
その女 危険人物！！！！ S I D E - A

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その女 危険人物！！ SIDE - A

【Nコード】

N 7 2 5 9 E

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

走り屋だった新卒社員のこの俺に、ケンカを売って来た女は、会社社長のご令嬢？しかも俺の上司になるって……冗談だらっつ？？
？ 節操の無い俺様が、マジでらぶした年上カノジョとの危険な恋愛編 本作品R15です。15歳未満の方と、えっちに不快感を持たれる方の閲覧は、ご遠慮ください。

第1話 最悪な出会い（前書き）

恐れ知らずに某所に投稿している作品を、アレンジしてお届けします。

俺様視点の乱暴な一人称です。苦手な方はご遠慮下さい。

第1話 最悪な出会い

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「ヤベエ、あと五分も……ねーぞ……」

ステアリングを握る掌がジツトリと汗ばみ、呼吸が乱れる。

苛立ちを伴った息苦しい焦燥感に襲われて、俺は今にも胸が潰れそうだった

就職戦線を勝ち抜いて、俺は晴れて社会人。

今日から俺は、木村工業株式会の新卒社員として、華々しい生活が始まるってー言っのに……

なのに……

なのにこの俺は……

入社式に、よりもよって朝寝坊してしまったんだああ……！

「早く行かねーと間に合わねえ……っつ……！！！」

入社式ってコトで、夕べはいつもより早く早くベッドに潜り込んだのに、ミヨーに気が張ってしまっって眠れなかった。

てなワケで、俺はトーゼン寝不足だ。

ホンの半年前なら、深夜の峠を攻めていた『走り屋』だったこの俺だ。

始業時間の八時半は、俺にとっての感覚は真夜中も同一然。

毎日の習慣って、昨日今日じゃ簡単に切り替えられねーモンだろよ？

この俺的早朝時間帯に発生する、イワユル『通勤ラッシュ』ってーのが、こんなにヒドイものだとは夢にも思ってたなかったし。

片側三車線のバイパスは、俺の当初の予想をハズして、思いつ切り渋滞してくれていた。

一箇所の信号に何度も足留めを喰らい、頻繁なブレーキングに速度制限以下のノロノロ運転。

タダでさえ燃費が悪い俺の改造インテグラに、ガス欠間近のサインが灯った。

「うつひゃあゝマジかよ？」

一気に気抜け～～。

脱力してウナダレル俺。

世の中に、神も仏もねーのかよ？

一向に流れてくれない状況で、更に不穩要素を盛り込まれてブルーな気分になっちまう。

一台前の車が結構車間距離を空けているのに……俺はそこに行きたくても、前は勿論左右の車に挟まれて身動きが取れねー。

コノヤロー遅刻したらどーすんだ？

俺は自分の事を棚に上げ、苛々しながら左右のドライバーを睨み付ける。

自慢じゃないが、タダでさえ視力が悪くて目付きの悪い俺のガン付けは半端じゃねー。

「！」

左車線を走行していたドライバーが、殺気を含んだ俺の視線に反応した。

俺のインテグラと並走していた、白いセダンのカローラがブレーキランプを灯してスピードをダウンさせ、俺の視界から消えて行く。

俺の目の前に、自分の走行ラインが見えて来た。

よっしゃ！

一気にシフトレバーをローに落してアクセルを容赦なく踏んだ。

駆動部が俺のアクセルワークに呼応して車体にパワーを送り込み、改造インテグラが軽く沈み込む。

「？」

一瞬、視界がスローモーションを見ている状態になった。

俺の真後ろに着いていた車フィットが先に車線変更して、俺の侵入ラインを封鎖した。

そのパールホワイトに輝くフィットのドライバーが、俺と視線を合わせた。

先制を取られ、間抜けなツラをした俺を見て、その女は口元ゆるを緩めてニヤリと笑う。

事故る！

女の強引な割り込みに、全身の毛が逆立った。

咄嗟はじつとにハンドルを切り返すと、俺の車は情けなく白煙を曳いて元の車線おとに躍り込む。

「んぎっ？」

タイヤからアスファルトのグリッド感が失われた。

インテグラのパワーに押されたのか？

単なるいつものドリフトとは、明らかに違うこのカンジ。

ケツがブレて流されてる！

つか、俺まだナンにも遣ってねーし????

車体後方からの加重で、突き上げられているようなミョーな感覚。

ナニが起こった????

素早くミラーに視線を奔らせる。

俺の白いインテグラのケツに、後続して来たアルファードがランデブー……

って、オイっ！

こっつ、コレって追突されてンじゃんよっつ????

「うわわわ!!!!」

制御出来ねえええええええ!!!!

車線中央にいた俺のインテグラに、危険を察知した右車線の車が停車した。

車線右側フリーになったインテグラは、そのまま中央分離帯に等間

隔で接置されている黄色のポールを薙ぎ払い、走行車がマバラにな
っている反対車線へと強制的に押し出される。

左対向から、クラクションを激しく鳴らしてインプレッサが急速接
近中。

スピードオーバーのインプレッサは俺に気付くのが遅れたらしく、
甲高いタイヤのスリップ音を響かせて突っ込んで来た。

こんな時に、ブレーキ制御が出来ないくらい飛ばすんじゃないって
の！

って、余裕コイテる場合じゃなかったし。

ヤバイ！

ドライバーの恐怖に引き攣った顔が見えた。

コイツ、マジで停まんねー……つか、止められねーんだ！

目の前で星が散った。

遠くで緊急車両のサイレンが聞こえる

あのフィットの女……俺を見て笑いやがった……

無性に腹が立った。

自称『元走り屋』だけに、こう見えても運転テクにはチョツとした自信を持っている。

峠の日高^{ひだか}って言えば、この辺で名前くらいは知っている奴も多い。

あの時だって、あの女さえ加速して来なければ……

待てよ？

コレって……ひょっとして、あの女の方が運転テクが上って事かあ
????

* *

「……君？ ……日高君……」

遠くで俺を呼ぶ男の声が聞こえた。

「……は……い？」

俺は情けない返事をする。

「……？」

ぼんやりと俺の意識が現実に戻されて来た。

見た事の無い、白い天井……ココ何処だ？

「気が付いたかね？」

「……………」

誰？

このオッサン……………？？？

俺は親しそうに話し掛けて来る初老のオヤジに、何処かで会った気がしてならなかった。

濃いグレーのスーツをビシッと着こなしている上品そうな小柄のオヤジ……………

うん？ 待てよ？ この人は……………

「……………ってえ、し、し、社長？」

俺の顔がタチマチ蒼ざめる。

この人は、俺がこれから末永くお世話に……………なる予定の、木村工業（株）総取締役の木村社長本人だ。

思い出すのに時間があった。

それもその筈。

直接には、俺は採用試験で一度しかお目にかかった事が無い。

しかも会社の所有する体育館での社長挨拶に、遠すぎて米粒くらいにしか見えなかったぞ？

後は、TVや雑誌なんかのメディアで見掛けたコトがあるくらい。

木村工業株式会社は、滅菌装置や透析用ろ過器と言った医療関連機器をメインに取り扱っている地元の製造会社だ。

機器の自社開発・製造はもちろん、アフターケアのメンテナンスも一手に担っている。

高度な技術とユーザーの信頼を獲得し、県内はもとより国内や海外に措いても業界トップシェアを誇っている。

その大手企業のCADキヤド設計技師として、俺は見事この会社に採用されていた。

たちまち俺は恐縮して飛び起き、怪我人である事も忘れてベッドの上で正座……したツモリだったのに……

「あ……」

俺から「社長」と呼ばれた紳士が、慌てて俺に腕を差し伸べる瞬間が見えた。

俺の視界が接近するベッドの床を映し出す。

「ん、ぎゃーっつ！ー！」

術後の鎮痛薬投与のお陰で、身体中の感覚がマヒして自由が利かない状態だった。

俺は社長達が見守る中、無様にベッドから転げ落ち、頭から文字通り床にダイビングしてしまった。

傍に控えていた看護師が驚いて手を差し伸べる。

麻酔が効いていたのが良かったんだか悪かったんだか……

「きゃーっははは……」

社長のすぐ後ろで控えていた人物が、甲高い黄色い声で派手に馬鹿笑いする。

「こ、これっ、恵理！」

「だあってえーこの人、おっかしーんだもん。も、もお駄目……きやはは……」

慌てて社長が、俺を見て馬鹿笑いしている女を諭した。

けど、もう遅い。

あんだとぉー？

俺は看護師の介添えで起こされながら、その馬鹿笑い女を見上げて睨み付けた。

「まだ麻酔が効いていて良かったですね？」

看護師が困った顔をして俺に言った。

「病院ですから、それなりに治療は出来ますが……暴れたりしないでくださいね？」

「……は、ハイ……」

いや、暴れたツモリはないんですが……

看護師に厳重注意されて凹む俺。

少しだけ、馬鹿女から気が逸らされる。

「くすす……ふーん」

一頻り大笑いしてヤツと落着いた馬鹿女は、俺に品定めをするような視線を遣しやがった。

野郎でも退いてしまう俺の眼光にも、全く怖じ気付かないドロコが逆に不敵に笑って見返して来る。

ナンだよ？ コイツ……

「……………」

視線が合った時、俺の心臓がドキりと大きく鼓動した。

栗色のふんわりとしたユル巻きレイヤーカットに、パツチリとした二重の大きな瞳は、猫の様に気持ちつり上がっている。

スツと通った鼻筋に、ふっくらとした唇。

身長は百六十前後の標準。

体型はすらりとしたスレンダー体型で、腰の張りもイマイチなのに……胸だけはデカイッ！

なんだよコイツ……

馬鹿女の外見は……その……詰まり……

……俺のタイプだった……

強調するが、『外見だけ』だからなっつ！

「娘が失礼をした。大変な目に遭ったね？ 折角の入社式にも間に合わなかったそうじゃないか？」

社長はその馬鹿女を「娘」だと言った。

俺はその社長の言葉にあんぐりと口を開けて呆けてしまった。

「娘」って……ダレ？

まさかその後ろに立っている、ヤン姉みたいなの？

「失礼って何よ？ アタシは普通に走っていただけじゃない。コイツがいきなり車線変更なんかしようとしたから後の車にぶつけられたのよ？」

馬鹿女は口を尖らせて社長に抗議した。

『コイツ』って誰の事だよツツ！

言い様にムツとなる。

そして馬鹿女の言葉に我に返った。

え？ ナニ……じゃ、あの時のフィットはこの……

「恵理^{えり}！」

社長は馬鹿女の頭を軽く押え付けて、俺に頭を下げさせようとしたが、馬鹿女は社長の手を高慢に払い除けた。

「もお！ チョツと！ 止めてよ！ だから、何度も言っているけど、アタシは何にも関係無いってばあ！」

馬鹿女は、本当に冗談抜きで社長の娘……だった。

制御不能になってスピンの俺の車は、後続車のアルファードに『オカマ』された。

その後、勢いで対向車線に押し遣られ、運悪くスピード違反していた対向車両と映画のスタント真っ青に、派手に接触。

俺のインテグラは廃車確実に大破した。

入社式の当日……

俺は、利き腕である左腕と鎖骨、そして肋骨二本の骨折と右足の裂傷他合わせて十七針の怪我をした。

第2話 コレが見舞い？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「よう！ 司^{つかさ}！」

走り仲間のコウ（松永）と向井が俺の見舞いに遣って来た。

俺はあの後、社長から直々に丁寧に詫^わびを貰い、自分の葬式でも絶対にお目にかかれそうもない豪華なカゴ盛りを受け取って、ひたすら恐縮しまくっていた。

あの馬鹿女は別だったが……

「ナンだよー、こんな凄えー見舞い相手が居るんだったら、シヨボイのなんかするんじゃない無かったなー」

コウはテーブルに でえ〜ん！ と置かれたカゴ盛りを見比べて、貧相な自分のカゴ盛りをカルク持ち上げて見せた。

「いーよ。それで」

豪華なカゴ盛りよりも、ソツチのほうが一番俺らしい。

悪友の気持ちだけで嬉しかった。

「で、慰謝料貰ったのか？」

「はあ？」

短刀直入に聴いて来た。

ナンだよ、それが目当てかよ？

「慰謝料だよ。い・しゃ・りょ・う」

ン、な事何回も言わなくっても判ってるって。

「何で？」

「え？」

俺の反応に、コウと向井が不思議がった。

「ん、なモン、貰ってねーよ」

「はあ？ 何で？」

俺はこのカゴ盛りを持って来た人物が誰なのか、何で事故ったのかを二人に説明してやった。

二人は俺がこんな目に遭ったのが自分のミスだったと聞いて、ショックだったらしい。

暫らくは言葉を失くしていた。

ある程度自由に走行ラインが採れる峠とは、状況がマッタク違うん

だ。

しゃーねーだろ？

「まあ……オマエも災難だったよな？」

コウは所在無く頭を掻き、向井は黙って頷いた。

二人は馬鹿女に関わってしまった俺に、同情してくれたみたいだった。

「けどよ、これがキツカケであわよくば社長令嬢と結婚……なあゝんてな？」

向井が面白がってニヤケる。

「馬鹿言ってンじゃねーぞ！」

俺はマジ顔で否定した。

「冗談じゃねーよ！ ダレがあんな性悪女……」

断じて関わり合いにはなりたくねー。

俺は吐き棄てる様に言い放つ。

「あーら、性悪女でスミマセンでしたわね？」

凜とした声がした。

その喋り方には、言葉通りの謝罪など一切含まれてはいない。

「はいいい？」

俺達三人はお互いに顔を見合わせて訝^{いぶか}った。

^{おもむろ}徐に視線をドアに向ける

社長の取り計^{はか}らいで個室に迎えられていた俺に、あの『馬鹿女』が遣^{はな}つて来た。

仕事の途中を抜け出したのか、ユルフワの髪はアップに纏^{まと}められ、上下の紺色パンツスーツ。

足元はオープントウタイプの黒い七センチヒールだった。

カゴ盛りと同じく、俺には一生お目にかかれそうもない黄色のバラと白い小花のカスミソウを散らした大きな花束を抱えて。

百本以上はあるだろうバラの花束だなんて、俺はこんなの見たコトなんてなかったし。

コウと向井が、花束を抱えた馬鹿女を見て「おおっ」と声を上げてどよめいた。

ナニが「おおっ」だよッ！

……確かに美人だけだな？

俺は心の中で毒づいた。

「お父様からの言伝いづてがなかったら、アタシだってこんな所来たりはしないわ」

猫の瞳がキツと俺を睨んだ。

何が『お父様』だよ。

オマエには似合わねーって。

他人の事をどうこう言えるほど偉くはないが、俺だって少しは違いの判るドライバーだ。

自分のコトは別にしておくとして、運転の仕方である程度の人柄なり、性格なりが見えてくるんだ。

馬鹿女の本性なんか、俺はトックにお見通しだっぺーの。

あの時、左側を走行していたカローラを退さがらせたのはこの俺だ。

俺は他の車をビビらせたりしないよう、普段以上に気を配り、十分な車間距離を取って車線変更しようとしていたんだ。

ソレをこの馬鹿女が無理な追い越し掛けて来やがって……

法的には罪が問えねーかも知れねーが、俺が事故るキツカケ作ったのはオマエなんだからなっつー!!!

今だって……

高ビーで、金さえ払えば努力せずともナンでも自分の思い通りに出来る……ってえ態度がオマエにゃミエ×2なんだよ。

俺の悪友が見舞いに来てるってーのに、馬鹿女は二人……いや、俺さえもカンペキに無視して室内にずかずかと入って来たし。

「……」

俺は馬鹿女の気迫に気圧されて思わずたじろぐ。

って、この俺が退いている？

……ウソだろ？

馬鹿女は間抜けヅラした俺達三人を完璧にシカトして、持って来た花束をゴミ箱代わりにしていたバケツに、いきなりゴソツと投げ込んだ。

……マジ？

息を飲んで啞然とする俺達。

あの、その中にまだゴミあるし、水なんか入ってねーんだけど……？

男だつてそんな雑イ遣り方やらねーぞ？

「じゃ、サヨナラ。これでアタシ、お見舞いに來たつて事よね？」

馬鹿女は傲慢ちきにデカイ胸をツンと反らせると、俺達の視線を『ウザイ』つてえ素振りで払い除け、さつさと病室を出て行こうとした。

はああ？

それだけで見舞いに來たつて言うのかよ？

な……

な……

ナンだよ！ その態度！！！！

こんのおくくく馬鹿女！

ぶちっ！

頭の中で、何かがキレる。

「おい！」

俺は強い口調で馬鹿女を引き留めた。

「何よ？」

猫の瞳が物凄い殺気を放って俺を睨み付けて来た。

う……コワ……

傍でコウ達^{そら}が思いつきり退くのが判るし、俺だって怖えぞ？

けど、ココで退き下がるかってーの！

「……つか、コレはゴミ箱だっつ！ 見りゃ判るだろっ？ 花瓶なら、言えば看護婦さんが貸してくれる」

「だから？」

『文句あんの？』 ってえ顔をして、ジロリと俺達三人を睨んだ。

う……

ドン退きする俺達。

だけど、こんな所で引き退かれるかよっ！

「ち、ちゃんと花瓶に飾ってから帰れよ！」

俺はラッピングされたままの状態で、水さえも無いバケツに投げ込まれた花束に向かつて顎^{あご}を杓^{しやく}った。

偉そうに見えるが、術後の傷の腫れと筋肉痛のお陰で、俺の身体は頭しか動かせない状態だ。

一瞬、馬鹿女が鼻白んだ。

どうやら今までコイツに楯突いた男は、俺が初めてだったみたいだ。

「言うわね？ 勝手に自分ですれば？ アタシは貴方と違って忙しいの」

『誰に向かって言っているのよ？』馬鹿女の視線は、手厳しくそう俺に言っていた。

端正な顔をツンとして、馬鹿女は俺のコトバには耳を貸さずに踵^{きかづ}を返す。

「ン、だとお！」

木村工業の令嬢だかナンだか知らねーが、コイツ~~~~！

俺はカツとなってベッドから跳ね起きた。

「わ？ 止せ！ 司」

慌てたコウ達に、俺は肩を掴まれて引き戻される。

あつっ、そ、ソコは内出血の痣が……

超ー強烈な激痛^{はじ}が奔った。

「だああああ！ つつ！ いったってーだろツツ！！！」

涙眼になって俺は二人に振り返った。

「止すんだ。相手が悪い」

「ココはガマンだ。ガマンしろ」

それぞれが小声で口を揃えて俺を押し留める。

俺達の遣り取りに、馬鹿女はくるりと振り返り、軽蔑の視線を投げ付けた。

「それだけ元気があれば、サッサと退院すれば？　アタシがお見舞いに来る必要なんてないでしょ？」

馬鹿女がココに来たのは、父親である社長から言われて仕方なく……？

しかも……

キツイ視線を投掛けて……

喧嘩売ってんのか？　この女ア！

「何イ？」

カチンと来た。

コイツが男だったら、俺は間違いなくブツ飛ばす！

「フン！」

馬鹿女は鼻を鳴らしてサッサとその場を立ち去った。

「~~~~つきしょおお！ お前等、何で止めたんだよ？」

馬鹿女が去った後、俺は顔を真っ赤にして二人を睨んだ。

「けどよお、司……」

馬鹿女の後姿を、なぜか嬉しそうに眼で追っているコウがボソッと呟いた。

コイツ……あの馬鹿女の後姿を今夜のオカズにするツモリかあ？

「あんだよ？」

「直接の加害者でも、被害者でもないんだろ？ 幾ら自分の社員だからって……チョットおかしくね？」

「知るかよ！ ンな事」

俺は聞く耳持たず状態で、コウのギモンを一蹴する。

見上げた視線の先に壁掛け時計があった。

あッッ、もうスグ時間だ。

二日に一度、俺は看護婦さんに身体を拭いて貰っている。

実は今日から俺のお世話係が、ベテランのオバちゃんから新人の里佳子ちゃんに交代することになっていた。

昨日、婦長とアイサツに遣って来た里佳子ちゃんは、可愛くってモ口俺の好み。

チヨツと垢抜けた薄付きメイクでヤバイ感じが漂うが、美人には違いないから許しちゃう。

その時間が遣って来る。

途端に俺はソワソワして落着かなくなった。

「あーあ、司ってばお子様状態じゃん」

俺がキョドッているのを見て向井が呆れた。

「うるせー。お、お前等もう用が無いならトットト帰れよ」

俺が二人を追い払おうとしていると、すぐにその子は遣って来た。

個室のドアが開き、見習い看護婦の里佳子ちゃんが、バケツと暖かいクーラーボックスに蒸したタオルを一杯入れて遣って来た。

「日高さーん、お体拭きましょうねー」

「はい……ってえ、お前等帰れよ」

俺は、遣って来た里佳子ちゃんに視線を奪われている二人に向かって、薄情にも部屋から追い出そうとする。

「ひょっとして、さっきのイケテル看護婦さん？ ……司あゝオマエって……チクショーウラヤマシイぞお？」

俺の病室に来る前に、どうやらこいつ等は先に里佳子ちゃんに会ったらしい。

里佳子ちゃんも、コウ達のコトを覚えていたのか、にこっと笑って会釈した。

向井達がまだ何か言っていたが、この際、無視する。

不満タラタラの二人を追い返して、室内は俺と里佳子ちゃんだけになった。

「スミマセン。あいつ等うるさくって……」

「いいのよ？ じゃ、始めましょうか？」

里佳子ちゃんは廊下の人目を気にしながら後ろ手にドアを閉じて、俺ににっこりと笑い掛けた。

かつ、カワイイ。

白衣の天使？ この無邪気な笑顔が良いんだよね〜。

ベッドを取囲むカーテンがシャツと音を立てて引かれたから、不意の訪問者が来ても大丈夫。

俺は邪まな妄想を描いて顔が崩れた。

「日高さあん、傷の具合はどお？」

「ええ、お蔭様で……調子いいツスよ？」

俺の目線まで腰を屈めて、俺の顔を覗き込む里佳子ちゃんの薄いピンクの制服から、恥ずかしそうに浅い谷間がチラリと見えた。

女性の平均よりも、少し小柄な里佳子ちゃん。

最近蒸し暑いからか、でっかいクチバシクリップで亜麻色に染めたウェービーヘアを一纏めにアップにしている。

纏め切れなかったのか、それともワザとなのか、ハラリと項に落とされた後れ毛が妙に色っぽい。

院内での化粧が制限されている事への反抗か、彼女はよくカラーコンタクトを愛用しているらしい。

今日は濃いマリンブルーの瞳。

色白の肌に、これが人形みたいにとってもよく似合っている。

俺はその世界はよくは知らないが、これってコスプレ？

向井達に言わせると、萌え々系のお嬢さんナースなのだそうだ。

「検温されましたあ？」

「は、ハイ」

鼻に掛かった甘い声で、俺の体調を確認する。

俺が初めての担当だったらしく、里佳子ちゃんのキアイの入れようが目に見える。

もつと肩の力を落とさないと……

って、新卒の俺が言っても説得力がナイな？

これから行われるであろう事に大いに期待して、俺の胸はドキドキと高鳴った。

固定された身体じゃなかったら、とつくに襲っているかもだ。

「お熱は今日ありませんでしたか？」

「はい」

チヨツときんちょー。俺、まだ表情硬いナー。

「じゃあ、始めますね？」

里佳子ちゃんは事務的にそう言って、俺の掛け布団をフワッと剥ぎ取り、そして……

「いやあ〜！」

既に俺の相棒はスタンバイOK状態だった。

里佳子ちゃんは、パジャマにテントを張ってソソリ立つ俺のモノを見るなり、もの凄い形相で俺を睨んで来たし。

「な、な、何ですか？ コレ？」

「ナニって、俺の『ナニ』ですが？」

珍しいのか？ この状態。

「ど、どうして、こんなになっているんです？」

里佳子ちゃんは肩で激しく息を吐き、震えながら俺の股間を指し示すと、仁王立ちになって固まった。

「どうしてって言われても……」

こうなっただから仕方ねーだろ？

サスガに俺でも『里佳子ちゃんに欲情してます』って、本人前にして言いにくい。

身体は正直に訴えているけどよ？

「む、無理ですう〜！ じつ……じ、自分で遣ってくださいあ〜い！」

「ええ〜っつ????」

里佳子ちゃんは乱暴に蒸しタオルの入ったクーラーを、俺に向かって投げ付けた。

タオルだけとは言え、結構重いそのクーラーが、容赦なく俺の骨折している無防備なアバラを直撃する。

「ぎゃあああ~~~~っつ!!!!」

「いやあああ!」

俺の悲鳴に驚いた里佳子ちゃんは、病室から一目散に逃げ出した。

第3話 最悪の事態

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「あのつつ……ひ、日高さん、さ、さっきは本当にごめんなさい
つ……！」

里佳子ちゃんは俺と視線を合わさないまま、ペコリと頭を下げた。

あれから、婦長にこつぴどく叱られたらしい。

しゅーんとなって俺のトコロに謝りに遣って来た。

「もうイイですよ？ 俺もチョツと問題ありでしたし、気にしないでください」

サスガにクーラーボックスは死にそうだったけど……

俺は乾いたアイソ笑いをする。

そもそも俺が里佳子ちゃんに勝手に妄想しちゃっただけで、彼女は全く悪くない。

加害者は寧ろ俺だったりするし。

だけど、視線を合わせてくれない里佳子ちゃんの様子に、これからお世話になる俺は一抹の不安を抱いてしまった。

ナンとか打ち解けておかないと、この先暫らくは里佳子ちゃんがメ

インでお世話してくれるんだし、俺としてもシカトされたくはナイもんな？

俺は何気にベッドの隣にある、冷蔵庫を見詰めた。

「あ、そーだ。チロルの夏限定出たの、知ってます？ その冷蔵庫に入ってるんですけど……取って貰えますか？」

俺は首を廻らせてベッドの隣にある冷蔵庫に向って視線を送った。

「はい？」

シュンとして俯いていた里佳子ちゃんが『チロル』と言う言葉に反応して顔を上げた。

そして、冷蔵庫からよく冷えたカップ入りの新作チョコを取り出してくれる。

俺はまだ外出の許可を貰ってないクセに、勝手にリハビリと称して病院の外にあるコンビニに夜な夜出没していた。

それも結構頻繁に。

別に『チロル』を買うためにワザワザ痛い身体を引き摺ってコンビニに行ってるワケじゃない。

俺はエロ本目当てに行ってただけで、『チロル』はツイデだ。

パジャマ姿の怪我人っただけで目立つのに、立ち読みばっか遣って

たらヤバくね？

そいでもって、帰りにお菓子の新作チェックをしたりなんかする。

なぜかって？ そりゃ、女の子にはスイーツ系の話だらっつ？

決め付けるのもナンだが……俺が知ってるオンナ達は、みいゝんな甘党だったしょ？

俺的には甘いモノ苦手なんだけど、病院で毎日顔を合わせてお世話になってるのは圧倒的に女の子だし。

……元女の子も結構いるが……

「えゝ、こんなのもあるんですね？」

里佳子ちゃんはカップに入った『チロルチョコ』を手にして、珍しそうに眺めた。

さっきまでシュンって落ち込んでいたのに、もう復活して嬉しそう。

俺も女の子が落ち込んでるの見たくねゝし、ニコニコしてくれてる方がイイ。

うっしや！ 掴みはOK。

俺は動けねゝから、脳内だけでガッツポーズ。

「良かったら皆さんでどうぞ？」

俺の言葉に、里佳子ちゃんは意外だったみたいだ。

俺は里佳子ちゃんが受け取り易くなるように、里佳子ちゃんに対してじゃなく、ワザと『皆さんで』と言ってやった。

後は里佳子ちゃんが独りで食べようが、気の合う友達だけで食べようが、律儀に病棟詰所の看護師達と食べようが、それは彼女の自由にお任せだ。

サイアク、『要らない』って他の人にあげちゃうって場合もあるかな？

ま、いいや。

「あ、ありがとう、日高さん」

俺は里佳子ちゃんと10ポイント仲良くなった……って、ゲームかよ？

馬鹿女はあれ以来さっぱり来なくなった。

ま、俺だってあんな態度取られてまで見舞いに来て貰っても迷惑だ。

二日と空けずに熱心に遣って来るコウ達の本当の目的は、里佳子ちゃんと馬鹿女だった。

里佳子ちゃんは別だが……性格ブスの馬鹿女にご執心だなんて……

趣味悪いぞ？

俺は優しいナースちゃん達に手を握って貰いながら、鼻の下を伸ばしてリハビリに勤^{いそ}しんだ。

特に里佳子ちゃんはある日以来、俺のコト気に入ってくれていたのか、ちょこちょこ俺の様子を見に、病室に顔を出してくれた。

俺の担当ってコトもあるんだろうが……

あのまま嫌われてたら、俺、どうしようもなかったし。

モトが元気な俺が、『入院』だなんてな！。

病院なんか、健康診断するところだとは思っていなかった。

まさか俺がこんな事になるとはね……

俺は里佳子ちゃんにヨロシク遣って貰って順調に回復し、外傷だけのとつても元気な入院患者はスナリと退院のメドを付けた。

「日高さん、そろそろお会計いいですか？」

「あ、はい」

呼ばれて一階のフロントに向く。

そして俺は事の重大さに気付かされた。

先月まで、俺の治療代は木村工業が支払っていてくれた。

俺は院内の会計の人に呼び出され、金の掛かる個室から大部屋に移る気は無いかと訊ねられていた。

今思えば、確か、会社からの支給はココまでだと説明を聞いていたような……???

基本、『連絡がナイのは元気な証拠』ってえ音信不通を選んてる俺だから、親には事故のコトをナンにも言っていなかった。

見舞い客つても、走り屋仲間のダチばっか。

そんなに卒中来てくれるヤツはいなかったが、里佳子ちゃん達数人の新米ナースちゃんが、交代で様子伺いに来てくれる今の状態が気に入っていたし、別室に引っ越すのもナンだか面倒になってそのまま個室を選んでいた。

その請求が、そっくり俺に廻って来たんだ。

「……マジかよ……？」

俺は請求書の紙切れを前に、その金額に鼻白んだ。

慌てて親にSOSを打診したが、悲しい事に冷たく突き放された。

もっとも、俺の家は何十万の金をポン！と出せれるような家じゃ

ね！。

オヤジからは『ドコにそんな金がある？』ってアッサリと断られてしまった。

- 「司、事故つたつてえ〜？」

携帯を握った俺に、梓のマツタク慌ててナイ暢気な声がした。

「うん」

落ち込んでる時にオマエかよ……

俺は二つ年下の大学生、妹の梓の声を聴いてゲンナリする。

- 「あつははは……治療費くらい自分でナンとかしろよ？ オヤジよりいい会社に入社してんだろ？ 甘えんな。バ〜カ！」

P i

「あつっ！ クソ！ ムカつく……」

一方的に切っちまいがった……

梓の言ったコトも一理あって、更に落ち込む俺。

コイツ、俺をドン底に突き落とすタメに、ワザと携帯に出やがったのかよ？

まあ、俺って家出同然で出て来たものなあ。

頼もしい長男と、確^{しっか}りした長女の間、二歳ずつ空けて、その真ん中に出来損ないの俺が居るって家族構成だ。

実家は農家で僅かばかりの田畑がある。

オヤジは県庁職員で早朝と休日は野良仕事に精を出す、兼業農家ってえヤツだ。

兄貴は塾の講師を遣っている。

土地を持っているんだから金持ち……ってゆく感覚はウチにはナイ。

むしろ土地の維持費なんか金に金がかかっていたりするし、そんなに広い田畑じゃねーから自分のトコで食える分だけしか作っていない。

自給自足みたいな生活を遣っているようなものだ。

俺は一度二年前に事故を起こし、オヤジには事故の賠償金のために田畑の一部を売らせちゃった苦い経歴がある。

居た堪れなくなった俺は、実家を飛び出し……ってハナシだ。

泣きつ面にナンとかってえよく言ったモンだ。

入院する前からの半年以上もの家賃滞納に、シビレを切らせた大家のヤツが、俺の部屋の鍵を、勝手に変えてやがったんだ。

俺は荷物の殆どを大家に差し押さえられ、無一文状態で路頭に迷っ

た。

ただ、木村工業が俺の解雇をしなかったのがせめてもの救いだった……かな？

* *

「社長、おはようございます」

「おはようございます」

その人に気付いた社員達が、次々に素早く起立し、姿勢を正して挨拶する。

おおっつ！ みんなお辞儀の角度が四十五度だ！

俺は新入社員マニュアルに載っていた記事を思い出して感動した。

『社長』は軽く顎を引いて、社員達に応えている。

流石は大手企業のトップだ。

全身から高貴なオーラが立ち込めていて、俺なんか傍にさえ近寄れねー。

つか、霞^{かす}んじまう。

「日高君、今日からここが君の部署だ。遅れて入社した分、頑張っ

てくれ給え」

「はっ、ハイッツ！」

背筋を伸ばして硬直した。

恐れ多くも社長直々の部署案内に、またしても俺は緊張して恐縮しまくった。

つか……ナンで社長が???

視線が彷徨って落着かない。

怪我が治ったの初入社、俺は不安で仕方なかった。

「紹介しよう。彼女が君の直属の上司になる……」

社長の声に、俺は俯いていた顔を上げた。

目の前に、書籍カタログのファイルを捜して俺に背を向けていた、ベージュ色のスーツ姿の女性が居た。

長めの髪をキリッとアップに結い上げている。

髪留めに使われたクリップには、綺麗な光る石で造られた花の細工が施されていた。

俺が見たって、そこら辺の店では売ってなさそうな髪留めだ。

軽くパンプスの踵かかとを浮かせて、しなやかに伸びをして自分の身長よりも高い場所にあったファイルを取っている優雅な後姿に、俺の心は舞い上がった。

華奢な身体にきゅっと括くれたウエスト、折れそうな細い足首が中々セクシーだ。

へー、なかなかのプロポーション。

俺にはストライクゾーンのド真ん中。

「白石さん、この第三設計部の課長だ」

社長の説明に、俺の顔が緩んだ。

へえー『白石課長』……女の上司かあ……すげーよなあー。

俺はその美しい姿と綺麗な名前の響きに、涙眼になるほど感動していた。

くう~~~~っ！ 入社出来て、ホント良かったああ~~~~！
！！

死にモノ狂いで勉強した大学時代は無駄じゃ無かった。

夜間は峠で息抜きしていたけどよー。

これから毎日、この美しい姿が拝めるのかと思うと、俺は無性に嬉しくなった。

そして、俺の上司になる彼女が、社長の声に向き直る

「……えっ？」

一瞬で、俺の笑顔が強張って貼りついた。

「……ん、な……！！！」

声にならない。

全身の血が逆流したのかと思うほど驚いた。

「あら……」

彼女は細いフレームの眼鏡を片手で軽く押し上げると、俺を爪先から舐めるようにして見上げて来た。

「……」

俺は呼吸困難に陥った魚みたいに、口をパクパクさせる。

「……完治、したんだあ」

挑み掛ける様な視線は相変わらず健在だった。

馬鹿女！！！！

コイツが俺の上司だって????

ウソだろー？

フザケんなツツ!!!

俺は目の前が真っ暗になって、思考回路が遮断された。

マンションを追い出され、あれから悪友共の家を転々としていた無一文の俺だったが、遂には行く宛ても無くなった。

残された手段は、女に貢いで貰う、ヒモの生活。

コレでも俺は何度かそういった生活を体験している。

それも全部が車関係での金銭絡みが原因だ。

有難い事に、親は俺を意外と男前の部類に産んでくれたらしい。

声を掛けて狙っても、ほぼ高確率で命中。ゲット出来る自信はあった。

木村工業の大企業ともなれば、社員は当然男ばかりではない。

PCを取り扱うOAシステム部門や経理課。営業リサーチ部門に受付事務等、綺麗ドロコの女の子の部署には事欠かない。

全く……何てオイシイ会社なんだ？

ところが……

俺は自分の浅はかな短絡思考を、痛い程思い知らされてしまった。

浮かれていたのはホンの数日だった。

大企業の女性社員ともなると、そこいら辺の女達とは出来も違えば身分も違っていた。

関連会社令嬢やら、取引先の令嬢やら……俺に金があればどうにでも……ならないか。

とにかく、セレブなお嬢様方ばかりでやんの。

俺は流石に焦った。

身分の格が、桁違いだ。

価値観、特に金銭感覚が、全く咬み合わない。

つか、車さえ失くしてしまった俺なんか陸に上がったナントカと同じで、相手にもされなかった。

男共は俺と大して変わらない奴等ばかりだ。まあ、実力さえあればチャンスは望める……ってえ世界だった。

結局俺は、自分が所属している第三設計部のフロアにある仮眠室で

寝泊りし、会社が所有しているグラウンド傍の部室に夜な夜忍び込んで、勝手にシャワーを遣って生活するハメになった。

当然、俺は部署内で一番の残業時間になっていた。

帰る家が無いんだから、当たり前だけどな？

悪友から借りていた食費も殆ど底を尽き、明日のメシをどうしようかと悩みながら仮眠室で仰向けに寝そべった。

窓の外を眺める。

……外に美味そうな餃子が浮かんでいた。

「腹……減ったなー」

ぐうつうつ……

俺の腹の虫が容赦なく泣き喚く。

水分は部署内に常備してあるコーヒーなんかの嗜好品があったから不自由はしなかった。

部署内の者なら勝手に飲める。

だけど、主食となるとそうはいかない。

最初は奢って貰ったりしていたが、それも長くは続かなかった。

最期にまともに食べたのいつだったけ？

…… ああ、木曜日だったから…… 今日を含めると一週間かあ。

チクシヨウ、記憶さえ薄らボンヤリして来やがった。

二日と空けずにあの馬鹿女が、土産だのと言っては菓子折りを全員に振舞ったりしているのが空腹には在り難かった。

けど、それがどこその老舗の菓子だのと、同僚から菓子の銘柄なんかのウンチクを聞かされる度に、馬鹿女が自慢しているように思えて、それはそれで鼻持ちならないと感じていた。

給料日まであと半月。

俺、これからどうすんだ？

第4話 形勢不利？（前書き）

ご閲覧ありがとうございます。

作品中、主人公がヒロインに対して、心の中で乱暴な呼び方をしております。

特に、女性の方は不快感を強く持たれる方がいらっしゃるかと存じます。

主人公の心の変化によって、この呼び方がいずれ変わって行きます。お眼障りかとは思いますが、暫らくご勘弁ください。

第4話 形勢不利？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

部署に配属された当日、業務内容の詳細説明は一切ナシ。

よくそれで仕事ができるなって？

俺の部署にはC A D キャド図面が作成出来るP C パソコンが一人に一台ずつ宛がわれている。

業務の難易度に対応して、机上に並べられるディスプレイの数は最大で三台。

新卒の俺は、まだそのディスプレイは一台だが、そのうち三台並べてやるさっ！

で、そのP Cには、インターネットはモチロン、ポータルサイトの社内情報やメール・チャット機能から部署毎のお助けマニュアルなんかの情報も当然リンクしてある。

馬鹿女は俺に一言、業務関連とお助けマニュアルのD B データ・ベースがどのフォルダに入っているかを教えると、後は総てP Cで調べるようにとしか言わなかった。

……なんて大雑把な上司なんだ？

繊細そうな見掛けと中身が全然つり合ってねーぞ？

大雑把と言えば……

この前も馬鹿女は、俺に業者カタログの紙面情報を電子データ化するよう依頼して来た。

俺はその資料カタログがどこにあるのかを聞いたのに、「見ればわかるでしょっ？」と壁一面の資料キャビネットを指差して言い放った。

冷たく突き放された俺は、あんぐりと口を開けて立ち尽くしてしまった。

片側の壁一面を塞ぐようにして、床から天井まで何段にも分けている資料キャビネットがズラリと並んでいる。

まるで図書館みたいだ。

こっ、このフロア片面にビッシリと並んでいるファイルやカタログ資料の中から、取り扱い業者ファイルの数冊を探せってか？

ファイルは幅が十五センチくらいある分厚いモノだったが、そんなファイルはキャビネット中、ドコにでもあつたし……

仕方なく膨大な量のキャビネットを俺は端から端まで延々と探したが、結局それは見付からなかった。

他の社員に聞けば、俺が探していたキャビネットとは全く関係の無い、別の場所にあるキャビネットにその資料があつたんだ。

俺はその数冊の資料を探すのに、まる一日も掛かったんだぞーっ
！！！！

お陰で、大体の資料がドコに置いてあるのかは判ったが……

自分の持ち場の資料置き場くらい、知っているよな？

* *

「日高さん、この計算式これで合っているの？」

昨日提出していたフレーム強度の構造計算に、また馬鹿女がインネンを付けて来た。

「何度も見直したんですけど？ 間違っていますか？」

俺の言い方が気に入らなかったのか、馬鹿女は不満そうに口を尖らせた。

「私は、合っているのかと訊いているのよ？」

「だから……」

「貴方が私に質問するの？」

「……」

言い掛けた出鼻を挫かれた。

俺はムッとなってクチゴモる。

最近、毎日がこんなカンジ。

俺は話の内容について議論したいのに、この馬鹿女は俺の言い草が気に入らなくて突っ掛かって来る。

自分で構造計算なんかササツと出来る頭持っているのに、馬鹿女は俺には特に冷たい。

部下のミスは上司のミスだろ？

もし、これで俺が間違っていたとしても、アンタが上に提出する前に黙って確認すれば良いじゃないか。

フォローしてやるってえ意識はねーのかよ？

仕事しろよ。

あ~~~~っぜ~~~~っつ!!!!

「……再確認させて下さい。ご返却願えませんか？」

俺は、渋々片手を出した。

「合っているのかと訊いているだけよ？」

ぶち！

埒^{うち}の明かない押し問答につき合わされ、それでも栄養失調気味で苛々していた俺は、遂にキレた。

「だから返せよッ！」

俺のそのひと声に、タダでさえ静かだったフロアの誰もが息を潜めてシンとなる。

「何よその反抗的な態度は！」

馬鹿女も負けてはいない。

フィットで俺のインテグラを負かした時みたいな視線を投げ付けて、応戦して来やがった。

くう~~~~っつ！！！

今、思い出しても頭に来る~~~~ッ！！！！

興奮したせいか、手足の先がシビれて息が上がった。

「態度どうこう言っなよ！ 大体課長は……はあう？」

俺はそこまで言うと、急に身体が動かなくなった。モチロン、口も動かないから喋れない。

……

あれ？

ふら付き？

ナンだ？ この浮遊感は？？？

ぐらりと視界が大きく傾き、目の前に居た馬鹿女の姿が一転して逆さまになった。

驚いて眼を見張りナニか叫んでいる馬鹿女。

っせーな。

静かに出来ねーのかよ？

俺はスゴク眠いんだ。

目の前が瞬く間に暗くなり、部署内の雑音が遠退いて行く。

ああ……もしかして、俺……このまま死ぬのかな？

「きゃあああ　　！」

その場に居合わせた事務員の彩加ちゃんさやかと美紀ちゃんみきのかわいらしい悲鳴が耳に残った。

その日、余りの空腹に、俺は馬鹿女と言い争いをしている最中でありながら、眩暈めまいを起こして派手にぶっ倒れた。

部署内は一時騒然となった……らしい。

* *

あれつつ？ ナンだこれっ？

自分の身体が変だ。

俺は自分自身の中に居た。

まるでSFの主人公が自分の感覚を切り離されて、サイボーグにでもなっているみたいな感覚って言えばイイのかな？

目の前の大木に女が居た。

その女はあの馬鹿女

……ってえ……

な、ナニいい？

俺は焦った。

馬鹿女は奇妙にうねった大木に、両手を頭の上で合わせて荒縄で縛り上げられている。

シャツ一枚しか着ていない馬鹿女の胸元は、乱れて大きく肌蹴はだけられていた。

白い柔肌がシャツの隙間……胸元からフトモモまでチラチラと見えているこの状態は……俺が脱がした設定かつつ????

普段なら、キレイな光る石の髪飾りできっちり纏^{まと}めているハズの黒髪が乱れて、ジットリと汗ばんだ白い頬や首筋に貼り付いていた。

ぐったりとしたその表情で時折、甘く切ない溜め息を漏らしている。

うわ……

モノ凄い色っぱさに、俺は鼻血が出そうなくらいのぼせ上がった。

うん？

俺の利き手が何かを掴んでいる。

しかも断続的な振動を伴って……

不思議に思っ^て視線を落とし、自分が掴んでいる左手のモノを見詰めた。

えっ？ こっつ、こっつ、コレはあ~~~~

手の震えが治まらねええ~~~~っつ。

って、コイツがブルブルと震えているからなんだけど。

察するところ、馬鹿女はコイツで1Rを終え、汗に塗^{まみ}れて快感の余韻に浸っているのか？

チヨツと待て……

こんなの俺じゃねーぞつつ????

……つか、犯^やるんならこんなコソクなマネなんかしねーよ！

モウロウとした途切れ々の意識の中で、馬鹿女は涙眼になりながら「お願い、もう止めて」とうわ言のように何度も繰り返してツブヤイた。

柳眉を寄せ、潤んだ瞳で、切なく俺を見上げて来る。

その表情がまたイイ！

俺の顔がイヤらしく笑った。

「まだだ。俺に公衆の面前であれだけの大恥を掻かせたんだ。その代償は大きいからな？俺は最低限の生活さえ儘^{まま}ならなくなって、ヒト以下の生活を強いられたんだ……あの時、オマエのフィットさえ居なければ、俺はこんなに酷い目に遭うコトは無かった……全部オマエのせいだ！」

俺は自分に『非』が有る事でさえ、卑怯にも馬鹿女に転嫁して言い放っていた。

……何だよ？

これって本当の俺？

深層意識下での俺の本性なのか？

俺の声に、馬鹿女はいやいやと力無く首を横に振った。

「良いザマだ！　こうして外で見ず知らずの奴等に、もっとオマエの恥ずかしいコトを見てもらえよ！」

いつの間にか、辺りには野次馬の人ばかりが出来ていた。

って、　プレイかよ？

「……………いや……………見ないで……………」

声も絶え々に懇願する馬鹿女。

その表情を俺は満足そうに見下ろした。

「さあ、第2Rだ！」
サウンド

俺は馬鹿女の折れそうな細い両足を抱え上げた。

低いモータ音と小刻みの振動が、足を大きく開いた馬鹿女に潜り込む

馬鹿女が身体を大きく仰け反らせた。

取り乱した淫らな姿が、俺の網膜に焼き付けられる

* *

「ん……？」

ココどこだ？

……温かい。

俺は久しく味わっていなかった懐かしいベッドの感触にづるづるした。

さっきのは夢だったのか……？

それにしても、妙に生々しかったよなあ……

俺はまだ動悸^{どうき}が止まらないでいた。

「……………」

全身が汗ばみ、股間が凄く熱くてズキズキする。

やべーな……俺。

まさかこんな妄想でイッちやったのかあ？

両腕が何かの抵抗を感じながら、もぞもぞと動いて俺の分身に触れた。

いつもの存在感……ナンとかセーフだったみたい。

「……………」

俺って、そんなに馬鹿女のコトが嫌いなもの……か？

……まあ、少なくとも馬鹿女からはメチャクチャ嫌われているのは確か……だよな？

でなきゃ、仕事とは言えあんなに突っ掛かって来たりはしねーだろ？

それにしても、堪んないこの感じ！

俺は自分に掛けられていた薄手の布団にスリスリと頬擦りした。

あゝ、久し振りだぜこの感触。

いつまでもこうしていたい……。

でもこの布団、ダレのだ？

掛けられている布団は、もの凄く軽くなって気持ちいい。

これって、もしかして羽毛布団と違ってヤツじゃね？

「……………ん？」

モゾモゾ動いていたら、左腕に軽い重みと、妙に暖かい温もりを感じた。

俺は掌^{てのひら}を返して、その温かい重みの原因^{まゆぐ}を弄る。

むにつ！

柔らかい……

ってなんだコレ？

……あつっ！ コレは……

「えへへ」

覚えのあるこの堪らない感触に、俺の顔がだらしく緩んだ。

けど、コレは誰の……？

「……？」

ぱちつと眼を開けて左腕の方を見た。

「うづ……」

俺は慌てて声押し殺す。

時間的にどの位経ったのかは判らないが、俺の目の前にサッキまで俺と口喧嘩していたハズの馬鹿女が突っ伏して眠っていた。

俺の左手は、馬鹿女の片胸かたちをしっかりと掴んでいたんだ。

夢でのコトもあって、俺は赤面しながら慌ててぱつと手を離す。

ひゃあああ〜！

さ、さ、触っちゃったよおおお〜！！！！

これって痴漢になるのか？ 不可抗力だああ！！！！

えっ、えっ？ ナンでココに馬鹿女？

俺は辺りをキョロキョロと見回した。

外から差込む月明かりが遮光カーテンから漏れ出て、辺りを薄暗く照らしていた。

八畳ほどの、俺にとってはメチャクチャ広いフローリングの部屋。

ベッドの反対側の壁は一面がクローゼットだった。

こんなにクローゼットが必要か？

俺なんか衣装ケース一つで一年分、十分に間に合うぞ？

庶民感覚の俺は、無駄に広いこの部屋に呆れた。

察するところ、病院内ではないらしい。

どう見たって個人の寝室。

そして、目の前で眠っているのは馬鹿女。

これってこの馬鹿女の……部屋？

「ウソッ？」

マジで？

俺は慌てた。

……まさか襲われたりはしてないだろうな？

真っ先に頭に浮かんだ不安。

俺だってあんな妄想……つか、夢を見ていたんだ。

可能性としては十分在りうるかもだ。

俺はベッドの中でランニングとパンツ姿で眠らされていた。

って、誰に脱がされたんだよ？

ザワワと背筋に悪寒を感じながら、俺はそのベッドから馬鹿女を起こさないように、そーっと這い出して脱走する準備を……

ぐうぐう~~~~~！

「！」

あっちゃー！

馬鹿馬鹿！ 俺の腹の虫！

こんな時に何で喚くんだよ？

たちまち馬鹿女の眼が覚めた。

つてえ、このノリは何かの童話のハナシかよ？

「ウン……？ あら、気が付いたの？」

まだ眠そうに眼を擦りながら、俺を呑み込もうとしそうなくらいの大きな欠伸をした。

ひいいい……

俺はもう半泣きだ。

「しっ、失礼しましたあ！」

俺はそそくさと部屋から出て行くとして、馬鹿女から首根っこを掴まれた。

「うあ？」

そのまま後に引っ張られ、情けなくベッドに引き倒される俺。

こういうシチュエーションって、普通男女逆じゃねーか？

ナンで俺が引き倒されなきゃなんねーんだよッ？

恥ズイじゃねーかつつ！

「どこに帰るの？」

「……はい？」

その言い方は、既に俺がどんな状況で生活して日々を繋いでいるのかを知っている口振りだった。

「な、何……の、こと……？」

俺の愛想笑いが凍り付く。

「どこに帰るのかつて、訊いているのよ？」

社内で俺と口論していた口調とは全く違っていた。

なぜだか優しく聞えたのは、この馬鹿女が俺を救ってくれた女神様に見えたからか？

……き、気のせいにしておこう。

「……」

「また社内の仮眠室に戻って生活するつもり？　いつまでもバレてないと考えない事ね？」

サスガの俺も、コレには言葉を失った。

……何でそんな事まで知ってんだよ？

幾ら俺よりも金持ちだって、幾ら俺よりも恵まれた環境だからって、幾ら俺よりも年上でキレイな美人だからって……

面と向かってハッキリ言うなよ。

それだけでヘコんじまうよ。

「……」

「黙秘するの？ 黙っていたって時間の無駄よ？ さっさと認めて謝れば？」

その言いようにムツとなった。

俺に逃げ道さえも作らせずに追詰める言い方……相変わらずキツイんだよ。

やっぱり、さつき優しいと思ったのは気のせいだ。

「ナンで個人的なコトまで、アンタに報告して謝ンないといけないんだよ？」

俺は口を尖らせた。

馬鹿女は一瞬、口籠くちごもって顔色を変えた。

「そ、それは……日高クンの上司として……」

「関係ねーだろっつ？ もっともらしい理屈さえ思い浮かばねーの

かよ？」

おっつ、形勢逆転かああ？？？

ぐううう~~~~

思いつ切り、俺のハラが鳴った。

ンがあああ！！！！

せっかくのチャンスが台無しだ。

「くつくつくつ……あーつつははは……」

馬鹿女がまたしても馬鹿笑いをする。

ちえっ！

俺は赤面しながらそっぽを向いた。

「くすくす……ああ、ゴメン。笑ったりして……」

え？馬鹿女が謝った？

俺は自分の眼と耳を疑った。

「お腹、空いてるのよね？」

「ええ……まあ」

俺はオトナシク肯定する。

つか、この状況下での否定は不可能だろう？

「キッチンに食材があるから、何か作って？」

「……………」

俺は再度自分の耳を疑って固まった。

訝^{いぶか}って眼を細める馬鹿女。

「聞えてる？」

「……………はい。聞えてます」

「じゃ、作って？」

につこりと余裕で笑った馬鹿女の表情は、今まで俺が見ていたコイツの表情の中でも一番の『素』だった。

ああ、コンナに優しそうに笑えるのな？

……………って……………

「はいいい？」

何スかああ？？？

今、何て言った？

『作って』……だと？

俺、飢え死にしかけてるのに……

普通、こういった状態ならとつくに食事が出来てるってのが話のセオリーじゃねーのか???

「あの……」

「なに？」

「『作って』……って、俺が……ですか？」

「そうよ？ 他に誰が居るの？」

アツサリと即答されて、言葉を失くす俺。

そんなぁ……ナンで俺なんだよぉおお???

死にそーなくらい、ハラが減ってるってーのに。

「……」

チヨツとしたモノくらい、出来ンだろ？

俺は黙って馬鹿女を指差した。

「アタシ？ 無理。ほら、早く起きて作って？ アタシだってお腹空いたんだから」

言つなり、俺は二の腕を掴まれて、無理矢理ひいと引き起こされた。

俺よりも身体小せーのに、見掛けによらず、力強えーな？

「あの……無理……って？」

「だって、作れないもん」

はあああ？？？

しかも、『そんなの当たり前じゃん』ってえ顔すんの、止めてくれない？

第5話 ウソだろ？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

チクシヨウ、偉そうに……何だって俺がメシ作んなきゃなんねーんだよツツ。

しかも自分の分まで作れって？

俺は理不尽な境遇に対して不機嫌になりながら、馬鹿女が案内するキッチンへと足を運んだ。

ぐうつうつ……きゅうつうつ……

うおあああ~~~~っつっ!!!!

腹の虫が盛大に喚いてくれるぜ。

あああ~~~~もおおお!

ハラ減ったああ~~~~

「この中から何か出来る？」

馬鹿女は、俺よりも背丈が高くってでっかい冷蔵庫の扉を開けた。

俺は首を伸ばして庫内を覗き込むと、ゴクリと喉を鳴らした。

「うわ……」

肉類に、魚介類、野菜にチョットした惣菜ナドナド……中にはあらゆる食材がぎっしりと詰まっていた。

庫内奥の壁が、詰め込み過ぎで見えねーよ？

これじゃ、多過ぎて逆にメニューが決まらねーぞ？

「あの……」

「何？」

俺は冷蔵庫のドアを押さえている馬鹿女を振り返る。

「こんなに入っているのに、作らないんですか？」

俺は無意識に社内での喋り方をしていた。

ヘンか？ とも思ったが、取り敢えず俺を助けてくれたらしいのは事実だし、一応俺の上司なものな？

敬語ぐらいは使わねーと。

「作らない……じゃないの」

馬鹿女は小声でそう言つと、キマリが悪そうにそっぽを向いた。

俺は訝^{いぶか}つて首を傾^{かし}げる。

「ああ……」

……ナットク。

作れねーんだ……よな？

でもそんならどーして、こんなに食材が入ってんだ？

俺の素朴なギモンを感じ取ったのか、馬鹿女はテレながらも「自分で買ってきたの」と俺に言った。

ああ、買い物くらいは出来るんだ……

って、買い過ぎるだろツツ！

しかも、どれもがデパ地下ご用達の、俺に言わせると目を剥く^むホドの値段が付いているものばかりだ。

ヤレヤレ……こりゃ普段の食事、マジで作ってねーな？

「どお？ 出来そう？」

不安そうに俺の顔を覗き込んできた。

どき！

思わぬ至近距離に、俺の心臓が跳ね上がる。

あ、あの……そ、そんなスガルような眼で見ないでくれる？

しかも接近して。

「ち、チョッと待ってください……」

つてえ、コメどこだ？

俺はキッチンのあらゆる扉を開けて、キョロキョロと搜索中。

「なに？」

「あのおゝ、コメはどこですか？」

「あ……？」

サスガは自炊しないお嬢様。

肝心の米を買ってなかったらしい。

……つて、毎晩ドコでメシ食ってんだよっつ???

* *

結局、俺は生のタラコでササッとパスタを作り、トマトとレタスその他諸々の野菜でサラダを作った。

キュウリを薄切りにするタタタ……という小気味良い包丁の音に、馬鹿女は妙に感動していて、その姿が俺に取っちゃあ異様？ それ

とも新鮮???

コンナノ練習すれば誰だってスグに出来るって。

後は久し振りに飲みたくなった、豆腐とワカメの味噌汁を作る。

自炊は久し振りだったが、我ながら結構イケてる味付けになった。

何日振りの食事だろ？

くう~~~~っつ!!!!

目の前がうるうるして来たし。

「いったただきまあゝすっつ!」

俺は文字通りガッツいて貪り喰^むった。

テーブルに向かい合って座った馬鹿女は、俺のゴーカイな喰いぶりに怯んだのか、大きな眼をパチパチとシバツカせてフリーズしてる。

いや？ 俺をじい~~~~っつと……観てるのか？

微妙なその表情は、微笑んでるのか、泣きそうなのか……？

「どっ?」

「はひ、うはひへふ（はい、美味しいです）」

……つてえ、作ったの俺だぞ？

まあ、食材も高級品ばっかだし、そのせいもあるのかな？

「課長？」

「うん？」

俺はある程度まで腹を満たすと、食べるペースを落した。

馬鹿女は俺の五分の一も食ってねー。

「あの……不味い？ それとも苦手だったツスか？」

食が細いのか、それとも俺の味付けが不味かったのか？

俺は、そつと訊いてみる。

馬鹿女は、口角を少しだけ上げて笑った。

でも、ナンだかいつもの元気が無いぞ？

どうした？

「ううん、そんなコト……無い……」

「自炊……しないんだ」

俺は馬鹿女の様子を窺^{うかが}った。

「……ん」

馬鹿女はほんの少しだけ反応して顎あごを引く。

「だって、忙しいもの……」

その言葉に、俺は若干イラッと来た。

管理職がナニ言ってるんだよ？

シケた返事すんなよな？

独り暮らししてンだろ？

家事一切が『出来ない』じゃあ、生活出来ねーだろーが？

メイドさんでも雇っているンなら、ハナシは別だが……

「そうじゃないだろ？ 課長って、いつもソレだよな？」

「え？」

馬鹿女が不意を喰らったように顔を上げて俺を見詰めた。

「仕事だってそうだ。いつも『忙しいから』とか『そんな余裕ナイ』とかって、課長は俺の改善案を却下するよな？」

「……」

「今置かれている環境をもっと効率の良い方へ持っていく為の改善案だろ？ その為の準備にある程度の手間隙が掛かって面倒でも仕方がない。先の為の『投資』だと考えては頂けませんかね？ ……って思いますが？」

ふっふっふっ……言ってやったぞ。

今更仕事のコトを持ち込むなよな？ と、自分に突っ込みを入れてしまう俺。

「……」

馬鹿女は黙って視線を落して俯いた。

黙っているのは肯定している証拠じゃねーのか？

「自炊のコトだって同じだ。『出来ない』じゃない。『遣ろうとしない』だけだ。面倒がつて努力もしない。自分にも他人にも納得出来る理由を見付けて、逃げてるだけだろ？」

俺は言いたいコトだけ言うと、逃げの態勢で構えていた。

「……」

……あれ？

全然言い返して……来ない？

ひょっとして……凶星？

* *

あれから馬鹿女は俺に文句を……全く言わずに黙って完食した。

気が付けば、俺はナゼだか食後のコーヒーまで淹れていた。

ナンでって？

……気が付いたら二人分淹れてたんだよツ。

「美味しかったわ」

コーヒーで一息ついて、馬鹿女はにっこりと俺に微笑んだ。

「う……」

その微笑に、何かとんでもないコトを言い付けられそうで、在りもしない恐怖に俺はビクツて構えてしまう。

「課長？」

「なに？」

「ココ課長ン家ですよね？」

「そうだけど？」

馬鹿女はそれがどうかしたのって顔をした。

「俺、何でココに運ばれて来たのか、本当のコト、まだ訊いてないッスよ？」

「あ、洗いモノ宜しくね？」

「はい」

……って、俺がかよ？

社内みたく、いつもの調子で言われて、いつもの調子で返事してしまっただけ……

俺ってバカ……？

上手い具合に質問を、煙^{けむ}に巻かれてしまったし……

だけど、洗いモノまでナンで俺……？

納得いかなーンだけど？

って疑問を感じつつ、後片付け遣ってる俺ってどうよ……？

「……」

リビングから携帯の着信音が聞えた。

会話の中身までは聞えねーが、妙にしおらしい声で受け答えしてい

る馬鹿女。

察するトコロ、男だな？

……まあ、居ても不思議じゃねー……か。

「……………」

なんだか胃の辺りが重くなった……？

急に食い過ぎたから……かな？

「終わりましたよ？」

コレも『業務』の一つなのか？

なんだか良いように操られているが……

「ああ、アリガト。座って？ チョコ食べる？」

馬鹿女は『ゴディバ』と書かれた箱（モチロン日本語じゃねーぞ）のチョコを頬張りながら、食後の優雅なひと時をPCのネット検索に宛てていた。

「はあ……………」

促されて、す^{うな}とんと傍^{そば}にアグラをかい^てて座り込む。

「はい、あーん」

「はあ、あー……」

言われるままに口を開けたら、すんなりした細い指でチョコを入れてもらった。

指ごと食っちゃおうかと思った。

ン？ うめえ！

チョコを舌先で転がし、ヨダレが溢れそうになるのを注意しながら味わった。

口中でとろける絶品ってのは、こういうモノなのか？

俺は甘いものは基本的には苦手なんだが、コレは中タイケていた。

「ナニしてるんスか？」

口をモゴモゴさせながら、馬鹿女が開いているノートPCのディスプレイを何気に覗き込んだ。

画面には、旨そうな果実の『壁紙』の前にビッシリと文字が並んでいる。

うわ。

画像じゃなくって、文章かよ？

アタマ痛くなりそーだな？

もしかして、小説か？？？

「うふふ、ネット小説よ。今お気に入りの小説があるの」

馬鹿女は少し恥ずかしそうに言って微笑んだ。

「ふーん」

俺は別に興味は無かった。

あるとすれば、貰ったチョコのおかわりと、テーブルのPCに向かって横座りからをしている馬鹿女の肢体ぐらいか？

俺の視線が舐めるように馬鹿女の身体はを這う。

「どんなの？」

一応、訊いてみる。

「ハーレクイン風のラブロマンスなの」

「ふーん」

ハーレクインのロマンス……ねえ。

ハーレーダビッドソンなら得意分野だけだな。

ガサツな俺には縁がねーよ。

「オフィス・ラブのこの作品も素敵なの」

俺は内容まで聞いていないのに、馬鹿女 課長は十代の女の子みたいに、とても嬉しそうな顔をして説明して来た。

よっぽど好きなんだな？

俺はそこでまたしても課長の無防備な『素』の笑顔を見た。

何だ……笑顔もやっぱカワイイじゃん？

ドキン！

……なんだ？ この動悸は……？

「その小説、何て言うの？」

調子に乗って、聴いてみた。

俺の質問に課長が一瞬戸惑う。

「あ……あの……り……『略奪の……キ……』」

「え？ ナニ？」

『略奪のキ』？

終りが聴き取れなかった。それだけ課長は小声で言ったのだ。

「キス……『略奪のキス』」

遠慮がちにもう一度課長はそう言っ、少し頬を赤らめた。

課長が何に対して赤くなつたのかは俺には判らなかつたが、それとは多分別の次元……それも超低次元で、作品タイトルの『キス』つて言う言葉が、俺の頭の中を駆け巡る。

俺って『野獣』？

「ね、ね？」

俺は既に邪心の塊になつて、課長の視線を強引に向けさせた。

「え？」

「ご飯作つたの俺でしょ？ お礼のキスは？」

そう言つて、左利きの俺はその手で頬を指差した。

「う……」

一瞬、課長が退いたのが判つた。

「別にコツチじゃないスよ？ 課長がいいのならコツチでも、俺はゼンゼン構いませんが？」

俺はニコニコしながら、今度は自分の唇を指さす。

「……」

タチマチ課長の頬が赤く染まった。

はにかんで、頬を紅くさせている課長がナゼだか初々しく見える。

「ほら、ほらつつ」

俺は軽く眼を閉じ、左頬を突き出すようにして課長に催促する。

実際、外見上では無防備に見えるが、俺の意識下ではすでに警戒網が張巡らされ、臨戦態勢になっている状態だった。

峠を攻めている時のように、チョットした空気の流れでさえ、今の俺なら簡単に読み取れそうなほど全神経を頬に集中させて、課長の接近を待ち受けている。

「……」

課長の顔が近付いて来た

チャンス！

「うんっ？」

課長の唇が俺の頬に触れそうになった一瞬の隙を突いて、俺はサッと顔を向けた。

そのまま左手で課長の後頭部を抑え、右腕で細い身体を抱き締める。

「んんんっ！　ウン！」

唇を奪われて、驚いた課長が俺の腕の中で暴れた。

俺は唇を塞いだままでニヤツと笑うと、自分の体重にモノを言わせて、課長をその場に押し倒す。

細い両肩を掴んで、力任せに組み敷いた。

「！」

痛ッツ！

下唇に焼け付くような鋭い痛みを感じた。

課長に噛み付かれ、慌てて覆い被さっていた身体を離す。

暴れた課長から強烈な平手を喰らい、怯んだ俺の腹に蹴りが入った。

「あつ？」

体格でもハナシにならないはずの、俺の身体が宙を舞った。

巴^{ともえな}投げをされた俺は無様に背中から落ちる。

護身術？　強えー。

「……馬鹿ッツ！」

課長は赤面し、肩で息を整えながら、ほんの少しだけ涙眼になって

俺を睨んだ。

「…………課…………長？」

…………ウ…………ソだろう？

俺は、課長のその強張った表情から、課長がまだ……………なのだと知ってしまった。

第6話 計略？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺は殴られた左頬を手で押さえ、背中から壁にモタレ掛かると片膝を立てて座り込んでいた。

頬がチリチリと疼き、ショッパくって生臭い血の味が口中に拡がっている。

「う……そ」

両肩から力が萎えた。

……そうなんだ。

課長は俺とは違う

三人姉妹の末娘で、二人の姉とは違ってただ独り『白石』という母方の姓を名乗っている。

『社長の娘……そんな目で見られるのはイヤ』

そう言つて『木村』の姓を名乗るのを嫌つてはいたが、課長は正真正銘の大企業、木村工業株式会社のご令嬢

本来なら、SPが傍に控えてたつておかしくは無い。
セキユリティ

ダラシナイ本能に任せている俺とは全く違う。

別の世界の女なんだ……と、この時にハッキリと思い知らされた。

今までの俺なら、そんなヤバイ……っつか、面倒な女はコッチから願い下げだった。

『ウゼェンだよツッ!』

その一言であっさりとカタを着けられるホド。

なのに俺は……課長を意識して……いる?

……ナンでだ?

「も……う。や……止めてよね? い、いきなりこんなコト……するの……」

終わりの方は、声が震えて涙声だった。

課長は床にペタンと座り込み、両手で口元を覆った。

キツッ! と刺す様な視線を俺に投掛けてはいるが、いつもの獲物を追うキツイ目付きに迫力が無い。

大きな瞳に生氣は感じられず、寧ろくすんで見えるような気がする。

俺には課長が必死に強がっているのがモロ判りだった。

あれ？

……課長って、コンナに女っぽかったっけ？

「……ごめ……」

顔を伏せた俺は、それだけ言うのが精一杯だった。

居心地が悪イ……

普通のチャラチャラしていた俺はどこかに消え去っている。

今更謝っても……きっと課長は俺の事、許してはくれねーんだろうな……？

「あ？ う、ううん……び、びっくりした……だけ……」

覇気のナイ俺の声に慌てたのか、課長は取り繕つくろうようにそう言った。

俺が顔を上げると、課長は俺と視線が合わせられないのか、合わせるのがイヤなのか、気まずそうに視線を逸らせて俯うつむいてしまった。

……ナニか……

ナニか言えよ？

頭の中で、この気まずい空気をナンとかしたい俺が居るが、こんな俺の予想外。

フリーズしちゃった課長を前に、俺、どうすりゃいいんだよ？

課長だつて……『いやあ〜ん！ 司のえっちい〜！』……くらい、
言えよ？

無理かな？

だけど黙って俯かれちゃあ、息詰まって仕方ねーだろっつ???

「……」

お互いがダンマリになっちまった。

修復するのには、もう手遅れ……か？

暫らくして、俺はオモムロに立ち上がった。

そしてハンガーに掛けてあったヨレヨレの俺のスーツを手を取った。

次いで、俺の気配に気付いて顔を上げた課長が、息を飲んだ気配が
した。

「どこに行くの？」

俺は背中に課長の^{すが}縋るような視線を感じていた。

「帰ります」

サラリとカッコ良く言ったつもりだった。

……だけど、その言葉を口にした俺の今の格好は、白のドライメツシュ・ランニングに黒のショートボクサーパンツ。

そして足元は、なぜだか履いたまんまの黒のビジネスソックス。

下着姿のままでカッコもナニも……ねーよな？

「……」

振り返った俺と、このチョツと情けナイ俺の姿をじいじいっと見上げている課長との視線がガチで合う。

「……ふっ……」

課長のベソを搔いていた顔が、徐々に緩んで来る。

「はいい？」

ひよっとして、俺のこの格好でウケてるのか？

「ぶ。ぶ。ぶ。……」

遂に課長が吹き出した。

オイオイ、勘弁してくれよなー？

いつまでもメソメソされるのは困るが、俺の格好をサカナにして吹き出されるってえのもなんだかな？

「くすくす……帰るの？ でもどうやって？ こっつて、会社から二十キロ以上も離れているわよ？」

課長の言葉に、シャツに片袖を通していた俺の動きが停まった。

「……ウソ？ マジで？」

二十キロ……かあ……

途端にドンヨリと憂鬱になる。

車が無い俺に残されているのは自分の足だけだ。

やっと空腹が満たされたとは言っても、徒歩での二十キロはチト辛過ぎるし。

「また仮眠室？ 今頃行っても正門は閉鎖されているし、守衛さんが居る裏門だって正式な上司からの承認許可の提示が無いと開かないわよ？」

「今ここで、課長が承認を俺にすれば良い事じゃないっすか？」

俺は不満げに口を尖らせる。

目の前に居る、課長の許可があればいいじゃん？

……二十キロはコタエルが。

「それは上司として出来ないわ！」

課長は毅然とした態度でぴしゃりと撥ね付ける。

おっ？ 元の課長に戻ったのかあ？

「ナンで？」

「理由が無いもの」

……おっしやる通り。

「理由……ですか？ それなら、どうして俺をココに連れて来たんです？ 部署内でひっくり返ったから？ メシ喰って、もう元氣になっただから、自由にしてやつても良いようなものでしょう？」

つてえ、俺って犬・猫と同レベルかあ？

……チョット我ながら悲惨だなあ！。

自分で言ってるその理屈に、ナンだかおかしくなって笑いそう。

今度は俺が吹き出しそうだ。

「……出来ないわよ……そんな……」

課長は小声でそう言った。

そして少し困った顔をして、視線を俺から逸らせる。

「課長が自宅に俺を連れて来たつてえコト自体、俺は未だにナット

ク出来ていませんか？」

まゝだ言ってる……俺ってシッコイ？

実を言つと、俺はトック。

おおその察しは付いていた。

課長が俺のコトを……その……まあ、雰囲気で判るだろ？

だけど、敢えて俺は課長の口からソレを言わせようとしているんだ。

……意地悪かな？

「あ……だからそれは……」

答えに困りながらも、課長は俺に向き直った。

暫しの沈黙。

二人の視線が絡み合う……

おっつ？ ナンだか良いカンジ？

俺は課長からの返事を、ワクワクして待ち受けた。

「その……」

ピンポン

言い掛けた課長の言葉を遮る形でチャイムが鳴った。

二人の良いカンジの『間』が寸断されて、ムツとする俺。

チクショウ！ ドコのどいつだオジヤマ虫めつつ！！！！

- 『ちわーっ、宅配便でえーっす』

課長は『助かった』とばかりに玄関へと急いだ。

「ちえっ」

インターフォンから聞えた明るい声が、恨めしく思えた。

大きなダンボールを抱えて、課長はリビングへと遣って来た。

見た目のワリには軽そうに抱えているが……何だろう？

「良かったあ。今日中には届かないのかと思っちゃったあ」

サツキまでの課長の様子は一転して、妙に明るい。

……ワザと話をハグラカシテいやがるのか？

カッターでガムテープを切り、ガサガサと中を開ける。

俺は話をブチ切られて、ムツとする。

そして胡散臭そうに、嬉々として箱を開封している課長の手元を見守った。

「ほらっ！」

中から取り出したのは、男物の衣類ばかりだった。

その一つを取り出して、得意そうに俺に見せる。

「なかなかの見立てでしょ？」

デザイナーズブランドの薄いグレーのスーツ。

へえ……携帯の彼氏へのプレゼント……か？

ソレを俺に見せたって……嫌がらせか？

俺にはムナシイだけなんですが……？

……それにしても、まだ一杯中にあるみたいだが……？

俺は携帯の彼氏がチョット羨ましくなった。

一つくらい俺にくれっつ！

「サイズ、大丈夫だよな？」

課長が嬉しそうに言った。

「は？」

……サイズ？　って、ダレの？？？

「横幅は無いから、Lで大丈夫でしょ？」

「？　んな……何のコトっスか？」

一瞬、俺は話が見えなくてポカンとする。

課長は黙って下着姿の俺を見詰めた。

眼が覚めた時から、ずっと俺はこのランニングにパンツでソックス
ってゆゝ、妙な格好で居る。

……　チョット情けない格好だよな？

「その格好でウロウロされると困るわ」

課長は今更だが、目のやり場に困った素振りを見せた。

ナンだよぉ、俺が（未遂で）襲うまで平気だったクセに……

「……だから、ナニ？」

話を読めねえ？

「これ、着換え」

課長は手にしたスーツを俺に押し付けた。

「はあ？」

ひょっとして、俺の????

ウソ……マジで？

「えっ？ こ、これ……俺のなんスか？」

俺は箱にまだ入っている衣類の山を見て嬉しくなった。

おおっつ、下着から着換え一式揃ってら。

「ええ。全部」

「えゝ、マジで？」

俺は手放しで喜んだ。

さすがは一流企業のご令嬢。

どれもが一流ブランドだ。

品揃えが違っているのは俺だって判る。

これだけでもかなりの金額になるハズだ。

「気に入って貰えた？」

「いやゝ、気に入るもナニもナイッシヨ。助かります」

「そう、良かった」

「結構な金額だったでしょ？」

俺はガサガサと箱の中身を物色中。

「まあね？」

課長は軽く顎を引いた。

そして、俺には思いも寄らない冷酷なコトバを、課長は平然と言つてのけた。

「全部、貴方の今月以降の給与振り替えだから」

「は？」

嬉しそうに言つた課長の言葉がイマイチ理解出来なくて、俺は思わず訊き返す。

「やーね？ だから、給与振り替えになるの」

「えッッ？」

手に持っていた新品のスーツが、バサリと床に落ちた。

「な……何ですかああ？」

「これ、全部今月以降の貴方の給与からの引き落とし。天引きするようにって、経理には言ってるから。自分の給与だから、気兼ねする事ないでしょ？」

課長は全く悪意のナイ笑顔でにつこりと笑った。

「……」

一瞬で、俺の頭が白髪になった気がした。

ちよつと……待て。

今月からの給料って……俺、車の修理代にと思って、アテにしていたんだぞーっつ！

実は俺、もう一台、旧式なのだが 蒼いランエボを持っている。

学生時、いつも入り浸っていた修理屋のオヤジに『邪魔だ』とか『さっさと廃車にしろ』とか言われているのにオヤジん所のガレージに勝手に置きっ放しにしている。

燃費の超々悪い、しかも故障しているランエボが。

コイツを真っ先に修理してやろうと思っていた。

車さえあれば、車内で生活出来るかなと思って。

なのに……

「……………」

俺はガツクリと肩を落とした。

……せっかく初任給で修理しようと思っていたのに、当面は先送り
かあ……………」

お陰で俺の予定が狂っちゃったぞ？

「あら、ナニ落ち込んでるの？」

「……………」

小首を傾^{かし}げて不思議そうに、課長は落ち込んでしまった俺を見た。

「……………」

ワザとじゃないんだ……………」ワザとじゃ……………」

課長は良かれと思つてのコトだろうし……………」俺だつてこの状態のまま
だと困つていたハズだ。

……………」何かウラがあるのか？

スンナリと納得出来ねえ……………」

いつもなら、ヤバイと勘ぐつてサッサと「逃げ」に奔^{はし}るのが俺のモ

ットーだ。

なのにこの課長ときたら、俺の勘を妙く狂わせちまう……

「どうしたの？ 不満そうね？」

課長は腕組みをして俺を見上げた。

さっきのシオラシかった課長は、ドコに行っちゃったんだあ？

しかも、その視線はなんだか俺の様子を見て面白がっているような……

「こんなに要らないですけど……？」

「あら、必要でしょ？ だって……日高くん、ココで暮らすもの」

「え……？？？」

はいい？

今、なんて……？

「行く当ても無いのでしょ？ アタシは日高くんが家事をしてくれる条件でなら構わないけど？」

課長はそう言うと、これ見よがしに車のキーを俺に見せ、自分の顔の横で軽く鈴を鳴らすように振った。

「運転手さんもヨロシクねえ」

言ってやったとばかり。

課長は堪え切れなくなったのか、くすつと笑った。

「……」

俺は絶句してフリーズした。

こっ、ココで……暮らす？

同居っつ????

……それって課長と同棲かっつ……????

「言っておくけど、さっきみたいにヘンな気は起こさないでね。手加減しないわ」

「……」

既に頭ン中が真っ白になってしまった俺は、後から言った課長の言葉は全く耳には届いていなかった。

……ひょっとして……俺は課長に……拉致^{らち}られたのかっつ????

第6話 計略？（後書き）

ランエボ : 三菱ランサーエボリューション

第7話 ラッキー？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺は課長のゲストルームで暫らく居候する事が出来るらしい。

その代わり、俺には食事・掃除等の家事一切と、会社の通勤運転手をすると言つ条件が提示された。

……これって……主夫^{しむふ}？

それとも召使……なのかよ？

最初この条件を課長が出して来た時、俺は猛烈に反発した。

で、結局、俺は課長から携帯をプレゼントされて『フィット、自由に遣つて良いから』の一言でアツサリとOK。

俺は携帯と車があれば何とかなるってゆー人種だ。

俺って単純？

「出来ましたよ？」

俺は課長の言い付けで風呂の準備を終えたトコロだった。

あれから課長は、再びPCに向かつて例の小説とやらを読み耽^{ふけ}っていたが、すぐに俺の声に反応する。

「そっ？　アリガト」

ナンなんだよ？

その全くありがたみがコモってない返事はア？

でも俺を見てニツコリと笑ってる？

ナニ？　そのハラグロそうな笑顔は。

普段業務中では絶対に見られねー、チョツとカワイイ課長の笑顔に
ドン引きする俺。

「一緒に入るっか？」

「ええつつ？」

トタンに俺の心臓とコカンがドキンと脈打った。

ヤリイ！　……って思ったのも束の間。

「冗談よ」

課長は簡単に否定すると意地悪そうにベロを出した。

「く……」

やっぱし。

そう簡単にはサセテくんねーよな？

俺がム力ついているのをワザと確認したりして、課長は悪戯を成功させた子供みたいだった。

満足そうにニコニコして、課長は後手に何かを隠し持ちながら俺においでおいでと手招きをする。

「日高くん、ちょっと……」

「？ 何スか？」

俺は飼い犬のように課長に近寄った。

「お礼がしたいの……その……目を……閉じていて……くれる？」

思わせ振りにそう言って色っぽい流し目を俺に投掛け、課長は少し恥ずかしそうに身体を^よ擦じらせた。

うっわ~~~~、イイツッ！

胸がドキドキする。

やりイ！

俺は何の疑いも無く心の中でガッツポーズ。

有頂天になって喜んだ。

言われた通り、素直に目を閉じて『マテ』の態勢になった。

……っ て、 やっぱり犬？

「うゝん、 少し……^{かが} 屈んでくれないと……」

課長は俺との身長差に爪先立った。

「ここまで言っ たらもお、 後はアレっ きゃねーよなー？」

「いいツスよ？」

俺は課長がすぐ傍に来ている気配を全身で感じ取っていた。

課長の軽い息遣いさえも甘く俺の耳に届く

……っ てえ？

首筋にヒヤリと冷たいモノが当たった。

かちゃ

なに？

…… かちゃ……っ て？？？

ぱちっ！ と目を開ける。

「……………課長？」

俺は自分の目の前で、 悪戯っ 子のような顔をして俺を見詰めている

課長と視線が合った。

「はい？」

「これ……ナニ？」

俺は自分の首に留められた金具とそれに繋つなげられた、太さ5ミリのワイヤを掴んで持ち上げる。

コレってひょつとして……首輪じゃねーのか？

「それ？ 見れば判るでしょ？」

いや、ココからじゃ見えないです。

「~~~~」

必死で外そうと繋つなぎ目を手で探る。

???? ナイ？

首輪は表面がつるんとした金属製だった。

手懸かりになるような所がない。

「それね、お父様がNASAの知人から貰った試作品なの。このリモコンにパスワードを入れないとロックが開かない仕組み。よく出来ているでしょう？」

名刺サイズの小型リモコンを翳かざして見せて、課長は嬉しそうにノタ

マワツタ。

「はあ？」

「アタシがお風呂に入っている間だけよ？ 済んだらハズしてあげる」

なんだとおお～～～？

「そんなに俺が信用出来ねーのかつつ？」

遂に俺はキレて早口で捲し立てた。

「うん！」

課長は自信ありげに大きく頷いた。うなず

余りの言い様に俺は退く。

「マツパの課長なんか、頼まれても見たく……」

「ナニよ？」

「……」

猫の瞳がギロリと俺を睨んだ。

至近距離から俺を見上げている課長の襟元が覗けて、言い掛けていた言葉を俺は思わずゴクリと飲み下した。

シャツの襟からヌケルように白くて美味そうな鎖骨が、チラチラと覗のぞいている。

課長がシャワーを浴びて、キメの細かそうな白い肌から滴したたらせている雫を、実際に眼で追って拝おがんでみたいと思ってしまった。

……やっぱり……見たい……かも……

う〜〜ん、やっぱり俺って覗くかも……だな？

覗かないってえ誓っても、課長が風呂に入ったトタン、誓いは瞬殺で反故はげ……だろうな？

自分のコトなのに、我ながらカルイ奴だな？　って思い知らされてしまう。

さては、俺がこうなるであろうコトを最初から計算していやがったな？

「……」

「ふふん」

課長は得意そうに鼻で笑うと、俺の横を颯爽と通り過ぎた。

くっそ〜〜、いつかコイツ、本当に犯してヤル……！！

擦れ違いざまの一瞬、俺の利き手が眼にも留まらぬ速さで動いた。

「……」

課長は何事も無かったように……つか、全く気付いていない。

さっきまで何も持っていなかった俺の左手が、何かをシッカリと握り締めている。

今度は俺が舌を出す番だった。

俺は通り過ぎて行った課長の後姿を横目でチラリと窺いながら、不敵にニヤリと笑った。

そして、ゆっくりと握った掌^{てのひら}を目の前で広げる

手にしたものは、たった今まで課長の大きな胸を上げて寄せていたブラ。

間もなくして、脱衣所から悲鳴が聞えた。

ザマー見ろ……だ。

* *

左頬に二度目の真つ赤な手形を貰った俺が風呂から出ると、課長はキッチンのカウンターテーブルに顎を乗つけて、アンニユイに何かを見詰めていた。

「ナニ見てんの？」

髪をガシガシと乱暴に拭きながら、俺は訝って課長を上から覗き込む。

課長の目の前には小振りの上品そうなアイスが二つ並べてあった。

ナニナニ？ 『ハーゲンダッツ』？

……ああ、あれか。

でもナンで二つを並べてるんだ？

よく見ると、同じハーゲンダッツでも種類が違っている。

「ねえ……」

課長はテーブルに顎あごを載せたまま、頭を少し寝かせて俺に話掛けて来た。

「ん？」

「どっちがいい？」

「え？ 俺？」

「うん」

「……」

「新発売のティラミスとモンブラン。どっちがイイ？」

「……?」

ティラミスとモンブランって、ケーキの種類じゃなかったっけ?

アイスに在るのか? そんなのが???

答えに困っていると、課長は二つを手にとり取って、俺の顔の前に差し出した。

「ね? どっちがいい? アタシはどっちも初めてなんだけどお?」

ひょっとして、そのどちらかが……俺の分?

「どっちでもイイッスよ?」

食った事のナイ新製品だと言われても、別に甘党ってワケじゃないから答えに困った。

大体、その容器の大きさじゃ俺は足りねーな?

面倒だったら、両方貰ってもいいんだぜ?

「決めてよ?」

「じゃ、右に持ってるの」

別にどっちでも良かったから適当に答えた。

「ええ、こっちイい?」

その言い方で、俺の選択権は一瞬で却下された気がした。

課長は右が良かったのかつつ？

だったら自分でサツサと決めろよ？

「なら、左」

「えつつ、えつつ、チョツ、チョツト待って……」

「……………??？」

課長は慌てて俺を止めた。

そしてアイスを再びテーブルの上に置いて、今度は大袈裟に頭を抱え込む。

時々俺は『女』が解からねー。

アイス一つでナニ騒いでんの？　これがパニくるコトかあ???

新製品だつつつても、限定何個までって言うのじゃねーだろ？

だったらまた買えば良いじゃん。

「~~~~ん」

「面倒くせえーなあー」

グズグズ言つてなかなか決められない課長を無視して、俺は手前に置いてあつた方を掠^{かす}めるようにして取り上げた。

「あッ！」

「もおー、早く食つちまわねーと、溶けちゃうじゃないッスか」

課長のヒメイのような声を無視すると、俺はさつさと蓋を開けてスプーンも無しにぺろつと舐めた。

おっつ？ これイケる。

クドクない甘さが微妙に旨い。

俺は『ティラミス』と書かれたアイスのカップの側面を、鑑賞するようにぐるりと廻して眺める。

じゃ、課長の目の前にある、残った一つが『モンブラン』かあ。

「ああ〜っつ！」

課長の咎^{とが}める視線もシカトして、テーブルに置いてあつたスプーンを掴むと、あつという間に掻き込んで完食した。

「あ〜っつ！」

課長は口を半開きにしたまま、俺^むが貪^むり食つてる様子を羨ましそうに見守つた。

……コドモみたいだ。

だけど、風呂上りの艶やかなピンクの唇と生乾きの髪が、妙に色っぽくて印象的だった。

課長の『女の子』と『女』の両面を同時に見せられて、俺は内心ドキッとする。

きつと、俺しか見た事ねーんじゃないか？　こんな課長。

「え？　一つは俺にくれるんでしょう？」

「うー」

返事……しろよ。

「俺にくれたのじゃなかったんスか？」

「あ？　う……ん」

「もー……ドッチなんスか？」

だあああ……コッチが欲しかったのなら、そつだとサッサと言えよあ……

もう食っちゃったし。

どうするよ？

俺は半ばイライラすると、いきなり課長の項に指を滑らせて乱暴に

唇を重ねる。

「むぐぐツツ？」

驚いた課長が唇を俺に奪われたまま、目をシロクロさせた。

モチロン、三度目の平手は遠慮したので、俺は空いたもう片方の手で課長の両手を掴んでガードする。

俺にとってはコレがキス……って言えるのだから疑わしい、アイサツ程度のソフトタッチ。

それに、また噛まれるのもイヤだし。

「うん！」

課長が感じてしまいそうになったから、俺は課長からパツと離れた。

「旨かったでしょ？」

「……」

課長は真っ赤になって固まっている。

「あれ？ 味、解かんかった？」

「……」

「……課長？」

課長は頬を赤らめて、トロンとした眼をして俺を見た。

つか、何て言ったらいいんだろ……魂が抜けてる……って言うか……

なんだ？ このフヌケた表情は？

見た事ねーぞ？ こんな課長。

???

俺は一つの予想を見い出して、ソレを試しにもう一度課長と唇を重ねた。

今度は今のよりも少し深い目。

「うん……」

課長は俺との接近に、そつと目を閉じちゃっているし。

……やっぱり……反応……してるよ。

「うっ……」

しっかり息まで止めちゃって……

課長の息が続きそうになかったから、俺は合わせた唇をそつと離れた。

「んっ、っ……司……?」

色っぽい潤んだ瞳で見上げて来る。

ナニ？ 『まだ物足りないわ？』 的なその表情は？

「んあ？ 課長、俺の事呼び捨て？」

俺は一本取ったぞと嬉しそうな顔をした。

「……………」

耳^{みみたぶ}朵まで真っ赤になって、課長が俯く。

そしてそつと俺に身体を預けて来た。

お互い、パジャマだと体温が伝わり易い。

確信。

ミヤク有り……………だよな？

けど、残念。俺はなんだか急に眠気が……………

やっと人並みの生活に……………戻れたのか？

この状態が？

これで暫らくは大丈夫？

……………なのかな？

安心したら、全身の力が抜けた。

俺って自分でも気付かないうちに、相当ムリしてたんだなあ。

俺の身体がぐらりと崩折れる。

「えつつ？ 司？ ち、ちよつとおお！ 起きなさいよお！ ころあ！ 寝るなああ、ウンもおおお〜」

遠くで、少し怒った課長の声が聞こえた。

もしかして、期待してたのに俺に裏切られちゃった????

課長、ゴメン。

第8話 お出掛け？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

何かのニオイが俺の鼻とハラをくすぐった。

何のニオイだろ……？

あれ？ これってカップラーメン……じゃね？

だけど、カップラーメンでもコレはいろんなメーカーのニオイが混ざり合っているし。

……こんなに食ったの誰？

「う……ん？」

この時も、俺はやっぱり空腹が原因で眼が覚めた。

ああ、違うな。

前は課長とのえっちなシーンで目が覚めて、それからハラ減りモードになったんだっけ？

俺はその時にイレギュラーでタッチ……っ！か、シツカリと掴んでしまった課長のバストの感触を思い出して、寝たまんまで顔を崩す。

え？ ……課長？

俺はガバツと跳ね起きた。

「…………あれ？」

誰もいない…………つか、ココ課長しか居なかったよな？

だけど、課長は今どこダ???

消灯している薄暗い室内を、俺は目を細めて見渡した。

さっきのカップメンの二オイの元も気になってるし…………

「…………」

…………ナンだよ？…………この部屋…………

俺の視線が宙を泳いだ。

脱ぎ散らかして放りっ放しになっている衣類。

脱いだままストンと落されただろう高そうなデザイナーズブランドのタイトスカートは、輪っか状になって床に落ちていた。

これって、課長の脱皮のアト…………？

だよな？

ストッキングもそのままで、しかも点々と落ちているこの状態は、脱ぎながら移動していたな？ 状態までもが簡単に想像つくし…………

「……」

チョツとコレは意外だった。

社内での課長は、管理職の肩書きのせいかも知れないが、常に整理整頓を心掛け、率先して社員の手本になってたし。

提出された資料ファイルの数センチの乱れさえ赦せないのか、角を揃えてキツチリと積み重ねられている。

ナニもソコマデしなくっても……って、思ったのが第一印象だったくらいだ。

課長の整頓されたデスクにその周りに居る社員達までが感化されて、神経質なくらい片付けられていた。

俺は課長のデスクから随分と離れたドアのすぐ傍だし、捜し物がすぐ見付けられる程度の片付けで、テキトーだ。

だけど、散らかってる今のこの部屋って????

そして、ニオイの元のカップメンは、室内中央のガラステーブルに幾つも山積み重ねられていた。

……少なく見ても、五食分は置いてあるぞ？

洗ってゴミ箱に分別してから棄てるよな？ そんなコトも出来ねーのかよ？

俺だって遣ってるぞ？

それにしても……

もしかして、アレから何日も俺は意識不明で寝ていたのか……？

つか、このニオイが気にならねーんだろっか？？？

それも、課長のプライベートルームで……しかも、コレって課長のベッドだろうがっつ！

おっつ、俺の寝顔が……いや、まさか俺の身体がオカズ……ってか、イタズラされてんじゃねーだろーな……？

俺は慌てて身体を見回した。

一応、ダイジョウブみたいだけど……とっても不安。

俺は、課長に拉致られた時に見た、整然とされていた室内を思い出し、今この目の前の光景が錯覚ではないのかと疑ってしまった。

課長との契約が成立しているとすれば……俺はこれからこの悲惨な状態を毎日目にすることになるのか？

んなのイヤだ！

夢なら醒めてくれーっつ。

ふと眼にした壁掛け時計が、九時過ぎを差していた。

それが昼なのか、夜なのか、遮光カーテンに包まれたこの部屋に居る俺には全く判らねー。

だけど、コレだけは俺でも判っていた。

遂に遣ってしまった……無断欠勤っつー！！

あゝあ……どうせ、会社はもうとっくにクビ……なんだろうな？

新卒で入社して、ホンの数ヶ月でクビ……かよ？

全く……シヨボイなあ俺って。

トホホだぜ。

死ぬ気で就職勉強遣ったってーのに、あの時の努力は一体ナニ……？

こんなコトになるのなら、もっと遊んでおけばよかったなあ……

俺は猛烈な虚脱感を覚えて、ガツクリと頂^{うなだ}垂れた。

俺以外、誰も居ない静まり返った室内に、隣から冷蔵庫の冷却モーター音が微かに聞える。

「……」

こうしていたって始まんねーよな？

俺は頭を二、三度掻いて、大欠伸。

……取り敢えず、起きよ……

これからどうするかは、それからだ。

大理石で出来た広い洗面台は、否応無く俺の不安を煽^{あお}った。

こんなところ、旅行会社のリゾート案内パンフレットでしか見たことない……

海外にも幾つか拠点を持っている木村工業には、厚生部門でリゾート関連を手懸けている部署がある。

会社案内のパンフにもこんな大理石仕様のホテル写真を見たが……
どんだけ資産があるんだよ？

つか、一般貧乏人のこの俺にとっちゃあ落着かねーよっつ。

目の前のゴーギラスな鏡に視線を移した。

紺色のチェック柄のパジャマを着た、痩せた俺が映し出され……る？

「ああッツ？」

……遣られたよ……

何気に見た鏡には、ラクガキされた俺の情けない顔が映っていた。

マブタの上に眼が描かれ、左右の眉が繋がっていた。

しかも両の頬には何かの漫画で見た事のあるようなぐるぐる渦巻きが……

って、コドモかよ？

「う……しかもコレって……油性ペン？」

ナカナカ落ちてくれねーぞ？

一体、トシ幾つだ？

あの女あ……

スミに置いてあるフタの閉まった洗濯機が、俺的には妙に気になった。

で、中をそつと開けてみる。

「……」

絶句。

これって単なる干し忘れ？

つか、この洗濯機は乾燥機能ちゃんと持っているんだぞ？

洗濯し終えた状態の衣類が絡まったまま、干乾びてミイラ化してい

た。

まあ、これでも少しは本人が努力しようとは……して……いたんだろっな？

きつと。

もう一回やり直し。

シャワーを浴びようと、俺は自分の着ていたパジャマと一緒に投げ込んで、再び洗濯機のスイッチを押した。

今度は最期の乾燥まで設定してだ。

「……………あ？」

シャワーを浴び始めてからすぐに、俺は自分の着換えを持って来るのを忘れていたのに気が付いた。

ま、ゲストルームとココからはスグだし、課長は居ないみたいだからダイジョウブ。

取り敢えず、マズは何か食ってからアップ（虹川）のオヤジ（車の修理屋）に連絡して、それから……

俺は時間を確認していたにも関わらず、そんな暢気なコトを考えていた。

会社の終業時間は通常五時。

工場なんかの製作部門だと、三交代制で二十四時間フル稼働になっているが、設計関連の製造業ではこんなモン。

木村工業はデカイ会社だし、会社内外からの組織監査の干渉や、社員組合とか労働基準法なんかで俺達社員は保護されている。

だから、個人の業務さえ段取り付けておけば、定時に帰宅したつて咎められたりはしない^{とが}。

第三設計課は、商品のクレーム改善やメンテナンス関連を請け負っている。

ユーザーが使用中に発生した不具合を特定し、その場での改善や一時凌ぎ的な応急処置を指示したりする、いわば救急病院みたいな部署だ。

まあ、商品として市場に出すのには、幾度も行われる厳しいテストをクリアしないとダメだから、ヒツパクした緊急事態は年に数える程度。

で、それ以外の通常は商品の仕様書とか、メンテナンス向けのテクニカル図面なんかをPCで製作している、ワリと静かな部署。

だから、女性である課長がそんなに遅くなるまで残業するのはマレだってコトを、俺はスツカリと忘れていたんだ。

「うっっサッパリしたあ」

俺は上機嫌でそのまんま浴室から出た。

「~~~~!!」

「いつ？」

ドアを開けっ放していた脱衣所から出ようとして、俺は自分と真正面に向き合ったヒトが居るコトに気が付いた。

もちろん、誰も居ないと思っていた俺は、別に隠すコト無くフルオープン状態。

な、ななっ、何でだっつ???

それはコッチが聞きたいよ!

恐怖映画に出て来そうな、もの凄い悲鳴が室内中に響きワタル……

「かつつ……課長？」

「いやあああ!!」

タイムリーに帰宅した課長から……

俺は三度目の平手を喰らった。

「もおおお！ おつつ、驚かさないでよッッ！」

そう言っている課長の視線が、前を両手で隠している俺のコカンで止まっていた。

……あんまり……見ないで？

「早く着替えて車出して？」

「え？」

「聞えなかったの？ 車、出して？」

課長は赤面し、眉間にシワを寄せて怒った。

「は……あ」

俺は釈然としないままだ。

俺のそんな様子に、課長は一変してにこりと微笑んで見せた。

……その微笑に何度、騙されたコトか……

もお、騙されねーぞ？

身構える俺。

恥ズイ格好で身構えるもナニもねーんだが……

「隣町で夏祭りがあるの。連れて行って？」

「はいい？」

夏……祭り……？

って、コドモかよ？

身構えていた俺は、拍子抜けした。

だけど、コレも課長からのオーダーなんだ。

聞かねーワケにはいかないし……

* *

結局、俺は課長のフィットで隣町の夏祭りに、課長を連れて行くコトになった。

自分で行けよ？ って思ってしまう。

見た目、何の変哲もない彼女のフィットは……タダのそこいらへんにあるフィットじゃなかった。

マンションの専用駐車場に停めてあったその車の前輪は、左右ともアウトサイドが極端に磨り減って、溝が無かった。

タイヤ、ツルツルじゃん……

人のコトをどうこう言えたギリではナイが……マジで課長の運転の荒さが窺える。

へえ、オマエもご主人様と同じジャジャウマなんだな？

感心していると、やっと課長が遣って来た。

「お待たせ」

課長はいつの間にか、紺色の生地に鮮やかな同系色で描かれた蝶の浴衣に着替えていた。

朱色に山吹色の細いラインのアクセントが入った帯を締めて、軽く襟足を抜いたその姿が艶やかで、カッコ良かった。

俺はその着換えで遅れて来た課長の顔を、じい……っと見詰めた。

ドコから見ても、イイ女……じゃん？

とてもこの車のドライバーだとは思えねー。

こんなにカワイらしい顔してるのに……あ、いや、それはチョット褒め過ぎかな？

「な、ナニよ……？」

俺のアツイ視線にワケが判らず戸惑って、課長は妙に警戒した。

イヤらしい視線に見えたのかな？

「その浴衣、似合ってますよ?」

そう言つて、俺はくすつと笑った。

あれ? 今の、ホントーに俺のコトバ……なのかなぁ???

ケツがむず痒くなりそうだったが、本当にそう思ったんだから仕方ねーよ。

俺のその一言で、課長は真っ赤になってしまった。

そして、無意識に手にしていたウチワで口元を隠す。

あれ? 普通に反応出来るじゃん?

車内に乗つて更に驚いたのは、この車が今時ミッション……マニュアル車両だったってコトだ。

なんと、左足で操作するクラッチまで付いている。

今時のオートマチック車両でもある程度の加速は十分に体感出来るし、通常の走行なら全くモンダイ無い。

だが、それもある程度まで……

もちろん、ドライバーの腕にも依るが、ミッション車両の加速とは比較にならねー。

俺はマニュアル車両賛成派だが、レーサーでも無いのに女性でマニュアル車両を運転しているのって、課長くらいじゃないのかあ？

「課長？」

俺は、ダサダサの普通のシートベルトを装着しながら、助手席に滑り込んだ課長に問い質す。^{ただ}

「え？」

「これ、モロにミッションですよね？」

「あ、ゴメン……運転出来なかった？」

俺をナンだと思ってるんだああ……？

って、言いたかったケド、勝手に俺が決め付けている入社式当日の勝負で、勝ったのは課長だったんだよな？

俺は事故ったし……

「運転なら出来ます」

少しムツとなった。

「あ、そう？」

課長はそう言うてから……コソッと小声で『そうなんだ』ってツブヤイタ。

あれ？　なんだか課長、嬉しそう？

「????」

俺はその課長の不思議な反応を気にしながら、フィットを出した。

軽ッッ！！！

ステアリングの軽さに少しばかり戸惑った。

「で、さっきの話ですけど……」

運転しながら、俺は話を戻した。

「あ？　ああ、マニュアル車の話ね？」

「今時……って言ったらシツレイ……なのかな？　けど、どうしてオートマに乗らないんです？　オートマの方がダンゼン……楽しんでよ？　エンストするリスクも無いし……」

「だって……免許取ったのミッション車だったもの」

少し、恥ずかしそうに呟いた。

「その……忘れちゃうと……なんだか勿体無いつて気がして……」

「……」

大企業のご令嬢が「勿体無い」……なんて言うか？

フツー？

とにかく課長は俺が思っていた以上にフツーじゃないご令嬢だった。

つか、オテンバ……なんだろうな？

普通の男以上に男勝りの……

多分、俺の分析は当たっている気がする。

隣町まではほんの数十分だった。

俺は課長に会社での自分の状況を尋ねたが、奇跡的に俺のクビは繋がっていた。

まあ、上司の課長の部屋に居るんだ。

無断欠勤にはなんねーか。

『事故後の後遺症……』って言うコトで、会社側は了承してくれたそうだ。

……ホントーは、自己管理のミスに因る栄養失調の貧血……なんだけどね？

「助かったあ……」

俺はホッと胸を撫で下ろした。

「迷惑だった？」

「えつつ??? いや? そんなコト……全然無いツスよ?」

トートツに課長の携帯が鳴った。

俺はハンドルを握り、横目で課長の様子を窺っていたが、相手先の表示を眼にした課長の表情が、たちまち強張った。

「……?」

俺はそこで携帯の相手が例の彼氏だと思った。

そう言えば……

ナンでその彼氏と一緒に行かねーんだ?

行くのをオックウがっていた俺なんかを連れて行くよりも、ずっとマシだと思いがな……?

だけど、結局、課長はその携帯には出なかった。

……どうしてだ?

目の前に俺が居たからか?

それとも、勝手に俺が携帯の相手を課長の『彼氏』だと思い込んで
いる……だけなのか???

第9話 覚…醒？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

夏祭りがあった神社は今日が最終日ってコトで、深夜まで多くの人で賑わっていた。

来るのが遅かったから、残念ながら花火はもうトックに終わっていた。

時刻が十一時を過ぎていたので、夏休みに入っているとは言え、お子様連中の姿は疎^{まば}らだ。

代わって目に付いたのがカップルや、女の居ない野郎共ばかりでツルンでいる学生連中だった。

……って、傍^{はた}目から見れば俺と課長もカップル？

……多分そう……なんだろうな？

へへ、チョット……照れるな？

浴衣の裾を思いっきりミニにしていた女の子達も結構居て、俺は十分に眼の保養をさせて貰った。

社会人になったんだから、もうガキの祭りなんか卒業だ……なんて思っていたけど、やっぱり俺ってまだガキなんだろうな？

もお、ウキウキしてるし。

浴衣姿の女の子は結構居たが、その中でも課長の浴衣姿はダンゼン群を抜いてイケていた。

別に超ミニの浴衣だったワケじゃない。浴衣は裾がちゃんと足首まであるオーソドックスなタイプだった。

だけど、なんか品がある……っつか……なんて言えば良いんだろ？

カップルと擦れ違う度に、男の方がずっと課長を見詰めて、それに気付いた女が足早に男を引っ張って行く……っつかんじ。

何人かの男からも課長は声を掛けられていたが、そこは俺がきつちりとガードしていた。

トーゼン、悪い気はしなかった。

さすがに『ナンであんな男と一緒^{ヤッ}に居るんだ？』ってえ野郎の声を、擦れ違いざまに聞いてしまった時の俺としては、ちと複雑な心境になったが……

課長はと言うと、俺の……っつか、周りのそんな声なんか全く気になっ
てないみたいだった。

幾つもの軒を連ねている夜店に、まるで子供みたいに猫のような瞳をキラキラさせて見入っている。

射的に金魚すくい、焼きそば、チョコバナナ、わたあめ……

興味がある屋台を見付ける度に、課長は嬉しそうに俺の腕を引っ張った。

……もしかして、こんなトコロ来たコトがなかったり……して……？

……まさか……ね？

午前零時を過ぎると、夜店も殆んどが店じまいを終え、帰り支度を始めている。

俺と課長は一通りの祭りの雰囲気満喫して、帰ろうとしていた。

俺の右手にはたこ焼きが、課長の手にはヨーヨー釣りの水風船と金魚すくいで採った二匹の金魚。そして射的で課長が捕った、六十センチものキティちゃんのぬいぐるみを得意顔で抱えている。

……やっぱ、俺よりもコドモだな？

神社の境内から少し離れた人気ひとけの無いトコロに駐車場がある。

俺は駐車場の隅っこにあった公衆トイレで用を足そうと、課長にたこ焼きを渡して離れていた。

「かゝの女？」

「コンバンワ〜」

「……」

「独り？ 寂しくね？」

課長が二人のオトコから声を掛けられていたのが聞えて来る。

けど、この流れはヤバイ。

「ナニすんのよッッ！」

やっぱり！

課長のタダならぬ声と乱れた足音に、俺は慌てて手を洗う。

……課長の身に、ナニが起こったのかは、おおよその察しは付いている。

「恵理！」

さすがに『課長！』とは言えなかった。

俺は猛ダッシュで課長の元に駆け付ける。

……

そこに、野郎二人が地べたに蹲ひざまずっていた。

二人共、急所の鳩尾みぞおちを痛そうに押さえている。

俺なんかの出番……ナシかよ？

でも、課長も……普通じゃ居られなかった。

父親である社長からのプレゼントで、お気に入りだと言っていた浴衣は着崩されて乱れ、右の袖が無惨に引き裂かれ、細い肩が剥き出しになっていた。

俺が渡していたたこ焼きは、周りに撒き散らされ、踏み躪^{にじ}られていた。

夜店で採った水風船^{ヨーヨ}と金魚は駐車場の砂利の上に落され、水風船は割れ、金魚が水を求めて暴れている。

キティちゃんも汚れて落ちていた。

「課長……？」

「……」

両手で襟を掻き合わせて押さえ付け、肩で荒い息を吐いて震えていた課長に、俺はそつと声を掛けた。

薄暗い外灯に照らされた課長の顔は、柳眉を寄せ、顔を顰^{しか}めて……今にも泣き出しそうだった。

「ダイジョウブ……？」

「う……う……」

俺はそつと、震えている課長の細い肩を抱き寄せた。

課長の身体がフワリと擦り寄った。

俺の動悸が早くなる。

自然、俺は課長が普段愛用している甘い香水を堪能するコトが出来た。

「あつっ……」

「痛つてえ……」

課長に絡んだ奴等が起き上がって来る。

護身術なんてそんなもの、俺は全く知らない。

だけど、喧嘩ならガキの頃からシヨツチュウやっていたし、課長に一度は伸されているコイツ等だ。

二対一でも勝てる気はしていた。

「駄目よ、司！」

二人に向かって行こうとした俺の腕を、課長はぐつと強く掴んだ。

なんでだ？ 課長をコイツ等……

俺の問い掛ける視線に、課長は黙って首を横に振る。

「逃げよ?」

「……」

有段者の課長がそう言ってるんだ。コイツ等マジでヤバイのか?

俺は課長の視線に説得されて、即座に反応した。

リモートロック（イモビライザー）でフィットのドアを開けた。

課長が先に助手席に乗り込む。

俺は素早く死に掛けている金魚二匹を袋に戻し、ぬいぐるみを拾うと運転席に滑り込んだ。

「……!!!!」

起き上がった奴等が、それぞれナニか喚きながら、追い掛けて来るのがサイドミラーで確認出来た。

俺はソレを無視してアクセルを踏み込む

フィットは砂利を捲き上げて、急発進した。

奴等は意外とシツコかった。

今度は車で追い掛けて来たんだ。

車種は新型のGT-R。

クソッツ、羨ましい!!!

……モチロン改造しているのは一目で判った。

コッチがフィットだと、舐めて来やがったんだ。

ヤバイな……

コッチはミッション車だとは言え、超ド純正標準仕様車。

課長には面目ねーけど、マトモに遣り合っても絶対に勝ち目は無い。

声を掛けた女に伸されて、しかもフィットで逃げられたんだ。

よっぽどアタマに来たんだろうな？

けど、ホンの少しだけ奴等の気持ちが判る。

……俺もそうだったコトがあったから。

イバッて言えねーな。

ウサギと狼以上もの圧倒的な性能の差があったが、俺は『軽』並みの（HONDAの皆さんゴメンナサイ）フィットの俊敏性と機動力をフルに生かし、敢えて道幅の狭い住宅街を選んで、チョコマカとコーナーを曲がって逃走した。

直線コースに持ち込んだりすれば、一気に加速して追い付かれてしまっからだ。

俺はソコまで馬鹿じゃねー。

だけど、コーナーを曲がる度に多少の距離を稼げても、ここいらの地理に疎い俺が地元連中を引き離せるハズもなかった。

奴等の腕もソコソコで、フィットのケツにピッタリと付いて来やがる……

ちきしょ〜〜〜！

同じGT-Rなら絶対負けねー自信があるのにつつ！

「二つ目の角を左！」

課長が見兼ねてカーナビを読み取った。

俺は課長の声に瞬時に反応して、何度も乱暴にハンドルを切った。

タイヤが白煙を曳き、車体と課長が悲鳴を上げる。

……静かに出来ね？

なんとかコイツラを引き離せる手立てはナイモノカ……

住宅街のその向こう……顔を上げた俺の視界に、街路灯で浮かび上

がった高速道路の高架が映った。

あの辺りは海だったか、川だったか……

峠専門だった俺はまだ行った事が無かったが、確かその袂たもとに地元の走り屋連中でも怯む、魔の鋭角クランクがあるとウワサで聞いた事があつたのを思い出した。

だけど、そこへはドウ行けばイイんだ???

「次の交差点を右！ どうしたの？ 右だつて」

「ムリです」

言われるままにハンドルを切っていたが、今度はソレが出来なかった。

夜間工事で通行止めだ。

まだ作業は始まっていないみたいで、路上封鎖の為の標識が出されただけだった。

幾らカーナビでも、そこまでリアルタイムに表示出来ないだろ？

「そんな……」

「コッチに入ります」

俺は、まだシツコク追い掛けて来る奴等に舌打ちしてハンドルを切

った。

こりゃ、奴等本気で俺と課長をドウニカするツモリだな？

タチ悪うゝ。

フィットの車体が悲鳴を上げて軋む。

「駄目よ！ こっちの先には行けない！」

「なんで？」

そう、叫ばれても遅いつて。

もう侵入しちまつてるし、奴等も追い掛けて来てるんだ。

「この先の突き当たりクランクよ！それも鋭角にしか曲がれないわ。軽だつてムリよ！」

「！？」

そこだ！

よっしゃあ！

俺の眼が輝く。

キタ~~~~！！！！ 　　ってカンジだった。

俺ってツイテル？

「回転場所くらいはあるでしょ？」

「あるけど、切り返さなきゃそんなに広くは……」

「……」

俺の口元が笑った。

上等じゃねーか！

GT-Rに見せて遣るよ！

俺は不敵に鼻でフンと笑うと、シフトを落とし、アクセルをぐつと踏み込んで奴等を煽った。

ルームミラーにGT-Rが一瞬引き離され、慌てて加速して追い掛けて来るのが映った。

そーそー、この俺にツイテ来いってーの！

「んなっつ、ナニ遣ってるのよッツ！ 聞えなかったの？」

加速した俺に、課長は鼻白んで怒鳴った。

「向こう側は河口なのよッツ？ アタシのフィットを傷付けたら、タダじゃ済まさないからッツ！」

「じゃ、無傷で車返したら、俺に何かしてくれる？」

俺はハンドルを握りながら余裕をカマシた。

「……………」

課長が言葉に詰まって俺を見た。

『^{マジ}正気？』って言われた気がした。

モンダイのクランク鋭角コーナーがあつという間に近付いた。

荒い運転は久し振りだったが、頭の中が妙に鋭く冴えていた。

『峠』を卒業したハズの俺だったけど、やっぱりその感覚が堪らなく心地好く感じられる。

ハイビームで照らし上げられた正面のガードレールには、幾つもの事故の生々しい傷痕と、多くの車体の塗料が刻まれていた。

カーナビを一瞥すると、素早く正面に向き直り、目測でコーナーの^{アール}Rを読み取る。

確かにソクツたらフェンス越えて川だか海だかにドボン……だよ。

……約百十〇二十度の回転角度。四、五メートル空けて切り替え……
……だな？

俺は速度を落すべく、シフトダウンさせた。

エンジンブレーキが掛かり、身体が後方に引っ張られる……

サイド（ブレーキ）でロックさせ、後輪を滑らせながら、アクセルとブレーキを片足で同時に強く踏み込み、ハンドルを切った。

フィットの車体が回転方向のインに軽く沈み込む。

ケツが遠心力で振り回される寸前、瞬時にサイドを解除して、アクセルを踏み込みパワーを加えて立ち上がらせると、再びサイドを引いた

その間、ホンの数秒……

「きゃあああー」

ギリギリのコーナーを、フィットは課長の女らしい悲鳴を引きながら、見事に鋭角クランクをクリアした。

そしてその直後、後方で何かがガードレールにぶつかる大きな音がした。

ミラーで後方を確認する。

制御し切れなかったGT-Rが、ガードレールの隙間から飛び出し、スクラップになりながらフェンスを突き破って川へとダイブする瞬間が見えた

……モッタイナイ！

* *

「もぉー、司つてば……何て無茶すんのよ?」

ブランコに座って自分の両腕を抱きながら、課長は弱々しくそう言
った。

……サスガに課長でもさっきのは怖かったらしい。

真夜中、人気の無い公園の水飲み場で、俺は死に掛けの金魚に水を
入れてやった。

もう手遅れか? とも思ったが、袋の中に少し水が残っていたせいで、意外と大丈夫だったらしい。

金魚はたちまち元気に袋の中で泳ぎ始める。

「大丈夫でしたよ?」

「ナニが?」

「金魚」

「……」

俺の言葉に、課長は白い目で俺を見上げた。

「そんな事、言ってるんじゃないわよ」

言いたいコトは、判ってるって。

「はい」

「？」

俺は水の入った袋を、課長の目の前に差し出した。

中で赤と白の更紗模様のヒラヒラ金魚が泳いでいる。

「課長の金魚」

「あのね……」

文句の一つでも言おうかという素振りで呆れながら、課長は俺から素直に金魚の袋を受け取った。

「帰りませんか？」

「ん……」

帰ろうと、右手に金魚袋を持ったまま課長は両腕を伸ばし、ブランコの左右の鎖に掴まった。

その瞬間、俺の胸が波打つ。

浴衣なんて着物は元々、脇が大きく開けられている。

しかも、課長の右袖は破かれて無くなったままだ。

腕を上げた事で、課長の豊かな胸の丸いふくらみが引き裂かれた浴

衣からはみ出し、モロに俺の目の前に曝け出されていたんだ。

しかも……下着、つつ、着けて……ナイ……！

……ってコトは、ひょっとして、下……もかつつ???

うおおお~~~~!!

俺の中に潜んでいる野獣の本能が覚醒した。

俺は両膝を折って、突然課長の目の前にひざまずく。

「？」

俺の行動に、課長が『なんで?』って顔をした。

「無傷でフィット、返しましたよ?」

俺はニヤリと笑うと、両手を上げてバンザイの格好になったままでいる課長の細い胴体に腕を廻し、有無を言わずに唇を奪った。

「きゃ? あ、う……ん」

腕を廻した俺の右手がするりと着物の脇に滑り込み、このうで掌一杯に拡がる柔らかいナマの胸に触れる。

「あッ!」

課長の身体がびくりと反応した。

「へえ……感じ易いんだ……」

胸が大きいと意外と感じにくいらしいし、俺も何人かそういった女を知っているけど、課長は違うんだな？

「ああ……ん」

重ね合わさった唇の隙間から、甘い声が漏れる。

一瞬、俺は課長が抵抗するかと身構えたが、ホンの数回だけ俺とのキスに課長の身体が少しずつ順応して来ているみたいだった。

つか、全然抵抗して来ない……し？

鎖を握っていた手が緩んで、今にも解けてしまいそう^{ほど}だ。

俺、まだ本気モードになってません……が？

「ほら、しっかり持っていないと、金魚、落ちて死んじゃいますよ？」

俺の眼が笑った。

調子に乗った俺は、左手で課長のフトモモを浴衣の上から撫で擦^{なす}る。

「……んっつ」

課長の細い身体が仰け反^そった。

『司のペッティングがイイのお……もお、イッツちゃうよお〜〜』

って、よく言われていた。

俺の愛撫がナゼだか好評なのはずっと前から心得ている。

指先が特別器用だから……とも言われていた。

だけど、本人（俺）は未だにソレが全くもって判らねえ……

本当……なのか？

「うん……っ、司……」

「ナニ？」

俺は課長の唇に深く、浅く応じている。

「ココ……はい、嫌……」

「え？ もっと、ハッキリ言ってくれないと？」

俺は課長が言いたいコトを判っていたのに、ワザと意地悪くそう言っ
た。

少しだけ課長の肩が震えている。

幾ら深夜の公園だからって、何人かがすぐ傍の通りを歩いているん
だ。

もう既に、誰かに見られていたっておかしくはナイ。

さすがに通報されるとマズイ……よな？

「じゃ、車に乗る？」

「……」

俺の言葉に、課長は恥ずかしそうに頬を上気させ、俯いたままうなずいた。

第10話 ご褒美？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

フィットを停めていた公園の駐車場へ戻ると……

真夜中……ってえコトで、やっぱりココでもお約束のように十数台もの車が駐車していた。

中には激しく揺れている車両もアル。

頑張ってるうゝ。

俺は一際大きく揺れている黒いワンボックスを見て、ニヤリと笑った。

けど、課長はというと、不思議そうな顔で揺れている車両を見詰めている。

「……ねえ……」

「はい？」

「ドウシテ車が揺れて……いるの？」

「……」

シラフで訊くか？

ドン退きする俺。

マジでアレがナニをしているのか判らねーのか???

「ねえ、どーして?」

「……」

……答えられなかった。

つか、訊くか? フツー。

課長、アンター体……ドコまで純粹培養されてんだ?

けど、そんなコト、俺には訊けねー。

……訊かなくても……判る。

なのに俺は、コレからこの女にナニをしようとしている……?

「司?」

「……え?」

呆けた俺に、課長はいつもの猫の目付きを投掛ける

その視線に、俺ははっとした。

「何してるの? ドア、開けて?」

「あ？ …… ああ、はい……」

俺は持っていたフィットの鍵を手にとると、リモートでロック解除する。

……この眼だ！

この視線が俺を惑わせる……いや、狂わせる……かな？

頼むから、その視線をなんとかしてくんない？

でないと、俺のヘンなスイッチが切り替わって入っちゃうよ？

* *

「……っあ……」

マンションに戻るなり、ずっとオアズケを喰らっていた俺は、堪らなくなつて玄関先で課長を背後から襲つて……いや、抱き締めていた。

俺は課長の手から、素早く金魚袋を取り上げてドアのノブに掛けると、破かれて剥き出しになっていた右肩にキスを落とす。

溜め息のような声が、課長の喉から遠慮がちに漏れた。

仄かに体温で暖められた、甘い香水と課長の体臭が混ざり合つて、俺を更に興奮させる。

しかも今の課長は、俺好みの浴衣姿だ。

浴衣が着物の中で一番色っぽいように思えた。

これって昔のパジャマか下着みたいなモンだろう？

「駄目……」

吐息のように囁く。

「どうしてです？ これはさっきの続きですよ？」

「え……？」

公園でのコト、もう忘れたのかよ？

それとも忘れたフリして逃げるツモリか？

「課長、独りだったらあの連中から逃げるコト出来ました？ ね？
俺にご褒美くださいよ」

課長は俺に後ろを取られながら、軽く抵抗して来る。

俺は課長の両腕を後ろ手に捕り、片手で抑え付けた。

「こ、こんな……コトして……ゆっ、許さな……いつ……」

「なんで？ 俺、許してくれなんて言っていないッスよ？」

少し汗ばんで湿った栗色の髪に、俺は課長の耳元で聞えるように、ワザと音を立てて何度もキスをした。

そして髪から見え隠れしていた^{みみたぶ}耳朶を軽く甘噛みすると、課長は身体を撓^{しな}らせて、強く反応する。

「止め……アタシ、汚れて……」

「コトバになってないですよ？ 『ハッキリ言え』って、いつも課長俺に言っているじゃないツスか」

多分、それは課長がまだ風呂に入っていないってコトを言っているんだろう？ だけど俺にとって、課長は十分過ぎるホド、キレイだよ？

浴衣の上から課長の体温を感じ取っているように、俺の手がゆっくりと這っていく……

課長は堪え切れずに甘い吐息を漏らした。

浴衣の懷へと俺の手が分け入り、強張らせていた課長の身体がビクツと跳ねた。

その反応は、まだ課長の身体が何も知らないって言う証明だに思えた。

「あ、あれは上司として……ン！」

俺はそれ以上、喋らせないように、課長の顎を掴んで後を振り向かせると唇を塞いだ。

「ふ……ん……」

持ち上げるようにして掴んでいた顎から、更に手を深くして、今度
は下顎の方へ向かって両頬を軽く押し下げると、課長は簡単に唇を
ホドイタ。

いつの間にか、恥じらいながら頬を染めていた課長の全身が熱くな
っている。

そして自分から眼を閉じて、俺に総てを委ねているように見えた。

もお、噛み付きはゴメンだよ？

大丈夫……かな？

俺は後ろ手に捕まえていた課長の両手首を放すと、浴衣の帯に手を
掛けて解こうとした。

ときどきとき……

俺の心臓が高鳴った。

浴衣とはいえ、これも着物だ。

女性の浴衣がどんなになっているのかは知らなかったが、これって
多分、大昔に時代劇で見た悪徳代官と生贄にされる生娘……のノリ
だよな？

で、俺が悪徳代官かあ？

生娘……うーん、それにしてもチト年齢が……って、まあいいや。

『いやあああ！ お止め下さいまし！ お代官さまああ！』……つてなノリにも……なつてナイけどよ？

「……」

あ、あれ？？？

なんだ？ 帯って簡単に解けるじゃんか。

何重にもぐるぐる巻きにされていると思っていた浴衣の帯は、思っていたよりも短かくて、ハラリってカンジで解けてしまった。

こんなのって、反則だあ！

俺は長い帯をイヤラシク解くのを想像して興奮していたのに……

俺は盛装の和服と単衣の浴衣とを、どうやらごっちゃに混同していたみたいだ。

……チヨットがつくし。

「どうしたの？」

課長が不思議そうな顔で俺を見上げている。

いかん！

つい理想……つか、妄想を追いつぎて俺の手が停まってしまった。

しかも、せっかく熱く火照っていた課長の身体はもうクールダウンしてしまってるし。

「え？ ……んな、ナンでもないデス」

「その帯、シワにならないようにしてね？」

「はい」

……つてえ、また素直に返事してしまった……

俺はその場をゴマカそうとして、再び強く課長を後ろから抱き締める。

「あん！ ……もお！ 司シツコ……？」

いやいや、こういう場合はシツコくしないと。

勢いで課長を壁に押し付けてしまい、序に俺の股間も一緒に課長に押し付けるコトになってしまった。

「や………？」

『ナニこれ？』ってカンジで、たちまち課長の顔色が変わる。

まあ、男兄弟のイナイ姉妹で育った課長としては、珍しいモノなん

だろうな。

くうっ~~~~っつ！ 今の課長の表情イタダキ！

「ベッドに行く？」

俺は赤くなった課長の耳元で囁いた。

「……………」

課長は壁に凭^{もた}れ掛かったままで戸惑っているようだった。

「イヤならここでヤッちやいますよ？」

俺はイヤらしくそう言つと、後から両手で課長の胸前の衿を掴んで引き上げた。それを今度はぐつと左右に引き下ろす。

桜色にのぼせて火照った細い両肩と背中が現われる。

「きゃあっ？ な、何すんのよっ？」

案の定、課長は恥ずかしそうにしながら、イマイチな反応を示される。

まだ理性が課長の大部分を占めているからだ。

「やだぁ……………」

課長は恥ずかしさに耐えられなくなったのか、壁伝いに座り込んでしまった。

「もー、しょーがないなあー」

俺は課長をお姫様抱っこで抱き上げる。

慌てて課長は両手で胸を隠した。

課長の身体は思っていたよりも軽くって、勢い、俺の腕の中でふわりと浮いた。

「きゃ？ きゃあ！ は、放してえ！」

俺の両手が使えなくなったのをイイコトに、課長は一層真つ赤になつて、近付いた俺の顔を片手で押し遣り、身体をくねらせてジタバタと暴れた。

「痛てて……落っことしちゃってもイイんですか？」

俺は嬉しそうにニコニコしながら、意地悪く言う。

「う……」

トタンにティコウしなくなった。

あれ？ もう観念しちゃったのか？

「はい」

「きゃっつ?」

どさり!

俺は少々乱暴に課長をベッドへ降ろした。

課長は上半身を起こしたまま両腕を後につき、膝を段違いに立てると身体を掀よじった。

大きくハダケた胸元から、華奢きせうな身体とは少しアンバランスな白い胸がハズンで揺れる。

浴衣の裾が乱れて白いフトモモがチラリと見えた。

俺の心臓が爆発しそうになる。

慌てた課長は左右の手で胸元と裾をササツと隠し、右膝を引き寄せ、俺の視線をガードした。

うん????

よくは見えなかったケド、裾から中途半端な下着……つか、頼りない布みたいなモノがあつたような……????

「もお! ナニ見てるのよお!」

俺の視線をカンジて、完熟トマトみたいに真っ赤になった課長は急に怒り出す。

「チヨ、チヨット待つて。今のナニ?」

俺は課長を横向きのままで押し倒すと、スカート捲りの要領で一気に浴衣の裾を捲り上げた。

裾からチラリと見たモノは、頼りない布幅の下着だった。

「……………」

がぁ　　ん！！！

かなりショック。

ナンでこんなオクテの課長がAV女優みたいな下着を……………???

日頃の鬱屈したナニかが、課長をこんなに過激に奔らせたのかぁ？

「ちょっと……………」

俺が課長の下着を眺めて呆けていると、課長はムツとなった。

「着物用の下着がそんなに珍しいの？」

はいい？

『着物用』……………ですか。

「てっきりアダルトサイトで購入したモノかと……………」

衣料品は殆んどネット購入してるって言ってたし。

確かにそう言われればレースの部分が少なかったよーな……

「思い出さないでよ！ 馬鹿ッ！」

「課長がどんな下着でも、俺は全然構わないッスよ？ もっとエロイ下着でもゼンゼンOKです」

まあ、これ以上Hな下着もそうはナイと思うが？

「な……」

課長は更に真っ赤になって言葉を失ってしまった。

その様子だと、どんな下着がエロイのか想像ついてるってコトだよな？

オイオイ、知識はあっても実戦がまだかよ？

うゝゝゝ課長、オモイ……オモ過ぎるぞゝゝゝ

俺は退いた。

いつもならビシッと決めているユルフワの栗色の髪は乱れ、意思の強そうな（ホントに強い）パッチリとした瞳は、俺とのザレゴトでまだトロンとしている。

頬は上気して桜色に染まり、ぷるんとした唇は口紅を差していないのに、赤い果実のように旨そうだった。

退いたけど……やっぱり課長はオイシイ……よなあ。

乱された浴衣姿の課長に、俺は無条件でソソラレル……

俺、課長の罨に嵌ったのかなあ……???

俺は無表情で課長の顔に自分の顔を近付けた。

「課長、俺……」

「……な、ナニ？」

「……」

『恵理ノコト……手放シタク……ナイ……』

そう言い出しそうになって、つい黙り込んでしまった。

言葉に出して言ってしまえばラクになるのかな……？

だけど、今は言えねーよ。

だって、それは課長の今の『外見だけ』に惑わされている……だから。

……多分。

「俺……」

「あ、ゴメンちょっと……」

どうしようかと悩んでいたら、イキナリ課長の方からブチ切られてしまった。

しかも俺からするりと逃げ出して行っただし。

「……………」

……雰囲気ブチ壊し……

しかも、長いトイレだなと思っていたら、さっさとシャワーに行つてやがんの。

もおいしいよ。

思いつ切りシラケタ俺は、携帯で片っ端からオンナ友達に連絡を取っていた。

とつくに夜中の一時を過ぎていたが、俺には何人かのキャバ嬢の友達がいる。

丁度この時間帯ならかえって連絡がつき易い。

「あ、真帆^{まほ}? 俺、司。久し振り」

「ああ、くん、司あ? うん、もおドロ消えちゃってたのよ……」

携帯の向こうで、真帆の甘えた声が聞こえた。

「今からいい？」

「ええ〜っ？」

ナンだよ？ その迷惑そうな返事はあ？

俺は真帆の反応で、すぐ傍に誰かが居るのを勘付いた。

「ゴメン。邪魔した。じゃ」

「あ、ちよつと待って……」

俺は真帆が何かを言いかけていたのを無視して、携帯を一方的に切ってしまった。

何人かに連絡を取ったが、結局はムダだった。

……ナンだかムナシイ……

課長に出逢う前……つか、事故る前の俺って、こんなんじゃないかったのに……な。

ドウシタ俺？

ツキが堕ちたのか？

急にモテナクなっちゃったぞ？

まあ、事故ってその後、皆にはサンザン迷惑掛けちゃったからなあ

……

背後で課長の気配がして、缶のプルタブを開ける音が聞えた。

振り返ると、アタマに真っ白なタオルを巻き、同じく真っ白なバスローブを羽織っている課長が居た。

両手に一缶ずつ五百のエビスビールを持っている。

片手で開けた右手の一方を自分の口に押し当てて、旨そうにごくごく喉を鳴らした。

「司も飲む？」

課長はビールのCMモデル並みににっこりと微笑んで、左手に持っていたビールを俺に差し出した。

ゴクリと俺の喉が鳴る。

「……………うん」

俺は素直に手を伸ばす。

……………？

ナンだか課長の口元が一瞬笑ったヨウナ……???

カシッ

その瞬間、シェイクされて膨張していたビールは、勢い良く音を立てて噴出した。

「う、うわあああ！」

俺は慌てて缶の口を押え付け、キッチンへと駆け込んだ。

「きゃーっつははは！ 引っ掛ったあ！」

「……」

ムカツツ！

久し振りに、あの馬鹿笑を聞いた。

気を許すと、すぐコレだ。

俺は課長のペットじゃねーぞっつ！

おちよくって遊ぶなっつ！！！！

つか、ペットだってコンナにヒドイ扱い方されてねーだろよ？

俺はビールを飲み損ね、深夜にせつせと床掃除をするハメになった。

「ねえ？」

「はい、はい、ナンですか？」

俺は『忍』の一字で、不機嫌になりながら課長の部屋の床を掃除中。

「ソレ、後でいいじゃない？」

ベッドに入って気怠^{けだる}そうに話掛け、課長はナンだか俺を誘っているみたいだった。

「ナニのアト……ですか？」

社内に居るように、俺はワザとそう言った。

俺は無心に拭き掃除をして、課長の方を見向きもしなかった。

頼むから、そうやって誘わないでくれる？

半分キレ掛けている俺だ。

今、課長に応じればナニをするのか判らないし、自分を抑えられるかどうか判らなかった。

けど、俺はゼツタイに課長の開通式には参加したくないし、遠慮するっつー！！

『処女』自体俺はキライじゃないし、全然ダイジョウブだ。

だけど、幾ら俺がいいオンナだっと思って思っても、課長のは重過ぎるん

だよっつ。

『社長令嬢』の肩書きに、俺は思いっきり退いているんだ。

……？

いや、それだけじゃない……のかな？

「……………」

微かに課長が反応したのが判った。

「明日……じゃないや。今日会社でしょ？ 眠っておかないと就業中に居眠りしちゃいますよ？ ……課長？」

小さな寝息を立てて、課長はバスロープの格好のままでうつ伏せになり、右腕をベッドからだらんと垂らして眠っていた。

俺はベッドから出ていた課長の腕を戻してやる。

無邪気に眠った課長の顔は、ナンだか俺よりも幼く見えた。

髪も乾かさずに……起きた時に困るだろうが。

こんなコトまでダラシねーのかあ？

よく独りで自活する気になったよな……

「……………」

ヤレヤレ……

俺は軽く肩を落として溜め息を吐くと、課長が飲んだビールの空き缶を持って課長の部屋から出て行った。

……ナンだよこれはあ？

キッチンに改めて見回して驚いた。

さっきは噴出すビールで慌てていて気が付かなかったけれど……床には結構な数の空き缶が転がっていた。

ダストボックスもちゃんと置いてあるのに、そこから入りきらなくて転がり出ってしまったらしい。

それは全部課長が独りで飲んでいたモノだ。

俺は知らねーもん。

俺の目が覚めるまでの数日間、課長はカップラーメンとビールで食いつなぎ、俺を待っていてくれたのか？

ずっと……？

……待ってくれていたと思うのもナンダかな。

やっぱり課長は才毛過ぎるよ。

「^{いちず}途なところ……さ。

第11話 職場復帰？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「おはようございます」

「おはようございます」

早朝、俺はマンションのゴミステーションに可燃ゴミを出していて、偶然出会ったマンションの奥様とアイサツを交わしていた。

俺が意識不明で寝ていた五日間、課長がドツサリと買っていた食材の殆んどが生ゴミになっていたからだ。

ゴミ出しに来ていた奥様は、ガウン姿の四十歳前後の品の良さげなご婦人だった。

言い忘れていたけど、課長の居るマンションは海外に幾つも拠点を持つキムラセンチュリー株式会社で、木村工業の子会社だ。

海外の拠点では厚生部門でのホテル経営も手懸けている。

当然、ココに住んでいる住民には購入の際の厳しいチェックが義務付けられていて、俺が追い出されたマンションの住民達とは全くハナシにならないホド、カクが違っていた。

「貴方、お見掛けしないけど、新婚さん？」

奥様は、スーツ姿でゴミ出しをしていた俺を見上げて訊ねて来た。

「えッ？ あ……はい……」

はああ？？？

……って思ったけど、一応流れでそーゆー雰囲気になっていた。

下手に「違います」なんて答えれば、ナニを言われるか判らない。

「おはよー川口さん。あら、こちらの方お見掛けしない方ね？」

「篠崎さんおはよう。新婚さんですって。えーっと……」

「はあ、十二階の白石です」

そう言っただけ俺は視線を合わせると、アイソ笑いを浮べて、ひょいと軽く会釈をした。

なんだかホントーに課長の旦那になった気がして、チョットだけ……照れるな？

あ、でも失敗。

トッサに課長の姓を名乗ったりして……俺は自分を勝手に婿ドノにしちゃったし。

「あらあ、あの子の？ ……そう。そうなの」

……ナニが『そう』なんだよ？

「おはよう」

「ねえ、ねえ、こちらの方ね……」

えつつ？

「あ、あの、その……」

次々とゴミ出しの奥様連中が増えて来て、俺は逃げ出せなくなっていた。

俺は動物園の珍獣奇獣じゃねーぞつつ！……！

そんなモノ珍しそうな眼で、俺をみるなああああ……つつ！……！

「へえー、あの娘さんがねえ」

眼鏡を掛けた、ハラだけが妙に恰幅かつぶくのイイ女性が意味深に言った。

……？

ああ、妊婦だったか。

「ナニナニ？」

井戸端会議のメンバーが、更にドンドン増えて来る。

ヤバイ。

俺は腕時計を見て眉を寄せた。

早く、課長起こさないと、出勤時間、間に合わねー。

それに、ナンだよこの俺の晒され方はあ？

「あ、あの、時間無いんで……失礼しますっ」

俺は奥様連中の視線に耐え切れなくなり、井戸端会議の輪の中心からそくさと出て行った。

一つだけ判ったコトがある。

課長はココの住民からは余りイイ印象は持たれていない。

『美人だけど、不愛想な女……』

『アイサツ一つしない、可愛気の無い女……』

アカラサマじゃなかったけど主婦達の口からは、そんな声が聞こえていた。

特に、年齢層が高くなるにつれて、課長の評価はキビシイ結果だった。

……確かに、アタマ下げてるトコロ、見たコト無いぞ？

それは取引先の相手に対してもそうだった。

部署が部署だけに、滅多に客なんか来ないけど……

しかも、課長が俺に対しての態度なんか……論外だし。

* *

「え？ ココの人達？」

課長は、俺が焼いた目玉焼きにナイフを入れながら訊き返して来た。

「うん」

「知らない。だってカンケイ無いもの」

「え？ ゴミ出しとか駐車場とかで会うでしょ？」

俺はトーストをパクつきながら訊き返す。

お？ コレ、小岩井のバターたっぷり……旨いな。

それにしたって……

うーん、本当に『カンケイ』無いのかあ？

アイサツ程度のご近所付き合いって、大切だと思うが？

「カンケイ無い人に愛想フル必要なんて無いわ。それに、ゴミ出しなんか遣ったコト無いし」

「……」

さよか……

聞いた俺が馬鹿だったよ。

「何か、勘違いしているんじゃない？」

「ナニってナニ？」

課長はお付き合いのシガラミや個人情報を引き合いに出して話し始めた。

けど、その総てが否定的かつ、悲観的なモノだった。

考え過ぎだよって思うけど……？

遅いなあ~~~~課長……

俺は駐車場で待ちぼうけを喰らっていた。

フィットの運転席側のドアに凭もたれて腕組みをする。

早く出ないと遅刻確実だよ……

「お待たせえ〜。あ、運転アタシがするから」

「え？」

運転席に乗りうとドアを開けた俺は、そのまんまで固まった。

スーツ姿で来た課長は……見事にスッピンだったんだ。

化粧、一体イツするツモリなんだ???

「やっぱりいつも通りじゃなくっちゃ、時間の感覚が掴めないわ」

それでハンドルを握るってのか？

『いつも通り』……って???

「……」

助手席に座った俺は、終始無言だった。

つか、呆氣に取られて言葉が出なかったただけだ。

課長は信号待ちの時間を、自分の化粧時間に充てていた。

……ダレ？

つてえカンジで……

赤信号で停まる度に、課長はどんどんキレイになって行った。

……素も美人だけど、ホントーにキレイに変わって行く。

凄みを増す…… って言い方、ヘンかな？

……にしても、車外の人の目気にしないんだな？

俺なら絶対気にすると思うけど？

* *

「さ、ココからは歩きでヨロシク」

「ええつつ？？？」

急に狭い路地裏に入ったと思ったら……

俺は課長から有無を言わず強制的にフィットから降ろされ、路上に放り出されていた。

会社の正門まで、まだあと一キロ近くは優にある。しかも正門から部署のある本館三階までも結構距離があるんだぞ？

「じよ、冗談でしょ？ ココから走っても、俺、間に合わない……」

「あゝアタシも急がなくなっちゃあ！ じゃあね」

「じゃ、じゃあね…… って…… か、課長っ？」

ボタン

無情にもドアが閉まる。

うそっつ????

課長のフィットは俺を置いてきぼりにして、サッサと姿を眩ませた。

んな……ナンで????

俺、駐車場で十分近くも待ってたんだぞ？

「マジかよ……?」

俺は正門に向かって、頭の中で最短距離を算出しながら細い裏通りを駆け出していた。

* *

全力疾走で、正門守衛室まであと少しの路地裏を急速ターンした。

トタンにナニか柔らかいモノに接触する。

「うあっつ!?!」

「きゃん!」

耳に心地いい女のカワイらしい声がした。

その小柄な身体が俺に跳ね飛ばされる瞬間、俺の片手が彼女の二の腕をぐっと引き寄せて掴んでいた。

彼女は転ばずに無事だったが、衝撃で持っていた荷物が道にばら撒かれてしまった。

「だっ、ダイジョウブ？」

「え、……ええ」

どき！

心臓が大きく拍動した。

……… かつ、課長？？？

長い髪を後ろできつちりと纏めた少々ヤボったいヘアスタイルに細い身体。

驚いて頬を上気させたまま俺を見上げたその女は……

課長？

いや、そんなハズない。

今頃課長は、とつくに正門を通過しているハズだ。

しかも、課長の今日の服装は黒地に細い藍色のラインが入っているスーツだ。

彼女は木村工業の社員の制服である紺色の事務系スーツを着ているし……？

……だとしたら、コイツ誰？？？

顔立ちや、細い身体つきまで……課長にソックリだ。

こんな娘、居たっけ？

「ごめんなさい。急いでいたものだから……」

「ああ、コッチこそゴメン」

俺は時間を忘れて、彼女がばら撒いてしまったPC用CDやSD等資料を拾うのを手伝っていた。

「その制服は木村工業……だね？　これから社外？　俺、設計部の日高。君、部署は？」

俺は自分の首に掛けていた、顔写真入りのIDカードを彼女の目の前に出した。

彼女は提示したIDの写真と俺の顔を交互に見比べる。

「……広報部の三浦です。これからお客様をご案内するので社用車を取りに……」

彼女は俺から最後に残った数枚のCDを受け取ると、社員証で安心したのか、クッタクの無い笑顔でにっこりと微笑み掛ける。

それで社員駐車場へ、この近道を急いでいたんだな？

なるほどね。

けど……ナンテ笑顔が素敵な娘なんだあ？

ムツツリ課長とは全く違うぞ???

『中身』以外は良く似てる……チョット課長よりも若くてヤボった
いけど……な？

「三浦さん？ あー、今はチョット先を急いでるからナンだけど、
ぶつかったお詫び。今度、お茶しない？」

三浦さんはスコシだけハニカンで頬を染めた。

「お茶だけなら……いいですよ？」

……??? ナンだ？ 意味深な言葉だな？

「アトでメール入れるよ」

「……………」

俺の言葉に、彼女はこくんと頷いた。
うなず

名前と部署さえ判れば、PCから社内でのメールは可能だ。

俺は彼女の言葉に多少引つ掛ったが、先を急いでいたから彼女とは

そこで別れた。

広報部の『三浦さん』……か。

世の中にはソックリな人間が三人はいるって聞いたコトあったが……
ホントなんだな？

「日高くん、チョット」

案の定、カンペキに遅刻してしまった俺は、先に部署に入っていた課長から呼び出しを喰らっていた。

俺は仕方なく課長のデスクの前で、姿勢を正して直立する。

課長の張り詰めた声に、俺が倒れたコトを知っている部署内の連中は、カタズを吞んで俺を見守っていた。

職場復帰の初っ端^{はじはな}からこれかよ……？

気が重。

課長は度の軽い眼鏡を指先で押し上げると、俺に睨みを効かせる。

「まだ本調子でないのは判るけれど、時間はちゃんと守って貰いたいわね？」

「……はい」

ナニ言っただよ？

人をサンザン待たせておいて……拳句に放り出しておいてコレかよ？

黙っている俺の視線が、恨めしそくに課長を咎める。^{とが}

幾ら社内では部下と上司だからって……あんまりだ。

ピ。ピ。ピ……

ウン？

携帯が鳴っている。

「ナニ？」

課長は鬱陶しそくに顔を顰めた。^{しか}

「失礼します」

メールだ。

俺は課長に背を向けて、メールの閲覧ボタンを押した。

「え？」

……自分の眼を疑った。

メールの相手は……ナンと俺の目の前に居る課長からだった。

『ゴメン。遅れるとは思わなかったの。明日からはもう少し早く起

きるから』

そしてミヨールにカワイイクマのぬいぐるみの絵が、ぺこりとお辞儀をしていた。

こつつ、これって……

「ぶっ……」

思わず噴出す俺。

「チョット！ 聞いているの？ 大体貴方は自己管理が……」

課長は何食わぬ顔で俺への批判・説教を続けている。

俺を見守っていた部署の連中が課長にドン退きしているのが判って、それはそれでヘンなカンジだった。

これって、課長が俺との関係を周りに知られないタメの手段かな？

よくは知らないが、コンナのが俗に言う『ツンデレ』？

そうとも取れて、なぜか俺は浮かれていた。

コッチからは見えていないけど、机の下で握っている携帯には、あらかじめこのメッセージを入れていたようだった。

アトは課長がナニを言ったのかは覚えてはいない。

けど、こんなコトもするヒトだったのかゝってカンジ……だったよ？

「日高、落ち込むなよ？」

向かいの席の鈴木主任が、席に着いた俺に開口一番そう言った。

手先が器用な人で、片手でペンをクルクルと廻して遊んでいる。

よっぽど俺のコトが気懸かりだったのか、主任はキノドクそうに俺を見た。

そんなに心配しなくっても、俺はダイジョウブなんですけどね？

「はあ……」

「以前はあんな課長じゃなかったんだけどね？」

そう言ってチラリと課長の方に視線を向けた。

「？」

「課長の男勝り……って言うか、男嫌いのコトだよ」

……まあ、ハナシの内容はナントナク察しが付いていた。

多分、頼った男に、逆に頼られたんだろうな？ ……って。

「そこ！ 私語は謹んで！」

俺が鈴木主任の話に耳を貸す前に、鋭い課長からの一喝が飛んだ。

「また、今度……な？」

「ハイ。了解ッス」

俺は主任とそんな約束を交わしていた。

第12話 × ?

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

席に着いた俺は、P Cから届いた各所属部署からの業連（業務連絡）やメーカー、業者からのヤマほどのメールが入っていたのを確認して、ウンザリした。

社内のメールには、当然送った相手の名前とメール内容が表示されている。

……はあ？

……柴崎睦美？ 足立桃香？ 江藤真由？

……ナニ？ この女性名は？

メーカーや業者からのメールに混じって、女性名が二十件近くも入っていた。

業務よりも女性メールを優先する俺ってどうよ？

それも全員がココの従業員、若しくはパートや派遣の人もある。

どれもが俺への『元気出せよメッセージ』だった。

中には、『彼女になってもイイよ？』ってメールもあつたが、俺の守備範囲外のお姉様方からだったので、快く遠慮させてもらうつコトにする。

ドツサリあつた業務上のメールを内容確認するだけで、半日ドコロ
か一日以上も掛かりそう。

面倒になつた俺は、不本意ではあるけども仕方なく……そのメール
の一切を無視をして、広報部の三浦さんにメールを送っていた。

……って、それがホントの目的だつただけだね？

彼女が社外に出て行つたコトは知っていたから、返事は当然帰社後。
早くてもお昼過ぎかな？

お茶じゃなくつて、食事……ってえのも……アリか？

……とも思つたが、俺はカワイソウな囚われの身だから自由になる
時間は十時以降。

飲みには行けても、とても食事に誘える時間じゃない……か。

うん？ ……待てよ？

こんな時、俺の悪知恵が働いた。

彼女は俺と同じ会社だ。

出社時間も同じなら、帰社時間もタテマエ上は当然同じ。

まあ、広報部なら営業が絡んで来るから、設計部の俺とは時間の誤差はあり得るが……

一緒に帰ればいいじゃんよ？

一日くらい家事サボったって、課長は許してくれる……だろう？

……でも、デートでメシが作れませんでしたあゝって、バレたらブ
ン殴られるかな？

バレなきゃいいんだ。

バレなきゃ……

俺は課長のお世話係を条件にされているコトも忘れて、勝手に三浦
さんをカノジヨのツモリにしていたし。

俺の勘からして、三浦さんはとくにオンナになっている。

同じ容姿なら、オモ過ぎる課長より、三浦さんの方が気が楽だ。

彼女に鞍替えすれば、えっちなオトナの付き合いもソレナリに出来
そうだし……少なくとも課長よりも場数踏んでいそうな彼女の方が
オイシソウだった。

やっぱ、俺ってサイテーかな？

* *
* *

「う……ん？」

彼女の熱く火照った唇が、俺の唇の上下を代わる々挟み込み、弄もてあそんでいた。

細い身体がゆつくりと撓しなり、シートベルトで固定され身動き出来ない俺の身体に纏まとい付く……

まるで蛇みたいだと思った。

俺は彼女に浅く応えながら、逃げ出す方法を考えていた。

いかん！

ナントカこの事態を早く収めないと……俺、マジでヤバイかも……

単にキスしただけなのに、頭の芯が痺しびれて来る。

もしかして媚薬でも一服盛られちゃったのか？

こんなオナナ、初めてだった。

今まで俺が付き合っていたオナナとは比べようがない。

……重ね合わせる度に、接触した肌の部分から、徐々に俺の魂が抜き取られてフヌケになって行くみたいだった。

彼女は妖怪か？

そんなバカな？

俺ともあろうモノが……オンナに襲われて……いる？

そんなに経験豊富……とまでは豪語出来はしなかったが、カノジヨと呼べる何人ものオンナから始まり、ソープ嬢、デリヘル嬢からナース、飲み屋のお姉さん……自分のにも一応、場数は踏んでいるツモリだった。

このオンナ……三浦有紀みつじゆきに出逢うまでは……

彼女は俺からのメールに快くOKして、帰りに裏門で待ち合わせてくれた。

もちろん自分の車が無い俺は、課長のフィットでお迎えだ。

俺は、誘いにカンタンに乗って来た彼女に対して調子づいた。

取り敢えずはぶつかった時のお詫びから始まり、お互いの部署内での仕事や、部署内に居るヘンな社員達ヤツ、食堂のメニュー等……同じ社内だが滅多には出逢えないくらい広くて大きな会社だ。

共通の話題には事欠かなかった。

お互い好意を持っていたせいもあって、車内はあっという間に盛り上がる。

暫らくは雑談で適当に車を転がしていた俺に、彼女はお気に入りのお店があるからと言って、ナビゲートして来た。

ところがだ、彼女の指示通りに走らせていると、いつの間にか車は俺の知らない山奥に入ってしまったていた。

俺は車を停めて、道を間違えたのじゃないのかと問い質すと、彼女はイキナリ俺を襲って来たんだ。

妖しい艶やかな視線が、俺の思考回路の一つ一つを、をまるで蜘蛛の糸が何かのようにじんわりと緩やかに絡め取って行く。

甘い吐息で俺の頬をクスグリ、澄んだ瞳が俺の反応を窺った。

そして、弾力のあるピンク色の唇をハシタナク大きく開いたかと思ったら、イキナリ俺の唇を果実かナニかを貪るようにして強引に求めて来たし。

「あぐっ……」

思わず声が漏れた。

洗練されたファッションの課長に比べて、化粧や私服……見た目はホント地味系なのに、遣るコトは大胆だよな？

「どっしたの？ ふふっ、手が停まっているわよ？」

「……………」

彼女は意味深に含み笑いをすると、俺の頬にチュツと音を立ててキスをした。

白くて細い指先が俺の手を取り、ワザと自分の大きくハダケたシャツの隙間へと導いて行く。

そして、彼女の空いたもう片方の右手は、俺の股間をズボンの上から微妙な力加減で弄もてあそんで来た。

熱っっ！

彼女の掌てのひらの熱さに、俺の身体がビクンと反応した。

う……あ……マジ、感じる……

俺の額に薄っすらと汗が噴出し、その一つがスジを引いてコメカミに、っ……と流れた。

ぞくりと背中に冷たいモノが奔る。

オナナ泣かせの……と、自分で勝手に思っているこの俺が、このまま押されていてナルモノカ……ってえ、ナケナシのプライドみたいなモノが、俺を奮い立たせた。

彼女の胸元に触れている俺の利き手は、いつの間にか石膏みたいにキメ細やかで柔らかな肌の感触を愉しんでいた。

大きくハダケた胸元から、谷間が媚びるように見え隠れしている。

……コイツ、相当遊んでる……

彼女は潜在的に持っているモノと、実践で身体が覚えた後天的なモノの両方を持っている。

どうやら俺の勘は間違っただけみたいだ。

軽く触れた胸は……

オクテの課長と違って、スッゲー反応早ッッ！！

彼女はこみ上げて来る快感に身をユダネルように、細い眉を寄せて眼を閉じると、そっと額を俺の肩口に凭^{もた}れ掛けて来た。

「お、お茶……するって……くっ……言いません……でしたっけ？」

「……そんな意地悪言わないの……こうしたかったから、私に声を掛けたのでしょうか？」

蕩けるような甘い吐息で囁いた。

膝丈のタイトスカートを、素早く自分で乱暴に引き上げると、運転席に居る俺の上に、大きく足を広げて押し掛かる。

手馴れてる……！

ソレナリニ嬉しいが、内心退きギミの俺。

……俺、彼女に喰われそう……

「べ、別に……っあっつ、ぶ、ぶつかっただけ……お詫びが言いたか……」

…つつた、ダケですよ？」

彼女の細い肩と、チラチラと見える白い胸が揺れて、俺はくすくすと笑われた。

生暖かい吐息が俺をクスグル。

「ウソ……日高君、そんな眼で私を見ていなかったわ」

「へ、へえ？……『そんな眼』って、どんな？」

挑むような、媚^こびるようなどちらにも取れそうな妖しい視線を俺に投掛けて、艶^{つや}やかな唇を軽く綻^{ほころ}ばせる。

「う……」

なんてえ表情するんだよ？

妖しい余裕の微笑が、俺の心臓をズキンとばかりに貫いた。

ひええ~~~~！

さっきのナケナシのプライドはドコへやら……たちまち『攻めモードの俺』はナリを潜めてしまってる。

彼女に主導権を握られたまま、俺は今のトコロなすスベ無し。

完全にお手上げた。

もお、スキにしてっつ！

だけど、頭のドコカでこの三浦有紀のコトが引っ掛って仕方なかった。

課長によく似ているから……？

いや、それもあるけど……違う？

どうしたんだろう？

いつもなら通りすがりのオンナだと見切って、アッサリとラッキーに預かっているこの俺なのに。

なぜだか有紀のコトが気になって仕方がない。

……ナンでだ？

えっちだけ……ってゆーのとも、スコシ違ってゐるみたいだが……
???

あうっ……ナニが大切なコトを思い出せないような……思い出さ
なきゃなんねーような……モドカシイ感じ……

ナンだよ？

俺、どうかしちゃったのかあ……？

彼女の視線に射抜かれて、俺、やっぱりオカシクなっちゃったのか
あ？

「あう？」

彼女が舌先を尖らせて、俺の首筋から耳へゆっくりと焦らすように
這わせ、みみたぶ 耳朵を少しキツク噛んだ。

俺の顎が仰け反る。

いかん。

背筋がゾクゾクして、今度は俺の相棒がドンドン熱くなってきた。

俺、彼女に好いようにされてるよ。

こうなると、シートベルトが邪魔だ。

セツカクのお膳立てを頂かないワケには……

ピ。ピ。ピ。……

つてえ？

「……………」

携帯の呼び出し音に、お互いがハッとなる。

表示は課長からだった。

出ないワケにはいかないし。

でも、これでマジ助かったのかも……？

このままだと、俺、彼女に喰われてたし。

俺は大きく溜め息を吐いた。

いかにも、途中で携帯にジャマされてしまつて、ザンネンだって顔をして。

「……ゴメン。携帯」

目の前で、呼び出し音が鳴っている携帯を軽く持ち上げて見せる。

「判つてゐるわよ」

彼女は俺の上で、ムツとして口を尖らせた。

……ザンネンでした。

アリアリと悔しがっている彼女の表情に、俺はココロの中で舌を出す。

気分を切り替え、俺は努めて明るく携帯に出る。

「はい？」

・「山奥だなんて……一体、どこに行つてゐるのよお？ 司の馬鹿あ

っ！」

「……………」

課長の拗ねた怒鳴り声が聞えた。

……………ナンだよ？ 今の。

……………らしくない。

つか、俺的にはチョット…………可愛かったぞ？

携帯から漏れる課長の罵声に、彼女も気マズくなったのか、押し掛かって絡めていた身体を俺からそそくさと退けた。

どう考えても携帯の声の持ち主は、俺の彼女だなんて判るシチュエーションだ。

ご馳走を取り下げられたような悔しそうな顔をして、彼女は渋々助手席に座り直す。

俺はそんな彼女の様子を眼で追いながら、課長の相手をする。

「はあ……………友達を送って……………迷っちゃいました」

・「まあ……………帰るわ。早く迎えに来て？」

「了解」

GPS？

……だな？

正直、中断されて「惜しい」と思う自分と、「助かったあ」と思う自分が二人居て、自分のコトなのに妙にオカシかった。

一体、本当はドツチなんだあ？

……って。

「三浦さん、あの……」

俺はすまなさそうな顔をして、彼女を振り返る。

「言い訳なら結構よ？ 残念だけど……いいわ。そう言うコトなら」

はだけた胸元を整えながら、彼女はぴしゃりと言った。

スコシ怒っているみたいだ。

怖え……彼女も課長と同類かあ？

気、強そう……

「……ゴメン」

「次は彼女からのアポが無い時にしてね？」

「ああ……そうする」

って……マジで？

俺は改めて有紀を見詰めた。

有紀は白い項に掛かった黒髪をファサリと片手で払い、首を横に振った。

俺のトコにまで、有紀が愛用しているらしいシャンプーのイイニオイが漂って来る。

『次は』……って？

それって、俺には『次も在る』ってコトなの……か？

リベンジ出来るってコトだよな？

光荣？ それとも恐怖？

ふふっ、今のトコロ『光荣』だと受け止めておくべき……だよな？

お陰で課長との中途半端なえっちで、悶々とするコトがなくなりそんな心配。

見通し明るいつつ……？

彼女がシートベルトを着用したのを確認すると、俺はアクセルを強く踏み込んで数回大きく空ブカシをする。

そして例によって乱暴な切り返しで三百六十度のスピントーンを披露した。

カーブに差し掛かる度に、ワザとリアを滑らせてドリフトを掛ける。

フィットはタイヤから白煙を上げ、その都度彼女のヒメイを曳きながら、^{ひとけ}人気の無い山道を駆け降りて行った。

第13話 思惑？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺は三浦さんを最寄りの駅で降ろすと、一目散に課長の居る会社へと舞い戻った。

「お早いお着きで」

課長は俺の顔を見るなり、アカラサマに顔を顰^{しか}めてイヤミ^ミたらしく言い放つ。

うわ、ご機嫌斜めだ。

帰宅するだけだろうに、チョツとくらい遅れたぐらいで文句言つて欲しくはないんですが？

「あれ？」

帰宅するだろうと思つていた課長の服装は、今日見た就業中のビジネススーツじゃなかった。

やや深めに胸元がカットされた紺色のシンプルなワンピーススーツに、対になっているボレロは紺色で白い縁取りがしてある。

足元は黒のバックストラップの七センチヒール。

細い鎖骨には、繊細なシルバーのネックレスがあり、その先には淡

いピンク色に輝く小さな石があった。

耳にもネックレスとお揃いの淡いピンク色に輝く小さな石のピアスが、薄い耳朶みみたぶから今にも零れ落ちそうに付いていた。

これって……ダイヤ？

しかもピンク？　ピンク・ダイヤ？

本物志向の課長が、イミテーションを身に着けるコトは先ず……ナイと思う。

つか、イミテーション自体が不必要？

だとしたら、すげーっ！

ナリは小さいが、初めて見る貴重な宝石に俺は無条件で感心した。

……で、ドコかにお出掛け？

部署からの連絡を聞いていないから、他部署での飲み会か、御呼ばれか……？

そっか、今日は週末の金曜日。

完全週休二日制の木村工業だ。

なあゝんだ。

食事作って待っていなくて正解じゃん？

俺は妙な理屈を付けて、三浦さんとの密会（未遂密会？）を正当化していた。

俺は車中から助手席のドアを開けたが、課長はナカナカ乗り込まない。

「？ どうしたんスか？」

見上げた俺の視界に、課長は腕組みをして強い眼ヂカラでもって俺を睨み付けていた。

ナニ？

お迎えが遅くなってしまったコトを、まだ怒ってんのか？

「よく見て？」

課長はそう言っと、黙って黒いセカンドバッグからミニミラーを取り出した。

「……………」

不思議に思いつつ、俺はそのミラーを覗き込む。

「あつ……………」

……俺の頬には、三浦さんに襲われてキスされた口紅のアトが薄っ

すらと残っていた。

「あつ、……あのつつ、いや、こゝこれは……」

シドロモドロになる俺。

妥当な言い逃れを……って、俺は頭を巡らせるが、この状況証拠を言い逃れするのは先ずムリだ。

「さつさと拭いて？」

言われて俺は、慌てて手の甲で何度も拭った。

課長は眉を顰^{しか}めて怒った声でそう言つと、やっと助手席に滑り込む。

……やべえ……

俺としたことが……もうバレチャッタよ。

チラリと課長の表情を盗み見しようとして、視線が本人とバッチシ合っちゃったし。

「司が誰とナニをしようと……イイけど……ワタシのフィットを遣つて欲しくないわ」

課長は俺から視線を逸らせると、一瞬ためらってそう言った。

「ホント？」

俺は自分でも驚くほど嬉しそうな声で返事をしていた。

「……………」

課長は俺に顔を背けたまま、こくんと頷く。うなず

「……………」

俺は、取って付けたような課長の横顔を見詰めると、スコシだけ不愉快に思った。

……………ウソ吐け。

素直じゃねーな。

ナンでもっと怒らねーんだよ？

俺は課長が顔を背ける瞬間、哀しそうな表情をしたのを見逃さなかったんだ。

……………怒って貰っても……………困るけどよ……………

俺は自分でも不思議に思うくらい、居心地の悪さを感じていた。

* * *

「え？」

俺は課長のコトバを聴き返す。

「聞いていなかったの？ 食事、まだでしょ？ だから、これから
司と一緒に行くの。コンチネンタル・ホテルに」

「え？」

もう一度、訊き返した。

「コンチネンタルよ？」

ナニイ？ 『こんちねんたるほてる』……だあ？？？

「場所、判る？ ……どうしたの？」

俺の呆けた顔を見て、課長はプツと噴出した。

「あ？ え？ ええ。場所なら判りますよ？」

『場所だけ』……ならね？

聞いたコトのある有名なホテル。

だけど、ソレがナンだっけ言うんだ？

所詮、俺には縁の無いモノだと……思ってた。

しかも、食事？

うわ……俺、テーブルマナーなんか……知らねーゾ？

憂鬱になりながら、俺はフィットを市街地へと向けた

* *

課長の指示で俺は不器用にエスコートをして、ドラマにでも出て来そうな二人用の予約テーブルに案内された。

そして、テーブルマナーを知らなかった俺は……

注いで貰うワイングラスを持ち上げたり、音を立ててスープを飲んだり、フォークを落したり……

全く、お約束のようにサンザンな食事だった。

料理の味はモチロン最高だったけど、俺のマナーはサイテーだった。課長はその度に俺に小声で注意……つか、アドバイスしてくれたけど……

「……ナンだが、食べた気がしないツスよ」

レストランを出ると、俺は課長に文句を言ってしまった。

つか、俺の神経状態じゃコレが限界だ。

屋台でおでんかラーメン食ってる方がマシだってーの。

「……みたいね？」

課長はクスクスと上品そうに笑った。

「帰って何か作る……課長も何か食いますか？」

ここでのワインも旨かったが、やっぱり俺にはチューハイかビールがお似合いだ。

帰ってビール飲んで……

そ〜だな？

ツマミにアスパラのベーコン巻きでもササッと作るか……？

俺はまだホテルのロビーにさえ着いていないのに、ポケットから早々とフィットのキーを取り出して弄^{もてあそ}び、帰宅するツモリでいた。

ワイン飲んだから、モチロン代行……カッコ悪いケド。

「ツマミにアスパラのベーコン巻きと枝豆なんてどーっすか？」

「……」

返事が……無い？

メニューに不服なのか？

「あゝ、なんなら冷奴も付けましょうか？」

「……………」

あ、あれ？

俺は帰ってくるだろう課長の返事を期待して待っていたのに、返事どころか課長の気配すらしてねーぞつつ？？？

振り向くと、課長との距離は五、六メートルくらい離れていた。

立ち止まった課長を、俺は気付かずに取り残して、先を歩いてしまつてたんだ。

「？……………どうしたんスか？」

いつもなら、俺よりもずっと先を歩いてるような人なのに、今日の課長はいつもと違っていた。

思い詰めた表情を向けた課長は……………

黙って俺に向かって握った右手を差し出した。

俺の視線を避けるように受け止めながら、テノヒラを返し、オモム口に細い指を開く

「……………ナンの……………マネ？」

鼻白んだ。

課長のテノヒラには、ホテルのカードキーが納まっていた。

「……予約……したの」

「予約？」

冗談。

俺はドン退きした。

さっきのお粗末なテーブルマナーで、シェフやソムリエから失笑を買い、課長からは苦笑を買っていたのに……まだこのホテルに居座れてえのか？

俺は一刻でもこの場から立ち去りたかったのに。

居心地悪すぎて息苦しささえ覚えているのに……

一気に不機嫌になる。

「……」

俺はカードキーを握っている課長の手を包むようにして握ると、力任せにその腕を引いた。

「ちょ？ 司？ どうしたの？ ねえ？」

そのまま黙ってフロントへとずんずん歩く。

課長は俺に腕を掴まれて引き摺られるようにしてついて来る

「ちょ、ちよつと！ 放してよ……」

恵理の不満げな声を無視して、俺はフロント受付のスタッフと視線を合わせた。

「いらっしやいませ」

フロントのスタッフは丁寧に頭を下げて俺を出迎えた。

嫌がる恵理を俺が連れているのに、顔色ひとつ曇らせずに対応してくれる。

「キャンセル」

俺はムツとなったままそう一言。

そして課長の手からカードキーを奪い取り、カウンターに戻した。

「あの……何かお気に召しませんでしたでしょうか？」

トラブルかと、気配を察して奥から出て来た責任者が、戻されたカードキーを見詰めて問い掛ける。

「いや、こちらの都合です。代行呼んで貰えますか？」

責任者は一瞬、フに落ちないという表情をしたが、すぐに俺の要望に応えてくれた。

俺はマンションに戻るまで、課長とは一切顔を合わせないようにしていた

* *

「どう言っつもり……」

「どう言っつもりですか？」

玄関のドアを閉じた途端、俺達は向かい合って同じ台詞を口走っていた。

俺の剣幕の方がスコシだけ課長よりも勝っていたみたいだ。

課長は言葉を詰まらせて口をツグんだ。

あ、しかも退いてるし。

「課長も判っていたでしょ？ アレだけ俺に恥搔かせて……まだナニをするツモリだったんです？ 夜景がキレイだって言っただけ……もお、勘弁してくださいよ。俺は居たくなかった……判るでしょ？ 俺は、あの場所には場違いなんツスよ」

で、俺は先に自分の不満をぶちまけていた。

「俺なんか……え？」

「……」

急に課長は泣き出しそうな顔をして、俺の胸に飛び込んで来た。

「うあ？ ……ち、ちよっ……」

突然のコトに、一瞬怯んで背中から壁にぶつかった。

ドキン！

オロオロする俺。

「……馬鹿！」

「はへ？」

なんて仰いましたあ？

「アタシに……」

課長は俺の片手を取って、壁際に押し遣られた俺のフトコロ内側から深く入り込むと、流れるような体捌きたいさばでもって、俺を鮮やかに投げ飛ばした。

目の前で星がチラツク……

「痛……」

「女に恥掻かすなんて……サイッテー！」

痛ててて……

肩口から受身の練習をさせられているみたいに投げられた。

「ああ、そーですよ。俺は課長のお相手には値しない、サイッテーのヤツだよッ！」

ばし！

「ってーな！ 殴るコトないでしょ？」

平手は何度も喰らっていたが、サスガに今回ののはキビシかった。

つられて俺の頭にもカツと血が昇る。

俺はホテルで何度も逃げ出したかったのに……無教養丸出しの俺が……晒されているのガマンして、ずっと付き合っていたんだゾ？

なのにナンで殴られないとイケないんだ……？

途端に、三浦さんの口紅のアトを見付けられて、嫌な顔をしている課長の顔が浮かんだ。

「俺が他の女とヤルのがそんなにイケないコトですか？」

うわ、今俺ナンかヤバいコトを口走ったヨウナ？

もお、イイヤ。

開き直る俺。

「そうよッッ！」

ムカ！

「いつ、課長が俺の女になりましたっけ？」

いい加減にしるよな……ザレゴトゴトキで彼女ヅラされちゃ堪んねーんだっつーの。

「だから！」

「？」

予想していなかった課長のキリダシに、俺は驚いた。

その面喰った俺の表情を見るなり、課長は唇を噛締めて黙り込んでしまう。

あ？ チョツと涙ぐんでいるのか？？？

だけど、ナンで泣きたくなってたんだ？

ナニが『ダカラ！』なんだあ？？？

「だから……ナンです？」

「取ったのに……」

課長は少し躊躇うように小声で言った。

「ナニを？」

「……………部屋の……………予約」

「ああ、あのカードキーのコト？　へえ〜そうだったんですか……………
って、ええっ？」

課長の言わんとしている本当のイミを、ヤット理解出来た俺は退いた。

「……………最上階の……………スイートだったの……………」

マジで？……………うわ……………モッタイナイ！

以前、お水の麗華^{れいか}や何人もの女達から聞いたコトがある。

自分が行った部屋は最上階じゃなかったけど、あのホテルから見える夜景はバツグンだって……………
^{ロケーション}

『司つちも、（俺は一時そう呼ばれていた……………ハズカシイ）彼女と来ればイイよあ？』なんて言われて、その度に『俺がそんな金の掛かるトコロなんか行ける訳ナイだろツツ』って、言って笑いとバシてたよなあ……………

……………つてえ、今はそうじゃないだろ。

「イッショに朝を迎えましょ……って？」

課長の言葉尻をとって、俺が続けた。

「……」

課長は俺から視線をハズして頬を赤くすると、恥ずかしそうに片手を口元に持って行く。

そしてホンのスコシだけ間があつてから、コクンと大きく頷いた。
うなず

その微妙な『間』に、俺は課長の覚悟つか、期待つか……そんなものを見出し、更にドン退きする俺。

いや、今までも十分イッショに朝を迎えておりますが……？

それでもナットク出来ない？

「……」

……一歩手前で自重出来るか？ 俺？（不安）

「はぁ……お仕置が必要ですか？」

俺は深く溜め息を吐いた。

その様子に、課長は瞳をウルウルさせながらも驚いて俺を見上げる。まるで拾い上げられたネコみたいだ……それも品評会にでも出られ

そんな血統書ツキのネコ。

野良犬の……雑種の俺とはヤッパシ違うよ。

しゅる……

俺は上着を脱ぐと、乱暴にネクタイを解いた。

「イヤだって、泣いちゃっても知りませんかね？」

正面からふわりと抱き締めた。

課長の竦めた肩がびくんとハネる。

さすがに俺の言葉に退いていた。

今更後悔したってオソイからなっつ。

挑発したのは課長だぞ？

第14話 スコシ変態？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺は課長の肩に手を掛けた。

背中に廻した利き手は、微妙な力加減で背筋をススツツとなぞっている。

俺に触れられるのがイイのか、それとも背中がヨワイのか？ 課長はもう赤面して荒い吐息を吐いていた。

課長が俺の手から逃げるように軽く肩を引くと、着丈が短いボレロタイプの上着は、そのままスルリと足元に落ちる。

「あ、上着、シワになっちゃうとイケナイんですね？」

意地悪そうに言ってやった。

「……………」

課長は、『こんな時に言わないでえ』って顔をして、うるうるした瞳で見上げて来た。

けど、今までそう言っていたのは課長ですが？

お互いに向かい合わせで抱き合っている状態でのワンピースって、俺的にはかなり好き。

簡単にファスナーに手が届くし、びゃーッと降ろすだけで手間もからない。

だけど、敢えて俺は課長に後ろを向いて貰った。

右手で課長の顎を下から押さえて固定しながら、その片腕で課長の身体全体を支える。

「あ！」

俺の利き手のテノヒラが、課長のフンワリセットの髪を撫で付け、白い項を露わにさせた。

クスグルように俺の鼻先と唇が、代わる代わる項を這う。

時折熱い息を吹き掛けて、じれじれと撫で回した。

「あんっ、くう……」

たまらなくなつた課長から、甘い声が漏れた。

俺の右腕に掛けた課長の両手に、軽く力がコモル。

俺は課長のワンピースのファスナー部分に噛み付くと、ユックリとそのまま引き下ろした。

インナーは、淡いピンクのレースを使った豪華なスリップだった。

その下には、多分コレもお揃いだろうなと想像出来る同系色の下着のシルエットが、恥ずかしそうに透けている。

コレが課長の勝負下着だったのかぁ~~~~カワイらしいけど、イヤラシさは低めだよな？

で、五段階評価でポイント三。

可もなく、不可もなく……ってえ、チョットキビシイ採点だったか？

紺色のワンピースが輪っか状になって、頼りなくパサリと床に落ちた。

俺の利き手が課長のスリップをスカート捲りのようにたくし上げ、ストッキング越しのナマのラインを弄まさぐった。

カンジて興奮したせいか、課長の肌は少し湿って熱くなっている。

……うん？

指先に微妙な違和感……

ナンで左右一体型のパンスト履いてんだ？

「こんな時はガータータイプのストッキングがお約束ですよ？」

くすくすと笑いながら俺は課長に囁いた。

「え？」

「このアドバイス、さっきのテーブルマナーのお礼です」

課長は頬を染めながら『そうなの？』って顔をした。

「くつくつくつ……冗談ですよ？」

マトモに受け止められても困るんだが……でも、俺的にはガータータイプがスキ。

もぞもぞと蠢く俺の手に、くすぐったいのか身体をくねらせる。

まあ……くすぐったいんだろうな？

「あー！」

俺の力加減がマスカッタのか、ストッキングに伝線が……

いいや、このまま破っちゃえ。

俺は手を解いて課長の背後に跪き、今度は両腕を課長の腰に廻した。

「はむっ！」

「きゃ？」

腰のサイドライン辺り……骨盤下のストッキング越しに、軽く噛み付く。

フトモモを舌先で強く押し遣ると、ストッキングがヨレた。

そこから歯で微妙な力加減を遣って課長の身体からストッキングを

浮かせる。

びびび……

ワイルドに、俺はストッキングを噛んで引き裂いた。

「ああっ……」

さすがに課長も自分がナニをしているのだから、気付いたみたいだった。

少し蒼ざめて震えてる。

破ったストッキングを器用に脱がせると、俺は立ち上がって背後から課長を抱き^{すく}竦めた。

「課長？」

俺は課長の頭越しにそつと囁く。

課長の頭、花のシャンプーの残り香がしていいニオイだ。

「……え？」

「『止めて』と言えば、まだ止められますよ？」

俺的には、まだダイジョウブ。

「……」

だけど課長は何も言わなかった。

強情だな……ナンでガマンするんだ？

仕方ないや。

で、続行。

俺はさつき課長に『イヤだって、泣いちゃっても知りませんからね？』って脅しちゃってたけど、正直、そんな気はサラサラ無かった。

「ルール決めましょう」

「？」

「課長が『いや』とか、『止めて』と言えばそこで終わりです。俺、止めますから」

本当は、今スグにでも止めたいのは俺の方だ。

いつ暴走するか、判んねえ。

「イイですか？」

課長はこくんと頷いた。

俺は腕を解く。

「ね、ねえ……」

「はい？」

「アタシが……その……言わなかったら……？」

課長は頬を一層染めて俺に振り返った。

視線が強く絡み合い、ドキツとする。

つられて俺までが顔を赤くした。

いや、それはナイだろう？

俺は課長に『イヤ』って言わせるツモリなのに。

「その……約束……してくれる？」

「ナニをです？」

この期に及んで……

「……また一緒に……ホテルで食事したり……」

ナンだ？

その「くたり」ってえ曖昧かつ意味深なセリフは？

別のコトなら判らないけど……俺はそこまで課長がガマン出来とは思えなかったし、さっさと『イヤだ』って言わせられる自信があった。

「イイですよ？ …… 高級ホテルでの食事だろうが、社交パーティーだろうが、課長がそうしろって言うんなら、ゴイッショしますよ？」

余裕からか、俺は不必要なコトまでコイていた。

多分、きつとムリ。

そうなるコトは、俺的には『在り得ねー』ハズだ。

絶対に『イヤ！』って言わせてやらア。

「ホント？」

「え？ …… あ、はい」

つてえ、ナニその嬉しそうな顔は？

俺は課長の意外な表情に気圧されて、少し退いた。

……言わなきゃよかったかも……？

少し後悔……

「先にシャワー行って来てください。で、俺の部屋ゲストルームで待ってて貰えますか？」

「……」

課長は真っ赤になりながら、もう一度こくと頷いた。

俺の腕から離れると、少しだけふら付きながら脱衣所へと歩いて行く。

？ どうしたんだ？

この程度のザレゴトなんてシヨツチュウじゃん。

今更、恥ずかしがるガラじゃナイと思うケド？

……さあ〜て、ドウしちやおうつかなあ〜

イタズラ心がムクムクと湧き上がり、俺、ナンだかとっても嬉しくなる。

要はチョットだけ変態すれば、課長だって嫌がるだろうさ。

勝手に俺の部屋にしちゃってるゲストルームには直行せずに、俺は先に課長の寝室に入る。

部屋の出窓には、直射日光が差し込まないように、窓側を断熱ボードで囲んだ三十センチ水槽が置いてある。

そこには課長が祭りで採った、二匹の小さな金魚がヒラヒラと泳いでいた。

「……」

な、ナンか金魚と視線が合った……ような???

金魚がコツチを見て、ホンの少しだけ俺が今から遣ろうとしているコトを咎^{とが}めているみたいに思えた。

もちろんソレは単なる錯覚で、俺の良心がそう思わせていたのだと判^わっちゃいるが……

「……」

まあ……イイヤ。

サッサとイヤガラせて遣れば済むコトだ。

俺は再び室内を物色し始める。

課長がそのままにしているのであれば、まだ残っているハズ。

いや、ゼツタイに課長のルーズな性格から、ソレはここに在るハズだ。

俺を拘束した首輪。

された方の身になれてんだ。

俺はベッドとの壁の隙間に左手を差込んで弄^{もて}った。

「お?」

指先に、ヒンヤリとした金属特有の感触。

あつた！

ついでに解除用のリモコンも見つけた。

……

課長が浴室から出て来た物音がする。

俺は首輪とリモコンを隠し持つと、自分もシャワーを浴びるために立ち上がった

「お待たせ」

俺は腰に白いバスタオルを巻いた格好で、イイ感じに茹^ゆで上がっていた。

片手で濡れた髪をフェイス用タオルで乱暴に拭き、もう片方の手にはよく冷えたエビスビールの五百缶を二本下げて持っている。

もちろん、俺と課長のだ。

喉が渴いているからつてのもあつたが、目的は課長を酔い潰してサッサとイタダキ……ち、違う違うーっつー！！

酔い潰すのは間違いじゃねーけど、イタダクんじゃなくってその逆だ。

眠らせてしまうのが目的。

で、そのアトをイタダキ……って？

ちつつ、ち・が・う・つつ！！！

俺は自分の突っ込みに、慌ててブンブンと首を振った。

俺と同じ条件で、^{スタンズ}コトが在っても、無くっても単なるオトコとオ
ナの……って言うのならまだしも、このオンナは俺の上司で社長の
ご令嬢。

しかも、このナガレの課長って、ロストバージン願望オンナ？？？

つか、そんな相手は俺じゃなくって、他をあたってくれつつ。

課長のお初を頂いた瞬間、俺はソレと引き換えに、残りの人生を投げ
出さなきゃなんないだろう。

……多分。

冗談じゃねーよつつ！！！

ナニが何でも手出しは禁止っ！！！

ココは死守するんだつつ！

俺は自分に言い聞かせると、課長を見付けて引き攣った笑顔に向けた。

課長はと言うと、純白のバスローブを着てベッドの端に座り……あれ？

もおビール空けてるし……

細くて白いすらりとしたその足元には、既に空き缶になっていた一本が転がっていた。

課長は普通の女性よりもアルコールに強い。

それはキッチンのダストボックスに溢れているビールの空き缶の量からでも、簡単に想像がつく。

そう言えば……

俺は入社当初からのゴタゴタで部署内……課長達とはまだ飲みには行っていないが、部署内での飲み会情報からは、ポン酒（日本酒）も結構イケルとのコトだった。

って、課長がアルコールに強かったのを忘れていたあああ……！

課長を酔い潰す前に、俺の方が酔い潰れちゃうじゃんっ！……！

だけど……

だけど、さすがに今は違っている。

もお、ビールに吞まれているみたいだった。

酔えないと（俺と）デキナイ……って、思ったのか？

それとも酔ったイキオイで……？

ヤバイ……

俺は自分の不利な立場を一瞬にして覚った。

「うん？ どうしたの？」

俺を見て、ニツコリと笑った課長の眼が、微妙に据わっている……

賭けに勝つツモリかあ？

それじゃ、俺が困るんだあああ……

「もう飲んじゃってるんですか？ トイレに近くなりますよ？」

俺の言葉に、課長は陽気にくすくすと笑った。

「ウン、じゃあ、お風呂でえっち……するう？」

ぞく……

ナンだ？ 今の悪寒は……

課長の口からそんなコトバが出て来るとは……

「じゃあ、ビール置いて？」

俺は動揺を覚られないように、平静を装った。

「いいよお？ …… あ？」

課長はサイドテーブルにビールを置いた。

俺は課長の目の前で屈み込むと、イキナリ課長のウエストを結んでいたバスロープの紐を手にして、少々乱暴に解いた。

はらりと白い肩からバスロープが滑り落ちそうになり、課長が慌てて両肩を押さえつける。

「腕、抜いて？ 押さえていますから」

俺がバスロープの胸辺りを曳いて押さえると、課長はするんと細い両腕を袖から抜いた。

白くてキメが細かい大理石みたいな課長の両肩が露わになる。

俺は腕が抜けたバスロープの袖の左右部分を取って、課長の胸の前で結んで遣る。

少しきつめに締めたから、課長の大きな胸が行き場を失って大きくバスロープから盛り上がった。

でか……

これって、アレが出来るよな？

俺は内心少しだけ小躍りした。

「じゃ、両手を出して？」

「うん……？ あ、あ？ なに？」

俺は課長の両手首を片手で掴むと、課長から取り上げたバスロープの紐でその両手首を拘束すした。

一瞬、課長の表情が強張った。

ご丁寧に、終わりはリボン結びにしてやる。

「ナニこれ……」

「カワイイでしょう？ 我ながら上手に結べたなあ」

「へえ……ちょうちょ結び、上手なんだ」

そんなコトで感心されてもナンドかな……

「ツイデにコレもさせて貰いますね？」

俺は課長の部屋から持って来た、金属製の拘束具を取り出した。

「ええ？ ちょっと……」

首輪を見るなり課長は退いた。

俺が課長のマニュアル上で知っている知識とは違ったコトばかりす

るからか、少々恐怖を感じていたらしい。

ナニセマダ『女の子』だし……

逃げ出そうとした課長だが、両手を拘束されているので、いつもの身のコナシとは違っていた。

「くくく……逃げちゃダメですよ?」

身体をくねらせて逃げようと素振りを見せた課長を、俺は難なく捕まえる。

かちゃ

俺は意地悪く含み笑いをして首輪を嵌めた。

「ああん」

「どうしました? S Mっぽくなっちゃいましたケド、ナニか期待出来そうですか?」

「う……」

「ムチとか、ローソクはありませんから安心して下さい」

怯えて緊張してしまった課長が急にカワイソウになって、俺は課長を安心させようと、慌ててコトバを付け足した。

「なあゝんだ。そうなの?」

「…………えつつ　???」

んな…………　????

俺のセリフに少しだけ残念そうにする課長。

ひょっとして俺の気遣いって無用？

いや、ムシロ…………期待…………してたのかつつ？

第15話 ゲーム？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「いい？」

俺は跪ひざまづいたまま、ベッドの端に座った課長の耳元で優しく囁く。

課長は軽く顎を引くと静かに眼を閉じた。

俺は壊れ物でも扱あつかうみたいに、そうつと課長を抱き締める。

ドキドキ……

課長の早い胸のコドウが、俺の身体に直接伝わる。

こんな時には拘束した手や首輪が、却かえってジャマなんだよなあ。

俺は、二人の間にある拘束された課長の両手を、恨めしそうに見下ろした。

自分でヤッておきながら、今更ナニ後悔してンだろ。

俺は課長の両腕の間に、頭を突っ込んで潜らせた。

自然俺の顔が、バスローブ越しの課長の豊かな胸の谷間に押し付けられる。

「あん」

課長の甘い声に、俺はニヤリと笑った。

一旦、課長の困惑している視線を絡め合わせると、再び顔を谷間に埋めてスリスリした。

……セッケンのイイニオイ。

あ~~~~ヤワラカくて気持ちイイ~~~~

グラマラスだと、こうゆー特典がオマケで付いているんだよね？

まあ、ガマン出来ないし。

俺は、たった今縛ったばかりのバスローブの袖を、早くも解ほどきに掛かっていた。

『脱がせる』ってえの、俺的に大スキだ。

『襲うつ』のも、『焦らせながら脱がせていく』行為にも、俺は興奮ほろしてソソラレル。

……ってえ、ヤッパリ俺って野獣？

男なら比較的フツーだと思うが……？

自然と荒くなる俺の鼻息が、課長の細い鎖骨に掛かった。

キツく縛っているバスローブから解放された課長の胸が、息苦しかったとでも言うように、ふるん！と揺れた。

ハズされた純白のバスローブは、滑らかな肌をスルリと滑り落ちて、課長の腰に心細く絡み付き、非力ながらも俺から最期の砦をガードしているみたいだった。

おおっつ！

眩しいくらいのその胸は、崩れるコトなく見事にプツクリとお椀型。

俺の眼に狂いは無かったあゝゝゝっつ！

ココ最近、巨乳ちゃんとはサッパリだったもんな。

何度もこの胸を、ナマで手ツカミ&驚ツカミしていたにも関わらず、この眼でジカに拝んだのはこれが初めてだった。

くっう っつ！！！

俺、無条件で嬉しくなる。

課長は恥ずかしさに耐えられなくなったのか、顔を真っ赤にして俺の視線を逸らせようと身体を振じらせる。

が、手首を拘束されている上に、中に俺が割り入っているんだ。

腕でガードして逃げ出すのはゼツタイにムリ。

「い……」

薄くグロスをひいたピンクの唇が、力なく開いた。

お？

溜息とも取れるその声に、俺は素早く反応する。

「イヤですか？」

軽く含み笑いをして、ナガラかな課長の白い肩に、唇を這わせながらチュツ、チュツと音をたててキスをした。

課長本人には軽くキスをされているぐらいにしか感じられてはいないだろうが、実はコレ、俺のチョットしたイタズラ。

確実に俺との証拠を残してる。

俺のキスマーク……短時間で簡単に消えるようにするには、力の加減が難しい。

弱過ぎて付かないし、かと言って強くするとキズみたいに残るから、俺的にはNG。

コレをヤルと朝の着換えの時に、たいていの女が気付いてビククリしている。

『いつの間に付けちゃったのぉ？』って。

前に、俺にナイショで別の男を掛け持っていた女が居たが、姿見に映った自分の肌を見て顔を引き攣らせていたっけ。

「……………」

「どうしました？」

ニコニコしながら課長を見た。

余裕をカマシテいる俺に課長はムツと来たのか、上気して赤くなっている頬を軽く膨らませた。

「んな……ナンでも……ナイ！」

ふーん。

強がっちゃって。

やっぱしリタイヤするのは早過ぎて、まだダメだよな？

俺はさっきのキスを続けながら、無造作に下から課長の二つのふくらみをブラみたいに持ち上げた。

課長から甘い吐息が漏れる。

俺も、課長の声を聞いて身体の中が熱くなって来る。

堪らなくなつて、俺は課長のツボミを含んだ。

課長の身体がビクンと大きく反応する。

「カンジル？」

俺は一定のリズムで課長の胸に触れる。

大きく揺らされてカンジテいるのか、課長は柳眉を寄せて硬く眼を閉じ、必死に理性との間で闘はたかっているみたいだった。

拘束されている手で胸をガードしようとして引き寄せてしまい、逆に間に割り入っている俺の頭を二の腕で抱き込んでしまう。

胸に顔を挟はさまれた俺、マジで窒息しそう。

でも、ナンだかシアワセ。

俺は課長の背中に腕を廻し、胸から名残り惜しそうに顔を上げると素肌で胸を合わせた。

汗でシットリと潤った柔らかい肌が、ピタリと俺の肌に吸い寄せられて来る。

そのまま、課長の背筋や首筋を思う存分触れて、肌の感触を味わった。

疵きず一つナイ絹シルクみたいな滑らかな手触りと、さっきヒミツで付けたキスマークを見ていると、俺はどんどんヘンな気持ちになつて来て、昂たかぶつて来る。

「課長……熱い」

俺も熱くなつて来ていたが、呼吸が荒くなっている課長の方が俺よりももっと熱かった。

「つ、司あ……」

「ハイ？ ナンデス力？」

返事をしながらも、俺の両手は停まることなく課長の背中を優しく撫で回している。

「そ……の『課長』って……あん……言う……の、止め……」

言い掛けて、課長はハッと口を閉ざした。

クドイようだが、俺が課長から『止めて』と聞いた時点でゲームは終わる。

『そんなのイヤっ』てえカンジで軽く頭を振ると、『まだ、セーフよねっつ？』って^{すが}縋るような顔をして課長は俺を見上げて来た。

「ナニ？ 『止めて』？」

ニヤニヤしながら俺が意地悪く見下ろすし。

「え？ う、ウウン、そっ、そんなコト言ってないっ」

スグ目の前に、半開きになった艶^{つや}やかな課長の唇があった。

俺はゴクリとナマツバを飲み下す。

このっつ。

強情を言い張るのはこの口かっつ？

朝露に濡れたサクラノボみたいだ……その果実のような唇に、俺は軽く顎を引いて自分の唇と重ね合わせる。

角度を微妙に変えて、俺は課長の唇をじっくりと味わった。

……エビスビールの味かしねー。

さっきまで飲んでたんだから当然なんだろうけどさ……

チヨット情緒に欠けるよなあ。

「ちよ……つと、ま、待つてえ……」

俺の残念そうな表情を読んだのか、課長はそう言って一旦俺に『タイム』を送った。

課長は俺の身体から両腕を抜くと、腕で胸を隠しながら身体三つ分くらい座ったトコロまで移動した。

そして身体を深く折り曲げると、自分の座って居るベッドの足下を手探りする。

……ナニを捜しているんだ？

見守っていると、捜し物をしていた課長の腕がピタリと止まった。

バスローブで拘束されている両手が、ベッドの物陰から化粧品みたいなコモノを取り出していた。

淡いピンク色の小さなチューブ。

課長って、ピンク系が好きなのか？

そっぴゃ、携帯の色もピンクだったな？

うーん、俺が思っていたよりも、課長はもしかして少女趣味？

職場の課長と自宅の課長の部屋からは、とても想像付かねーんですが？

「それ、ナニ？」

チューブタイプのハンドクリームみたいだが……？

「コレ？ ラブコスメ 化粧品よ？」

イヤ、ソレは見りゃ判る……って？

『らぶこすめ』……？

課長は腕でさり気無く胸を隠しながら、チューブのキャップを空けて自分の指先に少しの量をトロリと垂らした。

中から出て来たのは、半透明のモノ……

個体よりも液体に近い、ジェル状のものだった。

課長はジェルの付いた指先をペロツと舐める。

その行動は課長の毒味か？

「うん、ダイジョウブ……司？」

「ナンですか？」

課長はニツコリと笑って俺においでと手招きした。

またナニか企んでイルナ？

「塗ってあげる」

「？ ソレをですか？」

って、俺のドコに塗るツモリなんだよ？

チョツとだけ妖しい空気を読んだ俺。

コツチが退きそう……

まあ、見た目には害はなさそうだし、ダイジョウブか？

俺は跪^{ひざまず}いたまま、課長の傍へニジリ寄ろうとした。

その時だ。

「あっ！？」

俺と課長の声がハモった。

大きく踏み出した一步がマズカッタ。

俺の腰を覆っていたバスタオルが緩み、はらりと落ちる。

……ってえ？

自然な開放感に俺は一瞬慌てるが、ココは落着けつつ！

「っ……司？」

「はい？」

焦っているのを気取られないよう、俺はヘーゼンと返事する。

「な、ナニ？ ……それ」

『それ』って、ナンだよ？

課長は大きく息を飲んでフリーズした。

瞳を大きく見開いて、俺から視線を逸らせられないでいる。

「え？ ナニって……見りゃワカルでしょ？」

見なくっても、今の俺の状況くらいワカリマス。

俺は開き直って腕組みをした。

……落ちたハズのバスタオルは、全部床には落ちなかった。

俺の相棒が臨時のタオルハンガーになっていたからだ。

……チクショー、恥ずかしい〜〜〜!!!

「ぶつつ!~! ふふふつ……くくつ……」

例によって……課長の馬鹿笑いは健在だった。

「……もお、イイですか?」

課長が一頻り^{ひとつ}笑い転げるのを、ジッと堪^たえて待っていた俺。

こんなコトなら、『笑い出す』ってえルールも加えときゃよかったな?

「ゴメン、ゴメン……で、ナンだった?」

「あのね……」

俺は呆れながら、課長の手にしたチューブに視線を移して指をさす。

「あ? ああ、これね?」

笑い過ぎたのか、顔が真っ赤だ。

「ひょっとして……ローション?」

俺は課長の答えを待たずに切り出した。

「…………えへっ」

課長は細い肩をスクめて小悪魔みたいに舌を出す。

ジェル状だが、課長の反応からして多分当たり。

……ヤレヤレ。

ホント、知識だけは立派だよ。

俺は課長に気付かれない程度の溜め息を吐くと、バスタオルが完全に俺から離れ落ちるのも気にせず立ち上がった。

更に赤面した課長が両手で自分の口元を押さえ、軽く息を呑んで驚く。

そして、大きく見開かれた瞳は、俺のアル一点に釘付けになってしまった。

マジ見るな~~~~っつ!!!!

恥ずイだよ。

課長のホボお約束の反応に、俺までツラレテ赤面する。

イヤ待て、ココまで来て俺を『純情くんのチェリーくん』だと誤解されるのもナンだ。

「ココは一先ず冷静にならねーと……」

「それ、貸して?」

「あん」

俺は平然として、課長からソレを取り上げた。

『イヤ』って言えない課長は、仕方なく俺にジェルを手渡した。

俺は未開封だったキャップを開け、中味を利き手の指先にトロリと落とす。

ひんやりとした滑らかな感触が、指先に伝わった。

熱くなった肌のクールダウンには持ってこい?

逆に欲情しちゃうかな?

「塗ってあげますよ?」

「~~~~~!」

課長は俺のコトバに反応して『いや~~~~ん』って言いそうになった。

慌てて右の手の甲を艶やかな唇に押し当て、声を押し殺す。

ちえっ! ザンネン。

ラブコスメを付けた俺の利き手が、課長の滑らかな肌の上を微妙な加減でゆつくりと撫で擦る。^{さす}

課長の耳の後ろから首筋、背中、脇腹……特に、胸は両手で丁寧に伸ばして付けて行った。

タダでさえ俺のソフトタッチでカンジていたのに、ラブコスメでの俺のタッチに、課長は甘い声を押し殺すだけで必死だったみたいだ。眼を閉じ、切なく吐息を漏らして、ふつくらとしたサクランボみたいな唇を軽く開く……

噴出して来る汗で、俺にマッサージされている課長の肌が、キレイな桜色に濡れて来る

チュツ……

課長の白い二の腕を取って、キスをした。

うーん、ミントと何かの甘いフルーツの味。

俺的にはチョット癖になりそーな味だ。

俺はワザと音を立て、課長の肌に塗ったラブコスメを味わうようにキスの雨を降らせた。

課長は俺のキスを避けるようにして受け容れながら、徐々（じょじょ）にウットリとした表情を見せ始める。

俺の両腕から肩にかけてザワザワと鳥肌が立った。

うわ、課長……色っぽい……

AV女優よりイイ！

課長の方がナマだもんな？

課長はトロンとした眼で俺を見上げた。

俺と視線が絡み合うが、課長の視線はすでに焦点が合っていないし。

俺はと言うと、もう一度指先に例のローションを取っている。

「コツチも塗ってあげますよ？」

俺は課長の腰に^{はかな}ま^{まと}く纏わり付いていたバスローブを軽く引こうとして、指先に力を込める。

^{ひも}紐がないバスローブなんて、頼りないバスタオルと同じだ。

「ああん……や……」

「じゃ、止めましょう」

そう来なくっちゃ

バスローブに掛けた手を解いた。^{ほど}

俺はまた課長のコトバ尻を取ってニヤつく。

「うっん、ま、まだ言ってな……」

うっっん、ガンバル。

……困ったなあ。

コッチが先に暴走しちまいそうだよー。

俺はラブコスメの付いた手で課長の膝から下……フクラハギや足首、爪先やスネの裏側にいたるまで、得意のソフトタッチで撫で回し、繰り返しキスの雨を降らせた。

下半身へ移った愛撫に怖くなったのか、課長の身体は『逃げ』の体勢になったみたい。

身体を強張らせて、ベッドの奥へとじりじりと後退りして行く

第16話 イジワル？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

課長はベッドの奥へ逃げようとするが、首輪に付けられたワイヤの先を俺がシツカリと握っている。

課長は俺からベッドの端に何度も引き寄せられ、連れ戻されていた。

「往生際、よくないですよ？」

俺は課長の細い足首を捕まえて、左右に開こうとした。

課長は素早く身体を左に^{よじ}擦って膝を閉じ、ガードする。

「反射神経いいですね？」

うゝゝゝんテゴワイ。

顔では余裕をカマシていたが、俺の中で次第に膨れ上がってくる『恵理が欲しいよサイン』に黄色のハザードランプが点滅したのを覚えて焦り始めていた。

早くギブまで持ち込まないと……

えええゝゝゝい、こうなったら泣かせてやるううゝゝゝっ！……！！

なかなかギブのサインを出さない課長に、俺は短期勝負を挑もうと

した。

持久戦に持ち込まれると、俺の方が……

つか、もう暴走し掛けているのかも。

俺は手法を変更した。

ベッドに倒れ込んでいた課長の上半身を抱き起こして『命令』する。

「脚、開いてください」

「……………」

課長は『ナニ言っているのよ?』って眼で俺を見上げた。

「『イヤ』……………ですか?」

俺のコトバに、赤面したままで課長は鼻白む。

俺がワザと課長から『イヤ』って言わせようとしているのを、どうやら勘付いたみたいだった。

……………勝ったあ!!!!

俺の眼が笑う。

「……………」

課長は俯いて所在無く辺りを見廻した。

「どうしました？」

ほらほら、早く降参しろよ？

「……拒否すれば？」

しつとりと潤んだ瞳が俺を捉えた。

「これでお終いです」

「……」

少しだけ涙眼になっているのが判る。

俺はグツと来て、ナンだか胸が詰まってしまった。

そんなにまでして俺とのコトを成就させたいのか？

こんな俺じゃなくなっただって他に誰か……『課長の処女を頂きます』
ってヤツがいるだろよ？

そ、そう！ 携帯のカレシ……とか？

……ソイツとじゃ……ダメなのか？

俺は数日前、課長と携帯で遣り取りしていた人物を思い出していた。

課長　白石恵理。二十五歳独身。

カレシ歴……不明。恐らくナシ。

木村工業株式会社の代表取締役、木村総司社長の三女の末娘であり、木村工業株式会社、設計統括部第三設計課課長。

地元国立大学卒業。

幼児期から父親の都合で、海外での生活を何年も余儀無く強いられていた帰国子女。

お陰で身に付いた数種類の語学は本場モノ。

社長の通訳として、年に数回の海外出張に同行している。

社長は病気で亡くなった前夫人との間に二人の娘を儲け、課長はその後には再婚した今の夫人との娘で腹違いの姉妹だ。

転々としていた海外赴任の諸事情や、課長が歳の離れた末娘だったってコトもあり、社長は溺愛していたらしい。

課長は、姉達や親類縁者の眼をいつの間にか必要以上に強く意識するようになり、一時は社長に反発していた時期があった。

結局母方の旧姓である『白石』を名乗って家を出てしまったそうだ。

……って、ココまでは席向いの鈴木主任から教えて貰った課長のプロフィール。

で、つい最近俺が知ったのは、課長が免許取得マニアだってコト。

仕事柄、危険物取り扱いの免許習得はモチロン、護身術から始まって昔の通信^{ハム}や、外洋船も操縦出来る船舶一級免許等、数え切れないくらいのスキルを持っている。

加えて、少々キツイ顔立ちだが、プロポーションは細身で極上。

外見はカンペキに俺好みの美女。

そして……

俺には手出しが出来ない別の世界のオンナ……

……そのっ

今はイッパイ近付いて、手出ししちゃってるけど……

課長に触れたってゆー事実だけで、俺はほんの少しだけ良心が痛んでいた。

悪友^{ダチ}からは、鬼畜ヤロウだとか一発ヤロウだとかって酷いコト言われている俺だが、俺にだって一応は人並みの良心ってえーモンがあるんだな。コレが。

「う……」

課長は一瞬だけ躊躇すると、俺から視線を逸らせた。

そして、俺が下した命令に決心したのか、きゅっと眼をつぶって口元に力を込めた。

課長は少し震えながらすうっと両脚を倒し、横座りに揃えて引き寄せる。

……ウソ……

今度は俺が怯んだ。

体育座りで膝を立てると、純白のバスローブがススッとフトモモから流れ落ちる

俺の頭の奥がジインと痺^{しび}れて来た。

ちょっとコレはマジでヤバイかも……

さ……触りてえ……っつ！……！

けどっ、だっ……ダメだっつ！

これ以上触れれば俺のナケナシの理性がフツ飛んじまう。

ココはガマンだああああ……！！！！

「手、出して?」

「?」

俺は課長の両の指先に、たつぷりとジェルを付けてやった。

「な、ナニするの?」

『これ以上どうするのよ?』　と言わんばかり。

マジで今にも泣きそうだ。

でも、ジレンマに陥って俺の方こそ泣きたいよ。

『鬼畜ヤロウ』の汚名返上だなこりゃ。

俺は顔で笑って心で泣いて……それでも俺の方からのリタイヤは絶対に遣らねーぞっつ……!!

「ふっ、ふっ、ふっ、それはですね……」

そう言うなり、俺は課長の指先を押さえると、ソレを課長の中心に導いた。

課長の身体がビクンと震え、顎が仰け反る。

たちまちジェルだけじゃない別の音が聞こえ、軽くベッドが軋み始める。

「こんなコト、やったコトありませんか？」

俺は荒い息を吐きながら、そつと課長に耳打ちした。

「あんっ……んな、ナ……イわよう」

「ウソ。ゼツタイにあるし」

幾ら課長が処女でも、ソレはあり得ねーな。

……と思う。

違うのかな???

課長との遣り取りに再び軽く興奮しながら、薄い耳朶みみたがにそつと吐息を吹き掛けて甘噛みしてやる。

「あつ、あつ……あん……も、ナンとでも言つて……」

次第に課長が大きく揺れ始める。

「じゃ、止めましょう?」

「アタシ、そんなコト言つて……んっ、なっっ、ふうっん!」

課長の甘い声が鼻から抜けてる。

んもー、ホントーに強情だなあ。

「自分の手でカンジちゃってるじゃないですか」

「そ、そんな……コト、あん……な、ナイ……」

あー、そーですか。

まだ未開発だけど、十二分にカンジテおりますか？

だけど、俺の方もヤバイかも……

俺は逆上^{のほ}せて鼻血が出そうになった。

「課……恵理？」

「ふうん……っ……かさ」

耳元でそっと低くササヤく俺の声に、課長 恵理が微かに反応して応えた。

トロンとした瞳で俺を見上げてはいるが、その実、焦点が定まっていないので俺を見ていないのと同じ状態だ。

俺よりも年上なのに、この時の恵理の表情はずっと幼く見えた。

俺は恵理の首筋や項^{うなじ}、そして頬に何度も何度もキスをした。

恵理は軽く眼を閉じて、俺のキスを受け容れながらカンジテいる。

「んっ……」

そして柔らかくて艶やかな恵理の唇に、深く、優しくキスをする。

俺は恵理の背中に手を廻して、スローモーションのように押し倒した。

恵理が自分から手を離そうとする。

「手を離しちゃダメです」

「うっん……」

「ダメだって。ほら、しっかり押さえて？」

唇を奪いながら、恵理の手を押さえて徐々（じょじょ）に手の上から強い刺激を与えてやる。

次第に恵理の反応が強く、鋭くなってきた。

恵理のフトモモが自然に閉じて、絶え間なく伝わる快感からガードしようとする意識に動く。

「閉じちゃダメです！」

強く手を押さえ付けた。

何度か逃げ出そうとしたが、その度にワザと俺は刺激を強くして触れさせてやる。

乱れて細い身体を撓^{しな}らせる恵理に、俺はドンドン欲情し、興奮して来る。

「あぁっ、も……ダメ……いや、いやぁ！」

遂に恵理がギブのサインをコールした。

恵理の恍惚とした表情に快感を覚え、俺は無意識に自分の相棒に触れていた。

「……恵理ッ」

……イッショにイク……

俺は再びシャワーを浴びると、眠っている恵理の傍で携帯を掴んでいた。

恵理と抱き合ったのに、まだナンだか満足出来ねー。

……当たり前か。

最後までイッてねーのに。

結局、お預け状態になった俺は欲求不満でイライラして、どうにもガマンが出来なくなっていた。

誰かナンとかしてくれえ……。

「……はい？」

多分、眠っていたんだろうな。

少し眠そうな、不満げな声。

彼女は七回目のコールでヤット出て来た。

「三浦さん？ ……俺」

「司？ どしたの？」

「今からソツチに行ってもイイ？」

このアト、俺は有紀と逢って心置きなくえっちが出来た。

でも、外見が似ている恵理と有紀だ。

俺は途中で二人を混同しちゃって、あることが有紀に向って『恵理っつ！』って口走ってしまった。

そして、俺は有紀から手痛い平手の洗礼を受けるハメになってしまった。

「痛つてえゝゝゝ」

ナニも殴るコトないだろよ？

どうしてだ？

……顔も容姿も似ていると、ヤルコトが同じで凶暴になっちゃうんだろっか???

* *

「課長？ もう起きてくださいよ。掃除、デキナイじゃないスカ」

「うつゝん……」

気だるそうな生返事が返って来た。

早く起きてメシ食って貰わないと片付かないし、俺の予定が狂っちゃう。

「朝食、冷めちゃいますよ？」

「今日はナニ？」

消え入りそうな声で囁く恵理。

寝起きの顔が、ミョーに艶かしい。

「和食です。鮭に、ダシ巻きタマゴ、トーフとワカメの味噌汁。納豆はご随意に」

「味噌汁、お揚げ入ってるの？」

「いえ」

「お揚げも入れてくれないと起きない……それに、鮭はいい。朝から欲しくないの」

ひく……

俺の顔が引き攣^っった。

恵理は地元特産の油揚げをこよなく愛す和食派だ。

ヒジキの煮物や炊き込みご飯なんかも入れるようと、強い拘^{こたわ}りを持っている。

「はいはい。入れておきますから……いい加減に起きてくれませんか？ 九時半過ぎてますよ？」

「今日は予定ナイもの」

恵理はベッドの中でモソモソと動いて、起きるのを嫌がった。

こんのお……今度こそ犯すゾ？

ベッドの中の恵理は、まだ真^ばっ裸だ。

チヨツと眼のヤリバに困る俺。

「課長の都合でしょ？ 俺、行きたい所があるんです」

「ドコ？」

「……修理工場」

「……修理……工場？ 行つて見たあい！」

恵理は瞳をキラキラさせて、急にガバツと起き上がった。

そして、自分が昨夜の俺とのゲームでそのまま寝ちゃったってコトに気が付いた。

白い肩から胸元にかけて付けられた幾つものキスマークが、昨夜、俺との関係がウソじゃないってコトを物語っていた。

傷にならないようにと注意して結んでいた両手にも、薄っすらと……見ようによつてはアザが付いているみたいだ。

その姿はまるで強姦されたアトみたいだった。

つて、やっぱし『みたい』じゃなくつてそのまんまなのかな？

恵理は自分の姿に真つ赤になって、慌ててシーツを手繰り寄せる。

その仕草に、妙に『女の子』らしさを覚えて、俺は軽くソソラレタ。

けど……

「ダメです」

俺は甘えてナツク恵理を、不本意にもムリに拒絶した。

「どおしてえ？」

そんな眼で見ないでホシイ……

結局理由は言えなかった。

行き先は虹川あぶかわのオヤジのいる（車の）修理工場だ。

俺が車を覚えたのは十七の頃。

トーゼン、無免許。

呆れるホドの度重なる補導に、俺は親からトックに見放されていた。

代わって未成年の俺の面倒を見てくれたのが、アブ（虹川）のオヤジだった。

子供の居ないオヤジは、俺の身元引受人を何度も遣ってくれたし、ホントウの親子みたいな付き合い方をしてくれた。

木村工業に就職が内定した時は、親以上に喜んでくれたし、コレを期に『峠』から卒業して、車も其れなりのに換えろと説得されていた。

オヤジの意見に素直になれず、逆らって……あん時は何度も殴られたっけ……柔道の締め技で、墮とされたコトだって一度や二度じゃなかった。

俺にとってのイチバンの拠り所の存在のオヤジだったから、入社式での事故のコトも、退院後の悲惨な生活も、逆に一切知らせてはいなかった。

つか、言えねーよ。

音信不通はこれが初めてじゃなかったが、これ以上、オヤジの頭を心配で真っ白にさせたくなかったから。

なのに恵理と一緒に連れて行けと言う。

ムリだよ……

オヤジは見た目ヘンクツそうなクソジジイだが、中身もやっぱりヘンクツなクソジジイだ。

けど、仕事となればハナシは別だ。

見た目まんま……ヘンクツさならではの職人技。

オヤジの腕を頼って遠方からワザワザ遣ってくる奴も居る。

意外と顔も広いし、人を見極める眼もスルドイ。

店構えはボロイくて今にも店舗兼自宅が崩れそうだったから、この第一印象から、オヤジに修理依頼をしようと言う無謀な初心者は滅多にお目にはかからない。

だが、縁あってオヤジが手懸けた車のオーナーは、その殆んどがリピーターになっていた。

その車のエンジンのベスト回転数を微妙な音と振動で聴き分け、同じ車種・年式と言えどもドライバーのクセを見切って微調節が出来るオヤジだ。

『ワシは車と会話が出来るけんのお？』

そう言つて、誇らしげに笑うオヤジに、俺は尊敬の念を抱いている。

だからこそ、俺は恵理を連れては行けなかった。

連れて行けば、多分……

今、俺が思っているコトをズバリと見透かし、言い当てられそうだったから。

『その女（恵理）には手を出すんじゃないやあねえぞ？』って。

……判つてるよ。

自分で判っているコトを、自分以外の者から改めて言われるホド辛いものはナイと思う。

ましてや、ソレが自分の力ではどうするコトも出来ないのなら、尚更だ。

* *

「……………」

遅い朝食を摂ろうと椅子に座った恵理の視線が、向かいに居る俺の左頬で止まった。

「ナンですか？」

「その顔……………」

「え？」

俺は慌てて利き手で頬を押さえた。

俺の頬には有紀から喰らった昨夜の平手の名残があったんだった。

マズイ……………」

「それ、ヤツタのアタシ？」

「……………」

へ？

一瞬の間があった。

「え？ ……え、ええ。パンツ穿いたネコに……………」

ヨカッタア……気付かれてナイみたいだ。

俺はコレ幸いと、不敵に笑って見せる。

恵理は俺がアレから夜中に出て行って、有紀とヨロシク遣っていたのに気付いていないんだ……

そう思うと、自然と頬が緩んだ。

「…………ネコ？」

恵理は小首を傾げてくすすと笑った。

俺もつられて愛想笑いを浮べる。

「んな、ワケないでしょっつ？ 知ってるんだから。司が昨夜出て行ったコト」

「う…………」

恵理の豹変振りに一瞬怯んだ。

「夜中に起きたら居なかったじゃない？」

うわ……… 果たしてもバレバレかよ？

「んな、ナンのコトっスかあ……？」

「惚けるの、止めてよね？ 大体アタシの目の前で堂々と…………」

言いかけた恵理の顔が強張った。

恵理の部屋から携帯の着信音がカワイらしい音を鳴らし始めたからだ。

「……………」

「？…………課長？」

俺は恵理の様子を窺った。

「……………」

恵理はそのままフリーズしている。

あの呼び出し音は、確か以前聴いたような……………？？？

時間で切れても、再び同一らしい人物からの着信音が鳴らされる。

中々鳴り止まない携帯と、中々動き出さない恵理に、俺は首を傾げて訝った。

「鳴ってますよ？ 携帯」

「う…………わ、判ってるわよ？」

『恵理が出て来るまで鳴らしてやる……………』

何度も掛かって来る着信音には、そんな相手の執着心みたいなのが

見て取れた。

「出た方がいいと思いますか？」

「わ、判ってるっば」

口を尖らせた恵理は、俺との遣り取りを中断した携帯の相手に不満そうだった。

「はい……」

チラリとダイニングで座っている俺の方を一瞥すると、恵理は俺に背を向けて自分の部屋の奥へと姿を消した。

内容まではハッキリとは聞き取れなかったが、時間や場所の確認をしているらしい。

声の具合からして恵理はソワソワと落ち着きが無いみたいに思えるが……？

ナンだよ……恵理だって『オトコ』とナンノ約束だあ？

人のコトが非難出来る立場かよ？

ハナシを終えて戻って来た恵理に、俺はヘーゼンとシカトする。

「……ね？」

「はい？」

「さっきの相手……気にならない？」

覗き込むように、恵理は黙って玉子焼きをパクついている俺を低い目線で見上げて来た。

「……別に？」

俺は内心穏やかじゃなかったが、表面上では、俺の様子を面白がって窺っている恵理の視線に、却って冷静で居られた。

俺は携帯の相手なんか全く興味が無いように振舞う。

「別に……別に……って」

俺のコトバを小声で反芻^{はんすう}し、恵理は少しだけガツカリと肩を落としたりした。

「俺が課長のお相手に、ヤキモチ妬いたらイイんですか？」

俺の何かしらの反応^{リアクション}をネコの瞳でワクワクと期待している恵理を見ていたら、急にナンだかムカついて……無性にハラが立って来た。

恵理と俺とがソコマデの仲だとは思われたく……ナイ？

俺の本心って……そうなのか？

それとも単なる意地悪……か？

「そんな……」

「いいですか？ 俺は課長の『カレシ』にはなれませんか、なりたくナイ！ ですから」

俺は、自分でも驚くほど冷淡に言い放っていた。

ああ~~~~っつ、俺、ナニ言っただ？

第17話 お嬢様？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「……………」

俺の強烈な一言が余程コタエタんだろう。

恵理は向かいのテーブルで立ったまま、息を呑んで呆然と立ち尽くしていた。

そして恵理の息遣いさえ聞えてきそうな静けさに、俺は険悪な雰囲気が漂っているのを微かに感じ取っていた。

ずるっ……………」

俺が味噌汁をススツテいる音がヤケに大きく聞こえる。

「食べないんスカ？ ……メシ」

俺は恵理とは視線を合わさずに、抑揚のナイ喋り方をした。

顔を上げなかったから表情は見取れなかったが、テーブルの上から見える腰の辺りで軽く握り締められていた白い拳こぶしが、ぐっと強く握られていた。

その拳が俺に向かって飛んでくるのか……………？

とも思ってたが……………」

「……」

不意に俺の視界から、恵理の姿が消えた。

パタン

恵理の部屋のドアが閉じられる。

俺は口を動かしながら顔を上げ、恵理が消えて行ったドアに視線を送った。

……言い過ぎだ。

恵理のハネツカエリの性格から、何かもつと言い返して来るかと思っていたのに……

携帯の相手がオトコだか、オンナだかの状況では俺に判るわけなかったんだ。

俺のカンで、オトコだと勝手に思っていただけだったんだ。

ホントに。

あーあ、マジで核心……突いちゃってたよ……

「課長？　メシ、済んでないっスよー？」

俺は座ったまま声を張り上げた。

「……………」

返事……ナシ。

「喰っちゃってもイイっスかあ？」

「……………」

駄目だ。

俺、恵理を泣かしちゃったのかなあ？

俺は恵理のコトを気にしながら、テーブルに残った食い掛けの恵理の玉子焼きに箸を伸ばしていた。

間も無くして、恵理の部屋のドアが開いた。

「……………」

碗を持って味噌汁を掻き込んでいた俺の手が止まる。

俺は恵理のガラリと変わった姿に眼を剥いていた。

恵理は薄いアイボリーのジャケットを腕に掛けていた。

純白のシャツの襟を立て、その胸元には小粒ながらも存在感のある

ダイヤのネックレスが輝いている。ピアスにも同じくダイヤ。左手首には豪華なバングルタイプの腕時計と、細い金色の鎖ブレスレットがあった。下はジャケットとお揃いのタイトスカートだ。

こうして見ると、ヤツパリ正真正銘のお嬢様。

キアイが入ったそのイデタチは……明らかにドコカにお出掛け。

俺へのアテツケかよ？

今日、予定無かったんじゃないのかよ？

『ダメ（連れて行かない）』って言ったからか？

「今日、遅くなるから。夕飯要らない」

俺の視線を撥ね返すように、恵理は無表情でそう言った。

まるで社内に居るみたいだ。

「はぁ……」

「車、好きにしてて良いから」

その視線は、俺からの一切のコメントを拒絶していた。

「フィット、無いと困るんじゃない……」

「別ので行くから」

は？ ……別の？

二台もあるのか？ 贅沢だな。

車はフィットだけじゃなかったのかよ？

ナンで今まで隠してたんだ？

別のあるんなら、ナニも一緒に会社に通勤するコトねーだろう？

「じゃ」

恵理はツンと澄まして俺に背を向けた。

……怒って……る？

洗濯機は乾燥機能があるが、基本俺は外気に晒しての自然乾燥がスキだ。

今日もP - カンだから、よっく乾くぞ！

俺は洗濯カゴを手に、ベランダへ向った。

洗濯物を干していると、マンションの地下駐車場から一台の真紅の車が現われた。

へえ〜BMWのM6かぁ〜

サスガは金持ちが住んでいるマンションだなあ！。

アレー一台で家を買えるぞ。

俺は手を動かしながら、暢気にその真つ赤なBMWを眼で追った。

車が左折して、左側シートに座っていたドライバーが見えた

パサリ……

俺の手から、洗濯したばかりの恵理の淡いピンクのスリップが無造作に落ちる。

「えっ……恵理？」

俺はそんなに視力が良い方じゃない。

だけど、ドライバーのシルエットは確かに女性で、俺が毎日眼にしている女のと変わらなかった。

ドライバーは、間違いなく恵理だったんだ。

* *

あぶかわ
蛇川のオヤジが居る修理工場に遣って来た俺は、偶然来ていた松永
コウ
や向井達四人と合流していた。

久し振りの再会に暮るハナシも一杯あって、暫らくは和気あいあいと盛り上がっていたが、俺がココに来た理由にハナシが及ぶと、雰囲気が一転した。

ココに俺が来たのは、勝手に置いてあった俺のランエボを復活させる為だったのに、オヤジの奴は俺のランエボをトックに廃車処分にしていたんだ。

「勝手にすんなよ！　こんのお！　クソオヤジ！！！」

「うるせえ！　テメエのモンなんか知るけえ！」

コトが発覚して俺とオヤジは掴み合いになったが、幸いにもコウ達が俺達にストップを掛けていた。

ひと悶着あり、更には俺が乗って来たフィットを見るなり、皆一様にお互いの顔を見合わせて口をツグンデしまった。

「なっつ、ナンだよ？　俺がフィットに乗ってちゃワルイのかよ？」

チヨットカツコ悪いけどよ？

俺の様子に、向井はいいやと首を横に振った。

「そうじゃない。司、オマエいつからフィットに乗ってる？」

「え？　つい最近………だけど？」

俺は周りの空気が読めない状態で戸惑った。

ナンが深刻^{ヤバ}そうな雰囲気……？

「オマエ、隣町の八幡神社の夏祭りに行った？」

「？ ああ」

それがどうかしたのかよ？

「……やっぱし」

皆から、溜め息が漏れた。

Ⅱ 「コイツだよ」

Ⅱ 「ああ……」

Ⅱ 「ゼツタイ」

それぞれが囁き合う。

「ナンだよ？ 気味悪いな」

「オマエ……ヤバイよ」

コウが眉間にシワを寄せて、キビシイ表情をした。

「ナンで？」

ハナシが読めぬー。

「ナンでって……」

コウは呆れて言葉を失った。

「な……ナンだよお？ ミンナして退きやがって」

ナンか、俺だけがKYでオミソ？

がぁっははは……

黙っていたオヤジが突然馬鹿笑いしやがった。

酒ヤケした赤ら顔をくしゃくしゃにして。

「ははは……司よお、お前え、そのフィットで連中のGT-R潰したんか？」

「いつつ？」

……ツブシタ……？

オーバーホールは免れねーとは思っていたけど、やっぱりお釈迦にしていたのか。

|| 「ヤバイよ司ぁ」

なおも豪快に笑うオヤジを後目に、コウが小声で諭す。

「ヤバイって、ナニが？」

「乗っていた連中、成和会せいわの奴等だぞ？」

「……つてえ？」

背筋に冷たいモノが奔った。

成和会　この辺り一帯の暴力団だ。

しかも国内でも屈指であり、海外にも支部を構えている強力な。

「連中、その時の白いフィット、マジで捜してるぞ？」

「お前ンだろ？　あの車」

向井がフィットに向けて顎を杓った。

「……」

い、いや、俺のじゃナイケド……

「見付かったらタダじゃ済まされないぜ？」

コウが青ざめた顔で俺を脅した。

「そう、ビビルな。白いフィットなんかザラだ。そこいらで走ってる。ナンバーさえ連中が覚えていなければーな？」

オヤジは軽く受け流すが、多分それはきつとムリ。

追いかけてこは二十分以上もしていたんだ。

ゼツタイ連中にナンバー覚えられてるし。

「ま、見付かりやあそれはそれで振り切って逃げるまでよ？」

オヤジはそう言って不器用にウインクを遣した。

カルク言っなよ。

「……キモイ」

俺はボソリと呟いた。

オヤジのウインクなんか欲かねーや。

「あん？ ナンか言っただかあ？」

オヤジはヒヒヒと笑って、俺に擦り寄って来た。

キモイよオヤジ。

「うわ、オヤジ酒臭え~~~~」

俺は鼻を摘んで顔をロコツに顰しかめた。

再びオヤジが馬鹿笑いする

オヤジとの遣り取りは、ピットに入って来た赤い車で中断された。

う~~~~ん、久し振りに聞く高級車のクリーンなエンジン音。

「うわ、すっげ~~~~」

「フル装備のBMWじゃん？」

振り返ったコウ達が感動モノの声を上げた。

赤いBMW……???

なんだかイヤな予感が……

ガチャッ

勝手知ったる様子でピットに停まったBMWのドアが開いた。

真紅のドアから、白いスニーカーを履いたほっそりとした女のオミアシがスラリと現われる。

「おおっ」

コウ達のドヨメキが聞こえ、俺はゴクリと喉を鳴らした。

「いつっ???」

「……」

BMWから降りて来た女は、サングラスを徐に外すと、一瞬だけ俺

と視線を絡めて来た。

猫のようなキツイ視線で一瞥をくれるが、無表情を決め込んでいる。

……恵理っつ???

な、ナンでココが判ったんだよ？

だけど、今のお嬢様姿の恵理は、俺の眼には『触れるコトさえ叶わない遠い存在の女』に映っていた。

恵理は俺を見ても、顔色一つ、表情さえも全く変えずにスルーして、工場の主人であるオヤジに向き直った。

シカトかよ……

居心地が悪くなった俺は、ソッポを向いて軽く舌打ちした。

「お待ちしていましたよ。お嬢さん」

オヤジは急に営業口になって、丁寧に頭を下げた。

「お世話になります」

恵理はオヤジに軽く会釈をすると、ニッコリと微笑んだ。

どうやら俺を捜してじゃなくって、偶然ココに来たみたいだ。

しかも、恵理がオヤジに向かって頭を下げてるし!!!

* *

恵理は始終俺を無視していやがった。

B M Wのオイルとエレメントの交換に寄っただけだったんだ。

呆気にとられていた俺を後目に、数十分後。

恵理はサッソウと工場から消えて行っった。

俺は、そんな恵理のB M Wをボンヤリとしたまま見送った。

恵理のコトをスツカリ忘れていたらしいコウと向井達は、彼女が去った後、カワイイとか、脚がキレイだとか、胸が大きいとかイロイロ……つか、殆んどがエロ談内容で盛り上がっていた。

一人俺を除いては

「司あ、チヨイと来いやあ」

「……？」

俺は片付けが終わったオヤジから、奥の事務所へと呼び出されていた。

四畳半ホドの狭い事務所内には、古びたスチール製のボロ机にそれとセットの錆び掛けの椅子が二組ずつ、向かい合わせになって中央に置かれていた。

何でも昭和からずっとそこに置いた、価値のある年代物だとオヤジは又カシやがった。

そのボロ机のセットにどれだけの価値があるのかどうかは知らねーが……

その一つに、オヤジはどっかと腰を下ろした。

スチール製の小さな椅子がギギイッ！ と音を立てて軋んだ。

「どしたい？ ずっとあの嬢ちゃんを見とったが……知つとんのか？」

オヤジは意味ありげな上目遣いで俺の様子を窺った。

「別に……」

俺はソッポを向き、口を尖らせて否定する。

オヤジと視線が合わせられねー。

「嘘コケ！」

オヤジは俺の頭を掠めるようにして乱暴に叩いた。

「つてゝゝゝな！ ナニすんだよ？」

「ちゃんとしてメエのツラに書いてんゾ？」

ムツとなる俺。

「ナニを？」

「知ってます……ってな？ ツイデにあの娘とデキてますってよお？」

「なっ……」

俺は頬を赤らめてオヤジに向き直った。

……ナンで判るんだよ？

「ほおゝゝゝ？ 大当たりかあ？」

かっつ……カマ掛たのか？

「っせーな！」

「そうじゃろっ？」

「っーか、オヤジうぜーし」

俺はオヤジの口車にマンマと嵌められたみたいだ。

気が付いたら、口を尖らせ、ムキになって否定している俺がいた。

「この馬鹿タレがあ……くくく……ぶわ……っはっはっは……」

オヤジはガマンしていたのか、一気に吹き出して大笑いし始めた。

「ん、ナニがおかしいんだよ!」

俺は鼻白んで噛み付いた。

「いやあ……、まだまだケツの青いクソガキだと思つとつたが……
…そーか、そーか」

オヤジは独りで納得してうんうんと何度も頷いた。

ナニを納得したんだ????

しかも、ダレがケツが青いつて?

いつまでもガキじゃねーんだけど?

「あーあー、勝手に笑えよ……」

俺は腐った。

オヤジは俺のコトバにフンと鼻を鳴らすと、引き出しからサラダ煎餅の個装パックを取り出して、「ほれ」と俺に勧めた。

「要らねーって」

俺は無下にアシラわれ、オヤジはヤレヤレと肩を落とした。

そしてガサガサと煎餅のパックを開けて、勝手に食い始める。

「お前え、あの嬢ちゃんがダレの娘か知つとるんか？」

ばりばり……

うるせーなあ。ン、なモン喰つてる場合かよ？

俺はオヤジのこういうデリカシーの欠片もナイ所が嫌いだ。

人がマジに……

「……知つてるよ」

ポツリと答えた。

オヤジは「ほう」と微かに反応した。

「……」

ばりばり……

オヤジは椅子から立ち上がると、部屋の隅に置かれている小型の冷蔵庫から、缶ビールを取り出していた。

ブルタブを開けると、旨そうに喉仏を動かしながら一気にぐびぐびと呷^{あお}った。

ごく……

思わず俺の喉が鳴る。

昼間っからビールかよ……客は居ないケド、仕事じゃないのか？

「……………」

俺は、オヤジからの次のコトバが予想出来て、胸が締め付けられたような気がした。

多分、次の言葉はこうなんだ。

『止めておけ』……………って。

判ってるよ。

恵理とは金目当てで付き合っているワケじゃない。

家賃こそ無いが、生活費はお互いに割りカン。

以前はヒモの生活をしてたコトあったけど、今の俺はソコマデ最低なヤツじゃないよ。

俺だって身の程くらい弁^{わか}まえているツモリだ。

だけど……………

「つぶはぁ……………司よぉ……………」

一気にビールを飲み干したオヤジは、口元を片腕で無造作に拭くと、俺の方へと向き直った。

「なに？」

俺は、そのコトバに身構えた。

一瞬の間が開いた。

オヤジは油やけたイカツイ右の拳こぶしを俺に見せると、ぐつと親指を立てて見せた。

そして、またしても不器用なウイंक……

キモイから、それ、止める。

「まあ……フラれんようにガンバレや！」

ニツツ！ と口元を歪める。

「んな……？ はああ……？」

一気に気が抜けた。

ナンなんだ……？

俺の聴き間違いか？

『ガンバレ』だって？

このオヤジが？

俺の顔を見るなり、オヤジはまたガハハと豪快に笑った。

「ナンぞ？ この馬鹿、怒られるとでも思ってたんか？」

「べ、別にそんな……」

自然と頬が赤らみ、緩んで来る。

「あの通りの嬢ちゃんじゃ。苦勞するぞ？ まあ、嬢ちゃんもヨリにもよってお前えなんかを……物好きな」

オヤジはそう言うのと、また肩を大きく揺らせて笑った。

「ほ……ほっとけ！」

軽口を叩いた。

俺の気持ちだが、ホンの少しだけ軽くなっていた

第18話 遅い帰宅

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「あーしたつつ！（ありがとうございました！）」

俺はコウ達が帰った後も居残り、オヤジの工場に納品に来た卸業者の後姿を見送っていた。

「オヤジい」

「あんでい？（何でい？）」

オヤジは、積み上げて納品された - 1 - ブレーキライニングの入った箱を、奥の倉庫へと移動させているトコロだった。

モチロン、俺も手伝っている。

「メーカー変えた？ 前はミニアスだったろ？」

ミニアス社は車の足マワリ関係、主にブレーキ部分やパッキン関連を取り扱っている地元の会社だ。

中小企業ではあったが、他県の大手企業の製品と比較しても何ら見劣りしなければ、精度上でも問題は無かった。

むしろ、注文後の輸送時間や手間暇のコストを考慮すれば地元であるミニアスとの取引は手堅い。

県内での需要も高い、成長株の会社だった。

「ああ」

オヤジは俺の言葉にアイツチを打つ。

「ナンで？ ミニアス社製品は、俺の会社でも取り扱ってるよ？
儲かってるって……」

「ソイツは単なる噂じゃろっが？」

俺のギモンに、オヤジは歩を止めてゆっくりと振り返った。

オヤジは面白くなさそうに顔を顰め、ツラレて立ち止まった俺の顔を覗き込む。

「ん、なつつ……？」

自然と俺は仰け反った。

怖えっよ、オヤジ、アップになるなっ……。

「あそこのはな、まだアスベストが混ざっとるのよ」

「え？」

アスベスト 石綿。二〇〇四年には石綿をパーセント以上含んだ製品の集荷が原則禁止になり、アスベストを含有した製品を取り

扱っている各関連会社は、その代替品を打ち出して自社製品の安全性を提唱した。^{アビール}

要するに、人体に有害な物質が出るアスベスト製品を廃止して、ノンアスベスト製品を取り扱っているのが当然になっていた今どきにも関わらず、製品を廃止せずにノンアスベストだとウソを吐いて取り扱っているらしい。

「それって捏造？ 詐欺じゃん？」

木村工業でも取引のある会社だぞ？

ヤバイだろ？

おれの言い様にオヤジはナオも付け加えた。

「デカイ会社なら簡単に製品の代替が出来るがな、小せえ会社じゃそれも儘ならん^{まま}ってえな……あそこの社長はワシもよく知つとる。じゃが、コツチも商売じゃからの。ワシは手を切らせて貰ったんじや」

オヤジは唸るようにそう言って、視線を落とした。

「……………」

俺には、大柄なオヤジの背中が小さく見えたような気がした。

* *

壁掛け時計は、もう十一時半を過ぎている。

「……オソイ！」

駄目モト半分で一時間前に携帯GPSで確認したら、このマンション内に恵理が居るコトが判った。

だけどあれから一時間……恵理は一向に帰って来る気配がナイ。

ダイニングテーブルに座っている俺の目の前には、まだ盛り付けされていない器が二人分セッティングされていた。

今日のメニューは激辛カレーとサラダ。

作る時、俺は昼間の恵理に頭に来ていたから、イタズラ気分でカレーを激辛にしてやろうと企てた。

で、作っている途中、恵理が『晩御飯要らない』って言ってたコトを思い出したんだ。

まあ、余ったら明日食べばいいコトだし……

『要らない』って言ってたけど、ヤッパリ待つコトにしていた。

俺から恵理に頼みゴトもあったし……遅くなるって言ったって、お泊りになるようなコトは言わなかったし。

そんなワケでお預け状態。

やっぱり『マテ』状態のイヌだよな？

ぐっぐっ……

ハラ……減ったあ……

換気扇をフルに廻しているが、今となってはイタズラで作ったカレーの匂いがツライ。

思いつ切り空きっ腹にコタエる。

冷凍庫にハーゲンダッツを見付けてたけど、コレを食えば恵理の機嫌が更に……つか、逆鱗に触れそうな気がしてたから止めにした。

「うっ……早く帰って来い……」

俺は空腹を訴えるハラのムシを宥めスカそうと、ガムを口に含んだ。

もう一度携帯で居場所確認。

……やっぱり恵理はこのマンション内のどこかに居るハズなんだ。

帰って来にくいのか？

俺は居候だし……自分の家だぞ？

「……」

ムダに時間が過ぎているように思えた。

捜しに行くか。

俺はパジャマになっていたのをＴシャツとジーンズに着替え直し、
恵理を捜しに行こうと玄関のドアを開けた

「うわっつ？」

「！」

ドアを開けた俺の目の前に、スーツ姿の恵理が顔を伏せて幽霊のよう
に突っ立っていた。

「……………」

恵理はゆっくりと俺を見上げる

その瞳には全く怒気はナイ。

つか、まるで叱られて、凹んじまったコトモみたいだった。

ココを出て行った時とみたいに、修理工場で見た恵理の凜とした力
ッコイイ姿はドコにも窺えない。

……………ナニがあつたのか？

「ホントーに……………遅かったスね？」

俺は目の前に居た恵理の姿に驚いたコトをハグラカスよう、穏やかに言ってアイソ笑いをした。

「……………」

恵理の唇が微かに動くが、ナニを言ったのかは聞き取れない。

「ドコ行ってたんスカ？ 差し支えなければ居場所くらい……………いつつ？」

イキナリ恵理は俺の首に縋り付いて来た。

俺は思わず後退りあひざりして、片手で押さえていたドアを放す。

投げ飛ばされるかああ？？？

俺はトツサに身構えた。

「うわ、ゴメンって、課長のフィットを俺にクレッって言うのは冗談ん〜んつつ？？？」

俺のセリフが奪われた。

恵理は突然、両腕を俺の首に廻してキスをして来たんだ。

「んっ……………ん？？？」

ばたん…………

玄関のドアが俺と恵理をのみ込んだ。

俺はそのまま恵理に玄関で押し倒されている。

本当は、俺が倒されて遣ったんだけどね。

「んん……」

恵理から俺にキスを要求して来たのは、コレが初めてだった。

様子がヘンだ。

お世辞でも上手とは言えない恵理のキス。

でもコレが意地っ張りな恵理からの、遅い帰宅の詫びだとも思えた。

「何があつた？」

俺は軽く力を込めて恵理の頭を引き離し、マジな低い声で囁いた。

ごっん

あうっつ……痛ええ……顎に頭突きされたよ……

俺はシリアスには向かねーな。

「う……ぐすつ……」

え？ 泣いてる？

恵理は俺を押し倒したまま、急にポロポロ大粒の涙を溢した。

俺はそれ以上恵理を問い質せ^{ただ}なくなってしまった。

「……課長？　夕飯、ちゃんと食って来ました？」

「……うん」

恵理は声を押し殺して泣きながら、首を横に振った。

「ダメでしょう？　ちゃんと食べないと」

「ひつく……うん」

恵理は何度もしゃくり上げる。

「俺も……実はマダなんつスよ。一緒に……食べますか？」

「……うん」

ヤッパリ今はナンにも聴けね〜な……

俺をベッドにしたまま、恵理は暫らくすすり泣いていた。

俺は恵理を押し退けるコトが出来なかった。

ナニが恵理を泣かせた？

俺か？

怒らせるようなコトはシヨツチュウだが、この恵理を泣かせるまでに至ったコトは、今のトコロ遣っていないツモリだが……？

「ぐすつ……司？」

「はい？」

恵理はぐしゅつと軽く鼻をススルと、俺から身体を離れた。

「アタシを……見て？」

そう言つて、シャツのボタンに手を掛ける。

ゆっくりと第一ボタンが外され、第二ボタンに手が掛かつて、恵理の深い胸の谷間が見えた。

薄っすらとアザのようなモノが白い胸元に残っていた。

それは俺が昨夜付けたキスマークなんかじゃない。

フザケて付けたキスマークはトツクに消えているハズだ。

うわ、うわ、まさかココで……？

「ま、待った！」

俺は慌てた。

基本、俺は『攻め』タイプだ。逆だと調子が出ないし、退いちまう。
俺の声に、恵理は驚いて手を止めた。

上体を起こした俺は、片手で課長の頭を引き寄せて、軽く唇を重ねた。

「メシにしましょ？ 課長のハナシはアトで聴きますから」

しまったあ……

そう言った後、俺は心の中で今日のメニューをサンザン後悔した。

……あんなの作るんじゃないかったよ……

イタズラに作った激辛カレーが恨めしく思えた。

* *

「……ごちそうさま」

サラダだけ食べると、恵理は弱々しく言って立ち上がった。

フラフラと上体を揺らし、身体を重く引き摺るようにして部屋に向かう。

「……」

ぱり……

最期に残していたサラダに食い付きながら、俺は恵理が消えて行った部屋のドアを見詰めた。

恵理の暗い表情が頭に焼き付いて離れない。

今、恵理は自分のコトで精一杯。

俺の相談ゴトが介入出来る余地なんてなさそうだ。

どうしようか……

俺は迷った。

『フィットを俺にくださいよ』

玄関先で恵理に口走ったコトバ……恵理は俺の言ったコトなんて聴ける余裕はなかったハズだ。

コウ達から、俺は自分が暴力団である成和会に狙われているコトを知らされた。

『奴等は白いフィットのドライバーを搜してる』

コトの起こりは恵理の美貌だ。

コッチは奴等を覚えてねーが、向こうにはトックに俺達の……つか、恵理のメンが割れている。

しかも俺は奴等の新型G T - Rを潰したコトになっているらしい。

二人共、見付かれば……ヤバイ。

ハナシを聞いた俺は、オヤジのトコロから戻って来る時でさえ、内心ビクって怯えていた。

恵理が帰ってくる間、ずっと独りで居るのが怖かったし、モチロン恵理が無事なのも祈っていた。

警察に……とも考えたが、現時点では俺が奴等に対しての加害者だ。下手すりゃ被害者の連中が成和会とも知らずに、俺を引渡し兼ねねー！。

しかも俺は交通違反の常習犯だった。

前科者の俺の言うコトなんか……ダレが聴くかよ……？

「…………マジかよぉ」

俺はテーブルに座ったまま、両手で頭を抱えた。

恵理が無事に戻って来て安心したアト、俺は言い様のナイ焦燥感に襲われた。

次々とこみ上げて来る不安と恐怖に震えが奔る。

さっきの恵理の様子じゃねーが、追詰められた心境に堪らなくなつて、ナンだか泣き出したくなる。

正直、今すぐにもココを飛び出して恵理のフィットを廃車処分にし、俺がフィットのドライバーだったって事実を隠蔽して消去させたい……

だけど、フィットは恵理の車だ。

『アタシのフィットに傷を付けたら承知しないんだからあ！』

G T - R の連中を振り切るタメ、無茶をした俺に向かって叫んだ恵理のセリフが脳裏に過る。

はあ……

どうすればいいんだよ……？

「……」

軽く溜め息を吐くと、俺は後片付けのために立ち上がった。

カチャ、カチャ……

食器をトレイの上に積み上げる。

……俺だって命は惜しいさ。

死刑執行が確定している囚人になった気分だった。

しかも執行日は未定で、それがいつどういったカタチで執行されるのか判らない。

- 2 - おんしや 恩赦ナシの無期限……ときた。

気が重い……

俺はノロノロと食乾機ゲストルーム（食器洗浄乾燥機）に食器をセットすると、憂鬱になりながら自室へと引っ込んだ。

* *

暗闇の中、俺は何人もの男達に囲まれていた。

俺は恐怖で呼吸を乱し、カッと見開いた眼がこの場からの出口を求めて、忙せわしく宙を泳いだ。

「押さえてろ！」

怯える俺を嘲笑あざわらいながら、男はチェーンソーのリコイルスタータを引いた。

二、三度乱暴にスタータを引くと、チェーンソーが不気味な音を立てて唸り出す。

周囲には、ガソリンエンジンの異臭が充満した。

俺はひざまず跪き、上体を軽く屈める格好で両腕を左右に拡げさせられていた。

男二人に腕を片一方ずつシツカリと押え付けられている。

呼吸が更に激しく乱れた。

「う……うわぁ……止めろぉ！」

俺は気が狂ったように首を振り、あらん限りの力で抵抗して暴れ出す。

「アツツ！」

後ろから、乱暴に前髪を鷲掴みされ、強制的に顔を上げさせられた。

恐怖で涙が止まらない。

「へへ……諦めな」

見苦しく暴れる俺に、腕を押さえている男達が冷たく言い放つ。

「イヤだ！」

俺の目の前で、男はチェーンソーを使って木製の椅子を意図も簡単に分断した。

ソイツでどうしようって……？

決まってる！

俺もその椅子と同じ運命だ！！！！

「はああ……」

タスケテ……！

命乞いしたいが、声にならない。

恐怖で全身が戦慄^{わなな}いた。

脂っばいイヤな汗が、ジツトリと俺の背筋を伝う。

「先ずは右腕からだ……気を失わないようにブッタ斬って遣らあ。
よく見てろよ？」

「う……っわ……」

男達の含み笑いが、俺の恐怖心を否応無しに煽った。

チェーンソーの刃が、ゆっくりと俺の方に向けられる。

高速回転する外刃がピタリと二の腕に宛がわれ、青白く光る刃先が
俺の身体に潜り込んだ。

俺の悲鳴がチェーンソーのエンジン音に掻き消される

「はっ？」

俺は恐怖と息苦しさのあまり眼が覚めた。

ガクガクと震えながらも右手を持ち上げる

「……………」

あるべきハズの俺の腕は、ちゃんとソコにあった。

生きてる…………

夢だったんだ…………ヨカッタア。

俺は額に吹き出した汗を片手で拭くと、ほっと胸を撫で下ろした。

「う…………ん？」

だけどまだナンか息苦しい…………

眠ってから、どのくらい時間が経ったんだろう？

何かが俺の胸の上に乗っているみたいに重…………ああ？

「んああ？……………か、課長？」

……………恵理？

恵理は俺の胸の上に覆い被さるようにして^の押し掛かっていた。

通りで息苦しかったハズだ。

俺が眠っている間に風呂に入っていたのか、シットリと潤った柔肌にバスタオルを巻き付けているだけの姿だった。

「っ……かさあ……」

眼が覚めた俺に気付いた恵理は、今にも泣き出しそうな顔をして俺を見上げて来た。

なまめ
艶かしいピンク色の唇と、細い顎のライン。そしてその下に続くバスタオルから大きく盛り上がった胸が、クッキリと谷間を覗かせていた。

俺はゴクリとナマツバを飲み込んだ。

「な、な、ナンで……」

そう言ってから、俺はハタと思い出した。

探るような俺の視線が、恵理の胸元で留まった。

薄暗い室内でも、恵理が俺に見せていた左胸のアザがハッキリと判った。

肩口にも幾つか付いている。

ドキン……

俺の心臓が乱されて音を立てた。

それが乱暴されて受けたアザだというコトを、俺は簡単に見抜いていた。

恵理、もしかして誰かに……許したのか？

可能性は十分にある。

恵理だってコドモじゃない。

ホントウは、恵理の戻って来た時点の様子から、俺はオボロゲに予測していたんだ。

「あ？ ……ああ、ゴメン。俺、課長のハナシ聴いてあげてませんでしたよね？」

俺は戸惑いながらも恵理の腕を軽く掴んで起き上がる。

「……やだ……」

俺に促されて起き上がった恵理は、聴き取りにくいホドの小さい声で囁いた。

「……え？」

俺は躊躇いながらも聴き返す。

「う……あたし……やっぱり、司とじゃなきゃだ」

「！」

イキナリ恵理に襲われた。

ガバツと両腕で縋り付くように首を抱き締められる。

「あぐうつつ……」

気道を強く圧迫するように押え付けられて、ヘンな声が出た。

拳法三段、空手初段……有段者の恵理の腕は見掛けよりも強力だ。

本人が意識して手加減してても、それでも強い。

「……司とじゃなきゃダメ……やっぱりダメなの」

甘える恵理の声に、俺の思考回路がショートする。

何のコト???

突然のこの状況を把握出来ずに、俺は焦った。

どうやら恵理は誰かに……多分、携帯のカレシに許そうとしたが……邪念（俺かよ？）のせいで、その第一線を踏み切れなかったみたいだ。

「課長……?」

「ヤダ、『恵理』って……呼んでよ?」

恵理の瞳からポロポロと涙が毀れる。

その涙に、俺は罪悪感を抱いてしまった。

「……出来ません」

「司あ」

甘えた恵理の吐息が、俺をクスグル。

俺は首に縋り付いた細い腕をゆっくりと解いた。

「どうして？」

「……ムリです」

俺は恵理の視線から逃げて眼を逸らせた。

そんなコト、今更俺に言わせるのか？

だけど……

「うんっ……」

軽く首を傾げて恵理の柔らかな唇を奪った。

恵理は俺のキスに浅く、深く応えながら、差し出した俺の舌先に戸惑いながら自分の舌を絡めてくる。

『司がイイ』って言うてくれた恵理の言葉に、俺は大袈裟だが感激していた。

初めて出逢った時、これほど憎たらしい馬鹿女は見たコトが無いと思っていた……

なのに、今はゼンゼン違っている。

愛おしくさえ思えてくるのは、もう、俺には未来が見えていないから……なのか？

第18話 遅い帰宅（後書き）

- 1) ブレーキライニングドラムブレーキのドラムに接触して
回転を止める摩擦材

- 2) 恩赦^{おんしゃ}：確定した刑の全部、または一部を消滅させ、或いは
公訴権を消滅させること。内閣が決定し、天皇の認証により行う。
大赦・特赦・減刑と刑の執行の免除および復権の五種がある。（三
省堂：大辞林 第二版）

第19話 逆援交？

>i2202<ruby><rb>316<

薄い耳朵</rb><rp>(</rp><rt>みみたぶ</rt><rp>)</rp></ruby>にふうつと息を吹き掛けた。

舌先で肉薄の縁をそつとなぞつて行く。

「うん……」

恵理は逃げるように、俺に触れていない方の肩を大きく竦めた。

恵理の火照った身体が俺の肌の部分にしっかりと押し当てられる。

俺は恵理の両肩に刻印みたいに付けられた醜いアザを消すように、その上からキスをする。

そんなコトしたくらいじゃ恵理のアザは消えやしないのに……

アザの位置は、肩口をシツカリと掴めば、指先が丁度の位置に来る。

……俺よりも少し大きい掌。^{のひら}

おそらくは、俺みたいな貧相なホソオモテの痩せ狼よりも、体格も立派な虎かライオン……

拒むコトはナイと思つた。^{こぼ}

恵理がご令嬢である限り、将来性のある優秀なオトコを、親が勝手に用意していたって不思議じゃない。

俺の周りには縁のナイ奴等ばっかしだったから、中々思い付かなかったこのコトバ……

『婚約者』？

つか、そう考えるのが自然だ。

否定する方がどうかしてる。

なのに恵理が俺を選ぶ理由って……ナニ？

A　：　気まぐれお嬢様の火遊び

B　：　婚約者に不満アリ……ナニかの映画タイトルみたいだな。

Aであれば俺はまだ救われる。

恵理が飽きてくれれば、釈放されてオサラバだ。

頼むから、Aであってくれ……

恵理は軽く眼を閉じて、素肌に触れる俺に身を任せた。

ころんとつつ伏せに転がせ、俺は覆い被さるようにウシロから抱き
竦める。

恵理は両腕の肘をベッドに着いて、上半身を起こし、頭を擡げた。

今度は白い頂うなじから肩、バスタオルから覗いている背中にも、キスの
雨を降らせてやる。

両脇から差し入れた俺の手が、緩んだバスタオル越しの胸に触れた。
恵理の切ない溜め息が漏れる。

肩甲骨の真ん中やや上の辺りにキスが及ぶと、恵理は身体を撓しならせ
て仰け反った。

「課長？」

「あん……な、ナニ？」

「オトコの寢室を襲うなんて、いい度胸ッスね？ ハシタナイとか
って思わないんスか？」

「いいトコのご令嬢が……」

「……」

「お陰で夢見が悪かったつスよ」

「魔うなされてたの、あつ、アタシの……せい？」

「そう言うコトになりませんか？」

ナンドココに来たんだよ？

人が真剣に……

俺は恵理の胸を力任せに掴んだ。

「いつ！……痛あい！止めて！」

恵理の悲鳴が部屋に響く。

「うっ……」

マジで痛かったんだと思う。

涙ぐんだ恵理は、黒目がちな瞳を大きく見開き、驚いた顔をして俺を見上げた。

「はい、お終い」

まだ『あの時の続きだ』とばかりにそう言って、俺は勝ち誇ったように笑った。

精一杯余裕をカマシた作り笑いを装って。

恵理、頼むから……ホント、これ以上ココに居て欲しくないんだって……

今の俺は、成和会からどうすれば逃げられるか……つか、どうすれば助かるのかってコトだけで頭がイッパイなんだ。

暴力団「オトシマエ」死んで詫びを入れる……若しくは半殺し……って恐過ぎる図式が頭に焼き付いて離れない。

マジで余裕、ねーんだよ。

だけど、俺が成和会に追われてるだなんてコト、絶対恵理には言えない。

連中のG T - Rを潰したのは俺であって、恵理のフィットじゃない。

恵理は、『知らなくていい』コトだ。

恵理の会社　木村工業には、S Pに該当する警護官セキュリティがいて、必要であれば、社長をはじめ上層幹部や要人を護衛する組織があるらしい。

これは部署のお茶室で雑談に混じった時に聞いたコトだ。

半分真実、半分デマらしいが、木村工業が業界でのトップシェアを誇っている事実がある以上、上層部の身辺警護する者が必要になると考えるのが妥当だ。

もし、そんなシステムが存在しているのなら、恵理にもしもの心配は不要だし。

大体、こんなコトでオンナをムダに怖がらせるのは、俺的にN Gで

好きくない。

……つか、成和会に怯えている情けナイ俺を、恵理に知られたくはなかった。

「部屋に……戻ってください」

「司？」

俺のコトバに驚いた恵理の瞳が大きくなる。

「う……」

言い返す言葉さえ失くした恵理の瞳から、大きな涙が毀れた。

引き寄せておいて、思い切り突き放した……

……俺、最低だ。

それでも、このままワケも言わずに黙って恵理を部屋から追い返すのは、胸が痛む。

ナケナシの良心ってえヤツだ。

「俺、今ね、ムシの居所が悪いんすよ。だから……」

取って付けた理由を、恵理は簡単に見破った。

「ウソ」

「えっ？ いや、ウソなんかじゃ……」

「……」

涙眼の恵理は、怒ったように手早くバスタオルを巻き直すと、さつさと部屋を出て行った。

……怒らせちゃったかな？

俺はベッドの上で半身を起こし、片膝を立てた状態で恵理が出て行ったドアを見詰めた。

恵理だって、俺に聴いて欲しいコトがイッパイあったハズだ。

でなきゃ俺にあんな風に……付けられたアザを見せたりはしないだろう。

だけど俺だって、今は自分のコトでイッパイイッパイなんだよ。

「はぁ……」

思わず溜め息。

恵理に襲われ、悪夢から解放されて助かったのは俺の方なのに。

夢は眼が覚めたら消えるけど、現実はそんなに甘くはない。

リセット出来るものなら、今すぐにも遣りたいよ。

成和会に眼を付けられれば、恵理だって『あの時にフィットに同乗してた女』だと炙り出されてしまうかもだ。

そうなってしまうてからじゃ遅いんだよ。

恵理に被害が及ぶ前に……近いうちに、俺はココから出て行こう。

そんな気になった。

最期の頼み……『俺にフィットを譲ってクレ』は、明日言おう。

言うなら早い方がイイ。

「……………」

うゝゝゝん、それにしてもナンだかな。

俺は、自分のコトバにハマッテしまった。

『お嬢さんをください！』じゃなくって、『お嬢さんの車フィットをください！』。

……手切れの品じゃあるまいし。

カッコ悪……

くそ、ナンか調子……出ねーな。

俺は頭の後ろで両手を組み、そのままゴロンと仰向けに寝そべった。

「……」

目を閉じて、何度も寝返りをうつ。

「……」

眠れねー。

スッカリ眼が覚めちまったよ。

ドウシテクレル？

眼が冴えて、眠れなくなってからそんなに時間は経過していなかったと思う。

再び部屋のドアが開いた物音に、俺は驚いて飛び上がりそうになった。

ガバツと半身を起こしたい衝動を抑えて、眠ったフリをする。

辺りの状況を窺おうとそうつと薄目を開けると、俺の視界が近付いて来る白い人影を捉えた。

「え……？」

恵理……！

恵理は俺の部屋に戻って来た。

さっき出て行ったまんまの格好……バスタオル一枚で。

「ん、な……課長？」

俺は慌てて跳ね起きた。

恵理は俺の様子を窺いながら、おずおずと俺の居るベッドに近寄って来る。

ア然とした俺は、バスタオル一枚と言う恵理のセクシーな身体から眼が離せなくなっていた。

「どうしたんです？」

薄暗闇で、そっと問い掛ける。

「……」

「課長？」

俺の声に、恵理は軽く眼を伏せた。

「俺、さっき言いませんでしたっけ？」

『お終い』って。

ナンで戻って来るんだよ？

怒り半分、嬉しさ半分でスゴク複雑な心境だ。

俺の声で、怒っていると判るハズなのに、恵理は黙って近付いて来る。

ちえ……オカマイナシでシカトかよ？

お嬢様ってーのは……

俺は、警告されても近寄って来る恵理の無神経さに、多少なりとイラついた。

……金持ちは金さえ払えば自己中も許されるとでも思っているんだろうか？　って思われても、仕方ない行動を取るんだな？

恵理はすぐ目の前まで来ると、黙って右手を俺の目線にまで持ち上げる。

？　……ナニか持ってる。

「……これ……」

恵理の突き出した右手を見て、俺は鼻白んだ。

その手の中には、カードみたいに拵げた三枚の万札があった。

「……そ、それ……」

うわ、久し振りに見る福沢諭吉い！

だけど恵理はナニが言いたいんだ？

恵理は俺の驚いた表情を見て、ニツコリと微笑んだ。

「コレで、司を買えば良い？」

「え……？」

一瞬、コトバを失くしてフリーズする。

聞き……違いか？

かつつ、『買う』？

『買う』……って、言わなかったあ？ 今あ！

「コレで、アタシが司を買うの」

な、なんだとおおお……！！！！

「マッ……マジ？ ア、ア、アタマ、大丈夫ツスカ？」

声がドモツて裏返った。

俺、課長に援交なんて、頼んでなんかいませんが……？

い、いや、落着けつつ……！！

この場合、支払う意志があるのは恵理の方だから……こつつ、コレ
って逆援交ってヤツ……？

「ううん。正気」

いや、チョット待て。

カルイノリで答える恵理に、突っ込みを入れてる俺……って、んな場合じゃねーだろよ？

「しょ、正気……って……」

「うん」

「……」

本気だか、冗談だか判らない。

恵理の明るい返事に、ドン引きしてしまう。

「コレなら文句、ナイでしょう？」

「……」

あのなあ……『文句』って、ナンだよ？

俺が恵理とえっちする為には、金が必要だっと思ったのか？

俺達のカンケイって、そんなモノなの？

金どうこうでケリが付けられると思われているのなら、心外だ。

俺は恵理の自信ありげな言い様に、急にハラが立って来た。

「ナニ……？ 課長から見れば、俺娼夫？」

ん、なワケねーだろツツ！

「コレ、要らないの？」

恵理は手にした万札をヒラヒラとナビカせた。

ああっつ、福沢諭吉が……視線が諭吉を追いつける……っつ。

い、いかん！

恵理になんだかんだ言って怒っても、所詮は貧乏人の俺だ。

無意識に、視線が福沢諭吉を追いつけるんだから情けナイ。

だけど、今の恵理って……

「そんなコト、ドコで覚えちゃったんです？」

まるで、何処かの飲み屋での下品な『客』みたいだ。

俺は溜め息混じりにそう言った。

ソコマデして俺とやりたいのかよ？

「…………え？」

ニコヤカに笑っていた恵理の表情が強張り、手が止まった。

「イトコロのお嬢さんが……ヤルコトじゃないですよ？」

「……」

俺のコトバに、シュンとした恵理。

さっきの威勢はドコへやら……だ。

趣味のネット小説とやらで、逆援助交際の話でも読んで知恵付けて、真似したくなっただってーのが、バレバレなんだよ。

どんな小説かは知らねーがな。

「前にお仕置きしたばかりなのに……課長つてば、ゼンゼン懲りてませんねえ？」

ごく……

恵理の喉が鳴ったのが聞えた。

俺はクローゼットの中にあつたバスローブから、ベルト用のヒモを外した。

恵理はベッドの端に座り、じっと俺の手元を見詰えている。

『ナニするのよっ。』

恵理の視線がそう俺に問い掛けているみたいだった。

俺はソレを恵理の傍に置き、座っている恵理の前にひざまじ跪いた。

ヒモは暫らく、そのまま放置。

「また、縛られると思いました？」

それはア・ト・デ。

でもホントーは、いつ殴られるとも判らない恵理を、サッサと縛り上げたい気分だけだね。

恵理の両手を自分の手で包み込むように取ると、俺はイタズラっぽく笑って恵理を見上げた。

「……………うん」

恵理は俺の笑顔を見て緊張が解けたのか、ホンの少しだけ表情が和らいだように見えた。

「俺が三万っスか？ それとも課長が三万円？」

ドツチだろ？

恵理は目を合わせられなくなったのか、恥らうように俺から視線を逸らせた。

「さ、さっき……………言わなかった？ つ、司を……………買っつて」

オイオイ、声が震えているぞ？

ダイジョウブかあ？

「はあ俺？ 三万って……安ッッ！」

「え？」

不満げな俺の声に、恵理は不思議そうな顔をした。

「俺、学生ン時にホスト遣ってたんっスよ？」

「な、ナニ……く、口から出任せ言ってンのよ……学生で……って、で、出来るワケないでしょっつ？」

くすっ……

真剣な顔をして俺のコトバを否定している恵理が、妙に可愛く見えた。

お嬢様だからこそ、俺みたいな奴等の『そんな部分』は見えてないってコトかな？

恵理は本気で信じてはくれなかったケド、コレはホント。

年齢なんて簡単にサバ読める。

その時は、事故の返済金や修理代でどうしても生活出来なかったから……つか、事故る度に金が必要になってホストを遣っていた。

純真無垢の俺はドコへやら……高額金欲しさにエスカレートしてしまい、客とのえっちに目覚めてしまった。

俺の生活状況がオカシクなったのもこの辺りからだ。

あんまりイイ思い出じゃねーな。

今回も退院後、夜間にホストをすればナントカ生活出来たかも知れねーし、モチロンそうなれば恵理とも出逢えなかっただろう。

だけど、俺は今度はそうしなかった。

俺は水商売自体を非難しているんじゃない。

社員として本採用された者が副業を持つコトを、木村工業は社内雇用総則での禁止項目として挙げている。

これが他社だったら、俺は多分ヤツテいたと思う。

例えば木村工業と同じく社員の副業が禁止されていたとしても……

それだけ、俺には恵理の父親　社長が特別な存在だった。

俺が木村工業に就職を志望した動機はモチロンあるが、ソレはまた別にするとして……

どういったイキサツがあったのかは知らねーが、普通、大企業の社長自らが、俺ゴトキ新入社員の事故見舞いに、多忙を極めている自

分の予定を削ってまでワザワザ来てくれるか？

本採用されている俺がホストの副業をすれば、こんな俺でも採用してくれた大恩のある木村工業の社長に対しての『裏切り行為』だ。

だから、貧乏のドン底に蹴落とされても、地べたにハイックバツテでも、絶対にそれだけは出来なかったし、遣ろうとも思わなかった。

「信じて貰えなくつても、別にいいですけど……ね？」

俺は恵理と視線を絡ませたままで、恵理の右手を持ち上げた。

そして、その甲にそつとキスをする。

「な、ナニ？　いつもの司じゃない？」

慌てた恵理がその場をチャカそうとするが、俺は完全にムシしてやった。

今の恵理の背筋は、トリハダ状態^{モード}になっているのかも。

雰囲気^{モウ}に酔わせて……あ……ダメだ。

もう、モタナイ……

思わず顔を逸らせた。

「くすつつ……くつくつつ……」

「？」

イキナリ肩を揺すって吹き出した俺を、恵理はまたしても不思議そうに見詰めた。

ダメだな俺、スツカリ似合わねーキャラになってんの。

「あ？ ゴメ……俺的に……っか、これ以上はムリ」

「……何のコト？」

「課長のナイトに、俺は向かねーってコトですよ」

「？」

恵理は俺のコトバに小首を傾げた。

俺は恵理の『素』のリアクションに折れちゃったみたいだ。

しやーない、三万円分頑張りましょーかね？

第20話 処女？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

自分とは違う人肌の温もりが傍に在る……

それだけで俺は、いつ忍び寄って来るかも判らない『影』の恐怖から解き放たれた気がしていた。

それは恵理とこうして一緒に居るからか？

コレは、俺の現実逃避ってコトなんだよな？

恵理を拒否していたのに、恵理の肌に触れた瞬間に安堵感みたいな……癒しみたいな気持ち良さを覚えたんだ。

……随分と勝手な都合だっと思う。

俺は自分に呆れた。

だけど、こんな修羅場……殺されるかも知れない恐怖なんか、味わったコトねーんだよ。

怖くて、怖くて……仕方無いんだよ！

俺は恵理をずっと抱き締めていた。

「助かりましたよ」

お陰でコワイ雑念が払拭されたし。

俺はそう言つて、恵理の掌てのひらに頬ズリした。

うっっん、香水の甘い匂いが、直に俺の鼻をクスグス。

徐々に俺の『スリスリ』が恵理の肩口にまで昇つて行く……

「何の……こと？ あ、や、やん……ちくちくするう」

猫みたいに頬をスリヨせてゴロゴロする俺を見て、恵理はくすくすと笑った。

伸びかけの髭が柔肌には痛いラシイ。

ああ、ホントだ。肌が赤くなってるよ。

「課長……温かい」

背中に両腕を廻して、恵理の胸の谷間に顔を埋めた。

恵理は、俺の頭を両腕でそっと抱え込む。

「あん、『暑い』……の間違いじゃなくて？」

「エアコン効いていますが？」

いや、そーゆー情緒のナイコトを言われても……

「ねえ、司……」

「はい？」

首筋にキスの雨を降らせていた俺へ、恵理は避けるように受け入れながらそつと耳元で囁いた。

「アタシに……何か隠してる？」

ぎく……！！

吐息のような優しい声で核心を衝かれ、恵理の背中に触れていた俺の手が一瞬止まった。

俺が恵理を抱き締めていたと思っていたのに、気が付けば、俺が恵理に抱かれていた。

普段以上に優しい眼で見下ろす恵理の視線に、俺は不思議な居心地の良さを覚えていた。

「……」

「様子、ヘンよ？」

……気付かれた？

いや、まだだ。

恵理はまだ俺が成和会に眼を付けられているってコトを知らないハ

ズだ。

「へ、ヘン？……ヘンなのは課長の方でしょう？ンなコト言ってる、こ、今度はホントーに泣かせちゃいますよ？」

俺は強がって見せた。

ハナシをハグラカスように、恵理の豊かな胸に、バスタオルごと上から強く咬み付く。

モチロン恵理に傷を付けない程度に加減して……だ。

顎を胸に付けて、そのまま恵理をベッドに押し倒す。

「あんっ！」

ギシッ！

ベッドのスプリングにワンテンポ遅れて、バスタオルからはみ出した、恵理の大きな胸のフクラミが弾んだ。

バスタオルで寄せて上げられている恵理の胸は、柔らかくしたソフトボールみたいで俺はとってもソソラレル。

モロ出しの時よりも、見えそうで見えないチラリの方がイヤラシくて、俺はダンゼン燃え上がる。

俺は恵理の腰の辺りを跨ぎ、軽く押し掛かった。

恵理が拒否して膝を立てれば、俺はモンゼツ……いや、瞬殺されて

しまう体勢だ。

バスタオルからハミ出した、プックリとした旨そうなその胸に、唇と舌を這わせた。

片手を背中から放すと、その手で恵理の身体のラインをバスタオルの上から撫でるように弄る。

とく、とく……

恵理の胸に顔を寄せている俺は、恵理の早い鼓動と浅くなった呼吸音を聴いていた。

スイミングやテニス、その他モロモロの……俺は口に出して言いたくナイ護身術の類の習い事で、恵理の身体は驚くホド引き締まっていて、ムダが無い。

難を言えば、筋肉質ってコト。

ポツチャリちゃんの、あのフワフワ感がゼンゼン無い。

「んっ……」

頬を赤く染めた恵理が、眼を閉じたまま顔を顰めた。

胸と同様、白い内モモにも俺はスリスリを繰り返して頬擦りする。

「あんっ、いつ……イヤだぁ……」

羞恥心から、頬を紅潮させている息遣いが一際荒くなり、恵理はふつくらとした唇を半開きにして身体全体で呼吸を整えようとする。

その仕草が俺をアオツた。

「あん！ 痛いー」

皮膚の薄い内モモには俺の伸びカケのヒゲが痛いらしく、恵理は涙目になり、スコシ怒って上半身を起こした。

頬を膨らませて口を尖らせる。

俺はニヤリと笑うと、両手を突いて上体を上げ、その勢いで恵理の唇にソフトタッチのキスをした。

素早く胸元で留めてあったバスタオルを引く。

「あっ……」

恵理がイキを呑んだ。

恵理を包んでいたバスタオルがハラリと解けて広がった。

キャシヤな身体には不釣合いの、Dに近いCカップの恵理の胸が露わになる。

俺は膝で勢いよく立ち上がり、パジャマとボクサーパンツを押し下げて既にスタンバイOKの相棒を取り出すと、ソレを恵理の胸に押し付けた。

「や、あん……」

恵理の恥じらう声が、妙にウレシそうに聞えたのは気のせいか？

コレも二度目だから多少のメンエキが付いたのかな……？

「ふふっ……」

俺は荒い息を吐きながら、コドモっぽく笑った自分に内心驚いた。

ギシ、ギシッ……

俺の動きにベッドのスプリングがタワみ、恵理の細い身体が浮き沈みを繰り返す。

俺の相棒でカンジているのか、恵理は身体を揺らされながら、軽く顔をしか顰めて眼を閉じた。

微かに開いた艶やかなピンクの唇が、俺の欲情を乱して掻き立てる。

……色っぽい

恵理の表情にミトレ、頭のシンが痺れた。

「あっつ！ ヤバッツ！」

「きゃっ？」

俺は慌てて恵理を突き飛ばすように放したが……

時、スデに遅し……だった。

「ふえ……な、ナニ????」

半べそをかいた恵理は、俺にバスタオルで顔を拭き取られながら、コタエを求めて見上げてくる。

拭き残していた一滴が、恵理の髪を伝って左肩口に流れ、肘の辺りにまで糸を引いた。

「まあ、課長があんまり気持ちよさそうにするから……」

……ってえのは、モチロンウソ。

俺が先にカンジちゃったからだ。

珍しく……ハヤカッタ……な。

俺は図々しく、こうなったのは恵理のせいだと自分のコトを転嫁した。

「う……」

驚いて放心状態の恵理は、ナニが起こったのか、それさえも判らないといった表情だ。

そして、腕に流れたソレを指先に採って、興味半分、キモイ半分といった目付きで観察してる。

そんなに眺めるなあ……恥ズイじゃねーかよ。

「……」

一瞬、二人の時間が凍った。

あっちゃああ……寸止め失敗。

……ヤッテしまった。

俺は又けた分、冷静さを取り戻していた。

俺は『疲れた』様子でぐったり……んと、恵理に押し掛かる。

「あん、重い……司あ、シッカリしてよぉ」

にかっつ

恵理の胸元に顔を埋めた俺の口元がユルんだ。

「……課長？」

「え？」

「オヤスミい」

「ええ……？」

俺のコトバに、恵理は不満そうだ。

まあ、判るけど。

「もお〜〜」

「ソレって、牛のマネ？」

俺はクスクスと肩を揺らして笑い出す。

「馬鹿ツツ！」

これじゃあ、えっちドロコにはなんねーな。

はーっつ、コレで一安心……か？

俺はスツカリ油断していた。

恵理は俺の背中に廻した両手で、さっきの俺を真似て、サワサワと撫^なでまわす。

うつっつ、クスグツタイ……

「司あ、続きはあ？」

くすくす笑う俺に、恵理は甘えた声で囁いた。

「も、お終いです」

「ヤダあ〜」

スネた恵理の声。

そう言うだろうと思ったよ。

まだ恵理は一度もイッテなかったし、俺だけお先に……って、やっぱりズルイよな？

俺は今度こそ恵理をイカせてあげようと思い直して、身体を起こそうと、両腕を突っ撥ねた。

その時だ。

恵理の口から、俺は思わぬコトバを聞いてしまった。

「あの……もつとお金が必要なの？」

「……！」

たちまち俺の表情が強張る。

「……ナニ……言ってるの？」

恵理は、金さえ上積みすれば俺が言いなりに……つか、今までジャしてたのは、金を見せたからだと思ったのか？

そ、そりゃ少しは在ったけど……

「だ、だって、司が『安い』って……言ってたから……」

恵理は俺の剣幕に驚いたみたいだった。

「そんなの……ジョウダンに決まってるっしょ？」

俺は金どうこの問題抜きで、こうして恵理と一緒に居たいんだ。

なのに、恵理は違うのか？

俺とのえっちは金ナシじゃ、成り立たねーとも思っているのか？

「わ……判らないわ」

恵理は戸惑っているのか、視線を俺から逸らせて俯いた。

「俺が……金目当てで課長とジャレテいるとでも？」

そう思われていたのなら……俺、ショックだ。

「違うの？」

がん！

馬鹿でかいハンマーで殴られたような気がした。

こんな時に限って、恵理の業務モードが現われる。

余計なコトバは一切抜きで、要点のみを押さえたキツイ言い方……

恵理は俺のコトをそんな風にしか見てなかったのか？

俺の中で……何かがキレた。

ああそうかい。

だったらコツチも恵理のオモワクを、キッチリと裏切ってやるよ。

俺はこみ上げて来る不快感を感じて、無性に堪らなくなった。

確かに俺は金に困っているさ……貧乏人のヒガミだと思われても仕方ナイほど。

だけど、俺にだってナケナシのプライドってえモンがあるんだよ。

金目当てだなんて思われて、ホイホイ言う通りになんか……ダレがシテヤルもんか。

マジで……もつと恵理のコト……スキになれそうだったのに……

恵理はそうじゃなかったのか？

泣き出しそうになった恵理を、俺は黙って見下ろした。

……泣き出したいのは……コツチだよ。

恵理がそんなのだったら、俺だって……

「幾らなら払えます?」

俺は醒めた目で恵理を見下ろしながら、意地悪そうに言った。

「……」

「それが俺を買っ値段なら、逆に俺から見れば課長を売る値段でもあるんですよ？」

「だって……」

恵理は俯き、答えに困っているみたいだった。

俺はワザと不敵に笑ってやる。

「お生憎様」

「え？」

俺は顔を上げた恵理と、視線をシッカリ絡めながらこう言った。

「金は貰っても、俺、課長の『処女』は要りませんから」

「！」

恵理は驚いて瞳を大きく見開くと、きゅっと唇を硬く結んで俺を見上げた。

第21話 影

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

はあ、はあ、はあ……

薄暗い闇の中、荒々しい息遣いが聞え、狭いシングルベッドの上でオトコとオンナが絡み合っていた。

辺りにはオンナのヨガル声と、ベッドが激しく軋む音が聞えている。

1 - L D K の部屋の壁際で

俺は体育座りをして部屋の壁に凭れ掛かり、自分の目の前で繰り広げられている痴態を無視……いや、スコシは気にしつつ、手元で広げていた某有名料理番組の本をペンライトでテラシて黙読していた。

実は俺、恵理のトコロで居候してからとゆうもの、いつの間にか愛読書が車の本から料理の本になっていた。

笑えねえよな？ この事実……

ハタ眼には情けねーかも知れねーが、コレが結構面白くってハマルんだ。

「……………」

俺は本から眼だけを覗かせて、『オトリコミ中』の二人を軽く睨ん

だ。

……いい加減に気付けよな？

この部屋に来てからもう二十分以上になるが、部屋の奴等は全く俺に気付いてくれない。

「はぁん……う、うん？　ンねええ？」

「う？　ん、何？」

どのくらい経ったのか……？

お互いの体位を入れ換えた二人は、ようやく俺の存在に気が付いたみたいだ。

暗闇で、のそつと動いた俺の頭に、オンナが気付く。

「ヤダ、ちょ、ちよつとおお！　ウソ！　……誰か、ソコに居るよ？」

「え？」

オトコの胡散臭そうな声。

「あ、俺？」

ヤツト気が付いたのか？

立ち上がろうとした俺は、手に持っていたペンライトを逆さまにしてしまった。

闇の中から俺の顔を、下からライトで照らし上げた状態だ。

「キャアアア ! ! !」

オナナの絹を裂くような悲鳴が、狭い部屋に響いた……

「ダ、ダレだツツ！」

オトコが一声叫んで、部屋の明かりを素早く点ける。

「う……」

急激な瞳孔の収縮に、眼の奥がキリリと痛み、俺は片手をかざして室内灯の光を嫌った。

なんか、光を嫌う吸血鬼にでもなった気分。

「こんのヤロウ……!!!!」

オトコは俺の傍に駆け寄ると、いきなり座り込んでいた俺の胸倉を乱暴に掴み上げた。

俺は力任せにぐいと引き起こされてしまう。

「テメエ……人ん家に勝手に……」

ヤバ！ 殴られる！

「うわっつとつとお！ たっつ、たんま！ 俺っ！ 俺だって！」

険悪な雰囲気察して俺は慌てた。

両手を大袈裟過ぎるくらいに上げてホールドアップ。

勢いで手にしていたライトと本がアサツテの方に飛んで行く。

「……………あああ？」

後ろに大きく振り被ったオトコの拳が、ピタリと止まった。

「な……………？」

「ああ……………！ 司あ……………？」

たった今まで、ヨガッテいたオンナが、先に俺の名を口にした。

全裸で二人の男女が俺を見詰めている。

「よ……………よお」

俺は気マズくなりながら、口のハシに愛想笑いを浮べた。

「お前え……………何でココに居んの？」

「えっつとお、コウん家のドア、鍵掛かってなかったし……………」

俺は悪友である松永洸　コウの名を呼んだ。

* *

『金は貰っても、課長の『処女』は要りません』

そう言った後　俺は恵理のマンションを飛び出していた。

行くアテなんか無かった。

それでも俺は、恵理の居るあの部屋には……居たくなかったんだ。

ダメモトで何人が訊ねて行ったし、有紀のマンションなんか、イチちゃん最初に行った。

だけど、ゼンゼン捕まらねー。

俺はフィットをコロガシながら、いつの間にかコウのマンションに辿り着いていた。

で、カギが掛かってなかったから、コッソリと侵入……

「な、ナニ不法侵入コイテやがるよ！　そう言うコトを聞いちゃいねーって」

口からアワを吹きそうになりながら、コウは面喰ってワメキ散らした。

「コウ、いいじゃん。司も久し振りに一緒スルう？ アタシはゼンゼンいいよお？」

侵入者が俺だと判った冴子さへこは、ベッドにうつ伏せに寝転がって片肘を付き、その手に頭を預けてフフツと艶っぽく笑った。

茶髪で長いウェービーヘアを、もう片方の指先に絡めて弄もてあそんでいる。

二人は水着の痕をクツキリと遺して小麦色のイイ色に日焼けしていた。

つか、焼き過ぎだろ。

冴子はOKでも、素が地黒のコウは消炭みたいだし。

「や……いいよ。俺は」

きつと、何度か二人で海に行っただろうな……

そう思った俺は、二人の仲の良さにチョツとだけ妬いた。

コウの彼女である冴子とは、ワケアリで俺とも関係を持ったことがある。

コウもソレを知っているし、前は何度か三人で……ってのもあった。

だけど、今の俺はそんな気分にはなれなかった。

恵理とのアノ後だ。

遠慮……しとく。

「あれ？」

コウが俺の顔を見て、ニタリと笑った。

俺はそのワケを素早く覚り、利き手で頬を覆ったが……遅かった。

「あつはあ、司あ、おまつつ、ナンだよオそのツラはあよお？ し
かも、指先まで手形クツキリで……スゲーぞ？」

「う……っせーな！」

「痛ったそーじゃん？」

俺の左頬には、恵理から貰った右の手形が真っ赤に……しかもクツ
キリと浮かび上がっていた。

ヘラヘラと笑うコウに、俺は後ろから軽く膝カックンを仕掛けてや
る。

「っせーな。前ぐらい隠せよ。この『コモノ』があー！」

続いてミゾオチに軽くフックを喰らわせた。

素早く身体を折り、腹を引っ込めながらコウは俺の拳を両腕でガ
ドする。

「あう？ ほ、放っとけ。お前と大して変わんねーじゃん」

ギャラリーになった俺のコトバに、コウは少し赤面した。

「お？　そう言えば、司ナンで来たんだ？　まさか……？」

「ナニごまかしてんだよ……え？　車フィットだけど？」

アッサリと言い放った俺を見て、たちまちコウの顔色が変わった。

「ばつつ、馬鹿ヤロウ！　まさか、『いつもの駐車場に停めました』
ってンじゃねーだろーな？」

「そうだけど？」

「ソレがナニか……？」

「フザケンナよ！　イイかあ？　俺まで巻き添えはゴメンだからな
？」

俺は、イロをなして捲し立てるコウの剣幕に気圧けおされる。

「多少のコトなら俺も聞いて遣れるがな、フィット絡みだけは、マ
ジで勘弁してくれ！」

「……成和会か？」

俺は、コウの普通じゃない態度がナニを意味しているのかを覚った。

「ヤダ！　司……いつ、今、ナンって言ったのおお？」

俺のコトバに、コウは押し黙って顎を引き、冴子は目を見張っていた。

「……アレでココイラをウロツイたりしてんじゃねーよ!」

「コウ……?」

「頼むからさあ」

コウは急に情けない声を出した。

……ナニがあつたのか?

「一体、どーしたんだよ?」

「つか、お前今すぐ車^{フィッ}出せ」

「コウ?」

コウは苛立ちながら、なおも早口で俺に捲し立てた。

普段もあんまり冷静じゃねーお調子モンだが、今のコウは特別ヘンだ。

「……まだ『奴等』はお前だと特定出来てナイらしいが……」

「……?」

『奴等』って、成和会?

……だよな？

「アレからお前と別れた後に連絡があって……向井のダチが成和会の連中に襲われた」

「……え？」

「連中、峠攻めてる奴等、片っ端からヤキイレてるってよ」

「……」

「そのうち、お前のコト知ってる奴が口割らねーとも限んねーしよ……つか……おつ、俺だってイツそうなるとも限んねーからな？」

そう言うなり、コウは顔の前で両手を合わせて俺を拝んだ。

マップでそーゆーコトすんなってえの。

「どーしたんだよ？」

「悪イ！俺、先に謝っとく」

「ナニが？」

キショイじゃねーかよ。

「フクロにされたらお前のコト、マジ喋っちまつかも……」

「……アホウ」

トタンに俺の居心地が悪くなった。

んなコトで……謝ンなよ……

「じゃ、な」

「ああ。スマネーな」

結局、俺はコウの部屋から強制的に追い出されてしまった。

つか、自主的に。

理由はどうあれ、俺が遣ったコトが原因で被害者が出ていたのを知ってしまった。

これ以上居座って、コウ達に迷惑は掛けられねー。

マンションの外部通路をトボトボと歩きながら、俺は絶望を感じて宙を仰いだ。

深夜の夜空は澄み切って、幾つもの星が瞬^{またた}いている

確か、星座を習ったのは小学生の時だった……よな？

そう言やあ俺が小四の時、爺ちゃんが死んだあの日の晩、オヤジが『爺ちゃん星になったんだ』なんて……今時の小学生でも笑えるウソを、俺、マジで信じていたの思い出したぞ？

俺、あの星になっちゃうのか……？

なるかつつ！！！！

けど……

奴等はまだスグそこにまで来ている……

俺は消え掛けていた恐怖心が、足元から再び忍び寄り、コッソリと纏わり付いて来ているのをカンジて身震いした。

捕まれば……マジでヤバイ。

どうするよ？

マンションのエントランスから出たトコロで、俺は駐車場に停めてあったフィットに、ウゴメく人影を見付けてしまった。

どきりと心臓が跳ね上がる。

俺は反射的にマンションの影に身を隠した。

……まさか？

息を殺して、そうつと物陰から様子を窺った。

体格のガツチリした……K-1にでも出られそうな二人組みの男が、
恵理のフィットの前をウロツイテいた。

そして、短い二人の遣り取り……

「……間違いねーな？」

「ああ……連絡しとけや」

「よし」

そして携帯を掛けている気配がした。

「~~~~~!!!!」

声にならなかった。

いや、この状況で声なんか出したりすれば大変だ！

俺の血圧が、さああああ っと一気に音をたてて降下する。

せつ、せつつ、成和会の連中だああつつ!!!!

うわあああああ!!!!

ヤバイツツ!!!!

見付かったああああ!!!!

頭の中がマツシロになった。

息苦しさから胸が苦しくなり、もの凄い恐怖に押し潰されそうになる。

今思えば、俺はこの時にそこから単身で逃げ出しておけば良かったんだ。

幾ら恵理が大事にしている車だからって……

俺は息を殺し、手前にあった植木の茂みに隠れるよう、深く屈み込んで身を潜めた。

そして駐車してある車の陰を伝って、そっとフィットにニジリ寄る

動悸が激しくなり、近くに居る連中に聞えやしないかとハラハラした。

……頼むツツ！……

俺を見付けるなあああ！！！！

神様、仏様ああ……

俺は思い付いた神様の名前や、ナントカ大魔神って、聞いたコトのあるアリガタそうな名前を心の中で羅列し、必死に祈りまくり、拝み倒した。

神頼みだろーが、ナンだろーがこの際ナンでも遣ってやるっつー！！

俺の緊張度が、百二十パーにハネ上がる。

……フィットに辿り着き、そつとケツに貼り付いた。

ヨッシャ！

ココまではダイジョウブ。

そして片手で小さくガッツポーズをした。

連中はまだ俺には気付いていない。

あとスコシイ……

俺は震える指先で、ポケットにあるキーを弄もたらぐった。

フィットのキーは、ティファニーとか言うブランドのキーリングに付けてあった。

そのキーリングにも、同じ素材で出来たプレートタグが付いている。

金属に、金属。

普通に持っけていても音が出る。

俺は、恵理が付けていたこのキーホルダーが音を立てないよう、細

心の注意を払って取り出した。

「……………」

緊張してコメカミから汗が流れる。

心臓が先にイツチャいそうだあああ……

緊張から来るストレスは、俺にとって、何時間も待っていたような錯覚を起こさせる。

俺はいつでもダツシュでフィットに乗り込めるよう、心の準備をしながら『その時』を待ち、発見されるかも知れない恐怖に堪えた……

……そして、待ち望んでいた『その時』が遣って来た。

遠くから車のライトが近付いて来た

恐らくは、K-1な奴等が連絡して呼び出した仲間だろう。

生垣で鳴いていた虫が、人の気配を察して急にピタリと鳴き止む。

「……………」

コウの居るマンションの近辺は、何棟もの同じマンションが立ち並んでいる、集合型マンションだ。

土地を共有している為、駐車場はかなり広いスペースが取ってある。
フィットの前で立っていた男達は、何箇所もあるマンションの駐車場入り口からその車を誘導するべく、フィットから離れた。

チャンスツツ！！！！

連中が俺に気付いて駆け戻って来ても、追いつかれないくらいの距離とタイミングを見計らうと、俺は地面を蹴って伸び上がり、ドアに^{すが}縋った。

素早くリモートキーでドアロックを解除する。

ガチャ

右側のゴツイホスト崩れが、ドアのロック解除音を聞きつけて足を止め、コッチを振り返った。

俺は躊躇せずにエンジンを起動させ、瞬時にサイドブレーキを外す。

動き出したフィットに気付き、慌てて二人の男が引き返して来たのが見えた。

遅せえよツツ！

車にさえ乗ればコッチのモンだ！

さっきのビビりはドコへやら……俺はハハツツと不敵に笑って余裕を力マシた。

俺は左足のクラッチを抑え気味にして、アクセルを力一杯踏み込んだ。

フィットはフロントを一瞬だけ軽く下げ、送り込まれて来たパワーをタメて開放する。

タコメータのレベルゲージが跳ね上がって標準装備のエンジンが吠えた。

フロントが浮いて、フィットが飛び出す。

「待てや！ コラァ！」

連中がドスを効かせた声で怒鳴った。

冗談じゃない。ダレが待つんだよ？

俺は連中とは反対方向に、素早くハンドルを切った。

第22話 成和会

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

フィットが乱暴に向きを変えた途端、ルームミラーが後続車のハイビームをモロに映した。

連中が呼び出したヤツの車だ。

「あつ！」

眼が眩^{くら}んで、一瞬視界を奪われる。

それでも俺は眼に焼き付いていた残像と勘を頼りに車道に飛び出し、アクセルを踏み込んで逃走した。

俺の一瞬のスキを衝き、ハイビームの車がフィットとの距離を縮めて来る。

「くっそおお！！！」

俺もライトをハイに切り替え、視界を確保するとスピードを上げた。

片側一車線の深夜の車道には、対向車も他の後続車も見当たらない。

俺達の貸切状態だった。

二台のエンジン音が、コウの住むマンションを瞬^{またた}く間に後にした

暫らくの間、追いかけて続いた。

追って来るヤツは、俺を追い越して停める様子も無ければ、諦めて見逃してくれる様子も無さそうだ。

ずっとケツに貼り付いて来やがる。

キシヨイじゃねーかよ。

どーゆーツモリだ？

俺が向かっている方向は、高速へと続く、緩いカーブが連続してる山道だ。

まだ当分の間、見通しのいい一本道が続いている。

逆方向の市内へ向かえば入り組んだ宅地道路がイッパイあるし、地の利を活かして逃走するにはモツテコイだ。

追われているフィットで、このままの一本道はマズイだろ？

つか、高速行けば高速機動隊の白バイが多分居るし。

ああ~~~~ッッ!!!!

片手で頭をクシャクシャと掻いた。

成和会にも、警察にも……

俺はドツチにも捕まりたくはねエ〜〜！！！！

追って来るコイツが一体ナニを考えてんだか知らねーが、ココは一刻でも早く消えた方がイイ。

ハンドルを素早く左右に振り、俺はフィットを蛇行させた。

俺がシカケて来たと思ってか、ソイツのブレーキランプが灯^{とも}って車間距離が開く。

「よつつ！」

カウンタをカマシてフィットのケツが右に振れた瞬間、俺はハンドルを逆に切ってリアスライドさせ、直線ドリフトに持ち込んだ。

恵理のフィットが悲鳴を上げる。

フロント左がスツとインに沈み込み、車体がブレて微妙にローリングしながらフィットは進路を反転させた。

ヤツと向き合った状態の俺は、ギリギリのトコロで追って来たヤツの車を遣り過^すす。

「！」

擦れ違いザマ……一瞬の間だったが、ドライバーと眼が合った。

俺にカワサレタってえのに、俺よりも少しばかり年上の男^{ドライバー}が、余裕

をコイテ□元を緩めたのが見えた。

……俺よりもイケメン????

バカにしてンのか？

それとも参りましたってか？

前後のライト形状と、街路灯の明かりに浮かんたオオヨソの車体シルエットから推測して、黒いレクサスLS600？

とてもじゃねーけど、お互いの車はバトル仕様じゃナイ。

ナンだよ。

驚かしやがってえ……

コレなら道幅のナイ狭い場所を走りまくれば振り切れる。

俺はそのレクサスを甘く見下していた。

だけでもう一台、駐車場に残していた奴等の車があったのを、俺はスツカリ忘れていたんだ……

その拳が深々と俺のミゾオチにめり込んだ。

苦い胃液がこみ上げて、堪らずに吐き戻す。

「ぐはぁあつ！……う、う……」

俺はミゾオチを両手で抱えるようにガードしながら、大きく身体を曲げてよろめいた。

涙眼になりながらウシロへ後退る。

「オラオラア！ 退いてンじゃねーよ！」

「あうつ！」

後から両肩を掴まれ、無理矢理引き起こされた。

バカ力にモノを言わせて、俺の両腕をウシロで逆手に捻り上げる。

締め上げられた左右の肩関節が、ミシミシと厭な音をたてて軋んだ。

激痛に顎が仰け反る。

「シツカリしろよぉー。キゼツするにはまだまだ早えーぞ？」

俺にパンチをメリコマセたヤツが、嬉しそうに近付き、今度は顔面を何度も殴った。

チクショウ！ 人間サンドバッグかよ？

俺は何度もアスファルトに叩き付けられ、モンドリウツた。

体中、痛くないところがナイ。

「車見捨てて逃げたりや助かったかもしんねーのにな？ バカかデメエはよ？」

ソイツの言った通りだった。

俺は進路方向をコイツラの車に塞がれ、こうしてアツケなく捕まっていたんだ。

「……逃げられねー」

ハンドルを握った俺の全身が戦慄わなないた。

『アタシのフィット……』

恵理の言葉が脳裏を過る。

家一軒が買えるBMWより、恵理はマイカーとしてフィットを選んでいた。

粗い運転だが、どれだけ恵理が大切に乘っているかは、消耗部分を見れば判る。

恵理のフィットを見捨てては……逃げ出せなかった。

コイツラにフィットを潰されるくらいなら……

俺は逃げ出すのを『諦める』方を選んでいたんだ。

「オラオラ、もっと遊ばせろや！」

罵声を浴びせられて路上に叩き付けられた俺は、起き上がる気力も失くしていた。

身体を深く折り曲げて両腕で顔と頭をガードしたが、連中は革靴で容赦なく蹴りを叩き込んで来る。

俺、このまま殺されるのか……？

俺が締め上げられているすぐ傍で、一台の車が停まり、中から男がゆっくりと降りて来た。

俺をボコっていた連中は、その男に気付いて俺への制裁をぴたりと止めた。

「み……水守^{みかみ}さん、じ、直々にいらしたんですか？」

声の慌てようから、俺は連中が呼びもしなかった大物が出て来たのだと知った。

そして、俺はもうこれまでだ……と諦め掛けていた。

「そのくらいで止めておけ」

俺の意識が消えかかっていた時、頭上から降って来たその声が、まるで神様の声のように聞こえた。

助かった？

だが、ソレは俺の気休めでしか無かった。

凄い力で胸倉を掴まれ、俺は後から遣つて来たレクサスの男に引き擦り起こされた。

このクソ暑い夜中でも、薄い色の高そうなブランドスーツを着たま
んまだ。

連中が『みかみ』と言っていたが、一体コイツはダレなんだよ？

「うっ……」

俺は殴られた痛みを堪え、顔を顰^{しか}めながらソイツと視線を合わせた。

「……ほう」

俺の視線を受けたソイツが微かに笑った

「いい面構えだな？」

「いえ、視力がチヨット悪いモンで……」

俺はへへッと笑って軽口を叩き、強がって見せた。

あああゝゝ俺のバカッツ！！！！

ナニこんな時にコイてンだよおお！！！！

機嫌損ねたら殺されるゾ！

ソイツは俺のコトバを、鼻で笑った。

身長は俺よりも少し高い。百八十五前後。

均整の取れた身体つきに、俺が睨んだ通りホストでも遣っていそうな甘い顔立ちのイケメンだった。

つか、モノホンのホスト？

ただ、ソイツには、右顎から首を伝ってその下へ……シャツの襟に隠れてその先は見えなかったが、大きな古い刃物傷が続いていた。

……ホスト……にしては致命的だな。

やっぱし……ヤクザさんですかああ???

「手間は取らせない。来て貰おうか？」

「う……」

たった今、俺に殴り掛かって罵倒していたヤツラより、ソイツのフツーに話した言葉の方が、もっと俺を震え上がらせた。

「水守^{みかみ}さん、ソイツ汚いですよ？」

それぞれが勝手な方向を向いて停まっている三台のライトが、俺達を暗闇から浮かび上がらせていた。

刃物傷の男は、俺の胸倉を鷲掴みにして引き摺ったまま、自分が乗っていたレクサスの後部座席に乗せようとしてK-1なヤツラに止められた。

俺はK-1なヤツラに、全身の激痛に殆んど反応出来なくなるまでボコられていた。

時間が経てば経つほど、意識がモーローとなって来る。

眼を開けても、左のマブタを切ったのか、視界が真っ赤になって全く見えない。

でも、自分の体が汗と血で濡れて汚れているコトぐらいは理解出来た。

レクサスのイケメン兄ちゃん、来るんなら、もっと早く来てくれよ。

来るのが遅せーって。

恵理に平手で殴られただけでも軽くメマイがしていたのに、コイツラ、トーシロの俺相手に……手加減ナシかよ？

「ソイツの汚ねェ血で、シートが汚れちまいますよ？」

『水守』と呼ばれた男は、俺を押し込める手を止めた。

そして俺の胸倉を掴み上げたままで、K-1なヤツラに向き直る。

頼んますから、この手エ離せ。

ナイキのTシャツの襟が伸びちまうじゃねーかよ。

俺は、そう言いたかったけど……サスガにそれは言えねーだろ？

「怪我させたのは誰だ？」

水守は、ヤレヤレといった感じで、困ったように訊ねる。

K-1なヤツラ二人は全く悪びれた様子も無く、肩を揺すってへへつと笑った。

結局、俺はレクサスには乗せて貰えたが、後部シートじゃなかった。

俺は両手を後ろ手にガムテープで拘束され、レクサスのトランクに軽々と投げ込まれる。

三人とも俺よりもガタイがデカイし、体重なんかに至っては全くの論外だった。

まあ、俺はあの事故後の劣悪生活環境以来、短期間でステに十キロのダイエットを余儀無くさせられている。

以来、若干の体重増はあっても、ほぼ固定されて停まってしまっていた。

「事務所に着くまでソコデ大人しくしている」

K-1の一人が大きな前歯を剥き出して笑った。

ばん！

トランクが閉められ、視界が真っ暗になった。

* *

何かの冗談であって欲しかった願いもムナシク、俺は本当に成和会の事務所ビルに連行されてしまった。

そこはドデカイ二十五階立て事務所の四階だった……

「もう一度、聞く……お前が乗っていた車は盗んだ物か？」

刃物傷の水守は、俺の目の前にある高級革張りソファに深々と身を預けて脚を組み、静かに俺を見下ろしていた。

「ちつ、違~~~~うつつ!!!」

俺はと言うと、水守の前にある大理石仕様のゴージャスなテーブルの上

に、さっきのK-1なヤツラ二人がかりで貼り付けられていた。

俺は移動前と同じく両手を後ろ手に拘束されたまんま、顔を横向きにして、上から体重ごと加えて押え付けられていた。

耳元で、メリメリと音がして、目の前で星がチカチカする。

荒い息を吐きながら、俺は苦痛で顔が歪んだ。

あうっうっうっ頭蓋骨がカンボツするうっうっ!!!

「お前が乗っていた車は、誰のものか知っているのか？」

「いいゝゝゝつづでで！ しつ、知ってるってええゝゝゝあだだだ!!!」

俺は苦痛に悲鳴を上げながら正直に話す。

「コキやがれ！ このクソ……」

「テメエのオカゲで、田口さんと宮原さんが病院送りだ！」

「そんな……いいつつ！ だああああ!!! 止めるおおお!!!」

K-1なヤツラが更に力を加えて俺の頭を押さえ付ける。

俺は堪らずに、悲鳴を上げた。

G T - Rに乗っていたヤツラ、入院中なのか……

つか、マジで骨砕けるう〜〜〜！

刃物傷の水守が俺を捕まえた本当の目的は、どうやら仲間の病院送りと、G T - Rを潰されたコトへのお礼じゃなかった……らしい。

K - 1なヤツラは……お礼、スコシはあったみたいだけど……？

マジ、助かったぁ……

つか、冷静に考えれば、勝手に俺を追いつけて、勝手に事故ったんだよね？

俺がその一切の責任を背負い込む義務なんて……ナイんだ。

なのに、ナニ？ この待遇は……？

俺は苦悶の表情を浮かべながら、横目でちらりとソファに座っている男の様子を窺った。

「……」

『水守さん』と呼ばれているイケメンの男は、両腕を組み、片手を口元を持って行って、何かを考え込んでいるようだった。

「も……いいでしょ？ 俺を逃がしてくださいよ」

俺は半ベソを力キながら、その男に許しを請う。

K - 1なヤツラにはナニを言ってもムダだが、水守は少しは話が判

りそうだ。

「……………」

水守は目の前でギャクタイされている俺を完全にシカトして、じつと宙を見ていたが……

……その視線がやっと俺を捉えた。

どーでもイイケド、早くコイツラから俺を放してくれ！

一般のか弱い少年（？）がK-1モドキのオッサン達にボコられてたつてえのに、コイツは全く顔色一つ変えたりしねえ！。

今もそうだ。

感情を表に出さないその表情に、俺はソイツがどれだけヤバイ奴かを暗に読み取っていた。

コイツ……多分、幹部クラスの人物だ。

「ま、ウソか本当か……もうすぐ判る。お前達、手を放せ」

「はあ……………」

K-1なヤツラが渋々と俺を解放した。

な、ナニキザったらしくコイてンだよ？

俺はソイツの仕草に一タム力ついたが、一応解放してくれたコトに
対しては感謝していた。

「ウソだったら承知しねえ」

「覚悟しとけや！」

K-1なヤツラソレゾレが、俺に凄みを効かせてコイた。

フン！ ウソなんか言ってるねーし。

俺はつい、いつものクセが出てしまった。

口を尖らせ、ナナメ下から見上げるようにしてK-1達を睨んでし
まったんだ。

バカッ！

「あう！」

「調子コイてンじゃねえ！」

デカイ拳骨^{げんこつ}が俺のノーテンを直撃した。

目の前で火花が散って、鼻の奥がキナ臭くなった。

鼻水がツツツと垂れて来る。

慌てて手の甲で拭った。

……？

ヌルリとしたその感覚に驚く俺。

ア、アレ？ こつつ、コレ、鼻血じゃん？

キイイッ！ バタン！

「……」

派手にタイヤを鳴らしながら車が乱暴に停まり、ドライバーが慌ててドアを閉めた音が、ここにまで聞えて来た。

にわかに階下が騒がしくなる。

「……どうやら、お出ましのようだ」

ソファに座って何かをジッと待っていた水守は、そう言って俺を見るなりニヤリと口元を綻ほころばせた。

ナンだよッ？

水守は俺の問い掛けるような視線をスルリとかわして立ち上がると、ドアの向こうに消えて行った。

「ナンやア？ テメエは？」

「ザケンナア！」

何人もの、いかにもソレらしい連中が、階段を駆け上がって来る『誰か』を引き留めようと、口々に怒声を浴びせる

多分、その人物はさつき乱暴に車を停めた人物だ。

一体、ナニが起こったんだ？

カッカッカッ……

ハイヒールの音？

……まさか……？

聞き覚えのあるヒールの音が、何人ものココの連中と遭り合いながら階段に反響し、乱れながら近付いて来る

「退いてッッ！」

凜とした女の声が通路に響いた。

……恵理……！！

ウ……ウソだろう？　ココ、成和会の事務所だぞ？

第23話 救出？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「デメエ、ドコのモンだ！」

「とつとと帰^{けえ}んな！」

凄んだ怒声と、乱れる靴音……

侵入者はすぐそこまで来ている。

「ナニすんのよッッ！」

鋭いオナナの声が飛んだ。

「売り飛ばすゾ！」

「退^どいてッッ！ これでも退かないの？」

「この女ア！ ……うおあ？」

一瞬、ソコに居合わせた何人もドヨメイた。

オナナの『何か』に息を飲んで退いたのが判る。

一体、ナニを持っているんだ？

「ココを通してッッ！」

何人ものガラの悪い連中に絡まれながら、追詰められた野獣のように、再びオンナが鋭く叫んだ。

カッカッカッ……

小走りに駆ける靴音がハッキリと聴き取れる。

通路に響くヒールの音は一人分。

って、まさか…… たった独り？

「て…… テメエ、ザケヤガってえ！！！」

オンナが見せ付けたであろう『何か』に怯んだ連中が、慌てて我に返ったみたいだ。

遠巻きに何人もの靴音が入り乱れ、口々に汚く罵^{ののし}りながら、先を急いだオンナの後を追いつける。

「司ッッ！ ドコなのッッ？」

俺ははっとして、俯いていた顔を上げた。

やっぱり…… 恵理だ！

まさか、俺を助けに……？

マンションを飛び出す前、俺は恵理にヒドイ言葉を投げ付けていた。金をエサに俺を釣ろうとしていたが、それが恵理の焦りみたいなモンから来た単なる強がりで、本心から言った言葉じゃないってコト……俺はとっくに見破っていたんだ。

モチロン、金をチラつかせたコトに対して、貧乏人の俺は頭にキテいたさ。

けど、そうするコトしか出来なくなっていた、歪んでしまった恵理に対して、俺が素直にはなれなかったのも事実だ。

『馬鹿ツツ!』

テニスと武道で鍛え上げられた強烈な平手打ちが、俺の左頬に炸裂した。

溢れる涙を拭いもせずに……恵理は顔をクシャクシャにして、しゃくり上げながら泣いていた。

プライドの高いハズの恵理が、俺の目の前で大声で泣いたんだ。

もう、恵理は俺のコト、二度と赦^{ゆる}してはくれないだろうと思っていた。た。

本当は……俺、それでも構わなかったんだ。

そうすれば、俺だって恵理のコト諦められたのに……

『処女は要らない』……

我ながら、ナニぶっコイテやがんだよ？

その場の空気にガマンが出来なくなつて、俺はワザとそう言った。

恵理は木村工業の社長令嬢であつて俺の上司。

一方、元走り屋のこの俺は、どんなに背伸びしたつてお嬢様である恵理とは釣り合わねーし。

この先、恵理との関係を、ずっと続けていけるとは思えなかった。

なのに恵理は勝手にドンドン突っ走つて、挙句に金で俺を買おうとし、処女を棄てようと企てた。

俺だつて、恵理が普通のオンナなら、金なんか頂かなくてもサッサと処女を頂いてたさ。

フツのオンナ……ならな？

……お嬢様のするコトじゃねーだろよ？

このままだと、俺もいつタガが外れてしまうかもだ。

だから俺は自分から進んでこの関係を断ち切ろうとしたんだ。

結果、恵理を泣かせちゃったが……俺のコト、サイテーなヤツだつて……恵理が心底嫌つてくれて、それで終わってくれるんなら、その方がどんなにかマシだ……なんてね。

なのに……ナンで？

ココが成和会の事務所だってコト、マジで判ってないのか？

恵理みたいなお嬢様が来るようなトコロじゃねーんだ！

危険なんだ。アブねーよ！！！！

「恵理ィ　　ッ！　来るなあああ！！！！」

ココに向かっている、まだ姿の見えない恵理に対して、俺は声を張り上げて怒鳴った。

「戻れ！　早く逃げろぉーっ！」

聞えたのなら、引き返せっ！！！！

「テメエは黙ってろい！」

頭上から怒声が降った。

ガンッッ！

「あう……」

K-1な奴らの一人からいきなり胸倉を捕まれて、強烈なフックをお見舞いされた。

顎をシタタカに殴られる。

衝撃で首が折れそうに曲がり、再び俺の目の前で星が散った。

ふう〜と視界が白み、脳が揺らされて意識が遠退く。

「司あぁッッ！」

悲鳴に似た、恵理の声。

……必死に俺を捜してくれている。

その声で、俺は消えかけていた意識を『現実』に引き留める事が出来た。

つか、キゼツしている場合じゃねーだろ？

しっかりしろ！

俺は自分に喝を入れ、苦痛に顔を歪めながら頭を左右に振って意識を無理矢理引き戻す。

そして声のしたドアの方へと顔を向けた。

「司ッッ！！！」

部屋の前で、ヒールの靴音がピタリと止まった。

「デメエ……」

言い掛けたK-1なヤツラが、恵理の姿に鼻白んで口籠る。

……???

俺はボコられて腫上がった顔を、顰めるようにして眼を細める……

見間違えたりなんかしない……開いたドアには、確かに恵理の姿があつた。

襟を立てた黒いシャツに、動き易そうな黒いパンツスタイル。

腰の張りがイマイチの細身の恵理が、ナオのコトすらりとして見えた。

ただ、相変わらず、胸だけはデカかつたが……

俺は視線をサマヨワせ、恵理を見てK-1なヤツラが退いた理由を搜した。

「その手を放しなさいッ！」

恵理はK-1なヤツラに対しても、全く臆する事無く強い口調で言い放った。

そして、今まで履いていたシルバーの華奢なミュールミュールを脱ぎ捨てて、素足になる。

「煩^{わづ}え！ て、テメエ、ダレの許^{ゆる}しでココまで来^きやがっ……」

再びK-1なヤツラが退き、言葉を飲んだ。

恵理から放たれる強烈なオーラに圧倒されていたんだ。

現役のオッサンが退く……って、マジかよ？

……ぞく……

俺の身体に悪寒が奔った。

つか、コレって……『殺^{ころ}気』？

「なっつ……？ え、恵理っ……？？？」

俺は『殺^{ころ}気』の発生元を見付けてドン退きする。

静かに右足を一步ナメ前に擦り出して半身^{はんみ}に構えると、恵理は持っていたモノを横にして、自分の目線にまで持ち上げた。

右手にしていた黒い漆塗りの七十センチ程度の棒は、手元に『鏢^{つば}』らしいものがあり、全体に僅^{わず}かな反^そりがある。

「え……理？」

俺は恵理を見詰めて固まった。

ナニ？ その手に持っているモノは……？

差し出した棒を左手に持ち替えると、流れるような動きで腰の辺りに固定した。

ウソ、それってもしかして日本刀???

帯刀し、腰を低く落としながら軽く上体を左に捻る

肩越しに相手を見据えているその姿は、どう見てもこれから抜刀をする構えの、臨戦態勢だった。

しかも一分の隙も無く、無駄な動きさえ削ぎ落とされ、淘汰されたキレイな構え……

こんなモン、見様見真似で会得出来るモノじゃないってコトぐらい、俺にだって判る。

「来るのなら……覚悟なさい」

ネコの瞳が細くなり、妖しく光った。

そして眼で射殺す……今の恵理の視線は、見るもの総てを瞬殺出来そうなほどの強い殺気を帯びていた。

その表情は、今まで俺がコワイと思っていた恵理の表情なんかよりもケタ違い。

遥かにイッちゃってる。

俺には、『殺気』で包まれた眼に見えない結界が、恵理を包む空間に張巡らされたように思えた。

不用意に恵理の『間合い』に飛び込めば、俺ですらどうなるか判らねーヤバイ雰囲気。

恵理は、まるで獲物を狙うドーモーな肉食獣

「な……なにおう……こ、この……」

K-1なヤツラは完全に気圧されていた。

コイツラ、完全に恵理の殺気に飲まれてる。

……ソレって、まさか真剣^{モノホン}……なのかなぁ？

つか、それなら銃剣等不法所持だろ？

一触即発

状況を見守っている俺の喉が、ゴクリと音をたてた。

「くくっ……」

部屋の外……通路から、声押し殺しても自然と漏れてしまう男の笑いが、殺気に包まれたケンアクな雰囲気をぶち壊した。

「……」

集中力を欠いた恵理が、顔を顰^{しか}めて構えを解いた。

恵理の周囲から、ピリピリとした殺気がコッゼンと消える

はあ~~~~ビツクリしたあ。

恵理と言えば、ナンだかキマリが悪そうに、口を尖らせている。

気持ち、頬を赤くして。

「……もお、アンタってば……どうしてソウなのよ？」

困った顔をして、恵理は後ろを振り返った。

え???? 俺のコトじゃ……ねーのか？

助けに来てくれたハズじゃなかったの？

俺はこの時恵理からシカトされて、チョット複雑な気分になった。

「くすすす……強引。相変わらずだなあ、恵理姫は」

笑いながら出て来たのは、さっき奥に引っ込んでいた刃物傷の水守だった。

今、恵理のコト『姫』って……呼んだ？

「ソツチこそ、こんな夜中にアタシを呼び付けておいて、このお出迎えはナニ？」

出たツツ！ 恵理の高びくくく！

こういう態度を取るのって、俺にだけじゃなかったのか。

ってゆーか、この二人の関係って……ナニ？

俺は二人の遣り取りをアツケにとられて見守った。

「もしかしたら、久し振りに - 1 - 蒼月流そうげつを拝めるかなと思ってさ」

「……」

恵理は無言のまま、手にしていた日本刀をスラリと鞘走らせた。

「うわわっつ？」

その場に居合わせた俺達は焦った。

驚かなかったのはあの水守だけだ。

……一点の曇りも無い蒼白の見事な抜身が現れた。

その妖しい輝きは、トーシロの俺が見たってレプリカじゃないのが判る。

手に馴染んだ感のある刃の切っ先やいばを、恵理は水守にひょいと突き付

けた。

「冗談にもホドってものがあるわ。司にナニすんのよ？ 事と次第に因つては、この『霧雨^{きりさめ}』の錆^{さび}にするわよ？」

ややトゲトゲしく苛立つた惠理の声。

しかし、ナンてえ古風な言い回しだよ。惠理は時代劇ヲタクなのか？

「俺は惠理の車がこの男に盗まれたのかと心配して遣っただけだ……この男の言う通り、どうやら本当に盗んだ訳ではなかったようだ……となると、この男は惠理の何なんだ？」

サスガの水守も、真剣を突き付けられれば慌てるか？

って、あんまし慌ててねえし。

水守は甘いマスクを崩しながら、両手を軽く挙げて冗談っぽく降参しただけだった。

「よつつ……余計なお世話だわ」

核心を突かれ、惠理は赤面してウロタエた。

「カレシ？ へえ、まさか惠理が『こういうの』が趣味だとはね」

水守は、俺のブサイクに腫上がった顔をジロジロと観察した。

あの……ナンか俺、メチャクチャ不愉快なコト言われてね????

ボコられて、俺の顔は至る所が紫や青い内出血で腫れ上がり、眼もマトモに視界が確保出来ない状態だった。

つか、完全に人相が変わっちまってるし。

こんなの、俺じゃねーよっつ！

「んな、ナニよ？」

「いいや？ 『こういうの』より、やっぱり俺にしておけば？」

水守は、『勝った！』とばかり嬉しそうに爽やかに笑うと、親指を立ててソレを自分に向けた。

ナンだ？ この二人の組み合わせは？

……あれ？

俺は鼻の下から顎に伝って滴^{したた}っている生暖かいモノの不快感に、今頃になって気が付いた。

うっ~~~~、まだ鼻血が止まってねえ。

「結構よ。『みもりん』にアレコレ言われたくはないわ」

水守のコビを含んだ言い方さえ、恵理は無下に却下する。

ぷっつ……

俺は思わず吹いていた。

『みもりん』ってえナニ？

ひょっとしてコイツのニックネーム？

って、確か『ミカミ』って言われてたよな？

「オイ……」

思わず吹いた俺は、水守にスゴんで睨まれる。

ウシロに居たK-1なヤツラが、トッサに姿勢を正して萎縮するのが心配で判った。

サスガはその道のプロ？

恵理に負けず劣らずの眼光だったが、ザンネンながら俺の中では、スデにコイツの威光は地に堕ちてしまっている。

「……恵理」

「なあに？『みもりん』」

恵理は悪気が全く無いような、ワザとらしい笑顔を作った。

コイツが困ってるの、知っててワザと遣ってる……確信犯。

「その言い方……止める」

「あら、幼稚園の頃から『みもりん』は『みもりん』でしょう?」

「……だから、止めるって」

え? コイツと恵理が幼馴染の同級生????

「はい」

「ムリだ。そんなモン入んねーし」

恵理の差し出した『ソレ』を見て、俺はオオゲサに首を振って怯んだ。

「大丈夫よ。ちよとくらい大きくっ たって……」

言うなり恵理が俺の顔を無理矢理押さえ付ける。

「ナニがチョットだよ? デカ過ぎるってえあつづ!!! いただだ!!!」

「ガマン、ガマン」

「出来るかあああ!!! んぎゃあああ!!!」

大粒の涙を溢しながら、俺は必死に恵理の手を振り解いた。

恵理は俺の止まらなくなっていた鼻血を「止めてあげる」とか言っ

ておいて、ティッシュを何重にもマトメテでかいコヨリを作っていた。
それ、俺の鼻の穴よりもデカイ。

どー見たって鼻には入んねーだろが。

しかも花粉症のヤツ用に作られたデリケートタイプなんかじゃない。

フツのティッシュなんだぞ？

コイツをイキナリ擦じ込まれてミロ！ 鼻血が止まるドロコロかその
逆だっつーの。

「……っせえな。オトコだったら、多少のコトは我慢しろ」

恵理に手痛くフラレタ『みもりん』もとい『水守』が、不機嫌かつ
鬱陶しそうに俺を見た。

『こんなブサイクに俺は負けたのか？』 ってえ未だに不満タラタラ
の表情だ。

「アンタならこれがガマン出来るのかよ？」

「……」

俺のスルドイ突っ込みに水守はダンマリを決め付ける。

「……っつ！」

俺は眼の奥にスルドイ痛みがハシったのをカンジて、顔を顰めた。

アレ？ 虫？

痛みはホンの一瞬だったが、今度は目の前で、黒くて光っている虫みたいなのがイッパイ飛んでいた。

俺はソレを捕まえようとして、何度も手を振る。

「司？」

「はっ、はい？」

「ナニやってるの？」

恵理が不思議そうな……いや、心配そうな顔で俺を覗き込んだ。

その距離ワズ力数センチ。

だけど、その間にも虫は増え続けてイッパイ飛んでいる。

恵理の愛用している - 2 - アナスイの甘い香りが、俺のマヒした鼻をクスグツタ。

しかも俺の目線からは、恵理の寛げた黒いシャツから、柔らかそうな胸の谷間がマル見えだった。

ごく……

視線が離れない……思わずナマツバを飲み込んだ。

つか、このムシみたいなの、ジャマだ。

「いっつ、いやあ、べっつ、別に……」

チョット焦る俺。

俺の視線を覚った恵理から、今にも殴られそうな危険をカンジて、俺は退いた。

「うん？」

水守はイキナリ片手で俺の額をがしつと片手で驚掴みにする。

ひい？

コイツには俺の下心がバレちゃったのかああ？

じたばたする俺を無視して、素早く内ポケットからペンライトを取り出すと、俺の眼に片方ずつ当てている。

どうやら俺の取った奇妙な行動に心当たりがあったらしい。

「……早く病院に行った方がいい」

「え？」

「軽度の - 3 - 網膜剥離だ。連中、加減が無いからな」

それが、殴られたのが原因だったってのも、コイツはステに判っていたみたいだった。

水守は、かなり俺のコトを気遣っているみたいな言い方をしたが、その表情は相変わらずの無表情だった。

まあ、アンタからすれば他人事なのかもな……けどよ、俺がココまでボコられたのは、恵理のフィットを俺が盗んだってゆー、アンタのミヨーな勘繰りのオカゲじゃねーのかよ？

ナンか納得イカねーぞ？

第23話 救出？（後書き）

- 1 - 蒼月流^{そうげつりゅう}：抜刀重視の剣術。 コレは設定上のフィクションです。

- 2 - アナスイ：シークレットウィツシユマジックロマンス。
フローラル系の香水。

- 3 - 網膜剥離：眼球の奥にある薄い膜が網膜。 カメラで言えばフィルムの役割をしているこの膜が、剥離^{はくり}する。この症状には以下のようなものがある。虫が飛んで見えたり（飛蚊症^{ひぶんしょう}）、光がチカチカして見えたり（光視症^{こうししょう}）、その部分だけが見えなくなったり（視野欠損^{しやけつそん}）、視力低下^{しりょくていか}。適切な処置を怠ると失明する。司の場合、外部からの強い衝撃でこの膜が損傷してしまった状態です。

第24話 失明？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

成和会の連中にボコられて網膜剥離を起こしてしまった俺は、その足で明け方の救急病院へと運ばれていた。

網膜剥離の症状は、水守^{みかみ}が「軽い」と言ってたハズなのに……

俺を診るなり、医者は緊急手術を敢行しやがった。

……しかも両目。

俺の場合その方法でなかったら、間に合わなかったらしい。

もしかして、かなりヤバかった……？

術後の経過は順調……だったらしい。

って言うのも、実は極度の緊張と暴行された傷の痛みで、俺は術前麻酔を処置されるよりも先に寝てしまい、そのまま何日も意識不明の爆睡をカマシていたからだ。

術後の麻酔が切れて苦痛を訴えるでもなく、不安に駆られて騒ぎ出すようなコトも皆無の理想的な患者だったらしい。

爆睡して意識が無いんだから当たり前だが……

丁度病院内のベッド数が不足していたコトもあって、結局俺は元の鞘……恵理のマンションへと強制送還で連れ戻されていたんだ。

あんな酷いコト言つて、恵理を泣かせてしまった俺なのに。

恵理は俺のコト……嫌いにはならなかったのか？

恵理は目が覚めない俺の為に、ワザワザ担当医を自宅まで呼び出して往診させていたらしい。

俺としては、この包帯が取れるまで入院して、その後はどこかの仲介業者ネギって安い賃貸へ引っ越そうと思っていた。

そうすれば恵理と顔を合わせるのは、社内だけで済む。

しかも、恵理は管理職だから頻繁に会議に出席していて、部署内に居る時間の方が少ない。

それに周囲の目もあるから、お互いに手が出せない。

つか、俺からはもう手を出すツモリ……ないし。

なのに……

「はい、あゝんして？」

「……」

恵理のコトバに、俺は気恥ずかしくなって口を開けられなくなった。
頬から目尻の辺りが熱くなってジインと痺れてる。

自分の顔が真っ赤になっているコトを知って、更に羞恥心のボルテージが上がった。

「どーしたの？」

恵理が小首を傾げる気配がした。

俺、まだ包帯が取れてないから自分で『物を食う』コトが上手く出来ないでいる。

「……なんか、コドモ……つか、幼児になったみたいだ」

俺はベッドの上で、所在無く頭を掻いた。

「仕方ないでしょ？ ホラ」

恵理が何かをスプーンですくい、俺の口元に持って来る。

加熱処理されている『何か』の湯気とその熱^{ほて}りが、俺の肌を通して感じられた。

ひょっとして、コレって恵理の手作り？

立ち昇る湯気に混じるそのニオイは……

「う……げぼっ……」

俺は軽くムせてしまった。

……コレって、モロ醤油の二オイだ。

せっかく作ってくれた恵理にはホントーに悪いが……ぶっちゃけ……食いたくナイ。

つか、イヤな予感がするう……。

「課長？」

「うん？」

「俺にナニ食わせてくれんの？」

取り敢えず、冷静に聞いてみた。

「うん。先生がね『先^まずはお粥^{かゆ}からがいいですよ』って言うものだから……」

「え？」

……『お粥』？

そもそも、お粥ってこんなにキツイ醤油の匂いをするものなのか？

俺はその場で固まった。

「あ？ お粥は大丈夫よ。コンビニのレトルトだもの」

いちおう、恵理の言葉にホッとする。

けど、『レトルト』のコトバに安心するのって、ナンダかな……？
??

「でね、それをアレンジしてアタシが作ったの。サツマイモ入れて俺には、恵理が嬉しそうに『どうだあゝゝゝ、アタシだってやれば出来るのよッ』って、自慢したように聞えていた。

……アレンジ……しないで下さい。

そのまんまでいいです。

更にイヤな予感が……

……醤油に芋まで入れてるのか……幾ら何でも切らずに丸ごとってえーのはナシにしてくれよ？

俺は目の前にあるお粥に、芋が丸ごとゴロン と椀の中にある絵を想像してしまった。

幾らなんでもそりゃナイか？

「もうチヨット冷まそうか」

そう言っただけで恵理が器に盛ったお粥を二、三回掻き混ぜた時だった。

カチャ！

「あ！」

器の中で、硬そうなモノが跳ねた。

掻き混ぜていた恵理のスプーンが器に当たって、音を立てる。

「……………」

ひょっとして、今の硬そうなモノが芋……………なのかなあ？

……………つて、ナマの芋？

聞きたかったけど、今の俺の状況から判断してスルーした方が無難に思えた。

で、俺は気付かないフリをする。

お粥を掻き混ぜていた恵理の手が止まってしまっ。

「……………」

恵理はそのまま押し黙ってしまった。

目の前で起こった出来事が、信じられなかったのかも知れない。

自分独りの食事さえ『作らない』のだと、意地を張って豪語してい

た恵理。

仕事も趣味も……（テニスやゴルフ、スキーなら判るが、護身術や抜刀術が趣味だとは思えねー）免許皆伝。指導出来る立場にまで上り詰め、極めていながらも、家事一切が全くダメ……だなんて……

アリかよ？ そんなの。

『本当はそんなんじゃないダメなの、判ってるわよ！』

恵理が落ち込んでいるのが手に取るように判った。

俺の胸がチクリと痛む。

……ダメってのは……ナイと思うけど？

俺は恵理のそういったところ、まだ否定なんかしてませんが？

「…………課長？」

俺の利き手がスプーンを持っている恵理の右手を弄り、探し当てた。

俺に勘付かれたコトを覚ってか、恵理の掌はスコシ緊張して冷たく湿っている。

「う…………んあ？」

恵理が俺に『なに？』って問い掛けて来たのだと思った。

そして、俺は……

「はい、あーん」

俺は恵理に向かって口を開けた。

* *

俺は恵理の作った、醤油味の半煮え芋粥^{はんに}を残さずに食べた。

その後で俺が水分をイッパイ摂ったのは、言うまでもナイ。

「今、何時ですか？」

壁伝いにリビングへ移動し、ソファに寄り掛かった俺は、テーブルの上に置いてあるTVのリモコンを捜して手を這わせた。

寝過ぎのせいか、とにかく全身が^{だる}気怠かった。

でも、寝直す気にはなれないし。

「う……んと……夕方の六時過ぎ」

恵理が先にリモコンを取って、俺に手渡してくれる。

「六時？ ……夕方の部会（部内会議）はどーしたんですか？ 確か、来月アタマに新製品の各社合同展示発表会があるって言ってま

したよね？」

俺は、来月に東京で開催される合同展示会のコトに触れた。

先週末もその準備とかの大まかな打ち合わせで、恵理は午後から会議召集ばかりを受けていたのを思い出した。

「……サボった」

はいい？

俺の咎めるコトバに、消え入りそうな声で恵理が答えた。

「って……どーしちゃったんスか？ 課長がそんなでどーすんです？」

どうしたんだよ？

仕事一筋……だったんじゃないのか？

「……」

恵理は答えに迷っているみたいだった。

何かを俺に、言おうか、言っまいかと悩んでいるような気配を感じる。

俺は息詰まりそうになった。

大体の察しは付いている。

「サボった理由は俺ですか？　今は見えなくて不便だケド、俺ならもうダイジョウブだって……」

「う……」

「ねえ、課長？　課長は俺みたいな平（社員）とは違うんです。今更そのことを云々（うんぬん）言うツモリはありませんし、そのコトは課長が十分過ぎるホド判っていますよね？　課長独りの業務じゃないでしょう？　第三設計課の代表がそんなのでーすんです？」

あゝあ、どうこう言うツモリ無かったのに……ヤッパリお説教しまったし……

「でもアタシは……」

「『でも』じゃないでしょ？　……うあ？」

不意に恵理が、俺の首に腕を絡めて縋り付いて来た。

恵理の豊かなバストが、俺のパジャマと恵理の服越しから、ふにゅと押し付けられて来て、ダラシナク俺の顔が緩んだ。

「……馬鹿！」

「……か、課長？」

え？　今『馬鹿』って言った？？？

「司……失明していたかも知れなかったのに……」

「え？」

俺が？

確かにあの時、病院へ向かっている途中の車内で、どんどん視界が絞られて、真っ暗になって行ったけど……

ホントーにマジでヤバかったのか？

「手遅れかも知れないって先生から……司は意識無かったから知らないでしょうけど、あの後、司のご両親やお兄さん、お姉さん呼んで……タイヘンだった……だからぁ……うつつ……」

恵理はそこまで言って泣き出した。

「……」

「失明って……判る？ 今まで見えていた物が見えなくなるのよ？ 仕事どころか車の運転や……モノのカタチとか、色とか……みんな判らなくなっちゃう。普段の生活だって……アタシ、司がそんなのに……仕事なんて……出来ると思う？ 思ってるの？」

「課長……」

「水守^{みもり}さんは、司を捕まえろって言ったただけだって……まさか司がこんな眼に遭わせられていたなんて知らなかったって……」

「……」

いや、水守は暗黙の了解で、俺が連中にボコられていたのを黙って見ていたぞ？

ってコトは、やっぱり身内とG・T・Rの『お礼』も兼ねて……ってか？

まあ……恵理の幼馴染だと言ったって、シヨセンは成和会の幹部だろ？

俺は水守の強^{したた}かさを覚^しって、ソレナリに喰^くえねーヤツなんだと思^{おも}った。

でも、アイツが『病院に行け』と言わなかったら……俺、失明確定だったよな？

水守 ナニ考えてンだか読めねーし。

「ぐすつ、ホント……ホントに……心配……したんだからあつっ！
！！」

「課長……」

元々がスリムなのに、心労(?)のせいかまた少し細くなった恵理の身体を、俺はそっと抱き締めていた。

恵理のふんわりとした柔らかな髪が俺の頬をクスグス。

今回ほどのスゲー修羅場を踏んだコトは無かったが、走り屋同士で

の喧嘩やモメゴトはそんなに珍しいコトじゃなかった。

バトルする相手の車の趣味から始まって、そんなのアリかよ？　つてな改造。

ひいては連れているギャラリーやオンナまでもが、インネンや厭味の対象になった。

そう言やあ、今まで付き合っていた何人かのオンナで、恵理みたいにこうしてずっと俺の傍に居てくれたオンナは居なかったよなあ……

俺はシミジミと過去を振り返っていた。

自分の都合が悪ければ、喻え自分が原因であっても、いつの間にかトンスラコイて後始末は俺達ヤロー共にお任せえ……ってゆー、計算高い超軽オンナとしか付き合ったコト無かったし。

『車の運転が上手いから』とか、『見た目自分とつりあうから？（ホントーにそう思っているツラかよ？）　ナントナク……』つてえ、ソモソモ動機が不純なんだよ。

まあ、それにホイホイ乗ってた俺にもモンダイ……ありだけだよ。

……あれ？

俺、ナンか大事なコトを忘れてるヨウナ……？

「課長？」

「ナニ？」

恵理が俺の胸から顔を上げた。

「俺の家族呼んだんですか？」

いや、確かに『呼んだ』って言うてたよな？

「当たり前でしょう？ お家の方に来て貰わないと……先生からも身内の方を呼んでくれって言われてたし……」

「なら俺の両親に会ったんッスよね？」

「ええ」

恵理は『それがどうかしたの？』ってえ雰囲気。

つか、俺が恵理と同棲してんのバレバレじゃん……！

「もの凄く恐縮されちゃった」

へ？

俺は意表を突かれた。

「……って言いますと？」

「え？ ちゃあんと『日高君の上司です』って挨拶したわよ？」

「……会社の……上……司」

はあ……

『上司』……ね？

一気に気が抜けた。

「でもね？　すぐその後で刑事さん達が遣って来て……ご両親、その刑事さん達と知り合いだったのね？　すごい」

恵理は感心していたみたいだった。

いや、『知り合い』つつつても、何度も俺が遣らかした^{モンダイ}事故の^{かた}後始末とかで、仕方なく知り合いになっちゃってただけなんですが……？

恵理のピント、ボケてるぞ。

コレのドコが凄いんだ？

褒められたコトじゃねーだろよ？

「あの刑事さん……長谷部さんって言ったかしら？　司のコトをよ……っくご存知なのね？」

恵理はそう言っふふつと笑った。

アイツかよ……

久し振りにその名を聞いてウンザリする。

融通の利かねー性格と同じく、四角顔にフトイ眉。

いつも『情熱』の言葉を背負っているような熱いヤツ……長谷部の下駄ヅラが脳裏に浮かんだ。

峠を卒業するまで引つ切り無しに問題を起こしていた俺の、殆んど専属指導員になっていた刑事だ。オヤジ

「で、ナンで笑うんスカ？」

俺はムツとなる。

恵理に俺の過去を知られてしまったか???

俺にとっては不本意以外のナニモノでもないぞ？

「ん〜？ ナンでもないよ？」

恵理はまた思わせ振りにくすすと笑った。

「気味悪いっす」

俺は機嫌を損ねて仏頂面になる。

コレのドコが笑えるトコロなんだか。

「ああ、ゴメン。でね、実は司のご両親から、『司を宜しく願います』って、頼まれちゃったの」

「それ、社交辞令のお約束っしょ？」

よく言われる決まり文句じゃねーか。

「違うわよ?」

恵理は俺の否定を、自信を持って打ち消した。

はいい?

俺は才オゲサに首を傾げる。

「だって、病院で入院出来ないってコト、ご両親、説明聞いて知っているもの」

ソレを承知しての『お願い』なのかよ。

つてえ、ナンでだ????

俺はお願いされたくはねーぞっつ!!!

だけど……

俺は大きく溜め息を吐いた。

入院すれば、両目が不自由になっている俺には介護者が必要だ。

そのための看護師だけど、個人的なコトとなるとどうしても看護師では限界がある。

「詰まりは、俺の介護放棄をしたってコトですか?」

社会人になっても問題児の俺は、シヨセン要らない息子かよ。

「……そんなコト無いわよ？　だって、お二人共口では一杯司の事悪く言ってたけど……凄く辛そうな顔していたもの」

「『イツパイ』の『悪口』……ですか」

「ご両親が司のお世話をする事になっても……その……司はスナオに喜んでいた？」

「……」

はい。仰る通りおっしゃる通りです。

俺と家族との不仲を知って、恵理は言い難にくそうだった。

「課長？」

暫しの沈黙の後、俺は徐おもむろに切り出した。

「まだナニも食っていませんよね？」

「……」

恵理が頷いた気配がする。

いや、喋しゃべってくれないと、俺見えねーから判わかねーんですが……？

「手伝つてくれますか？」

「…………え？」

「俺、まだ見えませんから。課長、エプロン着けて下さい。俺が汚すといけないから」

「ナニ？」

「俺の……眼になつて貰えますか？」

「…………」

もう一度、恵理が頷いた気配がした。

だから、判んねーから返事しろよ？

「晩飯、リクエストありますか？ 俺、こんなだから簡単なモノしか出来ませんが」

俺はそう言つてカルク笑つた。

「チョイ右、ここだつて…………」

恵理は俺の傍に立つて、食材の位置を言葉と手で俺に伝えてくれる。恵理があんまり食欲ナイって言ったから、冷たいソーメンでも作ろうと思つた。

つつても、ソーメン「だけ」じゃねーからな。

カット野菜と金系タマゴ付。

野菜を洗って切るのは恵理に任せて、俺は削り節でダシを取る。

見えない分、聴覚に集中出来るけど、やっぱ見えないのは不便だ。

ダシの沸騰する寸前の微妙な音を聞き分けて弱火に切り替え、俺は醤油や調味料を加えた。

サジ加減が難しい……

タン！

「ったつっ！！！」

開始早々、恵理が小さく悲鳴を上げた。

俺に勘付かれないように声を押し殺して、その場に座り込む気配がする。

さては切ったな？

俺は包丁を使った後は必ずトイデいる。

軽く触れただけで簡単にスッパリと切れるホド、その切れ味はバツグンだ。

切れ味の悪い包丁より、切れる包丁の方が傷口も浅くて早く治るハズだが……？

「課長？」

「……っ、ん、んっ？ な、ナニ？」

必死になって平静を保とうとしている。

たぶん恵理にとっては冷や汗モノだろう。

「左手」

「えあ？」

「左手、出して」

ヘンな声出すなよ。

「え？ あ、ああ、あのね、その……」

俺に気付かれたのを覚って、恵理はシドロモドロになった。

「課長、『お手』」

フザケテル場合じゃねーケド。

「……」

恵理は気まずそうに、俺の出した左手に（俺の利き手だからしょーがねーだろ？）切った痛みで震える左手を乗つけた。

俺は、恵理が逃げ出せないようにその手首をそつと握ると、血の匂いがしている指先に顔を近づける。

切ったとすれば人差し指か。

俺は舌先でちろりと舐めた。

「……」

ぬるりとした濡れた感覚に、恵理が深めに切ってしまったんだと判る。

ぴちゃ……

血液独特の味と匂いがした。

「あう……痛……」

痛みに恵理が呻く。

身体を擦らせて手を引こうとするが、俺はそれを許さなかった。

俺は舌先の感覚を頼りに、恵理の流した血のアトをそつと辿った。

掴んだ手首を緩め、そのまま血痕をなぞるようにして舐め取っていき、ソレは肘の内側近くにまで及んでいた。

「あん……」

恵理の身体が退けている。

痛さを堪えて出たのとは違う声に、俺は軽く興奮してソソラレタ。

第25話 嫉妬？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「あんっ……っ……かさ、手……放して……」

恵理が軽く喘ぎ、俺の舌先をカンジながら身体をくねらせた。

俺は恵理の切った指先を、左手で包み込むように圧迫止血をしたまま、無理な体勢で恵理の左腕に舌を這わせていた。

モチロン、恵理の血は全部キレイに舐め取った後……だ。

柔らかな二の腕の内側を、肩に向かって唇と舌先がじれじれと這い上がって行く。

脇の辺りまで顔を近づけてるのに、恵理からは微かな汗のニオイと（アナスイの）香水の甘い香りしかなかった。

強烈なニオイは勘弁だが、恵理の身体からオナナのニオイを期待していただけに、チョット残念。

「ふえ、や……いやだあ、くっ、くすぐりたい……んあつつ？」

腕から唇を離すと、今度は恵理を後ろ向きにさせ、俺はウシロから右手でそっと抱き締めた。そして肩越しに鎖骨へとキスを落とす。

滑らかな恵理の肌の感触を唇と舌先にカンジ取りながら、その首筋を甘噛みした。

「んっ、ん……」

恵理は更に身体を擦じらせながら、俺のキスを受け容れてカンジてる？

声を出さないようにしているのか、右手の甲で軽く口元で押さえているみたいだった。

何度もクグモツタ声が、切ない溜め息みたいに漏れ聞こえる。

「んんんんん 課長んんんんん」

ちゅ、ちゅ……

ハナシ掛けながら、俺はそれでもキスの愛撫を止めない。

「あん……なに？」

「課長の肌、オィシィィィィ」

「馬鹿ぁ……」

フザケていた俺に、恵理が恥ずかしそうに応えた。

俺の吐息がクスグツタイのか、恵理はくすくすと肩を揺らして笑う。恵理のウエストに廻っていた右腕を解くと、その手で軽く顎を掴んだ。

俺の唇が恵理の顎を伝い、果実みたいに美味そうな唇へ……

「う……ん……」

恵理が堪えられずに切ない溜め息を漏らす。

視界が閉ざされたせいか、恵理とこうしている間、俺は俺でなくなっていた。

今の俺は、望めば何でも願い事が叶えられる……恵理が望むなら、俺はナイトでも何にでもなれる気がしていた。

分の悪い貧乏なんてクソ喰らえだ。

俺は俺のなりたい自分に、恵理が望みさえすれば……

「あ……ん」

俺は恵理を振り向かせ、軽く開いて声が漏れている恵理の柔らかい唇を奪おうとしていた……

その時だった。

恵理の部屋から携帯が鳴った。

恵理の身体がびくりと大きく跳ねて、次の瞬間フリーズする。

以前、恵理が嫌がっていた、聴き覚えのある呼び出し音。

恵理には当然、ソレが誰からなのか判っている。

俺の知らない誰かさん……だ。

視覚を奪われている今の俺は、恵理の心の中をワケナク覗ける気がしていた。

携帯の呼び出し音は、恵理を無性に不安がらせていた。

まるで心の中へ投石したみたいに、その不安が波紋となってたちまち幾重にも大きく拡がっていくように感じられる……

忘れていたケド、俺は意識不明で爆睡をカマシていたにも関わらず、何度もその呼び出し音を聴いたような気がしていた。

それは夢の中だけでのハナシだったのかも知れない。

だけど、なぜだか妙にリアルに聴こえていたのを、俺は不思議に思っていたんだ。

「課長？」

「あ？ ああ……アリガト。も、もう傷口、塞がったみたい……」

緊張のせいかな、事務的に喋り出した抑揚のナイ恵理の声が、俺にはなぜだか硬くとげとげしく聞えた。

ソワソワと落着かなくなった恵理は、手を振り払うようにして手首

を引いて、俺から逃れた。

「どうし……？」

恵理の反応に驚いた俺は、掛けるべき言葉を失くしていた。

「ご……ゴメン……携帯……出なくちゃ……」

恵理はそう言って、するりと俺をかわして行った。

ぱたぱた……

スリッパの音が遠去る。

携帯に出ようとする恵理の逸る気持ちが、足早に俺から離れて行くみたいだった。

「……？」

一体、どうしちゃったんだよ？

俺は恵理をもう一度抱き締めようと、腕を伸ばし掛けていたままの状態で固まっていた。

余所々しくなった恵理に、俺は恵理の中にもう一人のオトコが存在があるのだと確信してしまったんだ。

……恵……理？

「……痛つつ！」

包帯をしている眼の奥がズキリと疼き、俺は顔を顰めた。

俺が眠っている間に、ソイツと急接近したって言うのかよ？

頭の中で、恵理の身体に刻み付けられていた痣が、何度もフラッシュバックする。

恐らく、それは携帯のヤツが遣ったんだと俺は睨んでいる。

痣が残るホド強引に……恵理を……

でも、あの時俺はソイツに『遣ってしまえばいい』と思っていた。

恵理が処女を棄てたいと思って焦っているのなら、望み通りにヤツテ遣ればいいじゃないか。

ナニを躊躇ってるんだよ？ ……って。

俺だって、あの時点で恵理がそうになっていたのなら……俺だって諦めも付くし、傷は浅かったハズだったんだ。

確かに俺は恵理を拒否したさ。

ワザと酷いコト言って、憎まれ口叩いて、恵理を……

だけど……だけど心底からの俺の意思じゃなかったよ。

……今更な言い訳だけど。

結局、恵理は携帯のヤツと俺とを、フタマタ掛けてたってコトじゃねーのか？

……汚ねーよ……！

「……」

俺はこの瞬間に、恵理に出会う以前のダラシナイオンナ関係や、過去の自分の遣った『汚い部分』握り潰そうと思えば出来る、警察沙汰にならない程度のチョットした恐喝や暴行さえもタナに上げてしまっていた。

無意識に両手を握り締めていた。

堪らない不快感が後から後からこみ上げて来て、俺をガンジガラメに捉えていた。

ダシ汁が沸騰し過ぎて蒸発してしまい、なべ底ヒタヒタになった。

煮えタギツテいる鍋に、IH（電磁調理器）ヒータが危険を察知して自動的にスイッチを消した。

「……」

俺は立ち尽くしたまま、まだその場から動く事が出来なかった。

恵理の部屋から、バタバタと慌しくクローゼットの扉を開閉する音が聞える。

今からドコカに出掛けて行くのか？

携帯の相手に……呼び出されて？

一緒に恵理の夕飯^{メシ}作るんじゃないのかよ？

……俺は留守番で置いてきぼり……か？

恵理が息を切らせて足早に部屋から出て来た。

「ゴメン、司」

それだけ言つて、俺の目の前を素通りしようとする。

「いつ、今から外出？ ……ドコに行くんです？」

俺は頬がチリチリと熱くなつて来ているのを感じていた。

……こんなの、お預け喰らつたワンコロ……みたいだ。

俺の掛けた言葉に、恵理の足音がピタリと停まった。

そして、二、三步バックで戻つて来る足音と気配がした。

「……あれえ？」

赤面して不満そうな俺の顔を見たのか、恵理はふふつとカルク笑った。

むかつつ

まるで、困ったコドモをこれから宥めようかといった恵理の雰囲気
が窺えて、俺は更に頭に血が昇る。

まあ、その通りなんだけど。

「司あ、ひよつとして、ヤ・キ・モ・チ？」

俺には、恵理の声がチョット意地悪く聞えた。

ナニ能く天気なコト言ってるんだよ？

「おつつ？　俺が？」

ヤキモチだつてえ~~~~？？？

「うん」

恵理はコトも無げに言い放った。

その言い方にカチンと来る。

「んなつ、ナニ言ってるんスかあ！　ちつつ、ちがつつ……」

がああ~~~~っつ！！！

口がマトモに動かねえ~~~~。

この俺がナンでヤキモチなんか妬くんだよっつ！！！！

「いいの、いいの、ムリしなくっても」

恵理は思わせ振りの含み笑いをしてそう言った。

俺の反応を面白がっているのか？

けどその恵理の一言が、俺のオトコとしてのプライドみたいなものを奮い立たせるキツカケを作ってしまったんだ。

そもそも意地っ張りのこの俺が、スナオになれるワキャねーっての。

俺は一呼吸、息を大きく吸い込むと……ニヤツと口角を歪めてフテキに笑った。

そして、カワイゲのナイ俺が現れる

俺は包帯で目隠しされている状態のまま、睨み付けるように顎をシヤクツた。

「はああ？ ナンで俺が課長のカレシに嫉妬しなくちゃならないンっすか？」

自分でもハツとするくらい、俺のコトバは冷やかだった。

恵理から好いようにアシラワレている今の状況から、逃げ出そうと反発する思い……いや、この場合、本能って言ってイイのかも知れない……『尻に敷かれたくない』ってゆー本能が、強がるうとする勇気呼び覚まして俺を口達者にさせていた。

「……」

恵理は何も喋らない。

俺の変わりように息を呑み、怯んでいるみたいだった。

更に俺は調子をコイテ言い放つ。
さら

「ドコに行くのかって聞いたダケっしょ？ デートならハッキリそう言えばいいじゃないツスカ。課長がドコの誰とエッチしようとして、イチイチ俺に断りなんか要らないっしょ？ つか、俺だってそんなコトしませんよ？」

「……」

恵理の方から、軽く空気が震えた感じがした。

俺、また『あの時』と同じコト言ってる。

つい軽口叩いて恵理をタキツケようとしてる……

ナニ遣ってんだよ……俺……

黙っていた恵理はカルク溜め息を漏らした。

気を取り直すように、自分の頬に掛かった髪をウシロへ流す仕草をする気配。

また殴られるか？

身構えた俺の様子に、恵理がプツと吹き出した。

「全く……司つてば……いいわ、ご忠告アリガト。アタシも冗談が過ぎたようね？」

はいいい？ ジョウダン？？？

おっ、怒ってナイのかよ？ ば、暴力じゃなくて、マトモに返事で返せてるじゃん？

いつ、いや待てよ？ 安心するのはまだ早い。

今のは、俺が怪我人だからなのかも知れねーよなっ？？？

「今のは、会社からの召集よ？」

「え？」

会……社……？

「だ、だって、今からって……もう就業時間トックでしょ？」

「監査役から召集が掛かったの。で、これから会社」

恵理は半ば面倒くさそうにボヤイタ。

空気が動いて、軽い衣擦きぬすれの音が聞えた。

恵理が付けている甘いアサスイの香りがワンテンポ遅れて俺の鼻に届く。手にしていただろうジャケットを羽織ったんだ。

「監査役？」

「ええ。司が眠っている間にね、社員の個人情報が流出したの」

「個人……情報？」

「そ。全社で約二千三百件。ネット上で公開直前にシステム部が気付いて抑えたのだけど、数百人の情報が手遅れだったわ。その情報を最高値でウチが買戻したの。で、これからその後始末」

「会社……って……」

「じゃあナニか？ 恵理は今まで会社からの連絡に不機嫌になっていたってゆーのかよ……??？」

俺は、携帯のその呼び出し音にビクついていた今までの恵理の表情を思い出していた。

相手が会社なら、そこまでオオゲサに反応していた恵理の態度は不自然だ……

……違うな。

勘だが、そう思った。

恵理は今、俺にウソを吐いてる。

第26話 訪問者

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

考え込んでいた俺は、視線を肌で感じて我に返った。

俺は恵理から黙って見詰められている？

ってゆうより、今、俺は恵理から勘繰られて……いる？

「たぶん、召集されたメンバー全員がガツチリ叱られるのよね」
「あゝあ、行きたくないなあ」。残念だけど、デートじゃないわ」

俺には、明るく喋っている声とは裏腹に、恵理の表情が暗く翳っているように思えてならなかった。

見えるハズナイのに、どうしてもそう思ったのだが、自分でもよく判らない。

『婚約者殿』が居るのに恵理は俺に『会社』だとウソを吐いた。

タブン、恵理には『居る』ハズなんだ。

ほら、ゲームでもあるだろ？

『お嬢様』には必需品……つか、必須アイテムみたいな『王子様の婚約者殿』が……

で、それが『会社絡みの婚約者殿』若しくは、『社内に居る婚約者

殿』じゃないのかって、俺はそう睨んでいる……

「どーお？ アタシがデートじゃなくって安心した？」

「その言い方、俺キライ」

俺はぷいとソップを向いた。

つか、余りにも恵理が意地悪そうに言うから。

「タご飯、ホンツとにゴメン。今度、埋め合わせ……ネツ？ 終わるか判らないから、先に休んでて」

恵理はそう言つて爪先立つて背伸びをすると、素早く俺の顎に唇を軽く押し当てた。

「おあ？」

な、な、な……ナニ???

俺は驚いて、殆んど反射的に上体を退いた。

シットリとして柔らかい恵理の唇が、無精髭ヅラの俺の顎にフニユツと当たる。

恵理との身長差ではそれが精一杯だったらしい。

「じゃ」

スリッパがパタパタと軽い音を立てて走り去って行った。

がちや……

重々しく玄関のドアが閉まり、俺の居る室内から恵理の気配が消える。

「……………」

無言で立ち尽くしたまま、独り取り残された俺は、恵理にキスされた余韻の残っている顎へと片手をそつと伸ばした。

コレって……

別れ間際のキス？

こっつ、このシチュエーションって……

自分の顔が異様に熱くなって来るのを感じてドン退きする。

つか、ドラマとか漫画で見る男女の別れのシチュエーションが、俺達逆じゃね？

出て行かなきゃなんねーのは、恵理だし、俺は眼が見えないから仕方ねーんだけど。

「恥ずイ……………」

俺は自分の状況に照れて、思わずボソリと呟いた。

そして、益々頬が熱くなって来るのを感じていた。

パリッ……

恵理が出て行った後、俺はリビングのソファに立て膝をして行儀悪くもたれ掛かり、手探りで探し出して来た缶ビールとツマミのポテチに手を伸ばしながらテレビを見ていた。

ああ、見えてねーからこの場合『聴いていた』……なんだよな？

恵理の言った通り、木村工業は個人情報漏洩事件として、ニュースで大きく取沙汰されていた。

リモコンのスイッチを切り替えても、どの局のニュースでも恵理の父親である木村社長が、出演しているコトから、ソレがライブ（生の実況放送）だと判る。

残念ながら、包帯の取れていない俺には、何台ものカメラのフラッシュの音と、社長の謝罪する声しか聞こえなかったが、声を聴いただけでも、社長がかなり憔悴^{しやうすい}し切っている様子が窺えた。

スゲーや……

恵理の父親が、何千人もの社員を抱えている大企業のトップなんだな〜と、今更ながら改めて思う。

この人（社長）が、俺の入社式に起こした事故の見舞いに来てくれた人と同一人物なんだと思うと、正直、嬉しくなってしまった。

つか、俺からすれば、社長は文字通り『有名人』なんだよね。

暢気に社長の謝罪の言葉を聴いていた時だった

「社長、流出の媒体はネット上でのスキミングでしょうか？ それとも、内部か外部からの人為的な、SD等データ持ち出しに因るものでしょうか？」

何人もの記者が詰め寄っているのか、それとも本人が単独で興奮しているのか判らなかったが、一人の記者が声を張り上げて質問した。

「その件につきましても、未だ真相を調査中ですので、この席での即答は……」

フラッシュの音が一層激しくなった。

恐らく社長自らが取材陣に向って深々と頭を下げているんだろう。

記者の質問に、社長は苦々しく言葉を濁した。

どの道、木村工業に於ける情報セキュリティの甘さが、盲点として全国放送で真っ裸にされちゃった。

今後の会社経営上、少なからず何らかの影響が出るだろうと予測されるが、一平社員のこの俺がどうこう出来る次元の話じゃない。

SD？ 外部媒体……？

記者の言葉に引つ掛った俺は、妙な焦燥感を覚えて首を傾げた。

何かを思い出せそうな……いや、思い出さなくっちゃイケないよう
な……

SD……データ持ち出し……SD……???

俺の頭の中で、バラバラになったジグソーパズルが散乱している。
で、それぞれのピースには『SD』だの、『USB』だのの記憶媒
体の文字が写されていた。

「……」

う~~~~ん、ダメだ。

ハッキリ思い出せね~~~~!!!

もうチョットで思い出せそうなのに~~~~!

俺はリビングのソファから身を乗り出し、目の前にあるガラステー
ブルへ覆い被さるようにして、ぐて~~~~と伸びをした。

コッソ

「イテ！」

丁度、頭のテッペン辺りで、何かが当たった。

いつものテーブルの上には、リモコンくらいしか置いてないんだけどな？

不審に思いながら手探りすると、そこには俺の携帯が……

なんだよ。こんな所にホッポツちゃってたのか？

あ、でも見付かってヨカッタア……。

ピッ

「あ、やべ……」

俺は無意識に短縮を押していた。

このボタンの指位置からして、相手先は多分有紀。

三浦有紀
さいみ ゆき

見掛け恵理をダサくしたカンジの、同じ会社の広報部社員兼、俺のセフレちゃん……

あ、俺だけのセフレちゃんじゃないのかも。

有紀はいつも他のオトコのニオイをさせていた。

つつても、実際に匂っていたワケじゃない。

有紀には不特定多数のオトコの影が付き纏まとっている……そんな雰囲気

気のするオンナだった。

恵理よりも若いのに、オトコと遊び慣れしてるせいか、俺の『そんな所』を微妙に感じ取って、やりたくなったらいつでもヤラセてくれていた。

ココ最近、連絡しても捕まらなかったんだよね？

つか、もう番号変えちまったのかも知れない。

自宅に行っても居ないし……俺、振られちゃったのかなあ？

つか、振られた原因なんか思いつかねーぞ？

ナニかシャクに触るコト、知らないうちに言っちゃったのかなあ……？？？

……今更掛けたってムダか。

はあぁ……あ……セツカクのセフレちゃんだったのに……モッタイね……。

俺は未練タラタラ。

溜め息を一つ吐いた。

いつまでも女々しーぞ、俺。

もうこの辺がシオドキだったんだよ。

諦めて携帯を切ろうと握っていた俺の左手親指に力を込めた時だった

「……………はい？」

「うわ、出た！」

俺は自分で掛けておきながら、出て来た有紀にビビってしまった。拍子に携帯を落っこしそうになる。

「ゆ、有紀？」

「うん？」

「……………居たんだ」

有紀が『はあ????』って案の定、突っ込んで来た。

「ちょうど良かった。司、今から……………その……………会えない？」

「え？」

妙に媚びる言い回し。

珍しいな？ 有紀の方から『会いたい』だなんて。

いつもは俺から会いたがっていたのを、有紀が自分の都合の折り合

いをつけてくれていたってゆーパターンだったのに。

よっしゃあああー!!!

……ヤレル。

俺は手を握って、ガッツポーズを取った。

ツイデに俺の相棒もヤル気満々に、パンツの下でガッツポーズ。

けど、何にも見えないこの状態じゃあなあ……車の運転ドロコ外
出だって出来ねーぞ？

しまったあああゝザンネン。

「どしたの？」

俺が気落ちして失速してしまったコトを、有紀は素早く察知した。

「やっぱダメだ……俺、動けねーもん」

自分の置かれた状況に、俺は泣く々有紀とのえっちを断念する。

「出かけられないの？　なら、コッチから行こうか？」

恵理とは違う、吐息のような甘い天使の囁きが耳の奥に残った。

「今ね？　司のマンションの下に来て居るの」

「あ、そう？」

明るくハシヤグ有紀に、釣られて俺までノーテンキに返事をした。

……？

いや、チョット……待て。

有紀がナンでココを知ってんだ？

セフレちゃんの有紀には、俺が住んでいるマンション名とか場所とかを教えてなかったハズなのに、ナンでココが判ったんだ？？？

「ねえ、何号室のボタン押せばいいの？」

携帯からの有紀は、えっちの時みたいな鼻に掛かった甘い声でオネダリしてくる。

サスガに番号までは知らなかったらしい。

教えてナイんだから、コレが当たり前だ。

訪問者は、下のエントランスで訪問する部屋の番号を押さないといけないし、更にコッチからも玄関の入り口にセットしているセキュリティ確認の承認ボタンを押さなければ、もう一つの自動ドアは開かない仕組みだ。

ドウスルか……？

偶然かも知れないが、有紀とのお膳立てされたような出逢いに、俺は退いた。

「ちよつとおゝ、聴いてンのおゝゝゝ？」

焦らされたとも思っているのか、有紀の声が少しスネている。

怒らせるってーのも、アトで機嫌取ったりするのが面倒だし……

「あ？ ああ悪い。1201」

俺は馬鹿正直にココの番号を伝えた。

「1201？ チョットお、司って最上階に住んでるのお？ ア
ンタって、ココの大家？ そんな風には見えないわよ？」

「……放つとけ」

有紀のズバリな言い様に、ムツとする俺。

つか、やっぱし会って直接有紀に訊きたい……

誰から訊いたんだろう？

けど、『訊く』つつたって……誰に訊くんだ？

俺がココで恵理と一緒に生活してんの、知ってるのは当の本人である恵理と俺。

で、俺の本当の素性を知らないココのマンションの、極僅かな住人だけだ。

どうやって知ったんだ？

この素朴な疑問が俺の好奇心を掻き立てて、タダでさえ薄い警戒心を解きほぐしていた。

「ま、いつか。サンキュー、今ソツチに行くからねえ」

有紀の声はいつも以上に弾んでいる。

ナニかイイコトがあつたのか???

だけど、ナンかヘンだ……

俺は納得出来ないまま、有紀を玄関先で出迎えるハメになった。

* *

「ちょ、おっ？ おいつつ！ 誰が入れって言っ……もがつつ？」

玄関で有紀を出迎えた俺は、野郎のデカイ手で突然口を塞がれて、室内へと強引に押し戻されていた。

有紀一人を出迎えたツモリだったのに、有紀は一緒に誰かを連れて来ていたんだ。

しかも俺の横幅の倍以上もある、加齢臭のするゴツイおっさん……！

「ごめんね、司あ、『アトもう少し』の辛抱だからあ……」

有紀は意味深にそう言ってフツツと笑った。

「んんん……！！！」

有紀の連れて来たオトコに、俺は乱暴に羽交い絞めにされ、口にサ
ルグツワを噛まされた。

俺は驚いて暴れ出すが、眼が見えない俺がどーやって抵抗出来んだ
よ？

「静かにしやがれ！」

羽交い絞めにされた俺の腕が、ウシロから内側に絞り込むようにし
て締め上げられる。

「ぐっつ……」

ヤット成和会の連中にボコられた怪我が癒え掛けてるってえところ
だったのに…… 果たしてもピンチかよ？

……にしても、コイツ等いきなりナンナンドよっつ……！

このオンナ……いつもの『有紀』じゃナイ！

出逢った時の有紀のアカヌケナイ素朴な印象が、カケラも無かった。
自信に満ちた上から目線の言い様に、ドン退きする俺。

それに『あともう少し』って、どう言う意味っつ???

つか、これが本当の有紀なのか？

出逢った……時……???

俺は有紀と初めて会った時のコトを思い出していた……

そうだ、あの時……恵理に無慈悲にもフィットから放り出されて
遅刻させられたあの時だ！

俺は出社を焦って狭い路地を爆走していた。

会社から急いで出て来た有紀と出会い頭にぶつかって、そして……

『ごめんなさい。急いでいたものだから……』

『ああ、コツチこそゴメン』

そう言っただけ俺が手にしていたのは、有紀が落とした数枚のSDやCD！

他にも片手では持ち切れないホドの電子データ。

有紀と出逢ってから数日後に、俺は情報セキュリティの社員教育プログラムを受講していた。

原則として、提示された保管場所でのみ使用・管理をし、情報レベルに応じた情報管理責任者の承認を取得すれば、持ち出しも可能である。

システム部の記憶媒体は、社内指定のSDやUSBメモリにて保存する。

個人の席であっても、なりすましに因る不正のリスクを回避するために、入力したIDを次回から入力しなくてもいいオートコンプリート設定の禁止や、ウィルス感染した時の非常事態マニュアル云々（うんぬん）……といった項目内容だった。

もしかして、有紀とぶつかったあの時のCDやSDに、会社の個人情報……？

時間的に考えてもおかしくは無いんだ。

しかも、アレだけの枚数量だったんだ。とても個人情報だけで済まされているとは考え難い。

それが本当だったとして……だけど。

俺の身体にザワザワとトリハダが立った。

ナンデ講習を受けた時、もっと早くに有紀のコトを思い出さなかったんだよ……」

コレが本当なら、俺……ヤバイ？

俺は背筋に冷たいモノを感じていた。

「事情があつて、ココに来ただけ……眼を怪我しているだなんて、助かったわあ……。なんてタイミングイのかしら？」

有紀は今にも鼻歌が出そうなくらいに上機嫌だ。

「んんん……??？」

ど……ゆ……イミだよ？

身の危険をカンジて、俺は激しく首を横に振った。

ワケの判らない有紀の事情とやらに付き合わされて、コンナ眼に遭っているって言うのかよ？

チャツツ！

「んん……」

チクシヨウ！ ナニすんだ！

俺はオトコから、後ろ手にした手首に手錠みたいなのをハメられ、拘束されてしまった。

「司あ？ セツカクアンタと仲良くなれたのに、もうお別れだなんて、残念だわ？」

有紀が俺の顎をカルク片手で持ち上げると、その指先をコチヨコチヨと動かしてクスグツた。

ネコじゃねーんだけど？

俺の前に居る有紀が、SMの女王様みたいに思えて来たぞ？

つつても、ハードなのは勘弁。

ウシロに立っていたオトコの大きな両手が、俺の首を無造作にガシツと掴んだ。

「うぐ……が……」

サルグツワをされたまま、俺は大きく口を開けた。

自分の首の骨（頸椎^{けいつい}）がメキメキと音を立てているのが不気味に聞える。

首の頸動脈^{けい}はモチロン、強く気道を塞がれて俺の呼吸が出来なくなつた。

たちまち耳鳴りがして来て、頭に血が昇った状態になる。

「うぐう……」

目の前で俺がこのオトコにナニされていても、有紀は平気なのか？

殺される……

カンネンした時だった。

「待ちな！」

有紀がハスッパな声でオトコを鋭く制した。

第26話 訪問者（後書き）

- 1 - 第11話 職場復帰？ 参照ください。

第27話 刺客

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

トタンにオトコの指先からもの凄い力が消失する。

俺はくたつとひたまず跪き、左肩を床に着けてひづくま蹲ると、激しく咳き込んだ。

「ゴホ、ゴホ、ゴホッ！ おえっ……」

俺は吐き気までモヨオして、包帯の下で涙眼になる。

「最期だし、一度だけいい思いをさせてあげるわ」

俺に近寄って、有紀は嬉しそうに俺の耳元で囁いた。

小刻みに首を振って拒否の意思表示をする俺。

『いや、いい思いは結構ですから、俺を解放してココから出て行ってくれっ！』

そう言いたかったが、俺の声はサルグツワで有紀には届かない。

再びオトコから両肩を掴まれた。

俺は無抵抗のまま乱暴に引き擦り起こされ、立たされる。

「ふふっ……」

有紀の含み笑いが、妙にイヤラシク聞えた。

細い指先がイキナリ俺の下半身に伸びて、パジャマ越しに俺のモノを確かめるように、ソフトタッチで撫で回してきた。

「んぐう?。」

ビクッた俺は、慌てて腰を引こうとしたが、背後でオトコが俺の後退をガツチリと阻止している。

ああ、腰が退けね〜。

「ふへへ……兄ちゃん、イイな? 羨ましいぜ?。」

後ろで俺を押さえているオトコの熱い鼻息が、荒々しく俺の首筋に掛けられた。

「んん〜っつ!。」

ぞわわ……

全身の毛が逆立った。

うわあああ、キモイ!

俺、そんなシュミねーぞっつ?

俺は掛けられた鼻息の感触を打ち払うように、必死になって首を振る。

「どおしたのお？　いつもなら喜んでくれるのに……？」

有紀のシナヤカな指遣いが、俺の下半身を撫で擦る。

ザンネンだが、俺の相棒は只今休眠中。

つか、無理矢理押え付けられて殺されそうになってるこの状況下で、どうすれば欲情出来ンだよっ？？？

俺、ンなシュミねーって！！！！

「緊張してるの？　うふふっ……司ってば、カワイイ〜〜〜」

だっ、だっつ……ダレが『カワイイ』だッツ！！！！

俺が怯えていると知って、有紀は遣り手のオネイサンみたいな口振りで、甘く俺を誘った。

ヤダ。誘いにはゼツタイに乗ってなんかヤンない。

俺は固く心に誓った……

……が、その誓いは有紀が俺のパジャマのパンツに手を掛けた時点で、敢え無くミジンに消し去られてしまった。

「ぐ……っつ……」

有紀は俺のパンツを膝まで下ろすと、今度はボクサータイプの下着に手を掛けた。

ユツクリと焦らすように俺の下着が降ろされる……

あぁっつ、止めてっつ!!!!

興奮してナイから、下着はナンの引つ掛りも無くストンと膝まで落される。

「へへエ？ 兄ちゃん、チイセーなあ？ オイ？」

オトコが俺を見て馬鹿にしゃがった。

ばッッ……バカヤロウ!!!!

自分が殺されるかドウかって時に、コーフンしてどーすんだよっつ
????

「あーら、宗孫、司を見縊っちゃダメよぉ……」

有紀は嬉しそうにそう言って、ナマの俺の相棒に触れた。

「んっつ！ んあっ……」

敏感な部分に触られる度に、俺の身体がビクッ、ビクッと大きく跳ね上がる。

恵理と違って遊び慣れしてる有紀は、俺がカンジルトコロを心得ているから、身体的に抗うコトが出来ない。

しなやかな指先のフェザータッチで煽られ、
脊髄を伝った快感が俺

の脳内中枢部をガンガン刺激して来る。

コレって一種のゴーモンだぞ？

「うっう　　っつー！！」

うわあああ　　っつー！！　止めろおお！

必死になって呻り、首を横に振って有紀に止めるように頼んだツモリだったが、有紀は一向にオカマイナシだった。

気持ちで抵抗してみても、結局身体はずっと正直なんだよな？

言い訳にならねー。

「ほーらね？」

有紀がもの凄く嬉しそうにオトコに声を掛けた。

「ほおおー」

俺を押さえているオトコが感心する。

だあああー、オッサン！　タダ見してンじゃねえよっつー！！

「冥土の土産ってえヤツですかい？」

俺を背後で押さえ付けながら、オトコはウヒヒと下衆に笑った。

「……そうね」

有紀は俺の正面にこっぴど跪き、微かな溜め息を漏らすと、俺のナマ腰を両腕で抱き締めた。

俺の相棒がチヨウド有紀の左肩に当たり、有紀は首を傾げて俺の相棒を挟み込む。

「うぐツツ？」

ダイレクトな刺激に、俺の顎がびくんと反応する。

有紀は俺の反応を面白がっているのか、くすつと笑うと、ソソリ立った相棒に頬ズリして来た。

「うぐう~~~~」

あ~~~~ん~~~~ヤメロお~~~~!!!

俺は身をよじ擦じらせてヨガッタ。

見ず知らずのヘンなオヤジに、元気になった俺の相棒を見られて、今まさに有紀から責められてる瞬間までも見られてるだなんて、情けねーよおー！

「ん、んあ！」

俺は最期の力を振り絞って暴れた。

「きゃっつっ？」

有紀の胸の辺りを膝でグツと押し倒す。

「コイツ！ ジツとしてるイ！！！」

「うぐつつ！」

ウシロのオトコが、俺の拘束された両腕に、外側から自分の腕を深く絡め、俺の後頭部でその手をガツチリと組み合わせる。

自然、俺は上半身を折り曲げ、自分の顎を胸元にくつつけて頂垂れた状態になる。

唯一、自由だった両足も、オトコのデカイクソ足に踏み付けられて身動き出来なくなった。

「^{あね}姉さん？ 大丈夫ですかい？」

オトコが有紀を気遣った。

「だ……大丈夫。ちょっと驚いただけよ？」

有紀がそう言うなり……俺の左頬に破裂音とヒリツク痛みが奔った。

だけど、俺の口にはサルグツワがしてあるから、それが緩衝材の役割を果たしていた。

テニスと護身術で鍛え上げられた、怪力の恵理に殴られるよりはゼンゼンマシだ。

「司、往生際、悪過ぎよ？」

「うっうっうっ！！！」

悪くてイケナイかよ？

コッチは恐怖と羞恥心で気がヘンになりそーだっつーの！！！！

俺は必死に訴えたが、喋れないからムダだ。

「もお、セツカク元気になってたのにイ」

俺の相棒を包み込むように、有紀は顔を埋めて来た。

「ふが~~~~つつ、うっう~~~~！！！」

よ、止せつてば！ ヤメロよお~~~~！！！！

俺は荒く息を乱しながら、ナント力抵抗しようと努力するが……有紀と何度もえっちしていて身体の方が覚えてしまってる。

ヤメロ~~~~

俺は快感に翻弄された。

体温が一気に上昇して汗が噴き出し、全身がビクビクと跳ねる。

んがあああ~~~~！！！！

殺されるってゆ〜、こんな状況なのにイッテしまっ~~~~つつ！！！！

必死に自分をセーブしようとする俺。

この後、ホントに天国行きなのか？

「そろそろいいですかい？」

俺をガッチリと拘束していたオトコが、痺れを切らしたように少々苛立って有紀に同意を求めた。

「んんんあ？ もおふこひ（もう少し）」

有紀の鼻息も荒くなる。

あ……けど……もっ、ダメかも……

俺の身体がブルツと身震いしてトリハダ立った。

ヤバイ。

そろそろ限界が……

有紀はナカナカ俺が反応しないと勘違いしていたのか、有紀は俺を含んだままで上半身を大きく振り動かす。

「うっうっんんん！！！」

うわあああ

瞬く間に催した噴火の兆候に抗えず、なす術ナシのお手上げ状態。

「ぐづぐづ……」

……瞼の裏に閃光が奔った。

有紀の喉が音を立てる。

このアトのコトさえ無ければ、俺はもの凄くカンジて昇天出来たってーのに。

幾らセフレちゃんの有紀でも、こんなのアリかよ？

俺、今度こそ殺されるのか？

こんなの……ナンか『蛇の生殺し』みたいでイヤだ。

「ははっ、兄ちゃん、やあーっとイツたか？ ん、じゃあ今度こそ覚悟しろや」

にちゃっ……

オトコの舌舐め擦りする音が、鮮明に耳元で聞えた。

俺は無理矢理有紀にヌカレて脱力&放心状態。

そして再びオトコの節くれ立った太い五指が、俺の首に左右から掛けられた

「……あばよ」

オトコが笑った。

ダンッッ！！！！

玄関のゴツイ金属製のドアから突然大きな音がした。

ナンの音？

あまりの音に、俺を含めた三人がビクった。

声すら上げる余裕も無い。

「よお、取り込みのお楽しみ中ワルイんだが……」

上から威圧するような不快感を覚えるその声に、俺は聴き覚えがあった。

オトコのコトバは丁寧な言い回しだったが、その言い方は乱暴だった。

「そろそろ、お開きにしてくれないか？ 待たされるのは嫌いでね」

この声！ ……みかみ 水守！？

俺を酷い眼に遭わせた、成和会の幹部。

つか、いつの間に……そこに居たんだ？

背後でオトコがナマツバをゴクリと飲み込む音が聞えた。

俺をイイように弄もてあそんでくれた有紀達も、現れた人物が誰なのかをトツクに知っているみたいだった。

慌ててパツと俺を放り出すと、急いで部屋の奥へと逃げ出した。

拘束されていた俺は支えを失くし、下半身を露出したままブザマに引っ繰り返る。

「待ちやがれえ！」

「こんのヤロウ！」

逃げ出そうとした有紀達を追って、玄関からワラワラと数人のオトコ共が突入して来た。

ひょっとして、俺をボコってくれたK-1な奴等、居るのかな？

「おい、ココ土足厳禁だ」

「ああつつつ……とお？」

「はっ、ハイ！」

水守のフツーに喋った一言でヤロウ連中が素直に従い、急いで廻れ右をして玄関に引き返す。

そそくさと靴を脱いでいる気配がした。

そして奥の部屋でドタバタと……乱闘？

「いったあゝゝゝい！ 放せえゝゝゝ！」

時折、有紀の甲高い悲鳴と、一緒に来たオトコが殴られて呻いている声が聞えた。

頼むから、部屋を散らかさないでくれよ？

「うつ……うつ……」

有紀達二人が外へと連れ出されて行った後、俺は拘束されたままの手で下げられていたパジャマを下着ごと必死に引き上げようとしてモガいていた。

……？

傍に来た水守の気配を察知して、俺はコロンとうつ伏せに寝転がる。

俺の醜態をコイツにだけは見せたくないと思った。

ソレは多分、コイツ……水守が恵理と幼馴染で、しかもコイツは未だに恵理のコトが好きだってコトを俺が知っているから。

だから。

……今のトコロ、一方的な水守の片思いらしいけど。

「何とか無事だったみたいだな？」

「んぐうう？（はいい？）」

水守が俺よりも高い長身を折り曲げて、すぐ傍で片膝を着いた気配がする。

そして少々乱暴に俺からサルグツワを解ほどいてくれた。

「んつつ、ぷつはああ、助かったあゝゝゝ来て居たンなら、どうしてもっと早く助けてくれなかったんスカ？」

イキナリの憎まれ口……ソレが俺の開口一番のコトバだった。

「水守さんに向かって……テメエ、口の訊き方を教えたるかいつ！」

横柄な俺の言い様に、水守と一緒に残っていた男が凄んだ。

「まあ、待て」

水守はオトコを宥めながら、くつくと笑った。

……つたく、気に入らねーな。

笑い方までキザなヤローだぜ。

「愉しそうだったから、中断出来なかったただけだ」

「アレのドコが『愉しそう』なんスカ？」

つか、やっぱり見てたんだ。

ずっと……？

「違うのか？」

「ったり前でしょ？」

白々しいな……

俺は反論しながら、未だに穿けていないパジャマにテコスツテいた。

うつ伏せの状態でモゾモゾと蠢^{うごめ}いてる姿は、デカイ芋虫みたいだ。

つか、俺の半ケツを見られたっつ！！！

「そ、それよか、この手錠を外してくださいよ？」

俺は後ろ手で拘束されている手を、手錠ごと振る。

「あ？ ああ、それか？」

水守はそう言ったアト、ムリだと冷たく言い放った。

「鍵はさっきの連中と一緒に……多分今頃は事務所に向かっている途中だ。鎖か、本体を壊すか……だな？」

「ええ……？？？」

* *

俺は水守に細いピンか針金を捜して貰い、自力で手錠を外していた。

「器用なヤツだな？」

水守が俺のシゴトに感心する。

「コノくらい出来ないと、悪いコトも出来ませんよ？」

俺は腹黒く笑った。

「ふーん。俺のトコロに来ないか？」

「いゝえ、お断りです。俺、『もうフツの会社員』ですから」

「フン、意味ありな言い方をするな……まったく、喰えないヤツだ」

水守は俺のコトバを鼻で笑い、面白くなさそうにボヤイタ。

「それはお互い様じゃありませんか？」

ドッチが喰えないんだか……そっちこそよく言うよ？

惚けてはぐらかそうとした俺に、突然水守は俺の首へと乱暴に腕を廻して、ヘッドロックをカマシて来た。

「なっつ？ な、な、ナニすんだよ？」

視界が閉ざされたままの俺は抵抗さえ出来ず、水守の小脇に抱えられたまんまだ。

「お前って、ホント、カッコイイクねーな？」

「誰が！」

一瞬、ヒヤリとする。

俺って水守の趣味……守備範疇だったのか？

……って思ったら……ものの見事に誤解だった。

「よく聴けよ？」

「？」

フザケていた水守の声が、突然マジに切り替わって小声になった。

「もう判っているだろうが……木村工業が狙われている」

「どお言うコトです？」

ツラレテ俺も小声で訊き返した。

「二日前に怪文書が送られて来た。『木村を潰す』……本社社長室PCに直接メールで送られて来た文面だ。この事は極僅かな上層幹部クラスにしか知らされていない」

俺は耳を疑った。

大企業の木村工業が狙われている？

ソレが証拠に、個人情報ひこきめの漏洩で、恵理は会社へ……そして俺は、その件に関与していたと疑われている有紀達に、たった今命を狙われた。

冗談で片付けられそうだったコトが、事実へと変換されて行く。

それを逸早く水守が知っている？

恐らくは他の社員よりも先に？

……水守、アンタって一体……？

何者なんだ……？

俺が見た処じゃ、どんなに鼻^{ひこきめ}真目に見たって水守は世間一般から言われてる『ヤクザ』にしか見えねー。

つか、成和会だと本人が名乗っている以上、暴力団には間違い無いんだ。

それとも、暴力団に見せ掛けた警察関連の公安組織とか？

……ドラマじゃあるまいし……馬鹿馬鹿しい。

だけど、本当に俺は有紀達に命を狙われた……それは紛れもない事実なんだ。

「それって、ガセかも知れないでしょ？」

それでも俺は水守のセリフを一蹴しようとしていた。

「残念だが嘘じゃない。半年前に札幌の拠点関連子会社が倒産を余儀無くされた。今回の怪文書と同じパターンだ。当時は悪質な悪戯だとして会社側は放置し、なんら対策を構じていなかった……知っていたか？」

「いえ……半年前って、俺、まだ学生でしたから」

知らなかった……そんなコトがあっただなんて……

「恵理によく似たさっきの女……知り合いか？ お前を特定して狙って来たよな？」

「……」

「ほー、助けて貰っておいで、ダンマリを決め込む心算か？
いい度胸だな？」

俺は黙秘を選ぼうとしたが、瞬時に水守に見抜かれてしまった。

水守を騙すコトは出来そうも無い。

「……社内重要情報を盗んだのを俺が見てしまったから……」

「目撃者？ お前が？ ……それで口封じか？」

俺は黙って頷き、水守はフンと鼻で笑った。

「怪文書って……それだけ？」

「企業全体を狙ってなのか、それとも特定の上層部の人間を狙ってなのか、皆目検討が付かない……人物を狙うなら、恵理も当然含まれると見ていい……この意味、お前、判るよな？」

俺はコクコクと頷いた。

つか、ヘッドロックされているこの状態で、拒否なんか出来ねーだろ？

「……？」

水守からは何か言いたそうな気配がした。

一瞬、間があって、何かを躊躇っているような様子だった。

「恵理を……恵理を頼む」

そのコトバの端々に『貴様なんかには頼みたくナイ』って気持ちが見え隠れしていた。

「アンタなんかに言われなくっても……」

「判ってる……か？」

思わせ振りの言い草を俺は不愉快に感じて、水守の腕を振り解いた。^{ほど}

「水守さん、アンター一体ナニモノなんだよ？ 平社員の俺でなくつたって、アンタなら恵理を簡単に護るコトが出来るだろツツ？」

「……それが出来ればお前なんかに頼んだりしない」

俺のム力つくコトバにも、水守は穏やかに切り返して来た。

「どういうイミだよ？」

「お前、木村工業が業界のトップクラスに上り詰める事が出来た本当の理由を知っているのか？」

「え……？」

「……本当……の……理由？」

第28話 総会屋？

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

国内外でも名実共に屈指の暴力団

成和会。せいわ

さぞや頻繁に事件や問題を引き起こしては業界の社会面を賑わし、警察とゴツタゴタにモメテイルのかと思いきや、俺が想像していた暴力団とは少し違っていた。

いや、実際には揉めていても表沙汰にはならない様に賢く立ち回って、根回しや握り潰しをしているのかも知れない。

株式会社木村工業本社の所在地と本拠地を同じく分け合っている成和会は、木村工業の創業以来から性質を異にしているにも関わらず、発足した後に急速成長を遂げてなぜか木村工業と共存し、存続している暴力団……

俺達は成和会を一纏ひとまとめに『暴力団』と言っているが、世間一般では『総会屋』として認知されているらしい。

俺が知っているのはそれだけだ。

『総会屋』って悪いイメージが付いて廻るけど、逆に企業に味方する組織だってある。

タブン、成和会って『仲裁屋』とか『防衛屋』とかの部類なんだろうなと俺は見ていた。

「……どういう意味だよ？」

一瞬、刺すような水守の強い視線を感じて、俺はそれ以上訊けなくなつた。

「……ま、お前に話したって時間の無駄だな？」

水守は面倒臭そうにそう言うと、一呼吸於いて気の抜けるような大きなあくびをした。

まるで、『言うのじゃなかったな』と云わんばかりの態度だ。

「ちょ、チョット待って下さいよ。俺にワケを話してくれるんじゃないかったんスか？」

俺は気配のする方へと手を伸ばし、手探りで水守の背広のハシを掴もうとした。

俺の手は水守の腰辺りを弄^{もよほ}つて、ケツを撫でた状態になる。

「!」

驚いた水守の背中がビクンと反応した。

あ、いや俺はそんなシュミじゃねーって。

水守は腰を引いたが、俺はその背広を反射的にぱつと掴んだ。

「こっ……コラ、離せ」

ホンの少しだけ、水守の『動じない感情』が反応したように思えた。それは俺の錯覚で、単に表面上動揺していただけなのかも知れないが……

「ヤダ。話してくれないと、離さない」

珍しく、俺は本気だ。

つか、あれだけ思わせ振りに言われれば、是が非でも知りたくなくて来るじゃねーかよ？

「さっき恵理に連絡した。多分、一時間ほどで戻って来るぞ？」

「恵理のコトはいいですから」

「だから俺も帰る」

「だーら、帰る前にチョットだけ教えてクダサイよっつ」

俺はコビを売ってみる。

「シツコイなあ、お前……」

水守の呆れる声がした。

それって、ギブのサインかな？

「教える気になりましたか？」

俺は口角をチョット上げて、ニッと笑う。

「……」

でっ

水守のゲンコツが俺のノーテンを直撃した。

「ってえええ〜っつ！！！」

俺は両手で頭を抱えてオオゲサに蹲つづくまった。

「ヒドイや！ まだ治ってねーのに……また見えなくなったらどーすんだよ？ 今度こそマジで失明だよ？」

泣きを見せた俺の訴えも、水守の前では効果ナシだった。

水守の馬鹿にしたような冷ややかな視線が、俺に投掛けられた気がする。

「会社が巨大化すればするほど、外部・内部共に派閥や不穏要素、場合に因っては意図的な経営妨害も沸いて出て来るってモンだ」

「あづ〜〜。ンな事ぐらい、俺にだって判りますよ。俺が知りたいのは、木村工業とアンタ達成和会とのカンケイだ」

痛てーな。暴力反対だあ！

あ、コイツ暴力団だった……

「ゼツタイに口外しないと約束出来るか？」

「うん。出来る」

「……」

即答した俺を、水守はタチマチ警戒してしまった。

暫らく押し黙ってしまう。

ひよっとしたら、俺のカルさにドン退きしていたのかも知れねー。

「……お前にはムリだろ？」

「ああ……？ それって、外見だけでナンノ根拠もないまま俺を差別視してません？」

「……」

「俺、こう見えても案外口は堅いですよ？」

「案外……か。まあいいさ。口外すればどんな眼に遭うか、お前はもうトツクに身を以って判っているものな？」

俺は水守の視線が気になった。

「はい？ 『この身体が覚えています』 ってか？」

「ドンダケだよ?」

視線に堪えられなくなって、俺はカルク吹いた。

上っ面ではへらへらとヘッラッて、その場をごまかそうとした。

それでも水守は黙って俺を見ている気がする。

……居心地悪い。

水守は冗談でハグラカソウとしていた俺の『本性』を見抜こうとしているのか?

それとも、俺から発散されている『自分達と共通する本質的な何か』を導き出そうと推し量っているんだろうか?

……ナンか、息が詰まりそ……

俺は水守の視線にミョウな息苦しさを感じた。

コイツ……ゴマカシが効かねー。

水守のコト、今まで俺が見て来た奴等 力に任せてモノを言わせ

るチンピラよりはマシなヤツ……くらいには思っていたさ。

けど、俺がイメージしていた水守と、目の前に居る水守とではゼンゼン違っていた。

やっぱ、コイツは喰えねー。

掴みドロコのナイ……こんなヤツ、初めてだと思った。

つか、オトコに見詰められたってキモイだけで、嬉しかねーし。

「……俺の祖父の『姓』は……『木村』だ」

渋々打ち明けた水守の口調は、少し怒っているみたいだった。

……え？

一瞬……俺の呼吸が停まった。

『木村』……って？

じゃ、じゃあ水守は木村の血筋を引いた一族？

『お坊ちやま』？ いや、ひょっとして『御曹司』？ ……いいや、成和会の水守はこのバアイ『次期組長』？？？

別の次元でドン退きしている俺をシカトして、水守はナオも続けた。

「会社設立当時からずっと……成和会は木村（工業）の闇を担^{にな}って来た。『総ては会社の為』……それが成和会存続の理由だ。これからもずっと木村が木村として在り続ける限り……だから、時として意にそぐわない事にも対処せざるを得ない。喻えそれが結果として一個人……恵理を切捨てる事になったとしてもだ」

「……」

「一部の社員の犠牲で会社が救われるのなら、俺はソツチを選ぶ……そうすべきだと訓^{おし}えられて来た。だから俺では恵理に就いては遣れない」

「今時訓えもナニもないだろ？ 会社にもしもの事があれば、例え幼馴染……いや、身内の恵理であっても情けは掛けられないのか？ そんなに会社がイチバンなのかよ……？」

言い現しようなナイ不快感に煽られた。

ナンだよ？ その会社至上主義の理屈はあ？

そして一時的に視力を奪われている俺は、同時に水守の感情的炎がヤツの背後でメラメラと燃え上がったのを、垣間見たような気がした。

眼にするコトの出来ない、一切の熱を拒絶した冷たい……炎。

それが錯覚だというコトは、俺にだって判っていた。

「これ以上、俺を喋らせるな……」

これ以上、俺を怒らせるな……

水守は苦々しく、吐き棄てるように言い放つと、俺の傍を離れた。

「って、アンタは社名存続の為だけに……？」

「そうだ」

抑揚のナイ、静かな口調だった。

総てを諦めてしまった様なソレが、俺には水守の悟りであるかのよう
に聞こえた。

……ウソ吐け……本当の自分はそんなコト思っ
てなんかないクセに！

水守の建前的な回答に、俺はイラッ^{コタエ}と来る。

「ザケンナツッ！ あ、痛つつつつつ~~~~っつ
」

大声で怒鳴った俺は、脳天を突く激しい頭痛に襲われ、頭を抱えて蹲る。

術後の後遺症か、それともさっき水守に殴られたからなのか???

「いてて……し、社員在つての企業じゃないのか?」

俺の問い掛けに、水守はフンと鼻で笑った。

「長居し過ぎたな……」

カルク苦笑しているみたいだった。

その苦笑が、俺に向けてなのか、水守自身に向けてなのかを、読み取る事は出来なかった。

「違うのかよつつ?!」

まだ答えを貰ってナイぞ?

「……今日の事は忘れる。木村工業の一社員として居たければ……以後、深入りするな」

俺の横を通り過ぎ、部屋から水守が出て行くこうとする気配がした。

それって俺への脅迫かよ?

「待てよ!」

トッサに振り返った俺だったが……

既に辺りには誰の気配もなくなっていた。

……ナニカツコツケてんだよ？

独り部屋に残された俺は、水守のコトバを無性に腹立たしく思いながら、心身共に重い状態を引き摺って、ノロノロと立ち上がった。

有紀達を取り押えるために散らかされただろう、俺の部屋の片付けをするべく、俺は壁伝いに手探りで部屋を移動していた。

* *

それから一時間くらい経った頃、恵理が息を切らせながら戻ってきた。

ナニ？ この絶妙なタイミングは？？？

水守の予言が的中して、俺は軽く退いてしまった。

「司ツツ！」

「か、課長……あう？」

玄関先でパンプスを脱ぐのもどかしく、放り投げるようにして脱ぎ散らかした恵理が、出迎えた俺の胸にイキナリ顔を埋めて来た。

「無事だった???」

何だよ？ その質問は？

「水守みもりんからのメールに、司が襲われている姿が写ってて……ほら、コレ！」

バッグの中を掻き混ぜて携帯を取り出し、画像を俺に向けて見せようとしてくれた気配がする。

「……あ？ ああ……」

俺、見えないんだけど？

恵理も、すぐそのコトに気が付き、『ごめん』と気まずそうに呟いた。

「そ、その……びつくりして……」

俺は、恵理から戸惑いと……それにいつもの恵理じゃないくらいの、不釣り合いなホドの恥じらいを察した。

「……??? ひょっとして、あの時の画像？」

俺は血の気が失せた。

多分、有紀にえっちされた時の画像だろう。

そう思うと、更に不安が強まった。

「まさかズームで撮ったりなんか、してナイでしょうね？」

「……………」

恵理からの返事は無かった。

…………… ってコトは…………… オイツツ！！！！

してやったり！ …… ってえニヤケタ水守^{アイツ}の顔が頭に浮かんだ。

『これを見れば、いくら仕事女の恵理でもすっ飛んで戻って来るだろうっ』 …… って言う水守の下衆な配慮が窺えて、俺はまたしても不機嫌になる。

あんの野郎おおお……………！！！！

コソクな真似しやがって……………

第29話 恵理…1

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺は洗面台の前に立っていた。

すぐ隣の浴室では、浴槽にイキオイよく湯が入り、賑やかな水音を立てている。

自動注水だから、もうじきウルサイ水音もなくなるだろう。

徐に両手を上げて、包帯を留めているハシの部分を手で探る。
おもむろ

……あつた。

医療用テープを引き剥がし、留められていた包帯をスルスルと解いた。
ほど

そして左右の眼を押さえていたガーゼを除けると、一呼吸於く。

このクソ暑いのに、包帯で保温状態にされていた左右のマブタが、気持ち程度の涼しい外気に晒された。

久し振りの何とも言えない開放感だが、本当に眼を開けても大丈夫……なのか？

ダイジョウブ……

俺は少しだけ強く自分に言い聞かせると、静かにマブタを開いた

「……………」

ぼやけて見えた視界が、カメラのピントを合わせるようにゆっくりと映像を映し出す。

「……………」

正面の鏡に、痩せた無精髭面のオトコが映っていた。

そっと自分の眼の周りを触れてみる。

カルク疼^{うず}きはしたが、強い痛みは消えていた。

よっしゃあー！ 治った！！！！

って、俺的には完治したツモリ。

さっき、恵理から包帯が取れるのは二日後だって聴いてたけど、今だってダイジョウブだったじゃん？

つたく、みんな大袈裟過ぎんだよ。

「ふふん」

俺は調子をコイテ、鼻歌交じりに衣服を脱ぐと浴室へ……………

浴びせ湯をしてから、浴槽に沈んだ。

俺は頭を浴槽の縁に乗せて手足をカルク広げ、全身の力を抜いた。
揺らめく水面に弄もてあそばれながら、浮力で俺の身体がプカプカと浮かんだ。

今まで住んでいたマンションの狭い浴槽ではゼツタイに出来なかったコトだ。

「う　　つつ、気持ちイイ〜〜〜」

思わず声が漏れた。

つて、オヤジかよ？

コレって何日振りの風呂だろ？

まあ、あのままキゼツして爆睡カマシテいたもんな？

お陰でまた体重が落ちたケド。

俺は、痩せて肋骨おほほほが浮き出している脇腹を、情けなく撫で擦さすった。

オトコは自分の体重ウェイトが軽いのを嫌うのに、オンナは重いと嫌がるんだよな？

俺みたいに何日か絶食すればすぐに痩せられるのによ。

ダイエットの食品業界なんかスゴイよな？

一社員の年収が何千万の世界だもんね。

自分に余裕が出て来ると、普段頭にナイコトさえ浮かんで来るから不思議だ。

そうだ。

体重増やそ。

つつても、脂肪じゃねーぞ？

体重＝筋肉だからな。

まあ、脂肪が付かなけりゃ筋肉も付かねーけど。

恵理には悪いが、チヨイカロリーの高そうなメニューを考えてみるか。

……待てよ？ 『そんなの要らない』って食ってくれなくなるのもマズイよな？

……やっぱ別々のメニューで考えるか。

メインよりも先に、デザートの杏仁豆腐が頭に浮かんだ。

このマンションを出て行く前まで、恵理のお気に入りだったデザートだ。

また作ったら食ってくれるかな……？

今のところ、俺が作った食事を恵理が食わなかったのは、食事中に喧嘩した - 1) 朝食のあの時と、 - 2) 悪戯で作った激辛カレーだけだ。

いつの間にか、俺は自分のコトじゃなくって、恵理のコトばかりを考えていた。

頭の中で、スレンダーだけど胸はデカイ恵理のナイスバディが浮かぶ。

しかも、 - 3) この前に見た全裸の妄想付きだ。

あの時はバスローブのヒモでチョウチョ結びにしていたが……

別の縛り方とか……

今度、チャンスがあれば水着なんかに着替えさせちゃったりして……
…モチロンビキニ。

黒もイイケド色モノもイイよね、何色が似合うんだろ……？

えへへ……

脳内で試着している恵理の姿を想像し、俺の顔がガラシナク緩んだ。
水着なんて、伸縮する下着と同じだもんな。

「……」

想像しただけで、ノボセそうになった。

タチマチ俺の相棒が元気になる。

おゝ、健康バロメータも元通りだ。

だけど、ナンだか頭がクラクラして来たぞ？

医者から『安静』とお達しを無視して風呂に入ったからかな？

「……ヤバイ……マジでノボセソウ」

俺はシャワーを浴びようと浴槽から出た。

がちゃ

突然風呂場のドアが開き、湯気の間こうからバスタオルで身体を包んだ恵理が現れた。

「うえつつ？」

「あら？」

ドアのトコロで立っている恵理に、振り向いたままフリーズして身動き出来なくなっていた。

中腰でシャワーの切り替え蛇口に左手を伸ばした状態だったから、ナンとも情けねー格好だ。

いいいゝゝつっ???

恵理に奇襲を受けた俺は、この状況にドン引きした。

俺が入浴中だつて知っているのに、恵理が入って来るだなんて……
誰が想像出来るかよっつ?

し、しかもっつ!

「ん、な、ナンてえカツコで入って来るんですっ?」

俺は焦り、慌ててタオルで前を隠す。

浮き足立っている俺を見るなり、恵理はカタチのイイ眉を寄せて睨み付けて来た。

「司、包帯は? まだ取っちゃダメだつて言われてたでしょ?」

いや、そうじゃなくって……

「かつ、課長こそココにナニしに来たんです?」

「包帯が取れるのは明後日^{あした}だつて言ったでしょ? 先生から言われているのに、どうしてあと二日が待てないの?」

ナニ冷静に言つてんの?

……つか、会話が噛合つてねーよ???

俺は悪戯がバレタ子供みたいな気分になった。

恵理の言ってるコトは尤もだって思うけど、見えねーのはイヤだ。

ソレまで見えるコトが当たり前だと思ってた。

なのになった数時間の間に、見えていれば回避出来たかも知れない危険に直面して死にそうな眼に遭ったり、部屋の移動でも必要以上の気遣いを要求されたりして、俺の神経はズタボロなんだよ。

つか、こんな包帯邪魔だ。

俺は少しでも早く、見えるようになりたかったただけだ。

「だって、見えねーと不便じゃん？」

俺は独り言みたいに小声でボソリと呟いた。

「…………え？」

俺と恵理の視線が真っ向から絡み合い、お互いが一瞬黙り込む。

恵理は俺に近付くと、そっと俺の右腕に触れた。

「…………える？」

微かに恵理の艶やかな唇が動いた。

「え？」

ナニか言った？

「見える？」

ああ、『見えているか？』って言ってるのか？

「見えますよ？ 目の前に女神様が居る」

俺にとって、恵理はマジで救いの女神様。

成和会の事務所であの時恵理に助けて貰えなかったら、俺は今頃冷たくなってコンクリート詰めになってもなっていたかも知れないし、病院での手術に間に合わなかったら、トックに失明決定だったもんな。

俺のコトバに、恵理は「えっ？」と驚いた。

「見えないものが見えてるの？」

不安そうに恵理が俺の眼を見詰めて来る。

俺はクスクスと笑った。

「イヤだなあ。課長のコトですよ？」

ホントーに助かりました。

俺は神妙な面持ちになって、恵理の顔を覗き込んだが……

恵理の顔を見たところで停まればヨカッタのに、俺の視線は無意識に恵理の顎のラインからその下……バスタオルでぐっと寄せて上げられている、フクヨカな白い胸の谷間へと無意識に吸い込まれて移動してしまった。

お……、相変わらず柔らかかそ……

「……や！」

俺の視線に気付いた恵理が、慌てて両腕を掻き抱くが、それこそ俺にはモッテコイ……！！

深い谷間が一層深くなってしまい、恵理にとっては逆効果だった。

「で、ナニしに来たんスか？　もしかして、一緒にお風呂に入りたい？」

この状況下では、どう見たってソウだよな？

俺の眼が、にへら……とイヤラシク笑う。

俺は襲ってねーぞ？

襲いに来たのは恵理の方だからな？

一応、自分で冷静に状況把握。

さ……て、ドウしちゃおうかな……？

「も、も、もしかして……な、何よ？　ひ、人が心配して……」

オイオイ、声がビブラートしてるゾ？

俺が一步踏み出すと、恵理はトトツと小刻みに二、三步退った。

赤面しているその表情からは、『ドウシヨウ？』ってゆー焦りと後悔が読み取れる。

「もー、課長もスナオじゃないツスねー。一言『うん』って言ったら？」

俺は利き手で持っていたタオルが落ちるのも気にせず、胸を掻き抱いている恵理の両手首を掴んで引き寄せた。

恵理の顔は今にも爆発しそうなくらい、もお真っ赤だ。

「~~~~!!!!」

恵理の視線が俺の下半身一点に集中されて固定する。

ドコ見てンだよ？

……ったく。

まあ、自分が持っていないモノだからしよーがねーか。

だけど、ココまでマジ見されんの、恵理が初めてだぞ？

………チヨット恥ズイ。

『ナマで見るのが初めてだから……』

って、今まで俺のを何度か見てるだろっつ???

『三姉妹だから、情報不足なの』ってトコロかな？

「課長？ あのね……」

俺の声に、恵理は我に返ったみたいだ。

ハッとして俺の顔を見上げると、みみたぶ耳朶まで真っ赤になった。

「ち、ちがつ！ あ、あ、あ、アタシは司が見えなくて不自由だろ
うからって、洗うの手伝いに…… あうん！」

言い掛けた恵理のコトバを俺はキスで遮った。

あんまり俺の『ソコ』ばかり見られてンのも恥ずいし。

俺はイキナリ、潜水二十メートルばりのディープキスをやった。

キスに不慣れな恵理は、もうココの時点で息が上がってしまっている。

「俺を洗ってくれるんですか？」

俺は嬉しそうにフフツと笑った。

「そ、その心算つもりだったのよ？」

恵理は、はあはあと肩で息を整えながら、俺の胸に頭を寄せて来た。

「その格好で？ 濡れちゃいますよ？」

「きゃっ？」

俺は遠慮なく恵理を包んでいたバスタオルを、「えい」とばかりに剥ぎ取った。

「これで同じ条件に……？」

俺はダラシナク鼻の下を伸ばすと、ウシシと笑った。

バスタオルの下から、輝くような恵理のナイスプロポーションが……って、あ、あれ？

「ナニすんのよっつ！」

パチン

あう~~~~っつ、またしても恵理の平手があああ~~~~

って、コレで恵理からのビンタ何回目だ？

だけど、今回のビンタはそんなに痛くはなかった。恵理も手加減覚えたな？

……覚えて欲しくない。

つか、暴力反対っす。

第29話 恵理…1（後書き）

- 1 - 第17話 お嬢様？

- 2 - 第18話 遅い帰宅

- 3 - 第15話 ゲーム？ 、第16話 イジワル？ を参照下さい。

第30話 恵理…2

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

俺が引剥いたバスタオルの下に……恵理は水着を着用していやがった。

しかも肩ヒモナシの純白のビキニ。

胸の谷間部分で生地を捻^{ひね}ってギャザーを寄せているデザインのヤツで、下は浅いハイレグだ。

……紛らわしいコトしやがって。

風呂に入るのに、そんなの着て来るのって違反だ……つか、ひよっとしてさっきの俺の願望が成就したってのか???

水着着用……の？

「課長、『洗ってあげる』つってましたよね？」

俺は恵理から剥ぎ取ったバスタオルを、ドアのタオルハンガーに引っ掛けながら確認する。

「……そ、そうだけど……」

オイオイ、マジで洗ってくれるツモリだったのか？

頬を染めて恥らう恵理に、俺の心臓がきゅん！ となる。

だけど『ネ』がスナオじゃない俺は、恵理に向き直っていつもの軽口を叩いた。

恵理は俺の顔を見ながら、その合間にチラ×2と視線が下ってる。

また視線が『元気なココ』に来るのかよ？

いい加減に慣れやがれ……ねーかな？

やっぱし……

「そつ、その心算つもりだったけど、も、もう大丈夫そうだし……あ、あアタシ、出るね？」

我を見失い掛けた恵理は、そそくさと俺に背を向けた。

おゝ、ブラの後ろは大き目リボンのワンポイント。

チョットそのセンス、幼くね？

飾り（ダミー）だと判っちゃいるが、思わずそのリボンを解きたい衝動に駆られてしまう。

「ナニ言ってるんすか？ セツカク来たのに、それはナイっしょ？」

おーっと、そうはイカナイヨ？

俺は後ろ姿の曲線美に見惚れながら、細い左腕に手を掛けてカルク

引いた。

「きゃっ?」

恵理は濡れた床に足を滑らせてバランスを崩す。

「つとお!」

「あ……んっ……」

俺はタイミングよく恵理を胸に抱き留めようとした。

恵理は身体を強張らせて俺の胸に縋り付く……と思ったら、その細い右腕を素早く俺の首に絡めるのとほぼ同時に、捻りをかけて屈みながらスツと重心を落とした。

「へっ?」

瞬間的に俺は無重力を味わう。

「う、うわああ!!!」

ザッパーン!!!

恵理は細腕一本と、体捌きたいさばの絶妙な体重移動で、自分よりも重い俺を簡単に投げ飛ばした。

派手な水飛沫と共に、真っ裸マッパの俺は頭からブザマに浴槽の中へとダイブする。

「ぶあつ、なつ、ナニ……？」

つてえ、ナニすんの？

頭を水面から出すと、俺は左右に大きく首を振った。

俺が散らした水飛沫で、恵理が『きゃっつ』と小さく声を出す。

ご、護身術？ 今度は合気道かよ？

あゝビックリした。

「ご、ごめーん、司。つい……条件反射で遣っちゃった」

恵理はすまなさそうに両手を合わせ、肩を竦めて上目遣いに俺を見る。

マツタク悪意の無さそうな素振りで器用にウインクすると、ぺろつと舌を出した。

「つい……つて……ひでえや……」

『今のつて、ワザとじゃね？ こつなるの予期してたろ？』つて思えるくらいの鮮やかなお手並み。

つたく……。

護身術なんか忘れちまえ。

自然と身体が反応して攻撃的になっちまうから、カレシが未だに出

来ねーんだよ。

けど、『忘れちまえ』……なんて言っただって、頭より先に身体が反応するんだから……仕方ねーよな？

俺はそんな事を考えながら、浴槽の前で立っている恵理の姿を『ぢい~~~~っ』と見詰めた。

……ひょっとしたら、今の水飛沫で恵理が濡れて、水着も薄っすらと……

恵理の白い水着は確かに濡れてはいたが、胸にはカップがあるタイプだし、下もカンペキにガードされているヤツだった。

白い水着だからこそその透け感にワクワクしてしまったのに……

なんだ……期待してソンした。

がつくし……

ツイデに俺の相棒も、湯船の中で気が抜けた~~~~

俺の視線が恵理の水着に注がれているコトに、恵理も勘付いたらしい。

「な、ナニよ？」

そう言っただけで口を尖らせると、頬ほほを赤らめた。

慌てて胸を腕で覆い隠しながら身体を拭る。

レースクイーン並みのスラリとした立ち姿がとてもセクシーだ。

俺は片手で濡れた顔を拭い、その手で前髪を掻き上げると、浴槽から出た。

あゝあ、お湯が半分無くなったぞ。

シャワーが取り付けであるすぐ横には、全身が見渡せる鏡が嵌め込まれている。

俺は恵理に背を向けて、その鏡の前に立った。

恵理が鏡越しに俺を見て、標準タイプに戻った俺の相棒に気が付いたみたいだ。

……だゝら、マジ見すんなってーの！！！！

「あ、あの……司？」

「はい？」

俺は恵理の言いたい事が判っているクセに、ワザと聴き返して遣った。

「その……司の……その……ソレ……」

「はあ？ 『ソレ』ってナニ？」

にやり！

「う……」

コトバに詰まって恵理は困惑した。

「コレのコトかなあ？？」

俺はイジワルク言つて恵理の右手を取ると、無造作に俺の相棒を押し付けた。

「いつ??? きつ、きゃあっ!!!!」

恵理は驚いて小さく悲鳴を上げた。

トッサに手を引っ込めようとしたが、俺はその手をシツカリと握つて放さない。

恵理は表情を引き攣らせ、僅かに息を吞んで退いた。

「……」

暫しの間

引っ込めようとしていた恵理の手が停まる。

力づくでは俺に敵^{かな}わないと諦めたのか、それとも『チャンス!!!』
って思い直してなのか、腕の力を抜いて俺の意のままに委^{ゆた}ねて来た。

ナンだか少しだけ嬉しそうにも……見える？

「んっ……さっきよりチツチャイ……」

が~~~~ん!!!

言うな~~~~！ 聞えてるぞお！

しかも、『チツチャイ』だとおお~~~~？？？

有紀と一緒に来たオッサンからも言われるし……標準タイプならコ
ウ（松永）とほぼ同じなのに……

俺、ショック……激しく傷付いた。

それでも恵理の手は除けないのな？

「あう……」

俺はキモチ良くなって、思わず声を漏らした。

ナンか、恵理が急に積極的に触^{さわ}つて来るし……

初めは俺の相棒に触れるのを、拒んで戸惑っていた恵理だったのに、
慣れたのか俺の相棒と仲良くなったみたいだ。

ドウシテ？

「や~~~~ん、カワイ~~~~」

恵理ははにかみながら、イヌの頭でも撫でてるみたいなノリ。

あの……ペットじゃないんすけど……

俺としてはナンだか……凄く微妙だ。

でも、徐々（じょじょ）に俺の快感ゾーンが刺激されて、背筋がゾクゾクして来たぞ？

「……ねえ、その……ドコが……キモチイイ？」

……意外とお嬢様は積極的。

恵理は俺の真正面で跪いて膝立ちになり、両手で触れて来た。

俺は腰が退けて上体を折り曲げる格好になる。

息遣いが乱れがちになり、自然と声が漏れた。

体勢とは反対に、俺の相棒は元気復活。

「うわ、凄おゝい」

またしても恵理に観察されて……しまった……

ヤメロオゝゝゝ、恥ズイじゃねーかよ！！！！

「……」

俺をマジ見していた恵理の目が、いつの間にかトロンと蕩とろけていた。

その顔が俺の相棒に近付いて来る……こっつ、この状況はああ！！！！

「……………い……………い？」

恵理のふつくらとした唇から、溜め息のような声が漏れた。

いや、チョットソレは……………

嬉しいケド、タジログ俺。

チョツと怖いかも。

初心者の恵理が、果たして上手に遣ってくれるかどうか、メチャクチャ不安。

つか、ひょっとして俺って被験者で実験台？

……………どうしよう？

って、俺がチェリー君みたいじゃねーかよっつ？？？

恥ズイだろうがっ！！！！

恵理の舌がモゾモゾとギコチナク這って来る。

「……………司、携帯で……………こんな事……………されてた……………」

があ　　ん！

恵理の言葉に、俺ショック。

水守は有紀とのアレを、ズーム動画で恵理に送り付けやがったんだな？

俺は猛烈な羞恥心に晒される。

だけど……

見よう見真似で恵理はんなコト遣ってるのか？

有紀の時は嬉しくなかったけど、恵理が上手に遣ってくれるんなら……その……イイかな？　なんて思ったりして……

「つつ！」

最初、チョットだけ気持ち良くカンジていた俺は、刺すような痛み
に飛び上がりそうになった。

俺は慌てて恵理の細い両肩を押さえた。

「……………うん？」

「チョット……………たっ、たんま！」

遂に俺はガマン出来なくなつて、恵理の肩を掴んで引き離れた。

そして俺の相棒を解放させる。

は~~~~っつ、痛かった~~~~

「まあ、課長はコッチ!」

俺は利き手の人差し指と中指を二本揃えて、恵理の艶やかな唇を割らせ、少々乱暴に捻じ込んだ。

イキナリ指二本を奥の方まで咥えさせられた恵理は、スコシ涙目になっている。

「コレで練習してからじゃないと、ダメ」

「……やら、ろうひれ? (ヤダ、ドウシテ?)」

涙眼になった恵理が、上目遣いで俺を睨んだ。

『アタシの遣り方、間違ってる???』って顔をする。

俺はフツツと口端で笑って答えない。

「練習してみて?」

「れっ、れる……ヨラレ、れそう……っっ」

頬を桜色に染めた恵理の口端から、透明な糸がつつつ……と首筋まで流れる。

口中から溢れた自分の涎に気付いた恵理が、恥らって咥えていた俺の指を放そうとした。

「イイですよ。唾液なんか気にしなくて。ほら、舌で包むみたいに上手に舐めてみて?」

「ひにふるよぉ〜（気にするよぉ〜）」

「唾液で絡めるようにしてくればイイんだって」

唾液はこのバアイ潤滑剤の役割をしてくれる。

「んふう……」

恵理は俺の指先に、エンリョ気味に舌を絡めて来た。

「そ、歯を立てないように……上唇と舌でガードすんの」

恵理の旨そうなチェリーピンクの唇から、更に唾液が滴^{したた}って、細く白い顎^{のど}から喉へと伝い落ちる。

遣ればデキルじゃん?

俺は恵理の表情をオカズに、薄っぺらな恵理の掌で相棒を包ませると、目の前で自慰行為を見せ付けてやった。

「……………」

恵理が驚き、蒼ざめてドン退きしているのが手に取るように判る。

「……………んなの……………見たの初めて?」

やっぱ、そうだよな？

俺の相棒には触れるの初めてだったし……恵理的には、ちょっとシヨックが大きいか???

恵理はまだ凍り付いている。

「ふうん……も、やらあ……」

自分の於かれた状況から我に返った恵理は、俺の行動が理解出来なくなっただのか、続行を拒否して首を横に振った。

怖くなったのか、潤んだ眼からポロツとヒトシズクの涙が毀れる。

「ちゃんと……遣つて？」

「やらああー！」

半ベソを掻いた恵理は、俺から顔を背けた。

「……っだああ~~~~!!!!」

俺のヒメイが浴室に反響する。

恵理のヤツ、俺の指に噛み付きやがった!!!!

「ヤダッツ！」

視線を戻した恵理は、真っ赤になって俺を一睨みすると、ツンとソッポを向いた。

ただ、両手は俺が右手でシツカリと掴んでいるから、拘束されたままの状態だ。

……サスガは自尊心のカタマリのお嬢様。

スナオに俺なんかに指南されるイワレはナイ！　って？

「じゃ、もう止めましょう？」

セツカクだけど。

俺は手を放して、恵理の両手を解放した。

「うーっ」

怒っているのか？

恵理は膝立ちのまま、自分の掌に残されたモノをキモイとばかりに左右交互に見詰め、俺の股間を前にして呻った。

「ザンネンですけど、俺、途中ストップがデキルヤツなんツス」

ソレは俺自身が不思議に思っているコトだ。

今まで燃え上がったら最期、『イク』まで途中ストップなんか出来なかったし、そんなコト在り得ねーって思っていた。

恵理と会うまではね。

その代わり、ケツコー精神的体力が必要だけど。

手を洗って立ち上がった恵理に背を向けて、俺はハードタイプのナイロンタオルにたっぷりとボディソープを付けると、ソレを恵理に差し出した。

コレは百円ショップで買った俺専用。

恵理のはシルクが含まれている高級タオルだ。

「はい。洗って……くれるんでしょう？」

俺は視界の隅に恵理の姿を捉えながら、ニツコリと笑った。

「~~~~~」

一瞬、恵理が『いやあ~~~~ん』って言った気がした。

だけど、俺を洗うツモリで来たんだろ？

「優しくしてクダサイねえ？」

ワザと言った俺のオネエコトバに、恵理が真っ赤になってドン引きしているのが判った。

俺はその様子をチラリと盗み見て、笑いを噛み殺すのに苦勞する。

「くすくすくす……やっぱ、貸して？」

恵理にタオルでマッサージされていた俺は、肝心な場所に近付くとくすぐったくなってガマン出来なくなった。

そしてタオルを半ば強引に取り上げる。

「自分で洗いますから」

恵理がじっと見詰めている中、俺はいつもよりも手短にササッと洗って流し終える。

視線を向けると、恵理とバッチシ眼が合った。

恵理がハッとして俺を見上げる。

「洗って……あげましょうか？」

俺はにやっ　と笑い、アワだらけのナイロンタオルをカルク持ち上げた。

「……」

恵理は顔を引き攣らせて拒むのかと思いきや、急に切なそうな顔をして俺を見上げて来た。

意外だった恵理の反応に、俺はどきまぎして落着かなくなる。

「え……」

言い掛けた俺は、言葉に詰まってゴクリと喉を鳴らした。

『処女は要らない』『途中ストップが出来る』……なんて、口からの出任せに決まってるし。

本当は俺、恵理のコトが欲しくて欲しくて堪らないだけなんだ。

だけど、恵理は大企業の社長令嬢。

恵理には将来を約束されている婚約者殿がいるんだろ？

財力も、実力もナイこの俺なんかが近付いたり出来ない、別の世界のオンナだろうよ？

俺は頭の中で、何度も問い掛け、必死に自分に言い聞かせていた。

……でも、『恵理が好き』なだけじゃダメなのか？

「恵理……」

躊躇いがちに俺は恵理の名を呼んだ。

そして、両腕を拡げて恵理を抱き締めようと試みる。

「……」

「っあ、ダメだ」

これ以上、近寄れねーっつ！！！

「どうしたの？」

恵理は俺を見上げたまま、不思議そうな顔をする。

そんなに無防備にならないでくれっつ！

俺、今にも野獣になりそうだ。

「恵理には……その、居るんだろ？」

「誰が？」

「そ、そのっ……け、結婚を約束した……ほら、あの……」

『婚約者』^{フレーズ}って言葉が、俺にはどうしても言い出せなかった。

最終話 その女 危険人物!!!

> i 2 2 0 2 — 3 1 6 <

「何の事かしら?」

恵理はフワリと笑ってはぐらかす。

「あゝ、ホラ、恵理のカレシ……」

「は?」

つて、俺ナニ言つてンだよ?

「あゝ……じゃなくつて、その……ほ、ほらっ、よく親同士で結婚
相手を勝手に決めて……」

グダ×2な俺の説明に、恵理は腕組みをしてカルク吹いた。

その余裕ありげな態度から、俺がナニを言いたいのか恵理はトック
に知っていて、ワザと喋らせようとしているんだと気付いてしまっ
た。

「……」

「良いわよ? 続けて?」

急に口を噤んだ俺に向かって、恵理は小首を傾げると、上目遣いで
見詰めて来た。

「…………あの…………」

「どうしたの？」

「…………」

こんな遣り取り、まるで部署での課長そのまんまだ。

まるで俺が言えない、言いたくない言葉をムリにでも言わせようとして面白がっているみたいだし。

パワハラかよ？

納得いかねー。

家にまで業務モードを持ち込むなっつ！

拗ねた俺は、恵理にくるりと背を向けた。

「もっ…………イイ」

俺は投遣りに言い放つ。

ココまで俺が言っても、恵理はそのコトに触れようとはしないんだよな？

「アタシは『続けて』と言ったのよ？」

「いいってば」

「続けて……」

意外とシツコイ恵理との遣り取りに、俺のイラ×2も限界になりそう。

「ン、だからイイって……ンむう？」

くるりと振り返った俺の首に、恵理はイキナリ抱き付いた。

不意を衝かれた俺は、無抵抗のまま唇を奪われてしまう。

ちよっつ、ん、待ったああ~~~~!!!!

「ん~~~~ん~~~~!!」

サスガは有段者のお嬢様。

俺の『不意』を衝いて、マンマと尻に嵌めちまったのか？

「う……ん？」

慌ててジタバタした俺は、恵理の本気モードのキスで急にオトナシクなくなってしまう。

「今のは何点？」

恵理はシットリと濡れた長い睫毛を瞬かせながら、そつと唇を離して囁き掛けた。

「え？ 難点？」

俺は真剣モードに切り替え損ねて、惚けて訊き返す。

「……馬鹿」

吐息のように言葉が漏れて、恵理がフワリと身体を寄せて来た。

トタンに俺の心臓と股間が大きく跳ね上がる。

「こんなに酷い目に遭って……」

恵理は俺の目元に、そつと触れた。

緊張しているのか、恵理の指先は冷たくってキモチイイ。

俺は眼を閉じて、恵理の触れる指先をカンジた。

「もう、見えてますから心配ないですよ？」

「……うん」

恵理の栗色ユルフワの前髪を片手で梳^すいて、やや広いお凸^{でこ}にキスをする。

恵理の吐息が首筋に掛かってクスグッタイ。

「司は助けてくれたもの」

「？」

「夏祭りの事よ？」

一瞬、俺は恵理がナニを言っているのかを思い出すのに間が要った。

「？ ああ、あの、 - 1 - 駐車場でのコトですか？」

恵理はこくんと頷いた。

「あ？ でも、俺はナンにもしてませんよ？」

それが、どうして『助けた』コトになんの？

俺の怪訝そうな表情を読み取ってか、恵理は俺から気マズそうに視線を逸らせた。

「アタシ、あの時に司がアタシの事を放っぱって逃げ出すのかと思つた……ずっと前……学生だった時にも、似たような事があつたの。不良に絡まれて」

「……」

『すみません。俺も『不良』でした』……って言い出せる空気じゃねーし。

俺が黙って聴いていると、恵理は尚も続けた。

「怖かった。一緒に居た人が先に逃げちゃって……『オマエは武道してるだろ？』って言い捨てて、アタシを独りにして……」

「……」

そこまで言って、恵理は言葉を詰まらせた。

泣いてるのか？

俺には、恵理の細い肩が震えているように見える。

俺は以前、（2）鈴木主任がそんな事を口にしていたのを思い出した。

恵理が極端に男勝りなのは、ワケがあるのだと。

「護身術なんて……自分が怖がりだから。怖さを克服するための手段で遣っていただけ。型だけで、実戦なんて遣ったことさえ無かったのに、『習っているから強いだろ？』って……違う。違うのよ？ 本当は強くなる為に習っていたのじゃないのに。その人は判ってくれなくて……」

ぐす……

俺から顔を逸らせていた恵理が、そつと手の甲で目元を拭い、軽く鼻をススる。

「司は逃げなかった。それどころか、成和会の事務所で死にそうな眼に遭っていたのに、アタシに逃げろって……言ってくれたもの」

恵理はそつと俺に身体を預け、密着させて来る。

そんなコトで俺に感動しちゃったのか？

つか、オンナを危ない目に遭わせるのは、俺としてはNGだった…
…だけだ。

「恵理……」

俺は恵理を抱き締める。

「でも、恵理にはその……居るんだろう？」

白馬に乗った王子様が。

恵理は俺を見上げた。

「姉さん達とアタシは違うわ」

「姉さんって……？」

恵理には腹違いの二人の姉がいる。

長女の沙耶^{さや}さんの旦那である城嶋^{きじま}副社長と、次女の香奈^{かな}さんの旦那である持田^{もちだ}専務。

恵理の言い方から推測すると、お見合いか政略結婚なんだろう。

俺の予測が当たってると言わんばかりに、恵理は俺の様子を窺いな

がら、フフツと笑った。

「アタシはお父様達の七光りは御免なの」

「……」

いや、七光りだろうが、コシヒカリだろうが、真面目に『処女』を棄てたいのなら、ナンでもいいから嫁に行け。

「親の言う事は素直に聴くモノですよ？」

「それ、司が言えるの？」

「……」

大型猫科の瞳がキツと俺を見据えた。

はい。俺、墓穴掘りました。

つか、業務モードヤメロ。

「俺のコトはいーんです……その言い方じゃあ、セツカク用意してくれてた彼氏を振りましたね？」

多分、あの時。

- 3 - マンションに遅く帰って来たあの日、恵理はその彼氏に対して何らかの行動を起こして……

それでアザを両肩に付けていたんだ。

恵理はあの時、今にも泣き出しそうな顔をして、俺のトコロに戻って来た。

……俺のトコロつつても、恵理の家なんだが……

「だって、厭だって断ったのに、イキナリ怖い顔して押さえ付けてくるんだもの」

「そりゃオイシイ餌から断られれば、ムキになって当然でしょ？
どうしてモツタイナイコトしちゃったんです？」

もつとよく冷静になって状況を把握しろよ？

この場合、『オイシイ餌』は勿論恵理。

お相手は、恵理の父親　木村工業株式会社代表取締役社長が用意してくれていた、どこぞのハイレベルな御曹司。

多分総てに於いて、俺と比べようとしてもハナシにもならない、恵まれた環境下でのセレブな御坊ちゃまだろうに。

「……そうかしら？」

「はあ？」

恵理は俺の言葉に、不思議そうな顔をする……ってえ、恵理って天然っつ؟؟？

「何もかもが総て整えられているのって、それなりに見栄えは良い

けれど、それだけなの。判る？」

「な、ナンのコトっすか？」

いきなりナニを言い出すんだ？

「例えると、宝石　ダイヤを手にするのに、人に依っては手っ取り早くティファニーやブルガリのお店で、綺麗に磨かれてディスプレイされている完成品を購入する人っているでしょう？」

「？　フツー、そうじゃないんすか？」

ダイヤなら、宝飾店に行くだろう？

つか、俺にとっては別次元のハナシだ。

しかも有名ブランド名出すな。

肝心な恵理の言わんとしているところに気付けずに、俺は恵理から再び睨まれる。

「まあ、それは勿論ありだけど、鉾山に登って原石を自分から探し出すのって、ロマンチックじゃない？」

「はああ？　豪い目に遭って、サンザン苦勞して……山登りなんて蚊やムシが一杯湧いて出て来ますよ？　んで、結局宝石出ませんでしたあゝってのもありはしますが？」

ロマンチックもクソもねーだろよ？

「馬鹿っ！」

ぱちん

「いたた……??？」

俺は恵理の微妙に手加減された平手を左頬に喰らった。

「例え話よ。実際のとは違うのっ！」

「はあ……」

「だからあ、アタシは自分よりも完璧な人が苦手なのっ！ 判った？」

急に声を張り上げて、恵理は力説。

おお、コメカミに血管浮いてるぞ？

「で？ ナニ持論展開してンです？」

こんな状況下で。

「っあ？」

いつの間にか、恵理は水着姿のままベッドの上に寝かされている

……

って、気付けよ？

「だっ、だって司が判らないフリ……フリ？　してたの？」

猫の瞳が大きくなって、俺を見上げる。

にやり

俺は不敵に恵理を見返した。

あっつ、もおダメ。

クスクス……

「だったらナニ？　俺、そこまで鈍くないよ？」

俺は笑いを噛み殺しながら、恵理の身体に覆い被さる。

風呂から直行している俺は、相棒もスタンバツテいるし。

これ以上のお膳立ては不要……だらっつ

「あん……」

水着をずらせて、恵理のキュウクツそうだった胸を解放してやった。

ツイデに肩や首筋に音を立てながらキスを落とす。

恵理の身体は火を点けられたみたいに、タチマチ熱くなって来る。

キスを落として滑らかな肌に触れる度に、恵理はくぐもった声をあ

げて身体を撓^{しな}らせた。

水守^{みかみ}やアブのオヤジから、俺は恵理とのコトを応援されていた。

水守はチョツと……不本意っぽかったが。

だけど、イマイチ積極的になれなかったのは、恵理の婚約者殿の存在だった。

恵理の言い様から判断すると、恵理の勝手な婚約破棄？

将来を約束されているだろう、理想を絵に描いたようなお相手を、恵理は拒否してしまったのか???

俺にとっては信じられねーコトを、恵理は平気で遣っちまうお嬢様。

だけど……

俺と言う原石を、恵理は見付けてくれたってーのか？

そう思うと、ナンだか照れる。

つか、俺って『石』っつ？

「んあツツ！　ちょ、痛ツツ！」

恵理は顔を顰めて俺から逃げ出そうとする。

体育会系の恵理は見掛け以上に怪力で、スゲー力で俺を押し退けようとモガいて、ベッドの上へ×2と上がろうとする。

「恵理……」

俺は痛がる恵理の耳元で、そつと名前を囁いた

手を伸ばせば、恵理の温もりがスグそこにあった。

俺は気を失うようにして眠ってしまった恵理の頬にキスを落とし、そつとタオルケットを掛けてやる。

「……」

シーツに付けてしまった恵理の『シルシ』を見付けてしまい、俺はなんだか気恥ずかしくなってしまった。

ナニ照れてんだ？

ガラじゃねーのに。

『課長の処女は要りません』ってタンカ切ってたワリには……ココマで来るのに早かった？

いや、俺としては逆に『よく持ち堪えた』って感が拭えねーし。

で、俺ってホントは……

恵理と知り合ってから、俺は命の危機に何度も晒された。

ツイデに俺が建前^{たてまえ}だけで生きて来たってコトを恵理から気付かされ、無意識に隠し通していた俺の本音を、洗い^{あら}浚^{あは}い暴き立てられ、『素』に還らされてしまった特別なオンナ。

だが……

ひょっとしたら、そんなのは単なる序章に過ぎないの……かも？

その女 危険人物！！！！

俺にとっては、恵理が一番危険な存在……なんだ

最終話 その女 危険人物！！（後書き）

- 1 - 第 9 話 覚：醒？
- 2 - 第 1 1 話 職場復帰？
- 3 - 第 1 8 話 遅い帰宅 をご参照ください。

最後までお付き合い頂いて、ありがとうございます。

本作品は、他サイトで 2 0 0 8 ・ 1 1 ・ 0 5 完結済 R 1 8 らぶえ
つち

その女 危険人物！！ の R 1 5 バージョンです。

作品を発表するにあたり、両作品にコメント評価・ご指導頂きました作者様・読者様方、並びに人称のブレや表現法等、ワタシの作風に重きを置いてご指導して下さいました五十崎由記先生に、深くお礼と感謝の意を表します。

本当にありがとうございました。

2 0 0 8 ・ 0 9 ・ 0 4 <和 貴>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7259e/>

その女 危険人物！！ SIDE - A

2010年12月15日14時02分発行